東九州自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

― 28 ―

福岡県築上郡上毛町上唐原所在遺跡の調査

四ッ塚山遺跡
鏡迫古墳群
上唐原榎町遺跡３・４次調査

2016

九州歴史資料館

1　鏡迫古墳群周辺の風景
（北から）

2　同上（東から）

3　調査地全景（真上から）

1　鏡迫古墳群の石蓋土壙墓群
（真上から）

2　同上（南から）

3　同上（東から）

序

福岡県では、平成 19 年度から西日本高速道路株式会社の委託を受けて、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

本報告書は平成 23 年度から 25 年度にかけて行った、福岡県築上郡上毛町大字上唐原に所在する四ッ塚山遺跡・鏡迫古墳群・上唐原榎町遺跡３・４次調査の記録です。

四ッ塚山遺跡・鏡迫古墳群は山国川左岸の丘陵頂部に、上唐原榎町遺跡は自然堤防上とその後背低地に立地しています。

今回の調査では、四ッ塚山遺跡において弥生時代終末から古墳時代前期と古墳時代後期の小規模な集落跡と古墳２基が、鏡迫古墳群では弥生時代後期から古墳時代初頭の溝で区画された石蓋土壙墓 49 基からなる集団墓が、上唐原榎町遺跡３・４次調査では弥生時代終末から古墳時代前期と古墳時代後期から奈良時代の集落などが発見され、それぞれの時代における地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

平成２８年３月31日

九州歴史資料館

館長　杉光　誠

例言

1．本書は東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県築上郡上毛町大字上唐原に所在する四ッ塚山遺跡・鏡迫古墳群・上唐原榎町遺跡３・４次調査の記録である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第 28 集にあたる。

2．発掘調査と整理報告は西日本高速株式会社の委託を受けて九州歴史資料館が実施した。

3．四ッ塚山遺跡は東九州自動車道中津工事事務所管内の第 47 地点、鏡迫古墳群は第 48 地点、上唐原榎町遺跡 3・4 次調査は 49・50 地点である。

4．本書に掲載した遺構写真の撮影は坂本真一・小嶋篤・吉村靖徳・秦憲二が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真は東亜航空技研に委託し、ラジコンヘリによる撮影を行った。

5．本書に掲載した遺構図の作成は坂本・小嶋・秦・藤島志考・松崎友里が行い、発掘作業員が補助した。

6．出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、岡田諭の指導の下に実施した。

7．出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

8．本書に使用した分布図等は、国土交通省国土地理院発行の 1/25,000 地形図「中津」「土佐井」を改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。

9．鉄製品のＣＴスキャンは九州歴史資料館文化財調査室加藤和歳・小林啓が行った。

10．赤色顔料の科学分析は九州国立博物館に委託し志賀智史氏が担当した。

11．本書のⅢ章については坂本が、Ⅳは小嶋が執筆し、Ⅳ－５は志賀智史が、その他の執筆・編集は秦が行った。

本文目次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査の経過 …… 1
　3　調査・整理の組織 …… 2

Ⅱ　位置と環境 …… 6
　1　地理的環境 …… 6
　2　歴史的環境 …… 6

Ⅲ　四ッ塚山遺跡 …… 17
　1　遺跡と調査の概要 …… 17
　2　竪穴住居跡 …… 17
　3　土坑 …… 26
　4　四ッ塚山古墳群 …… 34
　5　その他の遺物 …… 44
　6　宇島鉄道について …… 45
　7　小結 …… 46

Ⅳ　鏡迫古墳群 …… 47
　1　遺跡と調査の概要 …… 47
　2　遺構と遺物 …… 48
　3　考察 …… 89
　4　小結 …… 96
　5　鏡迫古墳群の赤色顔料分析 …… 97

Ⅴ　上唐原榎町遺跡3・4次調査 …… 107
　1　遺跡と調査の概要 …… 107
　2　3次Ⅰ区の調査 …… 110
　3　3次ⅡB区の調査 …… 168
　4　3次Ⅲ区の調査 …… 183
　5　3次Ⅴ区の調査 …… 188
　6　3次Ⅵ区の調査 …… 190
　7　4次調査 …… 194
　8　小結 …… 199

Ⅵ　おわりに …… 205

図版目次

巻頭図版１　１　鏡迫古墳群周辺の風景（北から）　　２　同上（東から）
　　３　調査地全景（真上から）
巻頭図版２　１　鏡迫古墳群の石蓋土壙墓群（真上から）　　２　同上（南から）
　　３　同上（東から）

図版１　１　調査区周辺全景（北から）　　２　調査区北側全景（真上から）
　　３　調査区南側全景（北西から）
図版２　１　１号竪穴住居跡（西から）　２　１号竪穴住居跡・11 号土坑・１号溝状遺構（真上から）
図版３　１　11 号土坑（西から）　　２　２号竪穴住居跡（西から）　３　３号竪穴住居跡（東から）
図版４　１　４・５号竪穴住居跡（東から）　　２　５号竪穴住居跡カマド（東から）
　　３　６号竪穴住居跡（東から）　　４　６号竪穴住居跡カマド（東から）
図版５　１　７号竪穴住居跡（北から）　　２　８号竪穴住居跡（西から）
　　３左　８号竪穴住居跡炉跡（西から）　３右　８号竪穴住居跡土器出土状況（北から）
図版６　１　１号土坑（南西から）　２　３号土坑（南西から）　３　４号土坑（南西から）
　　４　５号土坑（南西から）　５　６号土坑（南から）　　６　８号土坑（西から）
　　７　９号土坑（南西から）　８　10 号土坑（南から）
図版７　１　12 号土坑（南から）　　２　13 号土坑（西から）　３　14 号土坑（東から）
　　４　15 号土坑（南西から）　５　16 号土坑（南西から）６　17 号土坑（南から）
　　７　18 号土坑（北から）　　８　19 号土坑（北から）
図版８　１　１号墳調査前（西から）　　２　１号墳墓道（西から）
　　３　１号墳墓道土器出土状況（北西から）
図版９　１　１号墳全景（真上から）　　２　１号墳閉塞石（西から）
　　３　１号墳閉塞石除去後（西から）
図版 10　１　１号墳羨道左側壁（西から）　　２　１号墳羨道右側壁（西から）
　　３　１号墳仕切り石（西から）
図版 11　１　１号墳玄室左側壁（東から）　　２　１号墳玄室右側壁（東から）
　　３　１号墳玄室奥壁（西から）
図版 12　１　１号墳左右袖石（東から）　　２　１号墳玄室敷石（東から）
　　３　１号墳玄室敷石（西から）
図版 13　１　１号墳耳環・ガラス玉出土状況（南から）　２　１号墳石室掘り方（北西から）
　　３　１号墳石室掘り方（南西から）
図版 14　１　１号墳右墳丘土層（西から）　　２　１号墳左墳丘土層（西から）
　　３　１号墳東側墳丘土層（南から）
図版 15　１　２号墳調査前（西から）　　２　２号墳撹乱除去後（西から）
　　３　２号墳墓道土層（南西から）

図版 16□1　2 号墳墓道土層（西から）□　2　2 号墳右墳丘土層（西から）
3　2 号墳右周溝（西から）
図版 17□1　宇島鉄道跡調査前遠景（西から）　2　宇島鉄道跡調査前近景（西から）
3　1 トレンチ（東から）
図版 18□1　2 トレンチ（東から）　2　3 トレンチ（東から）　3　4 トレンチ（東から）
図版 19□出土遺物 1
図版 20□出土遺物 2
図版 21□1　1 号土壙墓検出状況（北東から）□　2　1 号土壙墓石蓋露出状況（南西から）
3　1 号土壙墓堆積状況（南西から）□　4　1 号土壙墓完掘状況（南西から）
5　2 号土壙墓（東から）□　6　2 号土壙墓完掘状況（東から）
図版 22□1　3 号土壙墓検出状況（東から）□　2　3 号土壙墓石蓋被覆土（北から）
3　3 号土壙墓堆積状況（北から）□　4　3 号土壙墓（東から）
5　3 号土壙墓完掘状況（東から）
図版 23□1　4 号土壙墓（北東から）□　2　4 号土壙墓完掘状況（北東から）
3　5 号土壙墓検出状況（東から）□　4　5 号土壙墓（西から）
5　5 号土壙墓完掘状況（東から）□　6　6 号土壙墓検出状況（南から）
7　6 号土壙墓（西から）
図版 24□1　6 号土壙墓埋没状況（北から）□　2　6 号土壙墓完掘状況（北から）
3　7・15・19・20 号土壙墓（北から）□4　8 号土壙墓（北から）
5　8 号土壙墓完掘状況（南から）
図版 25□1　9 号土壙墓検出状況（東から）□　2　9 号土壙墓素環刀刀子出土状況（北から）
3　9 号土壙墓完掘状況（南から）□　4　8・10 号土壙墓（北から）
5　10 号土壙墓完掘状況（西から）□　6　11 号土壙墓完掘状況（北から）
7　12 号土壙墓完掘状況（北から）
図版 26□1　13 号土壙墓（北東から）□　2　13 号土壙墓埋没状況（東から）
3　14 号土壙墓（西から）□　4　14 号土壙墓鉄製品出土状況（真上から）
5　7・15・19 号土壙墓（北西から）□　6　7・15・19 号土壙墓完掘状況（北西から）
7　16・18 号土壙墓（北から）□　8　16 号土壙墓（南から）
図版 27□1　17 号土壙墓（北西から）□　2　17 号土壙墓完掘状況（南東から）
3　18 号土壙墓堆積状況（西から）□　4　18 号土壙墓完掘状況（西から）
5　19 号土壙墓完掘状況（東から）□　6　21 号土壙墓（西から）
7 □21 号土壙墓堆積状況（東から）
図版 28□1　22 号土壙墓（南から）□　2　22 号土壙墓完掘状況（南から）
3　23・24 号土壙墓（東から）□　4　25 号土壙墓（南西から）
5　26 号土壙墓（南西から）□□　6　28 号土壙墓堆積状況（南東から）
図版 29□1　27 号土壙墓（東から）□　2　28 号土壙墓（東から）
3　29 号土壙墓堆積状況（東から）□　4　29 号土壙墓（北東から）
5　30 号土壙墓（西から）□　6　31 号土壙墓（東から）
図版 30□1　33 号土壙墓（東から）□　2　34 号土壙墓（南から）

3　35 号土壙墓（東から）□　　4 □□37□号土壙墓（南から）
5　38 号土壙墓（西から）
図版 31□□1　39 号土壙墓堆積状況（西から）□　　2　39 号土壙墓（真上から）
3　40 号土壙墓（西から）□　　4　41 号土壙墓（東から）　□□
5　42 号土壙墓堆積状況（南西から）□　6　43 号土壙墓堆積状況（南西から）
7　43 号土壙墓（南から）
図版 32□□1　44 号土壙墓（北東から）□　　2　45 号土壙墓（東から）
3　46 号土壙墓（南から）□　　4　47 号土壙墓（真上から）
5　48 号土壙墓（東から）□　　6　49 号土壙墓（東から）
図版 33□□1　溝１（東から）　□□2□ 溝４（西から）　3　溝４堆積状況（北から）
図版 34□□1　供献須恵器検出状況（南西から）□□　2　供献須恵器検出状況（真上から）　□□
図版 35□鏡迫古墳群出土土器
図版 36□鏡迫古墳群出土土器・石器・金属器
図版 37□□1　上唐原榎町遺跡３次１区遠景（東上空から）　2　同上現道下調査区（上空から）
3　同上（上空から）
図版 38□□1　Ⅰ区１・２号竪穴住居跡（西から）□　2　Ⅰ区３号竪穴住居跡（上空から）
3　同上遺物出土状況（南から）
図版 39□□1　Ⅰ区３号竪穴住居跡北側主柱穴土層断面（東から）
2　同左南側主柱穴土層断面（東から）□　3　Ⅰ区４・５号竪穴住居跡（南東から）
4　Ⅰ区５号竪穴住居跡北側主柱穴土器出土状況（南東から）
図版 40□□1　Ⅰ区６・７号竪穴住居跡（東から）□　2　Ⅰ区６号竪穴住居跡カマド（南から）
3　Ⅰ区４～８・11・14 ～ 16 号竪穴住居跡（上空から）
図版 41□□1　Ⅰ区８号竪穴住居跡（東から）□　　2　同上カマド（東から）
3　Ⅰ区９・18・20・21 号竪穴住居跡（上空から）
図版 42□□1　Ⅰ区９号竪穴住居跡弧状掘り込み検出状況（西から）　2　同上土層断面（北から）
3　Ⅰ区 10 号竪穴住居跡（西から）
図版 43　1　Ⅰ区 11 号竪穴住居跡（西から）□　　2　同上遺物出土状況（南から）
3　同上屋内土坑遺物出土状況（北から）
図版 44　1　Ⅰ区 12・13 号竪穴住居跡・１号掘立柱建物跡（上空から）
2　Ⅰ区 14 号竪穴住居跡（東から）
図版 45　1　Ⅰ区 15 号竪穴住居跡（東から）□　　2　同上カマド（東から）
3　Ⅰ区 16 号竪穴住居跡（南から）
図版 46　1　Ⅰ区 20 号竪穴住居跡（北西から）□　2　Ⅰ区 21 号竪穴住居跡（南から）
3　Ⅰ区 22・23 号竪穴住居跡（上空から）□4　Ⅰ区 24 号竪穴住居跡（南から）
図版 47　1　Ⅰ区１号掘立柱建物跡柱１土層断面（南東から）　2　Ⅰ区１号土坑（東から）
3　Ⅰ区１号土坑土層断面（南西から）□　4　Ⅰ区２号土坑（南から）
5　同上土層断面（東から）□　　6　Ⅰ区３号土坑（西から）
7　Ⅰ区４号土坑（北西から）□　　8　Ⅰ区５号土坑（北から）
図版 48　1　Ⅰ区５号土坑土層断面（東から）□　　2　Ⅰ区６号土坑（北から）

3　Ⅰ区６号土坑土層断面（東から）　4　Ⅰ区７号土坑（北から）
5　Ⅰ区８号土坑（南西から）　6　Ⅰ区９号土坑（南から）
7　Ⅰ区 13 号土坑（北から）　8　Ⅰ区ピット２遺物出土状況（東から）
図版 49　1　Ⅰ区 26 号竪穴住居跡・２号掘立柱建物跡（上空から）
2　Ⅰ区９号竪穴住居跡、３・４号溝状遺構（上空から）
3　Ⅰ区１号溝状遺構土層断面（北から）
図版 50　Ⅰ区出土遺物１
図版 51　Ⅰ区出土遺物２
図版 52　Ⅰ区出土遺物３
図版 53　Ⅰ区出土遺物４
図版 54　Ⅰ区出土遺物５
図版 55　1　ⅡＢ区遠景（東から）　2　同上（北から）
図版 56　1　ⅡＢ区第１遺構面（上空から）　2　同上第２遺構面（上空から）
図版 57　1　ⅡＢ区基本土層（南から）　2　ⅡＢ区１号竪穴住居跡全景（西から）
3　同上カマド（南から）
図版 58　1　ⅡＢ区３号竪穴住居跡（西から）　2　同上カマド（東から）
3　ⅡＢ区１号掘立柱建物跡（上空から）　4　ⅡＢ区２号掘立柱建物跡（上空から）
図版 59　1　ⅡＢ区１号土坑礫出土状況（南から）　2　ⅡＢ区１号集石遺構（南西から）
3　ⅡＢ区１号土坑（南から）　4　ⅡＢ区１号溝状遺構土層断面（西から）
図版 60　ⅡＢ区出土遺物１
図版 61　1　ⅡＢ区出土遺物２　2　Ⅰ・ⅡＢ区出土土錘
図版 62　1　Ⅲ区遠景（南から）　2　同上（上空から）
図版 63　1　Ⅲ区南端トレンチ（上空から）　2　Ⅲ区波板状遺構（上空から）
3　１号集石遺構（東から）
図版 64　1　Ⅴ区全景（上空から）　2　Ⅴ区ピット１土器出土状況（西から）
図版 65　1　Ⅵ区全景（東から）　2　同上（上空から）
図版 66　1　堤状遺構全景（東から）　2　同左（北から）
3　同上東壁（東から）　4　同上土層断面（南から）
図版 67　1　Ⅵ区１号土坑（北から）　2　Ⅵ区２号土坑（西から）　3　Ⅵ区３号土坑（西から）
図版 68　1　４次調査全景（東上空から）　2　同上（上空から）
図版 69　1　基壇状遺構（北東上空から）　2　同上（上空から）
3　同上（東から）　4　同上土層断面（北東から）
図版 70　1　３次Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ区・４次出土遺物　2　３次出土装身具
図版 71　４次出土石製品１
図版 72　1　４次出土石製品２　2　４次調査石塔集積状況（東から）　3　同上（南から）

挿図目次

第１図　四ッ塚山遺跡・鏡迫古墳群・上唐原榎町遺跡調査範囲図（1/2,500）…… x
第２図　築上郡上毛町の位置図 …… 1
第３図　東九州自動車道調査地点図（1/100,000）…… 4
第４図　周辺遺跡分布地図（1/50,000）…… 7
第５図　四ッ塚山遺跡・宇島鉄道推定地周辺地形測量図（1/600）…… 13-14
第６図　四ッ塚山遺跡・宇島鉄道推定地全体図（1/300）…… 15-16
第７図　１号竪穴住居跡実測図（１/60）…… 18
第８図　１号竪穴住居跡・1 号溝状遺構出土土器実測図（1/3）…… 19
第９図　１号溝溝状遺構・11 号土坑実測図（１/60）…… 20
第 10 図　２・３号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 21
第 11 図　２・３号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 22
第 12 図　４・５号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）…… 23
第 13 図　４・５号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 24
第 14 図　６号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）…… 25
第 15 図　６号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 26
第 16 図　７・８号竪穴住居跡および出土土器実測図（1/60・1/3）…… 27
第 17 図　１～４号土坑実測図（1/30）…… 29
第 18 図　５～９号土坑実測図（1/30）…… 31
第 19 図　10・12 ～ 14 号土坑実測図（1/30）…… 32
第 20 図　15 ～ 19 号土坑実測図（1/30）…… 33
第 21 図　土坑およびピット出土土器実測図（1/3）…… 34
第 22 図　１・２号墳地形測量図（1/200）…… 35
第 23 図　１号墳墳丘土層図（1/80）…… 36
第 24 図　１号墳出土土器実測図（1/3）…… 37
第 25 図　１号墳墓道出土土器実測図（４は 1/4、他は 1/3）…… 38
第 26 図　１号墳出土遺物実測図（６～８は 1/1、他は 1/2）…… 38
第 27 図　１号墳石室実測図（1/60）…… 39-40
第 28 図　２号墳墳丘土層・周溝および出土土器実測図（1/40・1/3）…… 42
第 29 図　２号墳墓道実測図（1/60）…… 43
第 30 図　石製品実測図（１～３は 2/3、９は 1/1、他は 1/2）…… 44
第 31 図　トレンチ実測図（1/100）…… 45
第 32 図　鏡迫古墳群基本層序図（1/400・1/80）…… 49
第 33 図　鏡迫古墳群調査地周辺地形図（1/2,500）…… 50
第 34 図　鏡迫古墳群遺構配置図（1/160）…… 51-52
第 35 図　１・２号墓実測図（1/40）…… 53
第 36 図　３・４号墓実測図（1/40）…… 55

第 37 図　５・６号墓実測図（1/40）…… 57
第 38 図　７・８号墓実測図（1/40）…… 59
第 39 図　９・10 号墓実測図（1/40）…… 61
第 40 図　11・12 号墓実測図（1/40）…… 63
第 41 図　13・14 号墓実測図（1/40）…… 65
第 42 図　15・16 号墓実測図（1/40）…… 66
第 43 図　17・18 号墓実測図（1/40）…… 67
第 44 図　19・20 号墓実測図（1/40）…… 69
第 45 図　21・22 号墓実測図（1/40）…… 71
第 46 図　23 ～ 26 号墓実測図（1/40）…… 73
第 47 図　27 ～ 30 号墓実測図（1/40）…… 75
第 48 図　31・33 ～ 35 号墓実測図（1/40）…… 77
第 49 図　36 ～ 38 号墓実測図（1/40）…… 78
第 50 図　39 ～ 41 号墓実測図（1/40）…… 79
第 51 図　42 ～ 44 号墓実測図（1/40）…… 81
第 52 図　45 ～ 48 号墓実測図（1/40）…… 82
第 53 図　区画溝実測図１（1/60）…… 84
第 54 図　区画溝実測図２（1/60）…… 85
第 55 図　須恵器出土状況実測図（1/10）…… 85
第 56 図　鏡迫古墳群出土遺物（28 は 1/1、25 ～ 27・29・30 は 1/2、他は 1/3）…… 87
第 57 図　石蓋土壙墓の築造・埋没過程 …… 90
第 58 図　石蓋土壙墓群の支群構成（1/320）…… 91
第 59 図　ベンガラ検出墳墓 …… 103
第 60 図　上唐原榎町遺跡３次Ⅰ区全体図（1/300）…… 109
第 61 図　３次Ⅰ区１・２号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 111
第 62 図　３次Ⅰ区３号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 112
第 63 図　３次Ⅰ区１・３号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 113
第 64 図　３次Ⅰ区４・５号竪穴住居跡実測図（1/60・1/30）…… 114
第 65 図　３次Ⅰ区３・４号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 115
第 66 図　３次Ⅰ区６・７号竪穴住居跡実測図（1/60・1/30）…… 117
第 67 図　３次Ⅰ区５～７号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 119
第 68 図　３次Ⅰ区８a・b 号竪穴住居跡実測図（1/60・1/30）…… 120
第 69 図　３次Ⅰ区９a・b 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 121
第 70 図　３次Ⅰ区８・９号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 123
第 71 図　３次Ⅰ区 11・12 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 124
第 72 図　３次Ⅰ区 11 号竪穴住居跡出土土器実測図１（1/3）…… 125
第 73 図　３次Ⅰ区 11 号竪穴住居跡出土土器実測図２（1/3）…… 126
第 74 図　３次Ⅰ区 11 号竪穴住居跡出土土器実測図３（1/3）…… 128
第 75 図　３次Ⅰ区 11 号竪穴住居跡出土土器実測図４（1/3）…… 129

第 76 図　３次Ⅰ区 11 号竪穴住居跡出土土器実測図５（1/3）…… 130
第 77 図　３次Ⅰ区 11 号竪穴住居跡出土土器実測図６（1/3）…… 131
第 78 図　３次Ⅰ区 11 号竪穴住居跡出土土器実測図７（1/3）…… 133
第 79 図　３次Ⅰ区 13、14a・b 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 135
第 80 図　３次Ⅰ区 12 ～ 14 号竪穴住居跡出土土器実測図（３は 1/4、他は 1/3）…… 136
第 81 図　３次Ⅰ区 15、16a・b 号竪穴住居跡実測図（1/60、1/30）…… 137
第 82 図　３次Ⅰ区 18a・b、20、21 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 139
第 83 図　３次Ⅰ区 15・16・18 ～ 20 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 140
第 84 図　３次Ⅰ区 19・22 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 141
第 85 図　３次Ⅰ区 23 ～ 25 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 143
第 86 図　３次Ⅰ区 21・23 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 144
第 87 図　３次Ⅰ区 26 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 145
第 88 図　３次Ⅰ区 23 ～ 26 号竪穴住居跡、1 号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）…… 145
第 89 図　３次Ⅰ区１～３号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 147
第 90 図　３次Ⅰ区４・５号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 148
第 91 図　３次Ⅰ区１～８号土坑実測図（1/60）…… 151
第 92 図　３次Ⅰ区９～ 13 号土坑、ピット実測図（1/60・1/30・1/15)…… 152
第 93 図　３次Ⅰ区１～９号土坑出土土器実測図（1/3）…… 153
第 94 図　３次Ⅰ区 12・13 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 154
第 95 図　３次Ⅰ区溝状遺構出土土器・陶磁器実測図（1/3）…… 156
第 96 図　３次Ⅰ区ピット出土土器実測図（1/3）…… 157
第 97 図　３次Ⅰ区弥生包含層出土土器実測図（２は 1/4、他は 1/3）…… 158
第 98 図　３次Ⅰ区１・３号溝状遺構・縄文包含層土層断面図（1/60）…… 159
第 99 図　３次Ⅰ区縄文包含層出土土器実測図１（1/3）…… 160
第 100 図　３次Ⅰ区縄文包含層出土土器実測図２（1/3）…… 161
第 101 図　３次Ⅰ区出土石器実測図１（2/3）…… 162
第 102 図　３次Ⅰ区出土石器実測図２（2/3）…… 164
第 103 図　３次Ⅰ区出土石器実測図３（1/3）…… 165
第 104 図　３次Ⅰ区出土土・金属・ガラス製品実測図（１・２・６・７は 1/3、他は 1/2）… 166
第 105 図　上唐原榎町遺跡３次ⅡＢ区全体図（1/300）…… 167
第 106 図　３次ⅡＢ区１・２号竪穴住居跡実測図（1/60・1/30）…… 169
第 107 図　３次ⅡＢ区３号竪穴住居跡実測図（1/60・1/30）…… 170
第 108 図　３次ⅡＢ区掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構実測図（1/60、1/30）…… 171
第 109 図　３次ⅡＢ区遺構出土土器実測図（1/3）…… 173
第 110 図　３次ⅡＢ区遺構出土土器・陶磁器実測図（1/3）…… 174
第 111 図　３次ⅡＢ区中世包含層出土土器・陶磁器実測図（1/3）…… 176
第 112 図　３次ⅡＢ区黒色土包含層出土土器実測図（1/3）…… 177
第 113 図　３次ⅡＢ区出土石器実測図１（2/3）…… 178
第 114 図　３次ⅡＢ区出土石器実測図２（2/3）…… 179

第 115 図　３次ⅡＢ区出土石器実測図３（1/3）…… 180
第 116 図　３次ⅡＢ区出土石・土・金属製品実測図（30・31 は 1/2、他は 1/3）…… 181
第 117 図　上唐原榎町遺跡３次Ⅲ区全体図（1/300）…… 184
第 118 図　３次Ⅲ区集石遺構実測図（1/30）…… 185
第 119 図　３次Ⅲ区波板状遺構・流路跡土層断面実測図（1/80）…… 186
第 120 図　３次Ⅲ・Ⅴ区出土土器・陶磁器実測図（16 は 1/4、他は 1/3）…… 187
第 121 図　３次Ⅲ区出土石器実測図（１・２は 2/3、他は 1/3）…… 188
第 122 図　上唐原榎町遺跡３次Ⅴ区全体図（1/300）…… 189
第 123 図　３次Ⅴ区出土石器実測図（４は 1/3、他は 2/3）…… 190
第 124 図　上唐原榎町遺跡３次Ⅵ区全体図（1/300）…… 191
第 125 図　３次Ⅵ区土坑実測図（1/60）…… 192
第 126 図　３次Ⅵ区出土遺物実測図（９・10 は 1/2、他は 1/3）…… 192
第 127 図　上唐原榎町遺跡４次全体図（1/300）…… 193
第 128 図　４次基壇状遺構実測図（1/60）…… 194
第 129 図　４次出土遺物実測図（14 は 1/4、16 は 1/2、他は 1/3）…… 195
第 130 図　４次出土石製品実測図１（1/10）…… 197
第 131 図　４次出土石製品実測図２（３は 1/3、他は 1/5）…… 198
第 132 図　上唐原榎町遺跡地形復元図（1/8,000）…… 200
第 133 図　上唐原榎町遺跡・上唐原了清遺跡遺構略配置図（1/2,000）…… 202

表目次

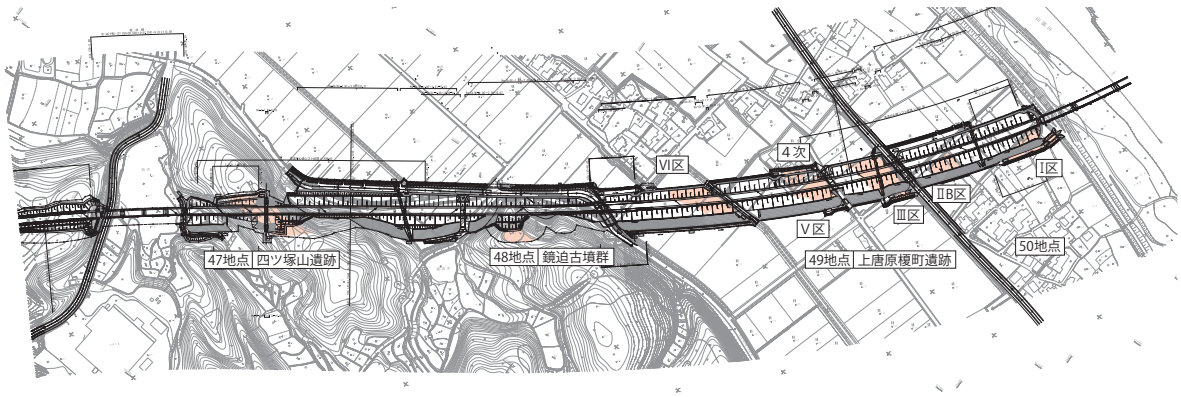
表１　東九州自動車道関係発掘調査地点一覧 …… 5
表２　鏡迫古墳群土壙墓一覧表 …… 93
表３　分析結果一覧表 …… 101

写真目次

photo. １　上毛町東部航空写真 …… x
photo. ２　中唐原駅跡 …… 46
photo. ３　図１～８ …… 99
photo. ４　図９～ 16 …… 100
photo. ５　図 17 ～ 22 …… 102
photo. ６　梶屋宝塔 …… 204

Photo.1　上毛町東部航空写真

東九州道路線
①四ッ塚山遺跡
②鏡迫古墳群
③上唐原榎町遺跡３・４次



第１図　四ッ塚山遺跡・鏡迫古墳群・上唐原榎町遺跡調査範囲図　(1/2,500)

Ⅰ　はじめに

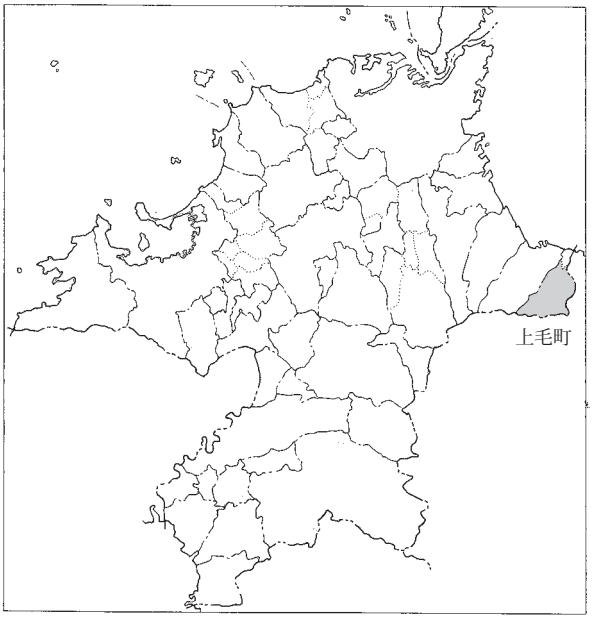
1　調査に至る経緯

九州内では、九州縦貫自動車道から始まり、大分道や長崎道、宮崎道と高速道路の建設が進められてきたが、東九州側では道路整備が停滞しており、南北を貫く高規格道路が待望されて久しかった。高規格道路は、農産物・水産物の輸送の効率化や、工場の誘致や企業の進出、観光産業の振興のために欠かすことができず、東九州地域の期待がかけられていた。このような中で計画された東九州自動車道は、福岡県北九州市から東九州の各県を結び、鹿児島県鹿児島市に至る総延長約 436km の建設が予定され、平成 17（2005）年 10 月 1 日に道路公団の民営化組織として誕生した、西日本高速道路株式会社（ネクスコ西日本）九州支社が事業にあたっている。福岡県内のルートは北九州市から築上郡上毛町に至る 49.4km で、北九州市からみやこ町の椎田道路に接続する部分、ならびに築城 IC、椎田 IC の改修については福岡工事事務所が、椎田道路から分岐して大分県へと続く部分については中津工事事務所がそれぞれ担当している。

北九州 JCT ～行橋 IC 区間までは平成 26（2014）年３月に開通しており、現在工事が進められている行橋 IC ～県境についても平成 28 年度末までに供用開始する予定である。東九州自動車道の整備計画については、報告済みの『東九州自動車道関係埋蔵文化財文化財調査報告－１－雨窪遺跡群』に詳しい。

平成 14 年度以降、表 1 のように用地取得が進んだ箇所から順次試掘確認調査と併行して、多くの発掘調査を実施しており、関係市町の多大な協力を得て、福岡県内の調査は平成 25 年度でほぼ終了した。また、平成 27 年度には残っていた豊前市内の最後の収容用地の発掘・試掘調査が完了し、すべての発掘調査を終了している。これを受けて、報告書作成作業も平成 27 年度で終了する運びとなった。

なお、東九州自動車道全体で、コストダウンを図る目的で、緑地化部分や橋桁の下部、将来車線として当面工事を行わない部分など、将来的に調査が可能と考えられる部分については、「限定協議」範囲として、調査対象から外すこととなり、苅田北九州空港 IC ～行橋 IC 間については平成 18（2006）年、行橋 IC ～みやこ豊津 IC 間ならびに築上～県境間については平成 20 年に協議文書を交わしている（苅田北九州空港～豊津間は平成 23 年に再協議）。ただし、遺跡の内容を知る上で重要と考えられる部分については、「限定協議対象地の発掘調査」の依頼を行い、承諾を得たうえで発掘調査を行っている。



第 2 図　築上郡上毛町の位置図

2　調査の経過

上唐原地区は東九州自動車道路線の福岡県内調査対象地の最も東部であり、西部の丘陵

部と平地部に分かれている。丘陵部は切り土、平地部分は盛土設計であったので、切り土部分の工事区間の調査を優先して、用地取得の進んだ範囲から試掘調査を実施した。

47 地点については、すでに「四ッ塚山古墳群」として周知されていた包蔵地であったが、平成 23（2011）年３月 17・18 日に試掘調査を実施し、２基の古墳のほか、弥生土器を含む遺構が検出された。これにより遺跡名を「四ッ塚山遺跡」として、用地内全域で本調査が必要となった。平成 23（2011）年４月 19 日から着手し、平成 24 年３月 26 日に終了した。

48 地点は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、実際に地域の共同墓地である「上唐原墓地」内に板石が露出していたので弥生時代から古墳時代の墓が存在することは明らかだった。上唐原墓地は現在も墓地として利用されていたので、墓地の移転作業を待って、平成 25（2013）年８月 28 日に着手し、26 年 3 月 24 日に終了した。

49 地点については平成 23（2011）年 10 月 21・25 ～ 27 日、11 月 2 日にかけて試掘調査を行い、遺構・遺物の見られた県道から西の水路そばまでを調査対象範囲として設定した。50 地点については平成 16（2004）・17(2005) 年度に大平村教育委員会（当時）がほ場整備で調査しているので試掘調査を省略し、上唐原榎町遺跡は 49･50 地点にまたがるものとして設定された。

上唐原榎町遺跡はすでに２度調査されていたので、今回は３次調査となった。50 地点をⅠ・Ⅱ区､49 地点をⅢ･Ⅴ･Ⅵ区として､50 地点の橋梁建設の作業期間を確保するため平成 24（2012）年３月 19 にⅠ区から着手し、工事の進行に合わせて順次調査して、平成 25（2013）年５月 20 日に終了した。用地取得の遅れていた 49 地点の一部は、年度が改まったので上唐原榎町遺跡４次調査として実施し、平成 25（2013）年５月 24 日に着手し、7 月 22 日に終了した。

３　調査・整理の組織

平成 23（2011）年度から 25（2013）年度の調査・平成 27（2015）年度の報告に関わる関係者は次のとおりである。平成 23 年度以降は組織改革により、埋蔵文化財調査業務全般が九州歴史資料館に移管され、事業者との契約・整理報告等を行っている。

なお、発掘調査に当たっては、地元の方々、発掘調査に参加された方々、上毛町および同教教育委員会の関係者の皆様より御協力を賜った。記して感謝いたします。

西日本高速道路株式会社　九州支社

	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 27 年度
支社長	本間清輔	本間清輔	本間清輔	本間清輔(～ 6.24)
				北田正彦(6.25 ～)

西日本高速道路株式会社　九州支社　中津工事事務所

所長	上羽坪勲 (～ 6.30)	三瀬博敬	三瀬博敬 (～ 6.30)	宗方鉄生
	三瀬博敬 (7.1 ～)		宗方鉄生 (7.1 ～)	
副所長（技術担当）	森田忠敏 (～ 6.30)	小島二郎	小島二郎	
	小島二郎 (7.1 ～)			
副所長（事務担当）	中村重俊	中村重俊	中村重俊	
副所長				中村重俊
総務課長	宇都良典	宇都良典	門田憲明	内田伸博

用地課長			岩田勲志（7.1～）	和田　勝
用地第一課長	藤江　正	藤江　正	岩田勲志（～6.30）	
工務課長	渡邉浩延	渡邉浩延（～1.31）	本田正和	本田正和
		本田正和（2.1～）		
上毛工事長	當房周三（～6.30）	荒平祐次	荒平祐次	
	荒平祐次（7.1～）			
豊前上毛工事長				大岡慶巳

	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成27年度
九州歴史資料館	（発掘調査）	（発掘調査）	（発掘調査）	（整理報告）
館長	西谷　正	西谷　正	荒巻俊彦	杉光　誠
副館長	南里正美	篠田隆行	篠田隆行	伊﨑俊秋
参事（文化財調査室長）			飛野博文	飛野博文
企画主幹（文化財調査室長）	飛野博文	飛野博文		
文化財調査室長				吉村靖徳
企画主幹（文化財調査室長補佐）			吉村靖徳	
庶務				
企画主幹（総務室長）	圓城寺紀子	圓城寺紀子		塩塚孝憲
企画主査（総務班長）	塩塚孝憲	長野良博	長野良博	中村満喜子
事務主査		青木三保	青木三保	宮崎奈巳
			南里成子	西村知子
主任主事	近藤一崇	近藤一崇		
主事	谷川賢治	谷川賢治	三好洸一	秦　健太
調査				
技術主査		秦　憲二	秦　憲二	
主任技師	坂本真一		小嶋　篤	
臨時職員	藤島志考		松崎友里	
整理報告				
技術主査（文化財調査班長）				秦　憲二
技術主査				坂本真一
技術主査（保存管理班長）				加藤和歳
主任技師				小林　啓
				岡田　諭
				小嶋　篤
				（アジア文化交流センター）
臨時調査員	藤島志考		松崎友里	

第３図　東九州自動車道調査地点図 (1/100,000)

表１　東九州自動車道調査地点一覧

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積（㎡）	試掘年度	調査面積（㎡）	調査年度	報告年度	既刊報告書番号	備考
0	苅田IC	雨窪遺跡群	京都郡苅田町大字雨窪			4,000	H13・14	H15	1集	
1	福岡		京都郡苅田町大字雨窪	1,700	H22					遺跡なし
2	福岡		京都郡苅田町大字提	4,500	H21・23					遺跡なし
3	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字提・馬場	13,100	H16・20・21	1,200	H20	H24	5集	
4	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字馬場・南原	35,300	H18・19	3,900	H19・20	H24	5集	
5	福岡		京都郡苅田町大字集	32,100	H21・22					遺跡なし
6	福岡		京都郡苅田町大字下片島	30,600	H18・2021・23					遺跡なし
7	福岡		京都郡苅田町大字下片島	10,700	H18					遺跡なし
8	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	24,200	H20～22	5,000	H19	H24	6集	
9	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	29,600	H20～22		H19	H24	6集	
10	福岡		京都郡苅田町大字上片島	21,500	H20					遺跡なし
11	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字岡崎・上片島	18,200	H20	8,440	H21～23	H24	6集	
12	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字上片島	7,500	H20	6,180	H21	H24	6集	
13	福岡		行橋市延永	12,200	H19					遺跡なし
14	福岡		行橋市延永	17,500	H19					遺跡なし
15	福岡	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市延永・吉国	24,810	H22	24,810	H19～23	H23～26	2・9・11・18集	
16	福岡		行橋市吉国	4,400	H20					遺跡なし
17	福岡		行橋市吉国	5,100	H19					遺跡なし
18	福岡		行橋市吉国・下検地	82,500	H18・19					遺跡なし
19	福岡		行橋市下検地	12,710	H22					遺跡なし
20	福岡		行橋市上検地・下検地	20,650	H22					遺跡なし
21	福岡		行橋市上検地・中川・大野井	19,190	H22					遺跡なし
22	福岡		行橋市大野井・宝山	4,820	H20・22					遺跡なし
23	福岡		行橋市宝山	10,050	H20					遺跡なし
24	福岡	宝山小出遺跡	行橋市宝山	16,100	H20	6,360	H21・22	H25	12集	
25	福岡	宝山桑ノ木遺跡	行橋市宝山・流末	46,620	H20・21・23	31,550	H22～24	H25	12集	
26	福岡	流末溝田遺跡	行橋市流末	14,710	H20・21	2,900	H22	H25	12集	
27	福岡		行橋市流末	840						
28	福岡	矢留堂ノ前遺跡	行橋市矢留	18,590	H20	12,750	H21～23	H26	19集	
29	福岡		行橋市矢留・南泉	7,000	H20・22					
30	福岡	福原長者原遺跡 福原寄原遺跡	行橋市南泉	18,774	H19・22	16,574	H22～24	H25	13集	
31	福岡	福原寄原遺跡	行橋市南泉	10,950	H21	3,300	H21	H25	13集	
32	福岡	竹並大車遺跡 竹並ヒメコ塚古墳	行橋市南泉	13,888	H22	13,888	H22			H22行橋市による調査
33	福岡	竹並大内田遺跡	行橋市南泉	17,636	H21	4,560	H21	H24	6集	
34	福岡	鬼熊遺跡	行橋市南泉	15,013	H20	15,013	H21			H21行橋市による調査
35	福岡	草場角名遺跡 国作三角遺跡	行橋市南泉・京都郡みやこ町国作	42,940	H20～23	2,720+7,000	H22・23	H24 H25	7集 8集	
36	福岡	八反田遺跡 京ヶ辻遺跡	京都郡みやこ町国作・田中・有久	29,491	H20～23	29,491	H21～23	H25・26	14・20集	H21八反田遺跡はみやこ町による調査
37	福岡		京都郡みやこ町有久	1,110	H21					遺跡なし
38	福岡	呰見川ノ上遺跡	京都郡みやこ町呰見	1,132	H21	1,132	H22	H25	10集	
39	福岡	呰見中園遺跡 呰見大塚古墳	京都郡みやこ町呰見	8,218	H21・22	5,918	H21～23	H26	17集	H22呰見中園遺跡はみやこ町による調査
40	福岡	カワラケ田遺跡 下原七反田遺跡 八ツ重遺跡	京都郡みやこ町呰見・下原	45,510	H19・20・21	22,763	H20～22	H23・25	3・10集	
41	福岡	カワラケ田遺跡	京都郡みやこ町呰見	5,080	H21	3,580	H21・22	H25	10集	
42	福岡	安武・深田遺跡	築上郡築上町安武	26,000	H21～23	26,000	H22・23	H22・23	20集	一部築上町による調査
43	福岡		築上郡築上町小原	24,359	H21・23・24					
2	中津	石堂大石ヶ丸遺跡	築上郡築上町石堂	9,027	H21～23	200	H23	H25	15集	
3	中津	福間菜切古墳群	築上郡築上町上ノ河内	16,644	H21～23	1,000	H22	H25	15集	
4	中津		築上郡築上町上ノ河内	19,420	H22					遺跡なし
5	中津		築上郡築上町上ノ河内	2,840	H21					遺跡なし
6	中津	中村西峰尾遺跡	築上郡築上町上ノ河内・豊前市中村	26,972	H22	15,000	H23・24	H25	15集	
7	中津	中村山柿遺跡	豊前市中村	16,579	H21・22	700	H22	H25	15集	
8	中津		豊前市中村・馬場	10,354	H21					遺跡なし
9	中津		豊前市中村・松江	42,434	H24					遺跡なし
10	中津		豊前市松江	9,905	H23					遺跡なし
11	中津		豊前市松江	26,570	H21・23					遺跡なし
12	中津	松江黒部遺跡	豊前市松江・四郎丸	14,462	H21	600	H23	H25	15集	
13	中津		豊前市四郎丸	12,986	H21・23					遺跡なし
14	中津		豊前市四郎丸	2,390	H21					遺跡なし
15	中津		豊前市四郎丸	9,735	H22					遺跡なし
16	中津		豊前市四郎丸	10,432	H22					遺跡なし
17	中津	川内下野添遺跡	豊前市川内	15,972	H21～23	3,600	H22・23	H25	15集	
18	中津		豊前市川内	16,040	H21～23					遺跡なし
19	中津	鳥越下屋敷遺跡	豊前市鳥越	4,963	H23・24	760	H24	H26	21集	
20	中津	鳥越湯福山遺跡 大村湯福遺跡	豊前市鳥越	8,762	H25 H23・24	2,100 1,100	H27 H24	H26	21集	H27豊前市による調査
24	中津	天地山遺跡	豊前市大村	6,777	H20・22					遺跡なし
25	中津	大村上野地遺跡 大村シトキ田遺跡	豊前市大村・荒堀	10,527	H20・22・23	2,600	H23	H25	15集	一部豊前市による調査
26	中津	荒堀山田原遺跡	豊前市荒堀	21,821	H21～24	1,000	H22			
27	中津		豊前市荒堀	9,823	H21・22					遺跡なし
28	中津		豊前市大西	23,122	H21～23					遺跡なし
29	中津	塔田琵琶田遺跡 大西遺跡 西ノ原遺跡 時末遺跡 永久笠田遺跡	豊前市大西・永久・塔田・久路土	63,733	H21～24	19,230	H23・24	H26・27	22・24 ～27集	H22豊前市による調査
30	中津		豊前市久路土	9,463	H23					遺跡なし
31	中津		豊前市鬼木	12,636	H23					遺跡なし
32	中津	鬼木鉾立遺跡	豊前市鬼木	25,256	H21・23	1200＋	H24	H26	21集	
33	中津	緒方古墳群 七ツ枝遺跡	築上郡上毛町緒方	12,456	H20～23	3,500	H20～22	H24	10集	上毛町試掘
34	中津	龍毛遺跡	築上郡上毛町緒方	11,732	H20・21・23・24	5,000	H21・24	H24	10集	上毛町試掘
35	中津	下尻高遺跡 ハカノ本遺跡	築上郡上毛町緒方・尻高	11,517	H20・21	7,200	H20・21	H24	7集	
36	中津	安雲山田遺跡	築上郡上毛町安雲	10,135	H20	9,400	H20			一部上毛町により調査
37	中津	安雲山田遺跡	築上郡上毛町安雲・宇野	24,970	H20・21		H20・21	H24	7集	〃
38	中津		築上郡上毛町土佐井	22,252	H20					遺跡なし
39	中津	土佐井遺跡2C-4区	築上郡上毛町土佐井	21,860	H20～22	4,400	H22～23	H25	16集	
40	中津	土佐井遺跡2A-2区	築上郡上毛町土佐井	13,476	H20～22	600	H23	H25	16集	一部上毛町により調査
41	中津	土佐井小迫遺跡 唐原山城跡	築上郡上毛町土佐井・下唐原	7,887	H21・22・24	1,500	H25	H25		
42	中津	ガサメキ古墳群 穴ヶ葉山南古墳群	築上郡上毛町下唐原	33,002	H21・22・24	4,000	H22・24	H25・26	23集	一部上毛町により調査
43	中津		築上郡上毛町下唐原	25,215	H21・22・23					遺跡なし
44	中津	大久保楮迫遺跡	築上郡上毛町下唐原	13,452	H22	7,500	H22	H23	16集	
45	中津		築上郡上毛町下唐原	11,997	H24					遺跡なし
46	中津	皿山古墳群	築上郡上毛町下唐原・上唐原	23,977	H22～24	12,000	H23・24	H26	23集	
47	中津	四ツ塚山遺跡	築上郡上毛町上唐原	7,193	H22・23	6,600	H23	H27	28集（本書）	
48	中津	鏡迫古墳群	築上郡上毛町上唐原	4,577	H25	2,000	H25	H27	28集（本書）	
49	中津	上唐原榎町遺跡3次Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ区・4次	築上郡上毛町上唐原	14,250	H23・24	8,940	H24・25	H27	28集（本書）	
50	中津	上唐原榎町遺跡3次Ⅰ・Ⅱ区	築上郡上毛町上唐原	4,735	H23	1,050	H24	H27	28集（本書）	一部上毛町により調査

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

四ッ塚山遺跡・鏡迫古墳群・上唐原榎町遺跡は築上郡上毛町上唐原に所在している。上毛町は福岡県の東端にあって、東は一級河川山国川を境にして、南は太平山・瓦岳・雁股山を結ぶ英彦山山系を分水嶺として大分県中津市に接する、西は同山系から掌状に伸びる一稜線と佐井川をもって豊前市に隣接し、北に接する吉富町を隔てて周防灘を臨む。町域の大部分は標高807.1mの雁股山から延びる丘陵であり、その大半が安山岩類に属する角礫岩・安山岩で、一部花崗岩の一種である花崗閃緑岩がある。丘陵先端には安雲面と呼ばれる低位段丘が発達している。山国川・佐井川・友枝川は丘陵や段丘を開析し、その流域に沖積地や自然堤防を形成し、周防灘に達する。

現在の集落の多くは、丘陵から派生する台地裾と自然堤防上に分布しており、当遺跡もこの自然堤防上に立地している。自然堤防後背丘陵裾部は礫層（註１）であり、後背湿地の水田地帯は旧川床の礫層が厚く堆積している。

山国川上流域は九州山地系の気候要素をもつため雨量が多く、山国川は一年を通して豊富な水量を持つとともに、頻繁に洪水を起こしており、平成24年7月３日及び14日の豪雨災害は記憶に新しい。近世には有野・原井・下唐原地区に渡し場が設けられ、中津との交通の要衝として発展している。

2　歴史的環境

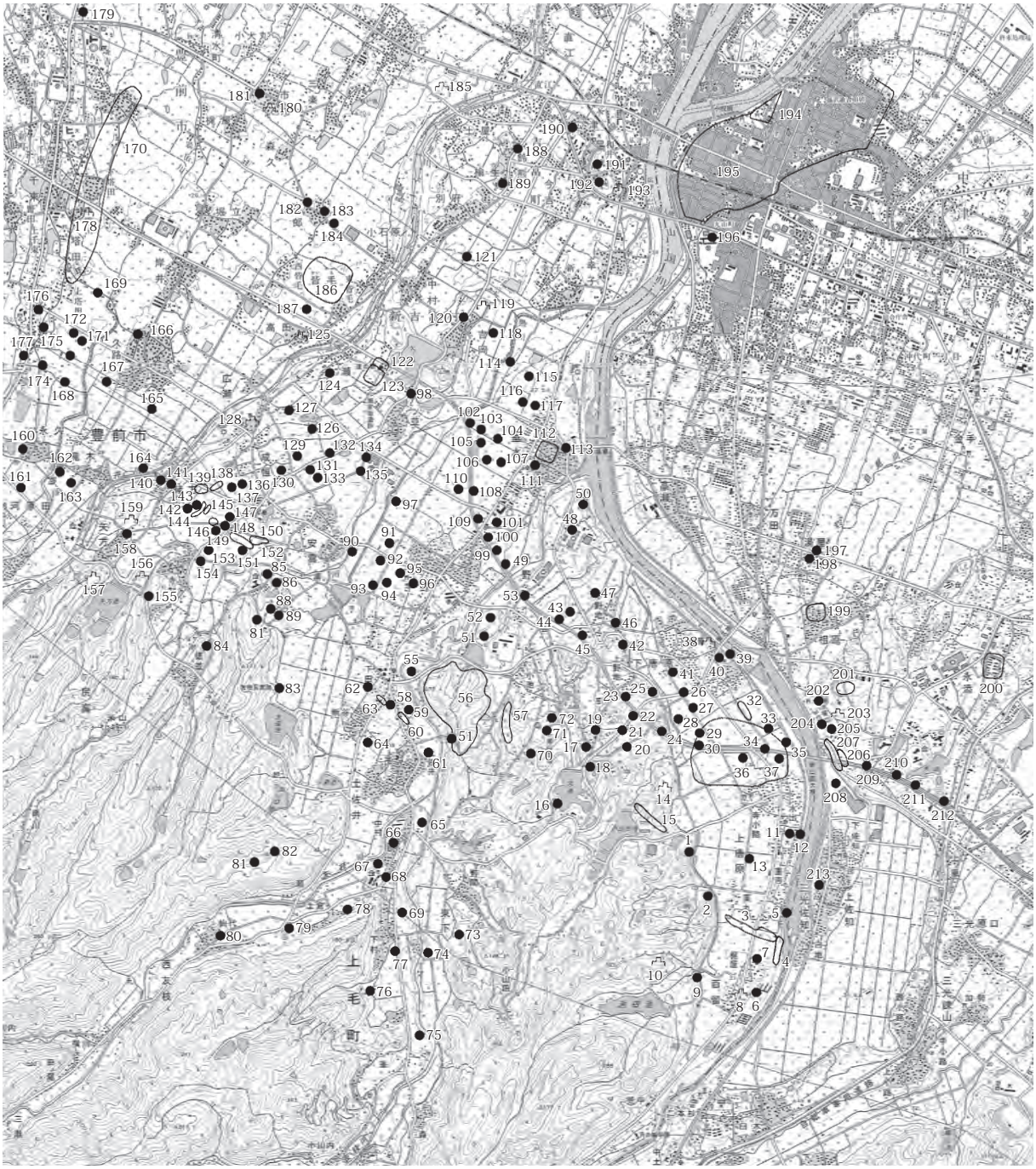
近年上毛町域では、ほ場整備事業や東九州高速道路などの交通体系整備など大規模開発に伴う発掘調査が増加し、新たな事実が明らかになっている。

旧石器時代の遺跡は、金居塚遺跡（註２）で後期古墳墳丘下から発見されており、いわゆる旧地表層なので時期は単一ではないものの珪質岩製ナイフ形石器が見られる。そのほかは2次的状況出土の資料のみで、下唐原十足遺跡（註３）でも珪質岩製ナイフ形石器が、桑野遺跡で流紋岩ナイフ形石器、上ノ熊遺跡で安山岩製剥片尖頭器が出土している（註４）。近年では、ガサメキ１号墳（註５）から黒曜石製ナイフ形石器が、安雲山田遺跡（註６）から黒曜石製のナイフ形石器が、皿山古墳（註７）からは安山岩質の三稜尖頭器が出土している。

縄文時代の中期以前の遺跡は希薄だが、早期の押型文土器が百留梅ノ木遺跡Ⅱ北２地点（註８）で、前期では轟式期の包含層が上唐原道祖丸遺跡（註９）で確認された。中期の遺跡は現在まで発見されていない。

後期に入ると一変して遺跡数は爆発的な増加を見せる。鐘崎式期を中心とする遺跡が、下唐原大法寺遺跡（註10）・下唐原龍右エ門遺跡（註11）・上唐原遺跡（註12）で見られ、石囲炉を伴う竪穴住居跡も発見されている。また、下唐原十足遺跡（註13）では100基近い鐘崎式期の貯蔵穴と見られる竪穴遺構群があり、集落から離れた場所に共用貯蔵施設を設けていた可能性がある。また、同遺跡では時期を特定できないが落し穴群も検出されている。

鐘崎式に続く北久根山式期も、下唐原寺前遺跡（註14）では竪穴住居跡から貝殻や獣骨が出土しており、近年では、鳴水遺跡（註15）で５基の竪穴状遺構と北久根山式の土器棺墓が発見されている。



1 四ッ塚山遺跡
2 鏡迫古墳群
3 上唐原榎町遺跡
4 上唐原了清遺跡
5 百留居屋敷遺跡
6 百留梅ノ木遺跡
7 梶屋宝塔
8 百留城跡
9 百留横穴群
10 代金城跡
11 上唐原村ノ内遺跡
12 上唐原稲本屋敷遺跡
13 上唐原道祖丸遺跡
14 壇ノ城跡
15 皿山古墳群
16 恵良古墳群
17 新池南古墳
18 大久保楮迫遺跡
19 上唐原甚吾久保遺跡
20 上ノ熊古墳
21 下唐原大久保遺跡
22 下唐原十足遺跡
23 上の熊遺跡
24 金居塚遺跡
25 西方遺跡
26 下唐原龍エ門遺跡
27 下唐原田代遺跡
28 下唐原石ヶ町遺跡
29 下唐原七社遺跡
30 郷ヶ原遺跡
31 下唐原遺跡群
32 下唐原太郎丸遺跡
33 上唐原久保畑遺跡
34 上唐原遺跡
35 上唐原大法寺遺跡
36 上唐原塚畑遺跡
37 上唐原田法寺遺跡
38 秋吉城跡
39 下唐原宮園遺跡
40 下唐原居屋敷遺跡
41 下唐原若木遺跡
42 能満寺古墳群
43 下唐原桑野遺跡
44 桑野遺跡
45 大塚本遺跡
46 下唐原寺前遺跡
47 下唐原伊柳遺跡
48 中桑野遺跡
49 宇野代遺跡
50 牛頭天王遺跡
51 桑野原窯跡
52 宇野台遺跡
53 上桑野遺跡
54 土佐井小迫遺跡
55 鳴水遺跡
56 唐原神籠石
57 ガサメキ遺跡
58 土佐井地区遺跡
59 土佐井遺跡２A-２地区
60 土佐井東遺跡
61 土佐井遺跡
62 土佐井２C‐４地区
63 土佐井西遺跡
64 土佐井ミソンデ遺跡
65 井手ノ上遺跡
66 今蔵遺跡
67 今蔵遺跡Ｂ地点
68 縄手遺跡
69 下村池ノ本遺跡
70 穴ヶ葉山南遺跡
71 穴ヶ葉山遺跡
72 穴ヶ葉山古墳群
73 堂ヶ迫遺跡
74 東友枝曽根遺跡
75 友枝城ノ腰遺跡
76 下村塚ノ前遺跡
77 下村養生寺遺跡
78 今蔵遺跡C地点
79 藤ヶ丸遺跡
80 仙代地区遺跡
81 願成寺廃寺
82 経塚山遺跡
83 友枝瓦窯跡
84 徳並横穴群
85 安雲山田遺跡２地点
86 安雲山田遺跡１地点
87 照日遺跡
88 山田１号墳
89 山田窯跡
90 小木戸遺跡
91 曲り遺跡
92 太田遺跡
93 唐ノ本遺跡
94 宇野田遺跡
95 松掛遺跡
96 宮ノ後遺跡
97 稲葉遺跡
98 八ッ並下ノ原遺跡
99 竹ノ下遺跡
100 ウツケ畑遺跡
101 馬々代遺跡
102 池ノ口遺跡
103 横道遺跡
104 一ノ坪遺跡
105 池ノ本遺跡
106 阿高田遺跡
107 石筆遺跡
108 三ッ溝遺跡
109 長田遺跡
110 正ノ坪遺跡
111 垂水高木遺跡
112 垂水廃寺
113 垂水遺跡
114 溝添遺跡
115 板敷遺跡
116 小柳遺跡
117 新助田遺跡
118 塚本古墳
119 吉岡城跡
120 吉岡巨石塚古墳
121 ウルネ遺跡
122 堂ノ前遺跡
123 大ノ瀬官衙遺跡
124 中ノ坪遺跡
125 高田城跡
126 フルトノ遺跡
127 中アサバル遺跡
128 広恒城跡
129 ハンダ遺跡
130 シバワラ遺跡
131 原田遺跡
132 ナカヲ遺跡
133 小宮本遺跡
134 下島ヲカ遺跡
135 下島地区遺跡
136 中屋敷遺跡
137 柿ノ木田遺跡
138 恒石遺跡
139 屋鋪田遺跡
140 緒方古墳群
141 七ッ枝３地点
142 春屋敷遺跡
143 七ッ枝遺跡２地点
144 原ノ前遺跡2次調査
145 道ノ本遺跡
146 龍毛遺跡２地点
147 龍毛遺跡１地点
148 龍毛遺跡３地点
149 龍毛遺跡４地点
150 ハカノ本遺跡２次調査
151 ハカノ本遺跡１次調査
152 下尻高遺跡
153 インキウ遺跡
154 尻高畑田遺跡
155 尻高後椀遺跡
156 緒方城跡
157 牛王城跡
158 七ッ枝遺跡1地点
159 緒方城跡
160 永久遺跡
161 河原田善丸遺跡
162 河原田塔田遺跡
163 鬼木四反田遺跡
164 鬼木鉾立遺跡
165 久路土鐘鐸田遺跡
166 久路土六田遺跡
167 久路土幡遺跡
168 永久笠田遺跡
169 久路土芝掛遺跡
170 千束原古墳群
171 塔田琵琶田遺跡
172 久路土高松遺跡
173 時末遺跡
174 西ノ原遺跡
175 大西遺跡
176 上塔田遺跡
177 中大西遺跡
178 旭城跡
179 吉木沼遺跡
180 市丸城跡
181 市丸城居屋敷遺跡
182 六郎神田遺跡
183 六郎堂ノ前遺跡
184 六郎桜木遺跡
185 三毛門城跡
186 小石原泉遺跡
187 皆毛梶又遺跡
188 鈴熊山遺跡
189 楡生古墳
190 和井田遺跡
191 今吉遺跡
192 天仲寺城跡
193 天仲寺古墳
194 中津城跡
195 中津城下町遺跡
196 高畑遺跡
197 沖代条里跡居屋敷地区遺跡
198 市場遺跡
199 相原廃寺
200 長者屋敷官衙遺跡
201 相原山首遺跡
202 鶴市神社裏山古墳
203 坂手隈城跡
204 坂手隈横穴群
205 弊旗邸古墳
206 勘助野地遺跡
207 上ノ原横穴群
208 佐知久保畑遺跡
209 柳ヶ迫池東遺跡
210 大畝町遺跡
211 大池南遺跡
212 市ノ沢遺跡
213 佐知遺跡

第４図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

さらに、上唐原了清遺跡（註 16）では三万田～広田式を中心とした資料が得られ、土偶や石棒が出土している。また、西平式から三万田１式を主体とする原井三ッ江遺跡（註 17）でも土偶が出土しており、山国川堤防上の広い範囲で小規模な集落が営まれていたことが明らかになっている。

友枝川流域では、東友枝曽根遺跡（註 18）で鐘崎Ⅲ式～三万田式期の約 30 基の竪穴住居跡と多量の土偶や石棒が出土しており、こうした後期の集落遺跡の調査の蓄積は上毛町域では竪穴住居跡の変遷が追える状況までに達している。

晩期遺跡も資料が少ないながらも次第に蓄積されつつあり、下唐原瀬戸口遺跡（註 19）で黒川式の包含層があり、百留居屋敷遺跡（註 20）・郷ヶ原遺跡（註 21）・下唐原川下遺跡（註 22）では夜臼式期の遺物が見つかっている。また、下唐原太郎丸遺跡（註 23）で晩期以降の 100 点を越える打製石斧が出土しており、生業の変化を考える上で注目される。

弥生時代の遺跡は、まず山国川の自然堤防上に前期後半に下唐原宮園遺跡（註 24）が現れる。その後、下唐原地区の台地上に前期末から中期後半に環濠を備える中桑野遺跡（註 25）や桑野遺跡（註 26）・下唐原桑野遺跡（註 27）・上桑野遺跡（註 28）・下唐原伊柳遺跡（註 29）などの遺跡が分布しており、１×１間、１×２間の大型掘立柱建物跡２棟が検出された牛頭天王遺跡（註 30）を有する拠点集落が展開している。上唐原地区では、皿山古墳群の下層集落遺跡のように丘陵に占地する集落が確認され、山国川堤防上では、上唐原村ノ内遺跡（註 31）や上唐原榎町遺跡・了清遺跡で中期の円形竪穴住居跡が検出されているが、いずれも大規模な集落は見つかっていない。このうち上唐原村ノ内遺跡出土の窓付土器が注目される。

埋葬遺跡としては、列埋葬の集団墓が南田遺跡（註 32）と原ノ前遺跡（註 33）に見られ、大塚本遺跡（註 34）では中期前半から中頃の方形墳丘墓と列埋葬の集団墓地が形成されている。また、小片ながら金居塚遺跡（註 35）で細形銅剣片が発見されており、有力集団の存在が窺える。

後期になると、下唐原地区に郷ヶ原遺跡や上唐原遺跡を内包する唐原環濠集落が出現する。３条の濠を巡らせ、最も外側の濠の外には水田跡（註 36）や小児墓地が発見されている。（註 37）また、環濠集落内の下唐原田代遺跡（註 38）からは、内行花文鏡片が出土している。

後期の埋葬遺跡では、金居塚遺跡・下唐原穴ヶ葉山遺跡（註 39）鏡迫古墳群（註 40）・下唐原甚吾久保遺跡（註 41）で石蓋土壙墓群が発見されている。これらは群集しているが、ベンガラを多用し、鏡や鉄器などの副葬品を持つことから上位の集団墓と考えられる。

古墳時代の首長墓としては下唐原地区に古墳時代前期初頭の前方後円墳である西方古墳（註 42）と能満寺３号墳（註 43）が存在する。中期古墳は吉富町楡生山古墳（註 44）があるのみで、埴輪をもつ竪穴式石室と記録されている。後期古墳としては台地上に桑野題古墳群（註 45）・宇野台古墳（註 46）・上ノ熊古墳群・金居塚古墳群・ガサメキ古墳群・皿山古墳群（註 47）などがあるが、上毛町域は大型円墳が小地域に分散して併存しており、小地域を統合する勢力は存在していないようだ。石室内部に線刻絵画をもつ穴ヶ葉山古墳（註 48）や山田古墳（註 49）が注目される。また、山国川に面する台地斜面には百留横穴群（註 50）と金居塚古墳群で凝灰岩の岩盤を刳り貫いた横穴が確認され、百留横穴群では１基に赤色顔料で円文が描かれたものが見られた。近年、上唐原榎町遺跡（註 52）で１基の古墳が、百留居屋敷遺跡（註 53）で時期は不確定ながら小竪穴式石室が２基発見されており、堤防上の埋葬遺跡も発見されている。

古墳時代前期の集落は、弥生後期から存続するものが多く、上唐原榎町遺跡（註 54）、郷ヶ

原遺跡（註 55）・百留居屋敷遺跡に見られたが、中期まで存続するものはほとんどない。中期の集落は町域北西部の池ノ口遺跡（註 56）と上唐原了清遺跡（註 57）が知られていたが、近年、下唐原地区でも下唐原寺前遺跡（註 58）や下唐原伊柳遺跡・下唐原石堂遺跡（註 59）で発見されている。また、垂水地区の池の口遺跡は「オンドル状カマド」と呼ばれる壁付き煙道を伴う竪穴住居跡が発見されている。

古墳時代後期の集落では、上唐原遺跡（註 60）・郷ヶ原遺跡・上唐原榎町遺跡（註 61）・下唐原太郎丸遺跡（註 62）がある。後期から飛鳥時代にかけての集落としては上唐原遺跡とその周囲の上唐原塚畑遺跡（註 63）・上唐原道祖丸遺跡（註 64）・上唐原寺畑遺跡（註 65）・上唐原榎町遺跡などがある。百留梅ノ木遺跡（註 66）では近接する百留横穴群と同時期の集落が発見されており注目される。

生産遺跡としては、５世紀末から６世紀初頭の下唐原大久保遺跡（註 67）と 6 世紀前半の百富梅ノ木遺跡（註 68）で埴輪窯が注目される。現在のところ、この窯の製品を使用した古墳は近隣で見つかっておらず、山国川を利用した水運で遠方まで運ばれた可能性が指摘されている。

律令期の豊前国には「田河・企救・京都・仲津・築城・上毛・下毛・宇佐」の８郡が置かれ、上毛町域は「上毛郡」にあたる。「上毛郡」は『和名類聚抄』には「加牟豆美介（カムツミケ）」と記され、文武天皇２（698）年鋳造の福岡県太宰府市観世音寺梵鐘口縁下端の線刻と奈良正倉院文書の大宝２（702）年豊前国戸籍断簡に「上三毛郡」と表記されている。上毛郡衙には大ノ瀬官衙遺跡（註 69）が比定されており、西１㎞ほどに郡衙前身の評衙の可能性のあるフルトノ遺跡（註 70）があり、南 0.7 ㎞ほどには郡倉の可能性のある２棟の掘立柱建物跡が発見された下島ヲカ遺跡（註 71）がある。また、尾島池を挟んで対峙する阿古田遺跡（註 72）でも２棟の大型掘立柱建物跡が発見されている。南東には垂水廃寺（註 73）があり、上毛町北西部の平地は「上毛郡」の政治・文化の中心地であったと考えられる。なお、垂水廃寺は方二町と推定されているが、伽藍配置等はまだ判然としていない。垂水廃寺の西にある池ノ本遺跡（註 74）・一ノ坪遺跡（註 75）と池の口遺跡では古代官道と見られる規模の道路状遺構が検出されており、後者は垂水廃寺推定寺域北端に達するが、前者は方向がずれており、垂水廃寺の寺域や条里との関係について検討する必要がある。垂水廃寺は屋瓦の文様から渡来系氏族が建立したと考えられている。瓦を供給した窯としては、地下式有階有段の登窯である友枝瓦窯跡を始め（註 76）・山田瓦窯跡（註 77）・照日窯跡群（註 78）・桑野窯跡（註 79）があり、山田瓦窯跡は瓦陶兼業で、照日窯跡は７世紀後半に瓦陶兼業窯に移行している。上毛町域の古代最大の発見は唐原古代山城跡（註 80）である。調査の結果、３ヶ所の水門をもつ包谷式山城であり、水門・列石・土塁・礎石建物跡が確認されている。

奈良時代の集落は希薄ながら、上唐原遺跡・上唐原榎町遺跡・上唐原道祖丸遺跡・百留居屋敷遺跡（註 81）で見つかっており、特に上唐原遺跡では細長い掘立柱建物跡が注目される。同じように細長い掘立柱建物跡が発見され、掘立柱建物跡のみで構成されたハカノ本遺跡（註 82）は、郷衙の可能性もあるが、古代官道と離れていることから神社跡と考えられている。

平安時代後期になると上毛町域は田部氏・宇佐氏一族の支配地となったが、末期ごろには宇佐八幡宮・弥勒寺の荘園が進出し、12 世紀末頃には上毛郡司宗成・俊忠と宇佐宮祠官の田部太子との間に吉冨名をめぐる相論が記録されている。平安時代のハカノ本遺跡では 11 ～ 12 世

紀代の有力農民の屋敷跡が発見されており、13 世紀には、下尻高遺跡（註 83）と一体となるコの字形の濠で囲まれた居館が検出されている。

鎌倉時代になると、関東から宇都宮氏が地頭として豊前国に下向して勢力をふるう。上毛町域では宇都宮氏一族の野仲氏が本拠地を構え、在地の国人勢力を支配下に置いた。山国川流域後背の丘陵には壇ノ城跡や代金城跡が、堤防上には秋吉氏の居城である秋吉城跡、百富氏の居城である百富城跡が造られている。山国川堤防上の上唐原了清遺跡でも、溝で囲まれた 13 ～ 14 世紀の居館址が確認されており、岡為造氏の採集品に下唐原地区の某寺跡出土とされる湖州鏡がある（註 84）。こうした有力者の墓石と見られる石塔群が残されており、秋吉城跡に近い下唐原居屋敷遺跡（註 85）では五輪塔の部材が多く発見され、百富城跡に近い梶屋集落には板屋宝塔が現存している。大平村誌によれば唐原地区に花崗岩の産地があり、有野地区には江戸時代に凝灰岩を使用する石工集団が存在していたとある（註 86）。文献資料が少なく実態がわかりにくい上毛町域の中世の様子も、発掘調査が進むにつれて次第に明らかになりつつある。

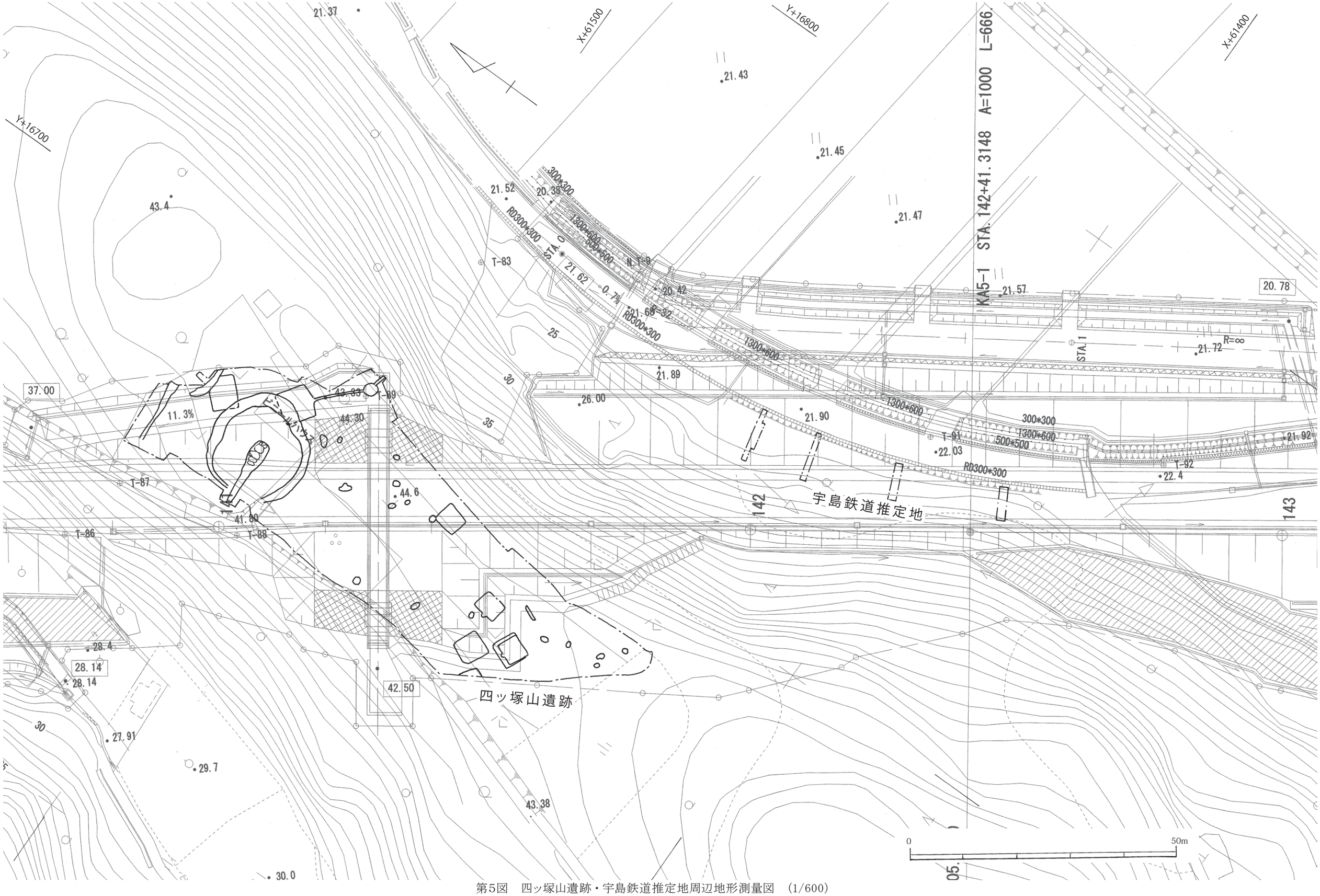
註

1　この礫層は（豊前）中津層と呼ばれるもので、川床の礫層に比べて亜角礫や風化の進んだ礫が多いので区別できる。坂本亨　長谷紘和 1972「大分県北部、中津平野の第４系」『地質調査所月報第 23 巻第９号』
2　福岡県教育委員会 1996『金居塚遺跡Ⅱ』一般国道 10 号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第７集
3　上毛町教育委員会 2002『下唐原十足遺跡』大平村文化財調査報告書第 12 集
4　福岡県教育委員会 1997『桑野遺跡・上の熊遺跡・小松原遺跡』豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第６集下巻
5　上毛町教育委員会 2014『大久保楢迫４号墳・ガサメキ古墳群　緒方１号墳』上毛町文化財調査報告書第 18 集
6　上毛町教育委員会 2015『七ツ枝遺跡　安雲山田遺跡　土佐井遺跡　上唐原榎町遺跡』上毛町文化財調査報告書第 20 集
7　九州歴史資料館 2015『ガサメキ古墳群２・３区　皿山古墳群』東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告第 23 集
8　福岡県教育委員会 2007『福岡県埋蔵文化財調査年報－平成 17 年度－』
9　福岡県教育委員会 2004『福岡県埋蔵文化財調査年報－平成 15 年度－』
10　福岡県教育委員会 2003『福岡県埋蔵文化財調査年報－平成 13 年度－』
11　上毛町教育委員会 2010『下唐原龍右エ門遺跡』上毛町文化財調査報告書第 11 集
12　福岡県教育委員会 1995『上唐原遺跡Ⅰ』一般国道 10 号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第２集
13　上毛町教育委員会 2002『下唐原十足遺跡』大平村文化財調査報告書第 12 集
14　上毛町教育委員会 2013『下唐原寺前遺跡』上毛町文化財調査報告第 17 集
15　福岡県教育委員会 2004『福岡県埋蔵文化財調査年報－平成 14 年度－』
16　福岡県教育委員会 2000『一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告５　上唐原了清遺跡Ⅱ』
17　大平村教育委員会 1989『原井三ッ江遺跡』大平村文化財調査報告書第５集
18　小池史哲・末永浩一 1999「太平村東友枝曽根遺跡の調査」『考古学ジャーナル』443
19　前掲註 10
20　福岡県教育委員会 1999『一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告３　百留居屋敷遺跡』
21　福岡県教育委員会 1995『郷ヶ原遺跡』一般国道 10 号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 10 集

22　大平村誌編集委員会 1986『大平村誌』
23　上毛町教育委員会 2012『下唐原太郎丸遺跡』上毛町文化財調査報告書第 16 集
24　福岡県教育委員会 1998『一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告２　下唐原宮園遺跡』
25　新吉富村教育委員会 1978『中桑野遺跡』新吉富村文化財調査報告第３集
26　福岡県教育委員会 1997『桑野遺跡・上の熊遺跡・小松原遺跡』豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第６集下巻
27　上毛町教育委員会 2009『下唐原伊柳遺跡（遺物編）下唐原石堂遺跡　下唐原桑野遺跡』上毛町文化財調査報告第９集
28　前掲註 27
29　福岡県教育委員会 1998『上桑野遺跡』一般国道 10 号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第８集
30　新吉富村教育委員会 1994『垂水高木遺跡　牛頭天王遺跡』新吉富村文化財調査報告第８集
31　上毛町教育委員会 2007『上唐原村ノ内遺跡　上唐原山ヶ園遺跡』上毛町文化財調査報告第５集
32　新吉富村教育委員会 2000『宇野地区遺跡群Ⅱ』新吉富村文化財調査報告第 13 集
33　前掲註 15
34　福岡県教育委員会 1998『大塚本遺跡』一般国道 10 号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第９集
35　福岡県教育委員会 1996『金居塚遺跡Ⅰ』一般国道 10 号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第４集
36　上毛町教育委員会 2014『上唐原久保畑遺跡』上毛町文化財調査報告書第 19 集
37　前掲註 10
38　前掲註 10
39　太平村教育委員会 1991『土佐井ミソンデ遺跡　穴ヶ葉山４号墳　穴ヶ葉山墳墓群』太平村文化財調査報告第８集
　　太平村教育委員会 1993『穴ヶ葉山遺跡』太平村文化財調査報告第８集
40　本書
41　上毛町教育委員会 2008『下伊良原伊柳遺跡 B 地点　下唐原甚吾久保遺跡』上毛町文化財調査報告第６集
42　前掲註 12
43　太平村教育委員会 1994『能満寺古墳群』太平村文化財調査報告第９集
44　吉富町教育委員会 1991『楡生山古墳』吉富町文化財調査報告書第３集
45　新吉富村教育委員会 1989『桑野題遺跡』新吉富村文化財調査報告第８集
46　新吉富村教育委員会 1990『宇野台古墳』新吉富村文化財調査報告第５集
47　九州歴史資料館 2015『ガサメキ古墳群 2・3 区　皿山古墳群』東九州自動車道関係埋蔵文化財調査　報告第 23 集
48　太平村教育委員会 1999『史跡穴ヶ葉山古墳』太平村文化財調査報告第 10 集
49　北代茂他 1990「山田古墳」『新吉富村誌』
50　上毛町教育委員会 2010『百留横穴墓群』上毛町文化財調査報告第 13 集
51　前掲註 35
52　福岡県教育委員会 2006『福岡県埋蔵文化財調査年報－平成 16 年度－』
　　前掲註８
53　前掲註 20
55　前掲註 22
56　福岡県教育委員会 1996『池の口遺跡』一般国道 10 号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第３集

57　福岡県教育委員会 2000『一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告５　上唐原了清遺跡Ⅱ』
58　上毛町教育委員会 2013『下唐原寺前遺跡』上毛町文化財調査報告第 17 集
59　上毛町教育委員会 2003『下唐原伊柳遺跡』上毛町文化財調査報告第 14 集
　　前掲註 41
60　前掲註 12
61　上毛町教育委員会 2015『七ッ枝遺跡　安雲山田遺跡　土佐井遺跡　上唐原榎町遺跡』上毛町文化財調査報告書第 20 集
62　前掲註 23
63　前掲註９
64　前掲註５
65　前掲註９
　　前掲註 52
66　前掲註８
67　上毛町教育委員会 2010『下唐原龍右エ門遺跡』上毛町文化財調査報告書第 11 集
68　福岡県教育委員会 2008『福岡県埋蔵文化財調査年報－平成 18 年度－』
69　新吉富村教育委員会 1997『大ノ瀬下大坪遺跡』新吉富村文化財調査報告第 10 集
　　新吉富村教育委員会 1998『大ノ瀬下大坪遺跡Ⅱ』新吉富村文化財調査報告第 11 集
70　福岡県教育委員会 2002『福岡県埋蔵文化財調査年報－平成 12 年度－』
71　福岡県教育委員会 2001『福岡県埋蔵文化財調査年報－平成 10 年度－』
72　上毛町教育委員会 2010『垂水地区遺跡群Ⅲ』上毛町文化財調査報告第 12 集
73　新吉富村教育委員会 1976『垂水廃寺』新吉富村文化財調査報告第２集
　　新吉富村教育委員会 1999『垂水廃寺Ⅱ　宇野地区遺跡群Ⅰ』新吉富村文化財調査報告第 12 集
74　上毛町教育委員会 2008『垂水遺跡群Ⅰ』上毛町文化財調査報告書第８集
75　前掲註 74
76　太平村教育委員会 1976『友枝遺跡』太平村文化財調査報告第４集
77　新吉富村教育委員会 1976「山田窯跡の調査」『垂水廃寺』新吉富村文化財調査報告第２集
78　新吉富村教育委員会 1995『照日遺跡群』新吉富村文化財調査報告第９集
79　九州歴史資料館 1981「友枝瓦窯跡・山田窯跡」『九州古瓦図録』
80　太平村教育委員会 2003『唐原古代山城跡』太平村文化財調査報告第 13 集
　　太平村教育委員会 2005『唐原山城跡Ⅱ』大平村文化財調査報告第 16 集
81　前掲註 21
82　九州歴史資料館 2013『ハカノ本遺跡 2･3 次調査　安雲山田遺跡 1 地点』東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告第７集
83　前掲註９
84　福岡県教育委員会 1993『下唐原居屋敷遺跡』福岡県文化財調査報告書第 110 集
85　小田富士雄他 1983『岡為造氏収集考古資料集成』
86　前掲註 22

四ッ塚山遺跡



第5図　四ッ塚山遺跡・宇島鉄道推定地周辺地形測量図　(1/600)

第6図　四ッ塚山遺跡・宇島鉄道推定地全体図　(1/300)

Ⅲ　四ッ塚山遺跡

１　遺跡と調査の概要

四ッ塚山遺跡は東九州自動車道建設に伴い、築上郡上毛町上唐原 2561-3・6 の丘陵部分の約 6,600 ㎡が調査対象地である。調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「四ッ塚山古墳群」の北側に位置する。古墳２基が現存し、さらに調査対象地の詳細な状況を確認するために平成 23 年３月 17・18 日に確認調査を行った。その結果、古墳以外にも埋蔵文化財が発見されたので平成 23 年４月 19 日から発掘調査を開始した。

調査は用地取得の関係で全面掘削および大型バックホーの進入ができないため、小型バックホーによる表土剥ぎを調査区南側の半分から掘り始めた。平成 24 年１月６日には調査区北側を掘り、調査は３月 26 日に終了した。今回の調査では、縄文時代、弥生時代終末～古墳時代前期、古墳時代後期の竪穴住居跡８軒、土坑 19 基、溝状遺構１条、ピット多数と古墳２基を検出した。なお、東側斜面の下端部では宇島鉄道跡についての調査を行っている。鉄道建設に係る主な痕跡は検出されなかったが、人為的に掘削して地山を平坦にした面のみ確認できた。

２　竪穴住居跡

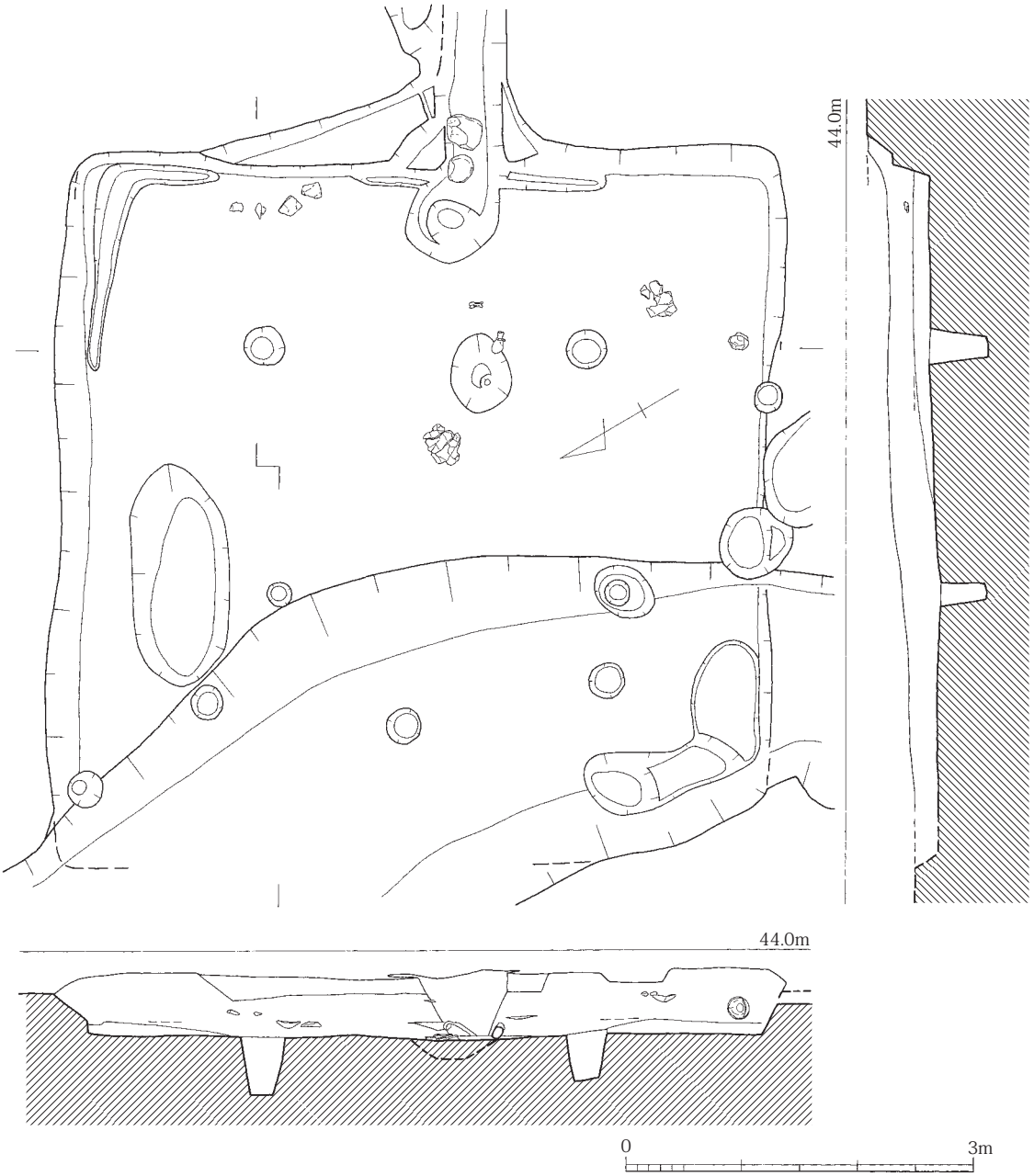
竪穴住居跡は調査区内全域で検出したが、南側に集中している。時期は弥生時代後期、古墳時代前期、古墳時代後期の３時期に分けられる。特に注目すべきは１号竪穴住居跡の東壁面に、東斜面へと延びる１号溝状遺構が付設する溝付き住居を検出した。

１号竪穴住居跡・１号溝状遺構・11 号土坑（図版２、第７・９図）

調査区北側の１号墳の東側で検出した住居跡である。西側 1/3 は１号墳の周溝などにより削平されている。掘り下げの際に東壁面側には掘り込みや石が見られたが、カマドを設置していた状況は確認できなかった。東側へ延びる 1 号溝状遺構を検出した。南北 630 ㎝、東西 610 ㎝、深さ 40 ～ 50 ㎝を測るほぼ正方形状である。4 本柱と思われるが、周溝により削平されたため 3 本しか検出できなかった。主柱穴は径 35 ㎝以下、深さ 50 ㎝を測る。また北東隅には壁溝幅 30 ㎝、深さ 10 ㎝が残る。なお炉などは検出されなかったが、出土遺物から古墳時代前期頃か。

出土遺物（図版 19、第８図）

１～ 10 は土師器である。１は二重口縁壺の口縁～頸部にかけての破片である。器面が荒れ、剥離しているが、外面頸部に刷毛目の痕跡がある。２は小型丸底壺片である。内外面とも摩滅していて調整不明である。３は甕の口縁～頸部片である。内外面の調整は刷毛目である。４も甕の体部片である。外面にはややくずれた断面台形状の突帯つき、表面には豆粒状の刻目を施す。５は体部下半～底部のみを残す壺又は甕片である。内外面とも摩滅していて調整不明である。６～９は高杯片である。６は杯部片で、体部下半付近に段がつく。７は脚部の端部を欠く。8 は杯部が接合しなかったが、胎土、色調、焼成から同一破片である。９は杯部と脚部の接合部分である。10 は支脚片である。内外面に指頭圧痕が明瞭に残る。11 は口縁部片を欠く鉢片か。最大体部径で 26 ㎝を測る。

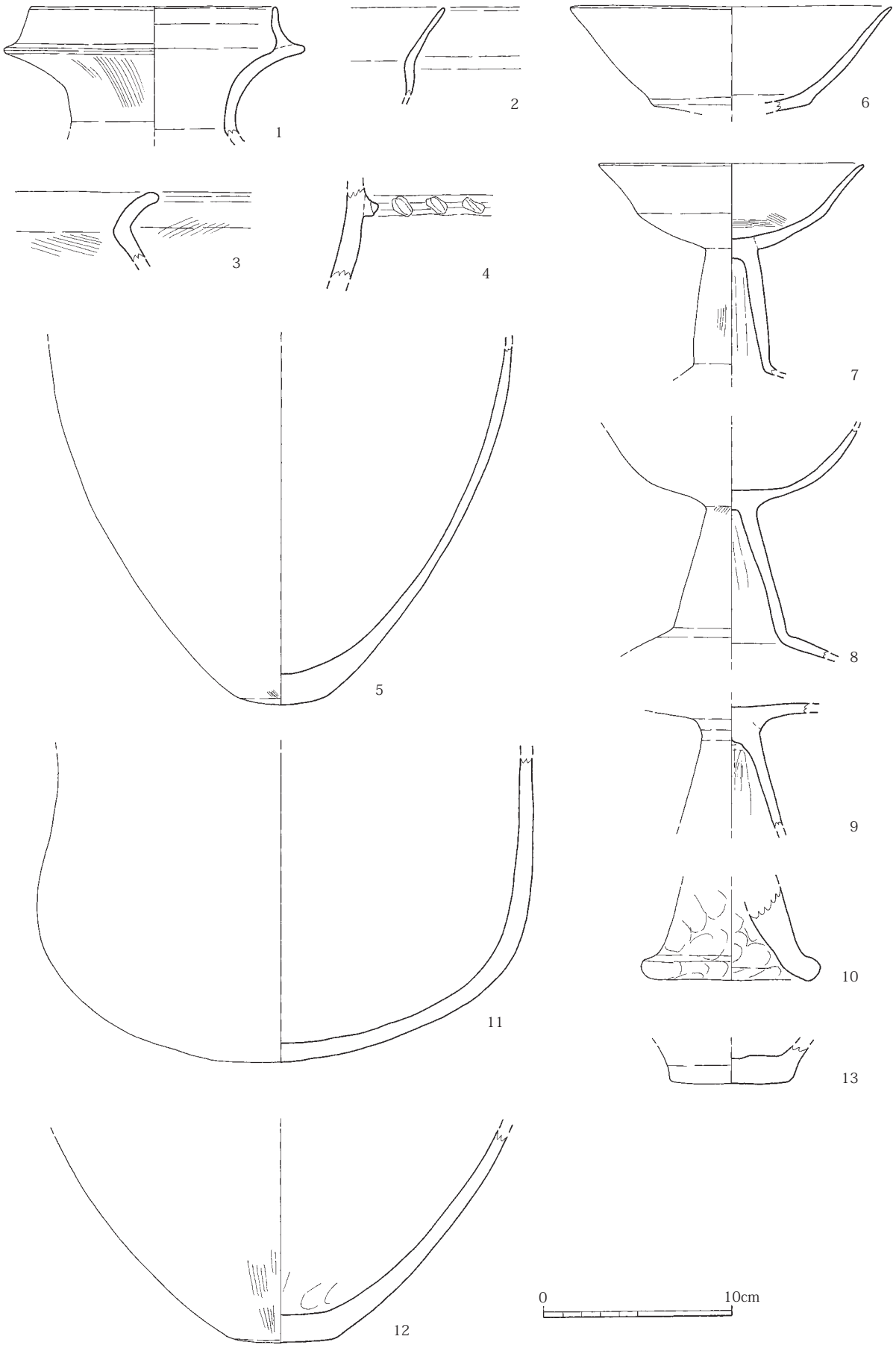


第7図　1号竪穴住居跡実測図（1/60）

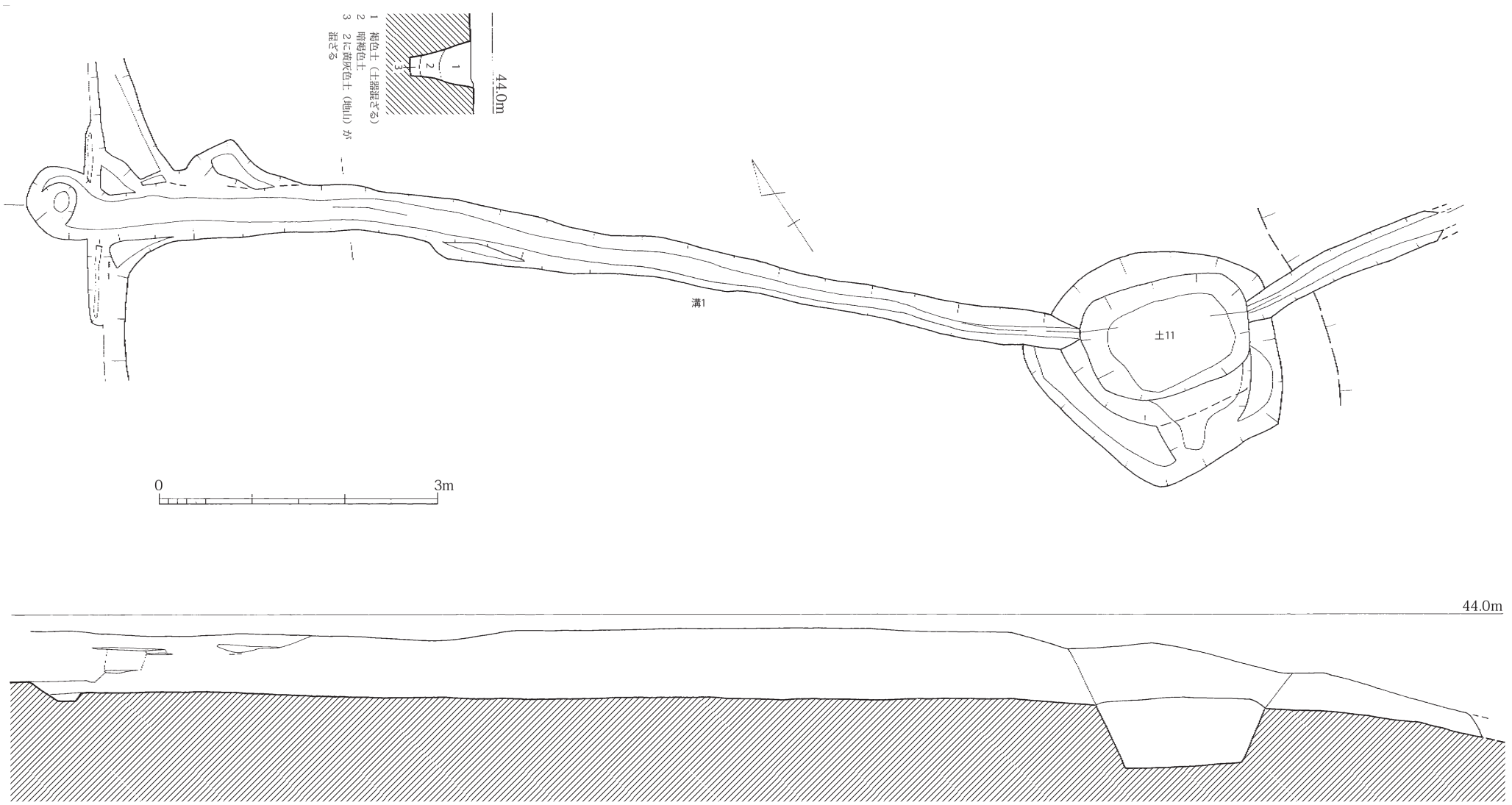
1号溝状遺構は1号住居跡の東壁面から尾根の東斜面まで延びる長さ約16m、幅60㎝以下、深さ約70㎝を測り、断面は細長い逆台形状である。溝の埋土には1号住居跡付近では約30㎝の石と埋土上層では土器を検出したが、下層から土器は出土しなかった。埋土の土層観察から水が流れたような形跡はない。溝の東側の11号土坑に切られて、溝の方向が南東から東へ方向が変わる。11号土坑は1号溝状遺構を切る形で検出し、長軸280㎝、短軸250㎝、深さ140㎝を測る長円形状である。上面より深さ約70㎝で段が付く。出土遺物はなく時期不明のため、1号溝状遺構との関係も不明である。

出土遺物（図版19、第8図）

12は唯一出土した1号溝状遺構出土の土師器壺または甕の底部片である。底部の接地面は狭いが、平底である。外面には刷毛目、内面にはナデを施す。13は11号土坑出土の弥生土器壺又は甕の底部片である。



第8図　1号竪穴住居跡・1号溝状遺構出土土器実測図（1/3）



第9図　1号溝状遺構・11号土坑実測図（1/60）

２号竪穴住居跡（図版３、第 11 図）

１号住居跡の北西側で検出した住居跡である。北側隅は１号墳の周溝により削平されるが、ベッド状遺構や壁溝幅約 20 ㎝が残る。長軸 650 ㎝、短軸 520 ㎝、深さ 40 ㎝を測る長方形である。東側壁面中央には長円形状で二段掘りの屋内土坑がある。なお、炉は検出されなかった。出土遺物は土器以外にも石庖丁やガラス玉１点も出土した。なお住居の時期は土師器から古墳時代前期頃か。

出土遺物（図版 19、第 10 図）

１は唯一図化できた土師器の小型甕片で、底部を欠く。外面は刷毛目、内面には板ナデを施す。復元口径で 15.4 ㎝を測る。

３号竪穴住居跡（図版３、第 11 図）

調査区南側で検出した住居跡である。４本柱で南北 510 ㎝、東西 530 ㎝、深さ 20 ㎝を測るやや歪な方形状である。主柱穴は径 40 ㎝以下、深さ 30 ㎝以下を測る。カマド自体は確認できなかったが、西壁側中央に粘土片や土器片を検出していることから、カマドがあった可能性はある。出土した須恵器片から７世紀前半頃か。

出土遺物（第 10 図）

２は須恵器杯片である。外面には段が明瞭に付く。３も須恵器杯の口縁部片である。内外面とも横ナデである。

４・５号竪穴住居跡（図版４、第 12 図）

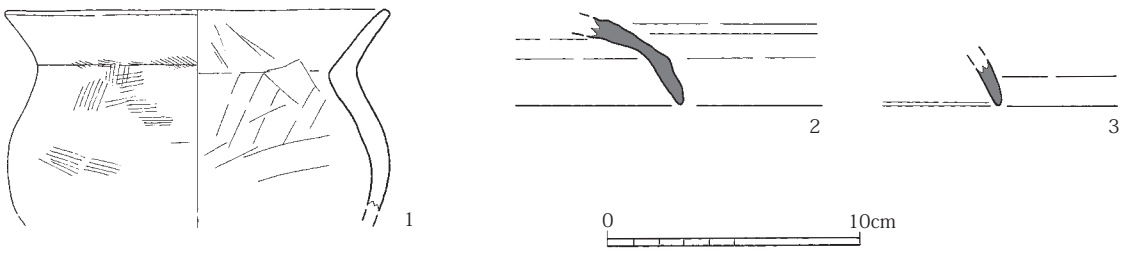
３号住居跡の南東側で検出した住居跡である。２軒の住居跡が切り合う形で検出し、大きく切られているのが４号で、４号を切る小さい住居跡を５号と番号を付した。４号住居跡は大部分が切られており、内部構造は不明である。南北 520 ㎝、東西 500 ㎝、深さ 15 ㎝以下を測るほぼ正方形状である。５号住居跡は西壁側にカマドを設置する。４本柱で南北 440 ㎝、東西 420 ㎝、深さ約 30 ㎝を測る正方形状である。主柱穴は径 50 ㎝以下、深さ約 40 ㎝を測る。南壁側では炭を検出することから、火災住居の可能性がある。

カマドは袖を地山の削り込みによって形成し、その袖部の前面に先端の尖った石材を埋め置く。南側の袖の石材のみなかったが、石材を固定した径 30 ㎝、深さ 10 ㎝以下の掘り込みは確認できた。カマド内部には６号住居跡のような支脚はなかったが、甑の体部片を底面に設置していた。なお、カマド内部は被熱を帯びて赤褐色化していた。

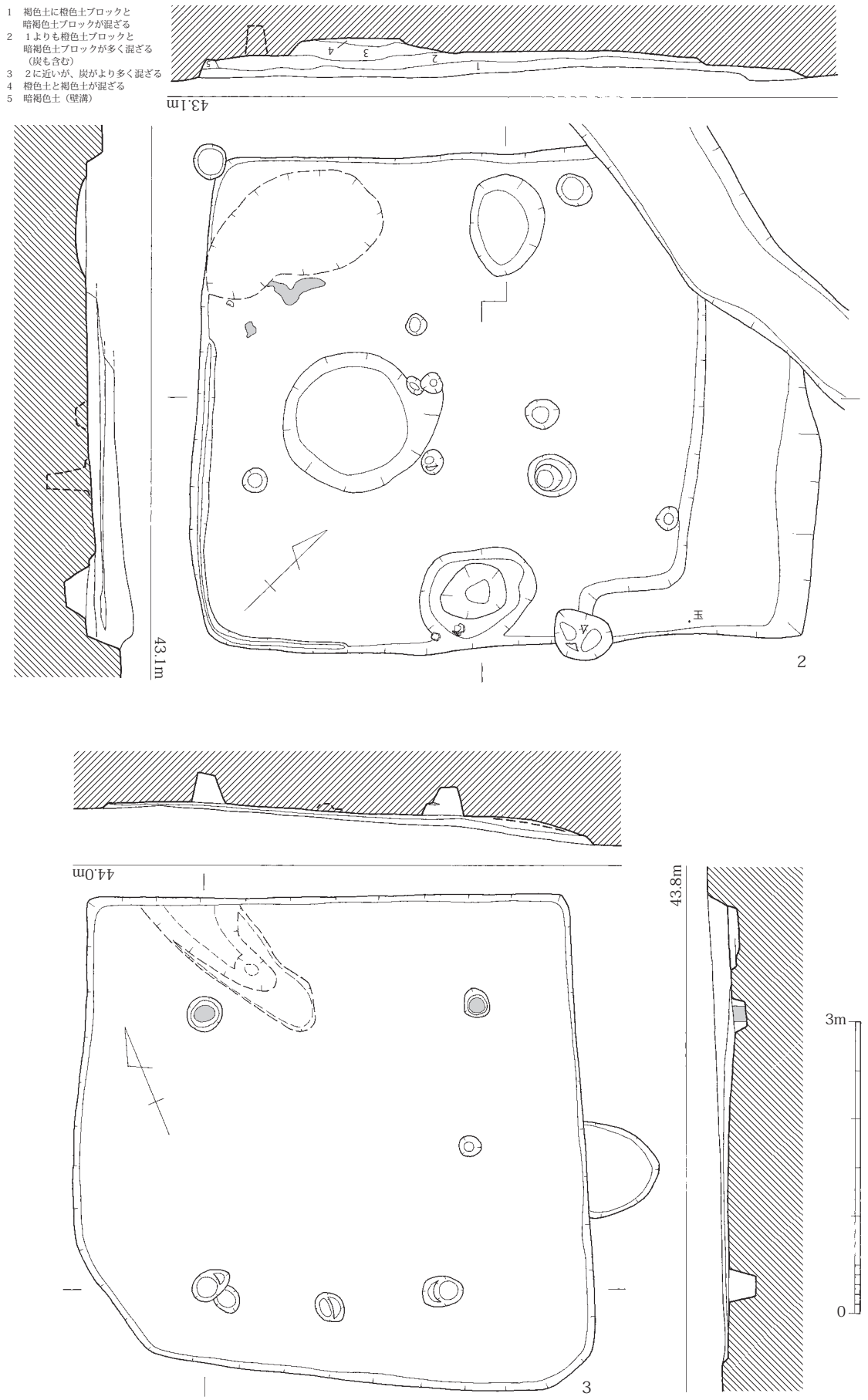
出土遺物から、５号住居跡は７世紀前半頃である。４号住居跡はそれ以前か。

出土遺物（第 13 図）

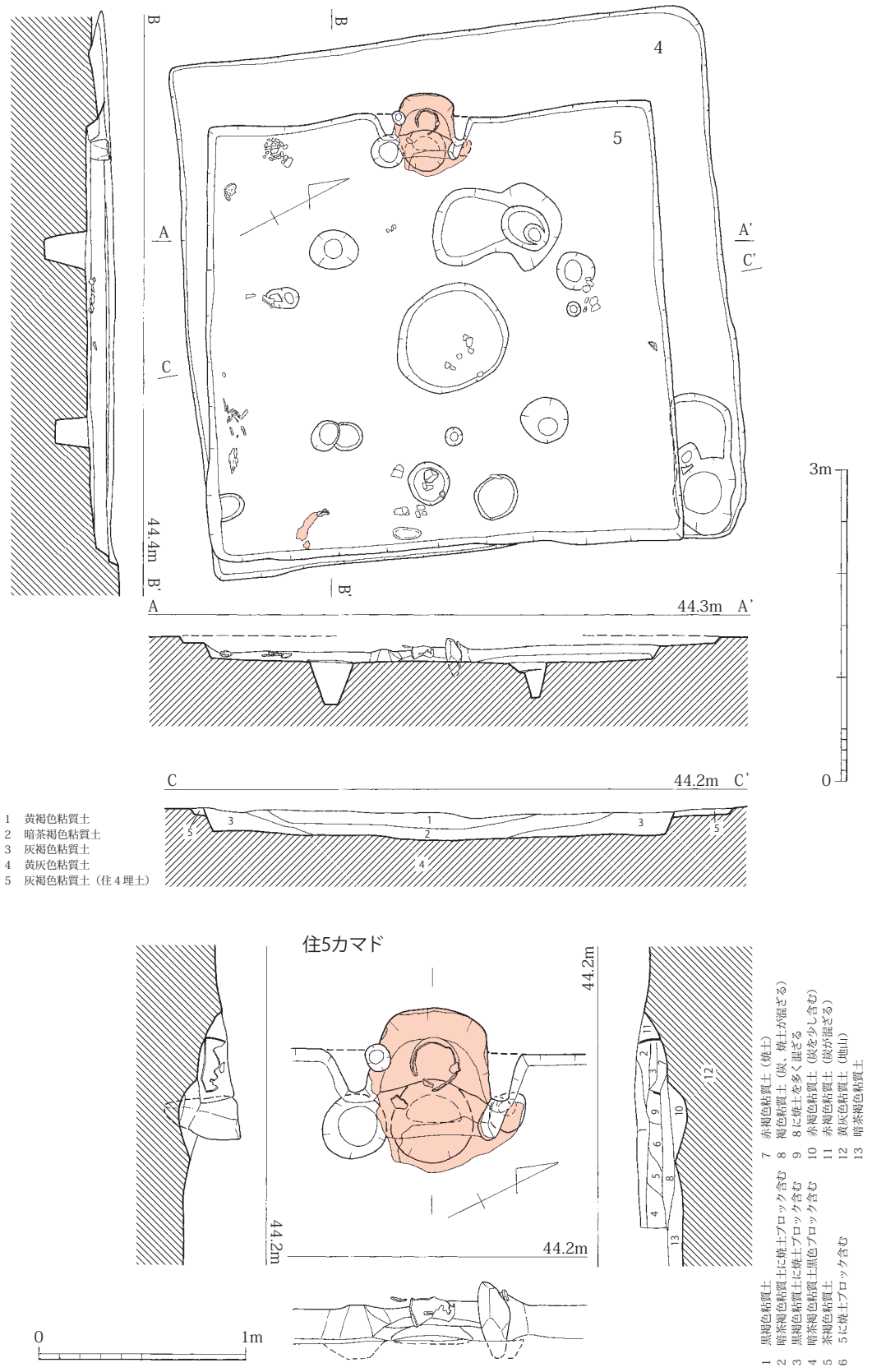
１～８は４・５号住居跡にまたがって出土した遺物である。１～４は須恵器である。１と２は杯蓋の口縁部片である。３は杯身片である。４は瑞の体部片である。二条の沈線間に、刺突文を施す。５と６は土師器の壺又は甕片である。いずれも摩滅していて調整不明である。７は



第 10 図　２・３号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第11図　2・3号竪穴住居跡実測図（1/60）



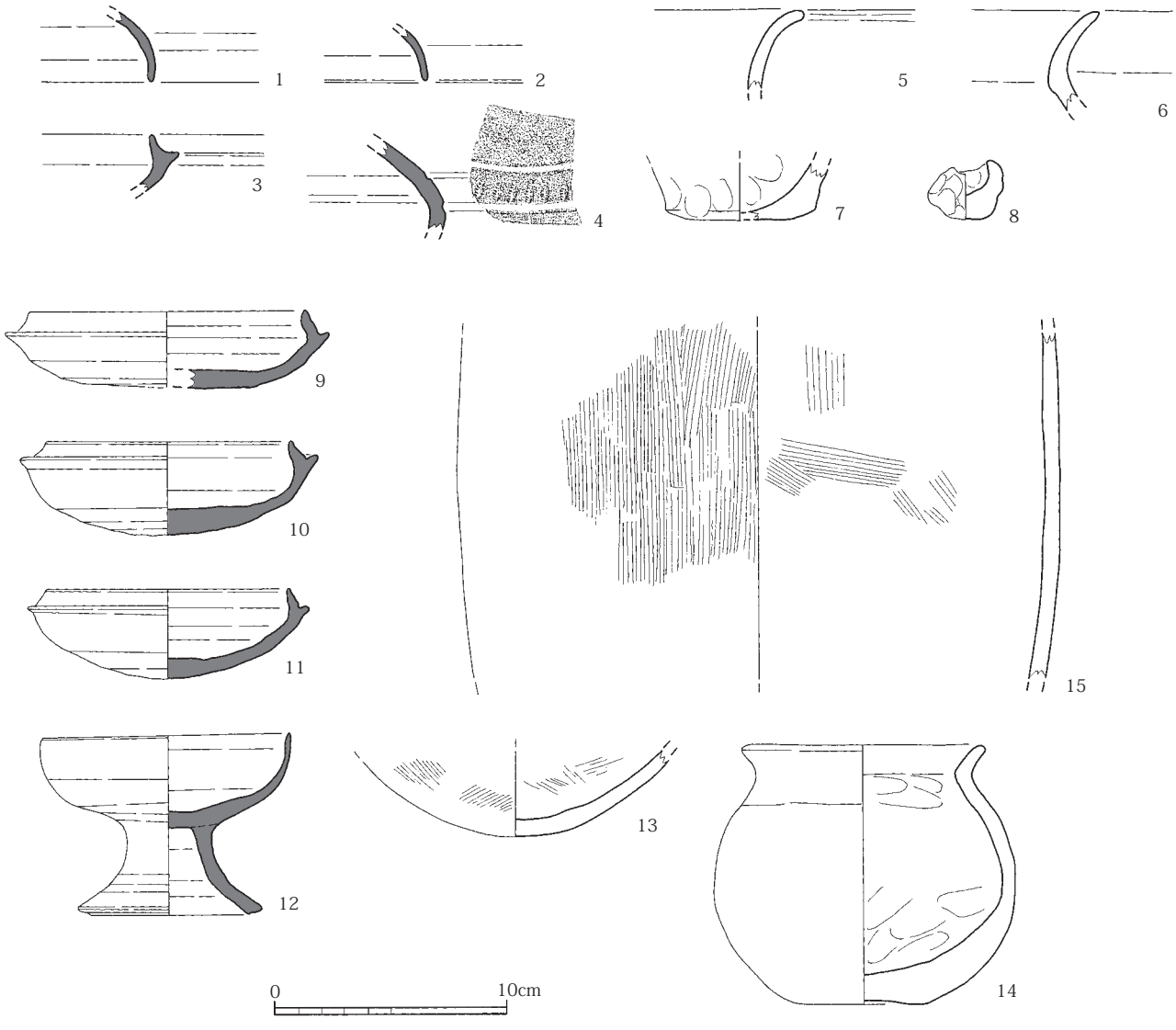
第 12 図　4・5号竪穴住居跡・カマド実測図　(1/60・1/30)

土師器の甕底部片である。平底で、内外面に指頭圧痕が明瞭に残る。８は雑な作りの手づくね土器である。

９～15は５号住居跡出土である。９～12は須恵器である。９～11は杯身である。９は浅く、底部は平底状である。10は受け部付近が厚手な作りである。11はほぼ完形に近い。いぞれも回転ナデで、外面底部はヘラケズリである。復元口径は９が12㎝、11と12は10.6㎝と同径である。12は無蓋高杯である。杯部は直に立ち、脚部端部は窪んで尖る。復元口径10.8㎝を測る。13～15は土師器である。13は壺又は甕の底部片で、丸底である。内外面に刷毛目が残る。14は小型の甕で、体部下半～底部付近は厚い。野暮ったい印象を受ける。外面は摩滅するが、内面はナデを施す。15は甑の体部片か。均一の厚みでやや弧を描くが、ほぼ直に延びる。内外面は刷毛目である。

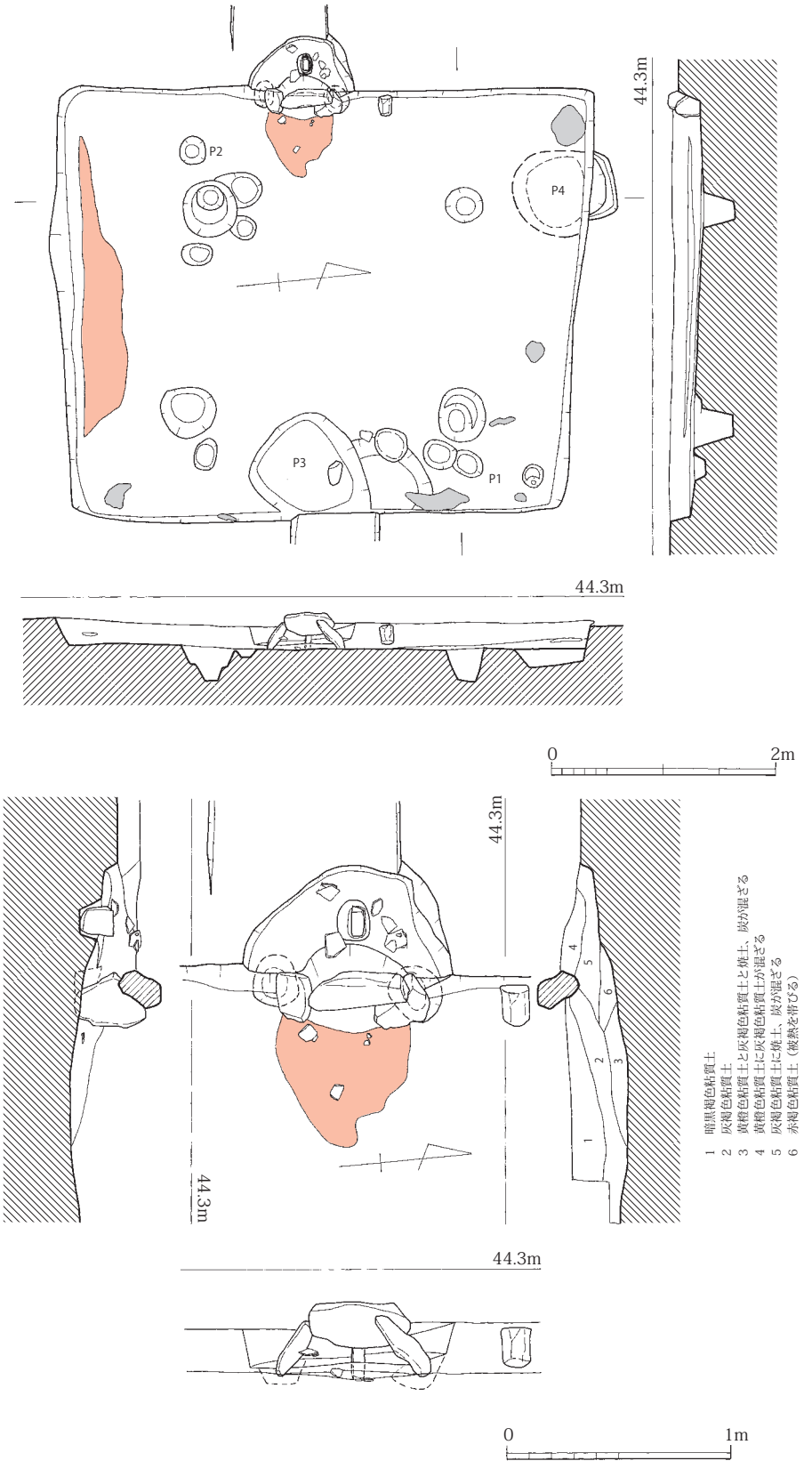
６号竪穴住居跡（図版４、第14図）

４・５号住居跡の北東側で検出した住居跡である。当遺跡内で唯一カマドの残りが良い。４本柱で南北480㎝、東西400㎝、深さ20㎝を測る長方形状である。主柱穴は径約50㎝以下、深さ約40㎝を測る。住居壁面には焼土や炭を検出したことから、火災にあった可能性がある。カマドのすぐ北側には土師器片が出土する。時期は出土した須恵器片から７世紀初め頃か。



第13図　４・５号竪穴住居跡出土土器実測図　(1/3)

カマドは西壁面の中央に設置していた。カマドは粘土によるものではなく、壁面際に径約20～25㎝の掘り込みを入れて「ハ」の字状に袖石を1/3程埋めて固定し、その上に横石を置いてカマドを構築する。カマド内部の中央にも径20㎝、深さ10㎝の掘り込みを入れ、その中に支脚を置いて固定していた。カマドの底面は火入れ部分が低く、屋外の方へ徐々にあがっているが、上部構造については削平されていたため、不明である。なおカマド内部にも土器が散在していた。



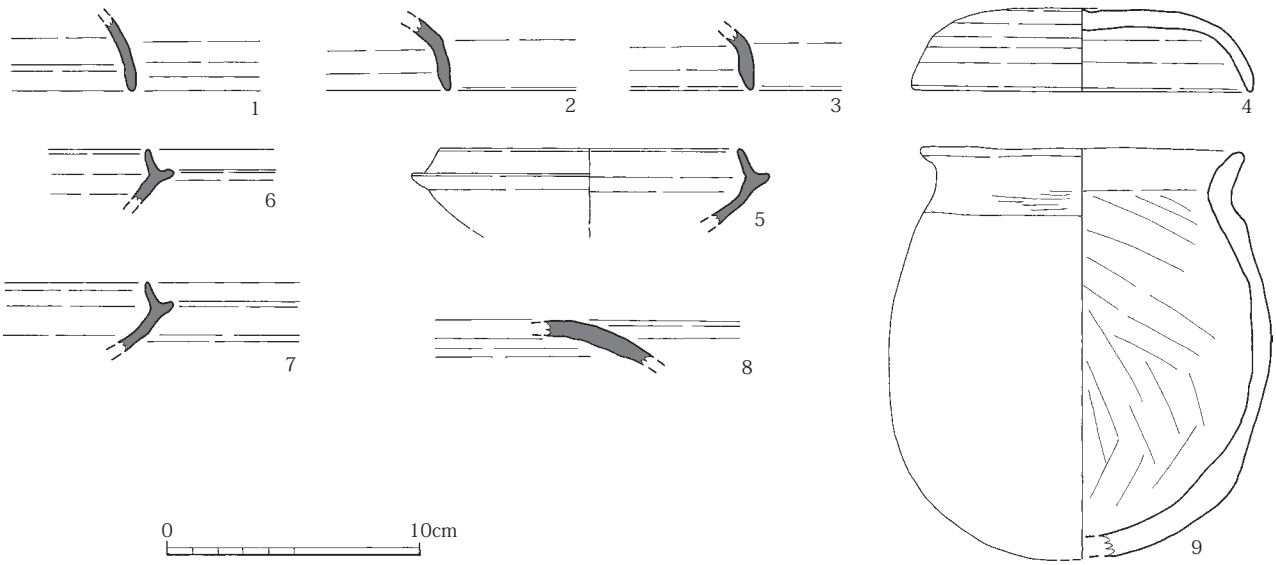
第14図　6号竪穴住居跡・カマド実測図　（1/60・1/30）

出土遺物（図版19、第15図）

１～８は須恵器である。１～３は杯蓋の口縁部片である。４は器高は低く、天井は平坦になる。焼成はやや甘く、灰白色になる。カマド周辺で出土した。復元口径15.6㎝。５～７は杯身片である。５のみ復元口径12㎝を測る。８は杯蓋片か。２の天井部の可能性がある。いずれも回転ナデ、外面の天井部と底部はヘラケズリである。９は土師器甕で、底部を欠く。口頸部は厚く、やや「く」の字状になる。外面は摩滅するが、内面は板ナデである。復元口径12.8㎝。

７号竪穴住居跡（図版５、第16図）

調査区南辺の３号住居跡南西側で検出した住居跡で、南北200㎝



第 15 図　6号竪穴住居跡出土土器実測図　(1/3)

分、東西 340 ㎝分を検出する。深さは約 20 ㎝とこれも浅く残りは悪い。土層観察でも切り合いなどは確認できなかったが、すべてが同一住居跡のものとするとやや歪つな形状であるので、東壁側は、別遺構により削られていると思われる。出土土器から 7 世紀頃か。

出土遺物（第 16 図）

１は須恵器杯蓋としたが、杯身の可能性もある。２は土師器甑の把手である。把手の先端部は欠く。外面には刷毛目を施す。３は体部径より口縁径が広いので鉢か。体部下半を欠く。外面は摩滅するが、内面頸部付近は刷毛目で、その下には指圧痕跡である。

８号竪穴住居跡（図版５、第 16 図）

調査区東側の中央付近で検出した住居跡である。確認調査時のトレンチにより西側を欠く。南北 470 ㎝、東西 430 ㎝をはかる僅かに長方形状である。床面まで僅かに 20 ㎝以下しか残存しておらず、残りは悪い。中央部分には比較的大きな径 90 ㎝、深さ 40 ㎝を測る円形ピットがあるが、その他のピットは径 50 ㎝以下、深さ 40 ㎝以下である。やや南側のはずれた二つのピットが、他よりも 30 ～ 40 ㎝と深く、主柱穴の可能性がある。。また南壁面中央のピット底面には平坦な 10 ～ 15 ㎝程の石の上面に土器が出土している。炉又はカマドは検出されなかった。出土した弥生土器がこの住居の時期とすれば、弥生時代後期頃か。

出土遺物（第 16 図）

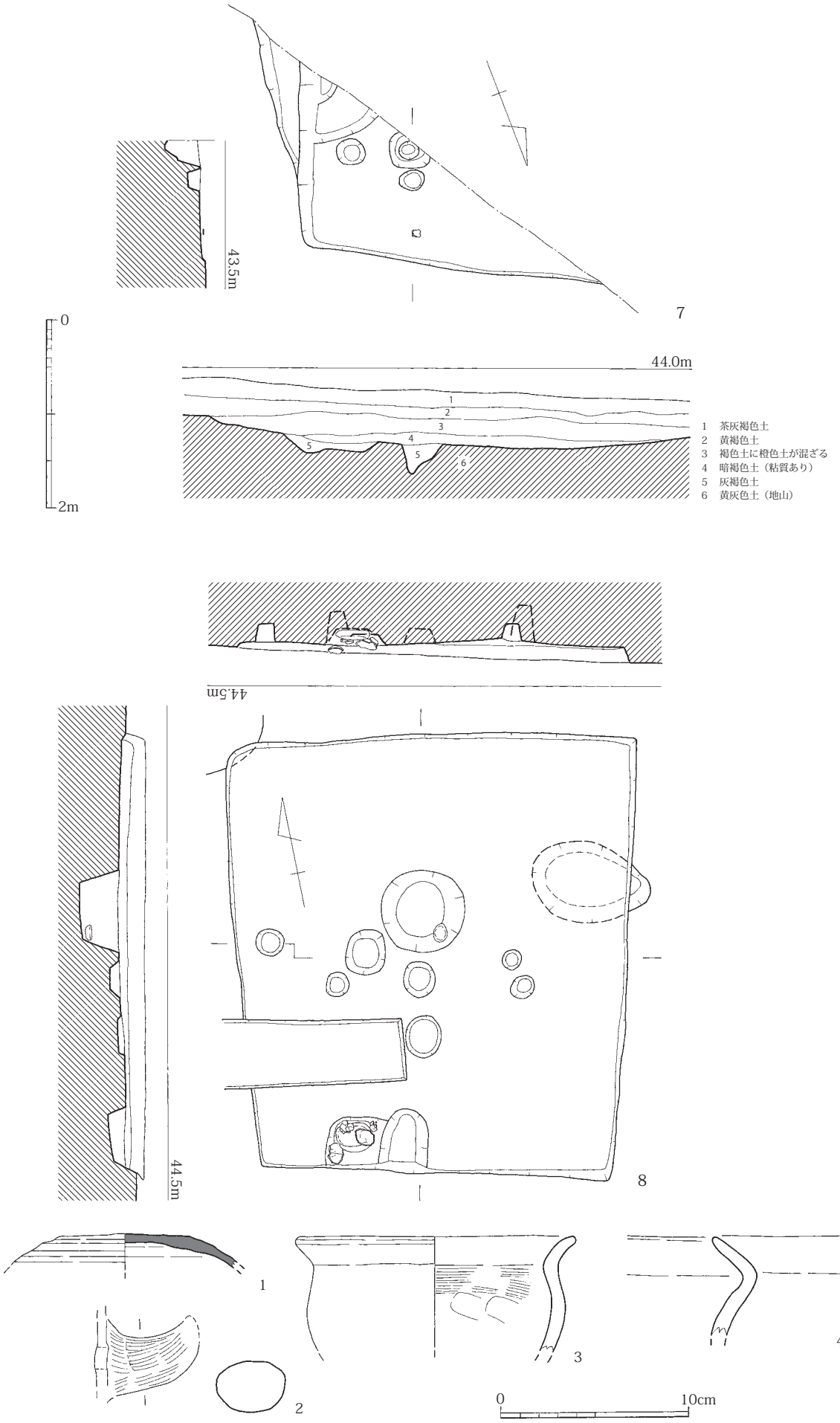
４は袋状口縁壺の口頸部片か。内外面とも摩滅していて調整不明である。

３　土坑

土坑は調査区内南半で、19 基検出した。落し穴も土坑として含んでいるが、井戸などはない。11 号土坑は p 18 で先述している。ほとんどの土坑からは出土遺物はなかった。

1 号土坑（図版６、第 17 図）

調査区中央西側よりに位置する。長円形状で、長軸 130 ㎝、短軸 90 ㎝、深さ 20 ㎝を測る。底面付近には炭混じりの埋土である。遺物はなく、時期不明である。



第16図　7・8号竪穴住居跡および出土土器実測図　(1/60、1/3)

２号土坑（第 17 図）

１号土坑の東側に位置する。やや歪な長円形状で、長軸 230 ㎝、短軸 120 ㎝、深さ 70 ㎝を測る。南北にそれぞれに平坦面があり、底面中央はさらに一段下がっている。遺物はなく、時期不明であるが、中央の掘り込みから落し穴の可能性がある。

３号土坑（図版６、第 17 図）

２号土坑のすぐ南側に位置する。周辺を一段、掘り下げた状態で検出する。長円形状で長軸 115 ㎝、短軸 80 ㎝、深さ 85 ㎝を測る。さらに底面中央には径 20 ㎝、深さ 20 ㎝の円形の浅い掘り込みがあり、落し穴と思われる。遺物はなく、時期不明である。

４号土坑（図版６、第 17 図）

調査区南端に位置する。長円形状で、長軸 110 ㎝、短軸 70 ㎝、深さ約 80 ㎝を測る。東側の壁面は西壁面に比べて垂直に立つ。遺物はなく、時期不明である。

５号土坑（図版６、第 18 図）

４号土坑の東側に位置する。不整形状で長軸 155 ㎝、短軸 105 ㎝、深さ 45 ㎝を測る。北側は二段の段をもつ。

６号土坑（図版６、第 18 図）

５号土坑の南側に位置する。不整形状で長軸 175 ㎝、短軸 135 ㎝、深さ 15 ㎝を掘り下げると、長軸 110 ㎝、短軸 95 ㎝、深さ 65 ㎝の不整形のピット状の掘り込みがある。遺物はなく、時期不明である。

７号土坑（第 18 図）

５号土坑の北側に位置する。長円形状で長軸 120 ㎝、短軸 80 ㎝、深さ 80 ㎝を測る。西側は 25 ㎝下がり、底面には円形で径 20 ㎝、深さ 15 ㎝の掘り込みがあり、落し穴の可能性もある

８号土坑（図版６、第 18 図）

７号土坑の北側に位置する。長軸 165 ㎝、短軸 80 ㎝、深さ 30 ㎝を測る。底面中央には円形で径 25 ㎝、深さ 15 ㎝を測る。出土土器から弥生時代の可能性がある。

出土遺物（第 21 図）

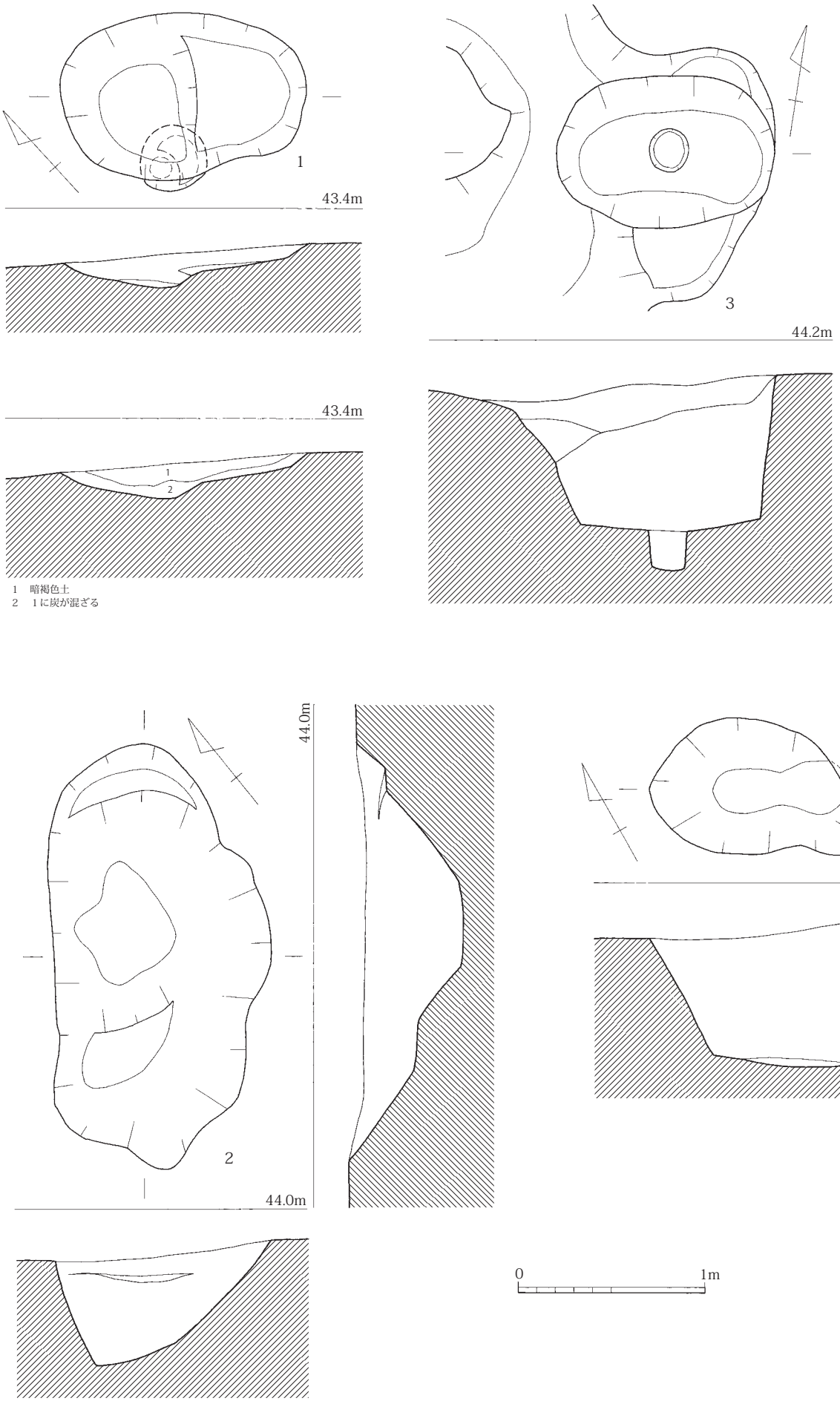
１は弥生土器の甕の肩部片で、断面三角形状の突帯つく。内面にはナデを施す。

９号土坑（図版６、第 18 図）

８号土坑の北側に位置する。長軸 295 ㎝、短軸 55 ㎝、深さ 25 ㎝を測る。南北には浅い平坦面があり、上面から弥生土器片が出土した。南北方向に延びる溝状になるが、ここでは土坑として番号をつけた。

10 号土坑（図版６、第 19 図）

６号住居跡の西側に位置する。不整形で長軸 155 ㎝、深さ 125 ㎝、深さ 85 ㎝を測る。底面



第 17 図　1～4号土坑実測図　(1/30)

は平坦である。遺物はなく、時期不明である。

12 号土坑（図版７、第 19 図）
８号住居跡の北側に位置する。長円形状で長軸 110 ㎝、短軸 75 ㎝、深さ 60 ㎝を測る。さらに底面には円形で径 15 ㎝、深さ 30 ㎝を掘り込みがあり、内部に 10 ㎝の礫石がある。落し穴の可能性がある。

13 号土坑（図版７、第 19 図）
12 号土坑の北側に位置する。長円形状で長軸 140 ㎝、短軸 90 ㎝、深さ 50 ㎝を測る。さらに底面中央には径 25 ㎝、深さ 55 ㎝の掘り込みがある。掘り込み内には 10 ㎝の礫石が入る。落し穴の可能性がある。

14 号土坑（図版７、第 19 図）
13 号土坑の東側に位置する。長円形状で長軸 120 ㎝、短軸 75 ㎝、深さ 55 ㎝、さらに底面中央には円形で径 25 ㎝、深さ 40 ㎝の掘り込みがあるが、直径約 15 ㎝の円礫がある。

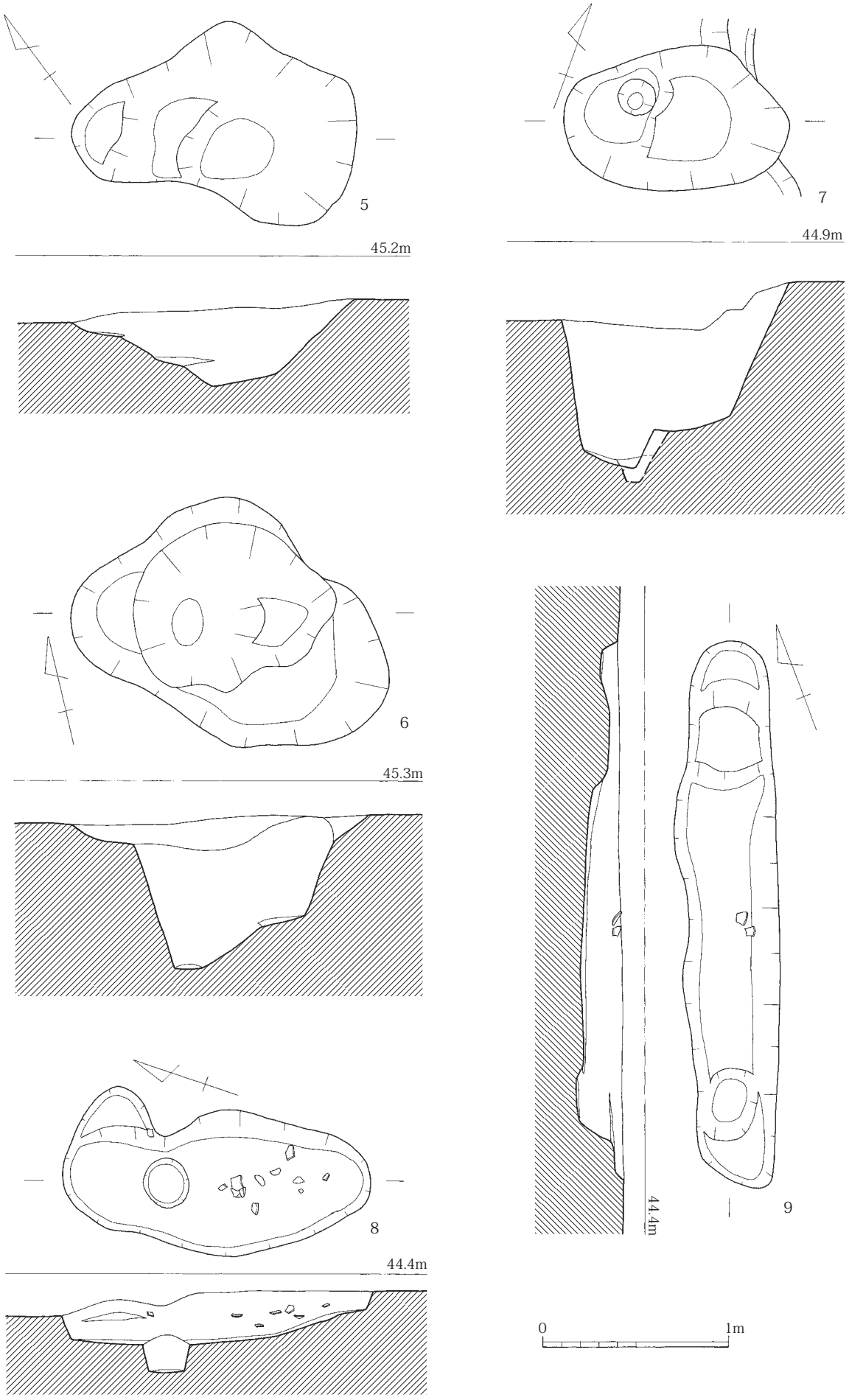
15 号土坑（図版７、第 20 図）
13 号土坑の北側に位置する。南北 135 ㎝、東西 90 ㎝、深さ 40 ㎝を測る。断面はほぼ逆台形状であるが、底面は平坦で、波打つ。

16 号土坑（図版７、第 20 図）
12 号土坑の西側に位置する。不整形状で南北 90 ㎝、東西 155 ㎝、深さ 35 ㎝を測る。さらに底面中央には径 20 ㎝、深さ 10 ㎝の浅い掘り込みがあることから、落し穴の可能性がある。

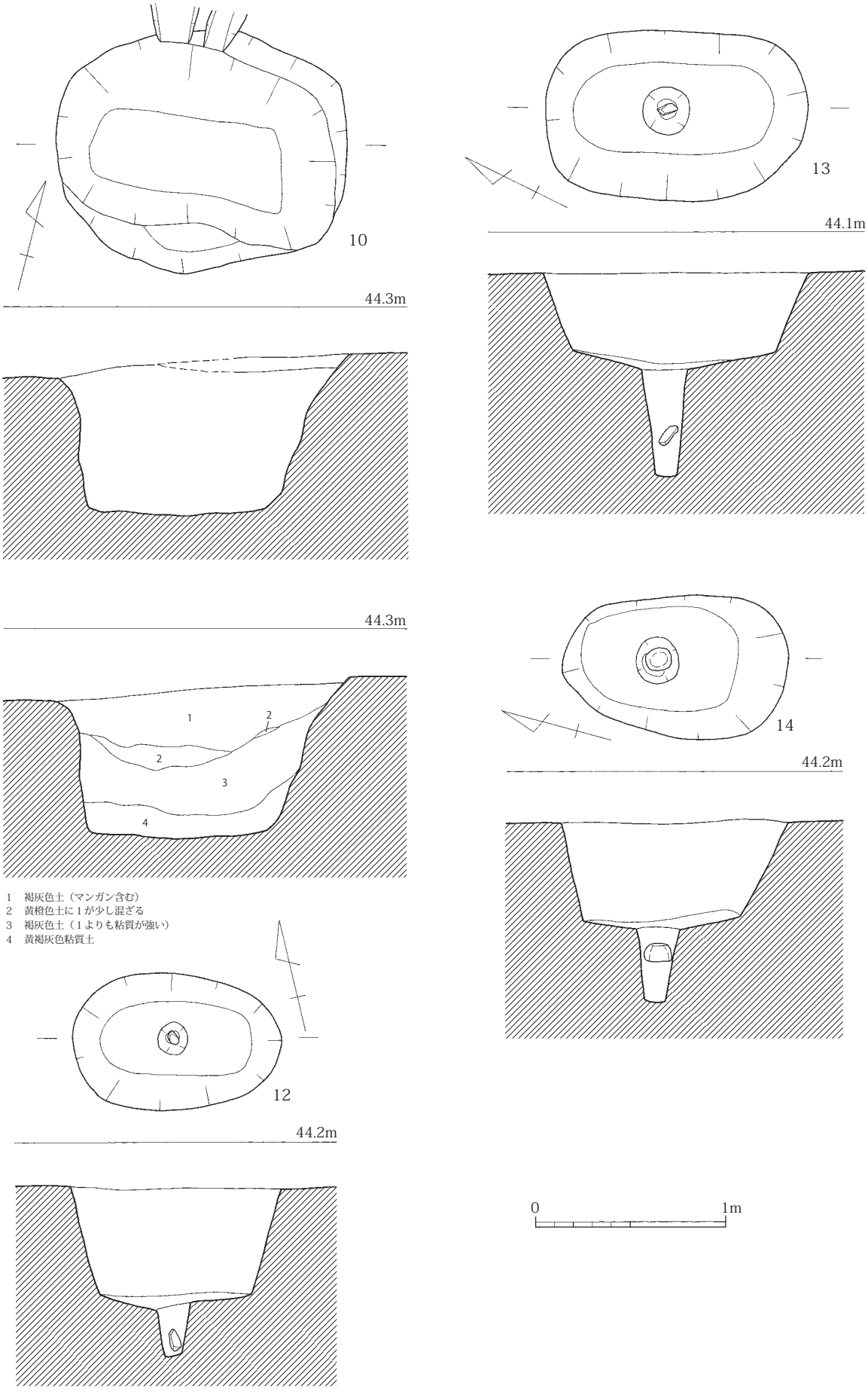
17 号土坑（図版７、第 20 図）
３号住居跡の北側に位置する。南北 95 ㎝、東西 190 ㎝で東西に延びる溝状になる。東側に浅い段がつき、深さ 35 ㎝を測る。西側は 10 ㎝のピット状の攪乱が入る。
出土遺物（第 21 図）
２は土師器高杯の脚部片で、杯部や脚部端部を欠く。外面にはミガキを施す。３は土師質鉢の高台片か。

18 号土坑（図版７、第 20 図）
17 号土坑の北側に位置する。丸みを帯びた五角形状で、南北 135 ㎝、東西 140 ㎝、深さ 90 ㎝を測る。断面逆台形状である。埋土は灰褐色土で、掘り方も大きかったので井戸かと思われたが、浅い土坑であった。

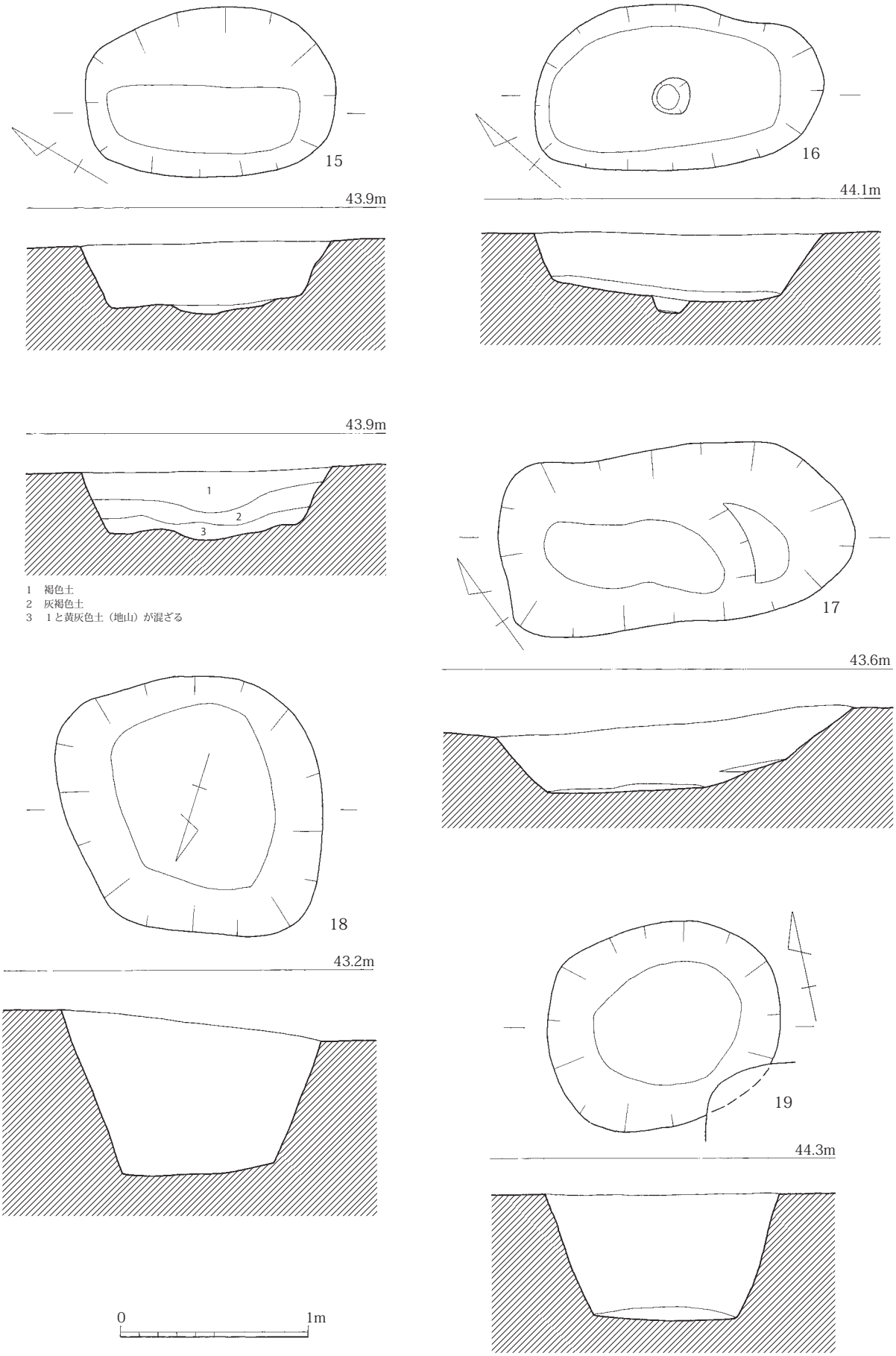
19 号土坑（図版７、第 20 図）
８号竪穴住居跡の北側隅に位置する。やや崩れた楕円形状で東西 125 ㎝、南北 115 ㎝、深さ 65 ㎝を測る。断面逆台形状である。黒曜石が出土する。



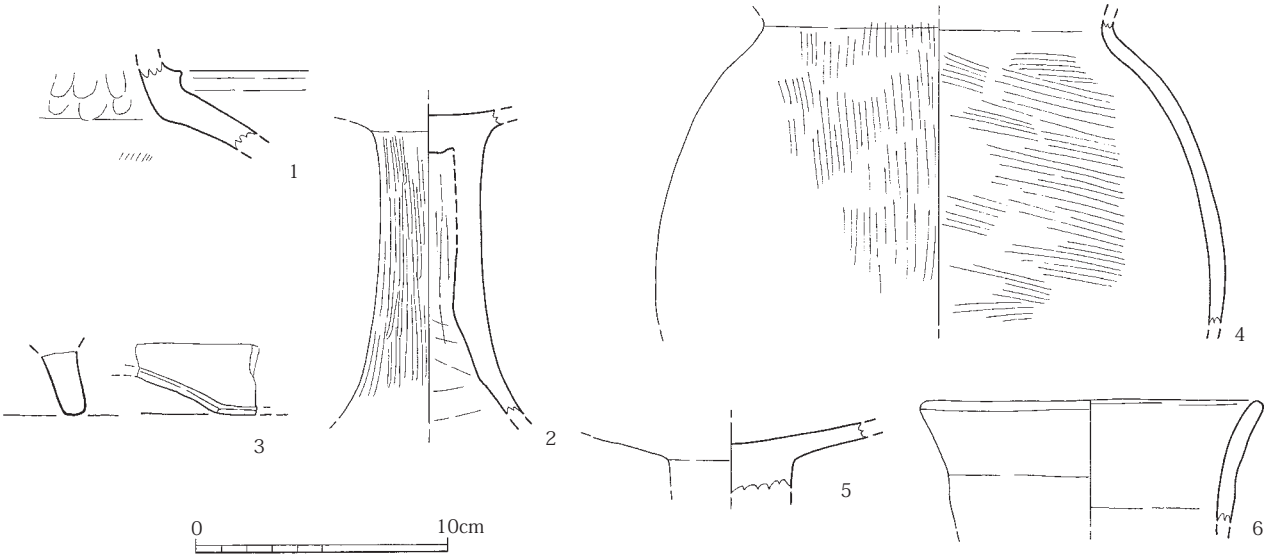
第 18 図　5～9号土坑実測図　(1/30)



第19図　10・12～14号土坑実測図　(1/30)



第 20 図　15 ～ 19 号土坑実測図　(1/30)



第 21 図　土坑およびピット出土土器実測図　(1/3)

ピット出土土器（第 21 図）

４～６はピット出土である。４は土師器壺又は甕の体部上半片である。内外面とも刷毛目を施す。P10 出土。５は土師器高杯の杯部と脚部の接合部分である。P29 出土。６は土師器壺の口縁部片である。口縁端部に向かって開き、口径 13.1 ㎝を測る。P37 出土。

４　四ッ塚山古墳群

１号墳（図版８～ 14、第 22 ～ 27 図）

墳丘・周溝

１号墳は山国川を東側に見渡すことができる丘陵上に立地する。墳丘の大部分は開墾されて畑地となり、調査前には荒地となっていた。墳丘は石室の天井部が露出するほど削平されていたが、残存する部分から推測すると周溝の内端で約 15.5m を測る円墳である。

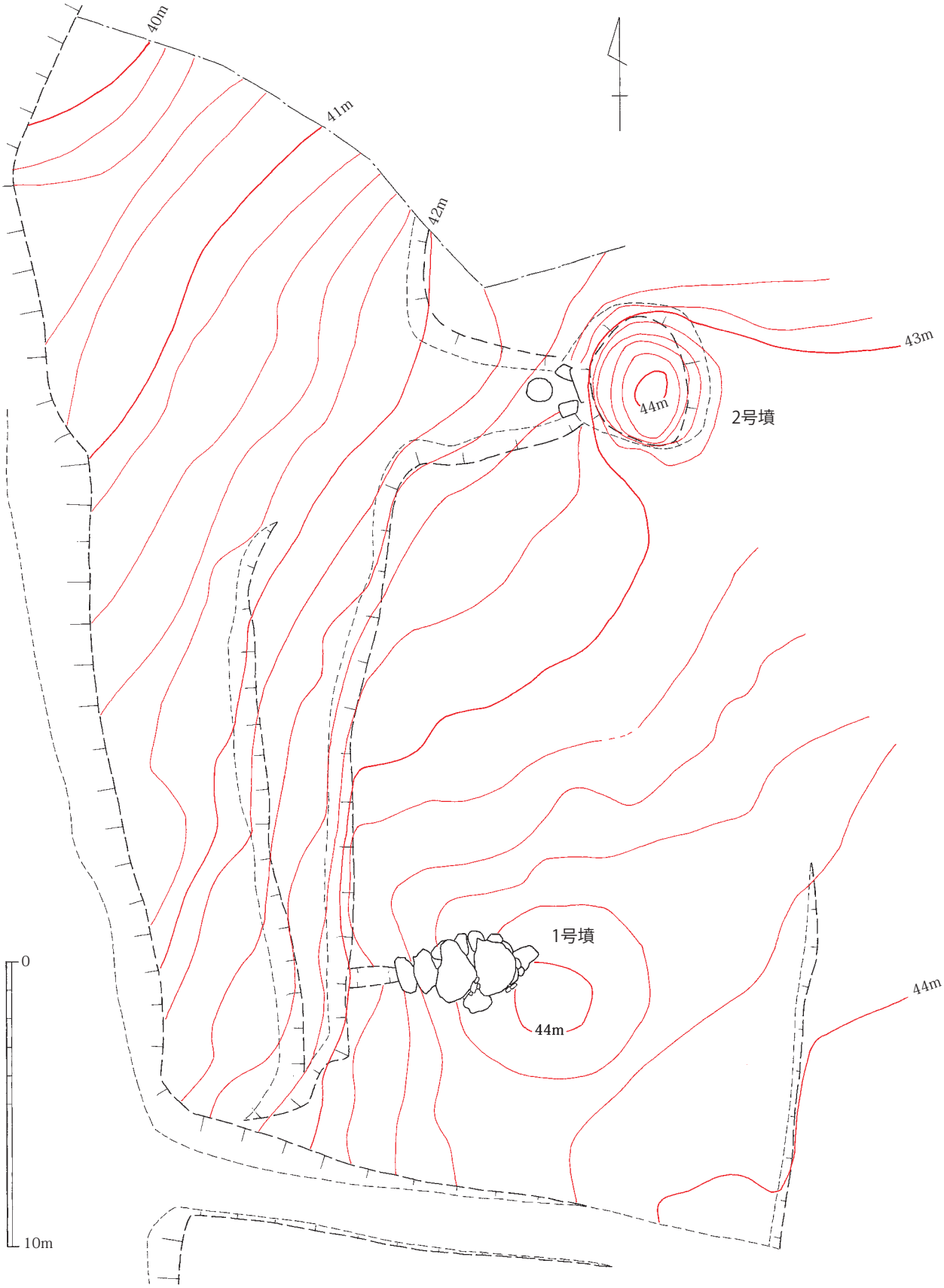
墳丘および石室の構築状況を確認するために、玄室を中心として南北方向に２ヶ所と東方向に１ヶ所にトレンチを設定した。土層観察から古墳は石室の１段目を据え置けるように地山整形を行っている。その後に地山の黄（橙）色土や黄褐色土、暗褐色土を使い、敷き詰めながら石室を構築しつつ墳丘を形成したのではないかと思われる。

周溝は、円形状で奥壁側の東では、幅 330 ㎝、深さ 40 ㎝を測る。１号竪穴住居跡を切るためか、やや東端を掘りすぎた感がする。また北側は幅 200 ㎝、深さ 40 ㎝、南側 130 ㎝、深さ 30 ㎝とやや北側に幅広くなりつつも、墓道に向かって窄まっていく。

なお、墳丘や周溝内にも目立った祭祀などの痕跡は確認できなかった。

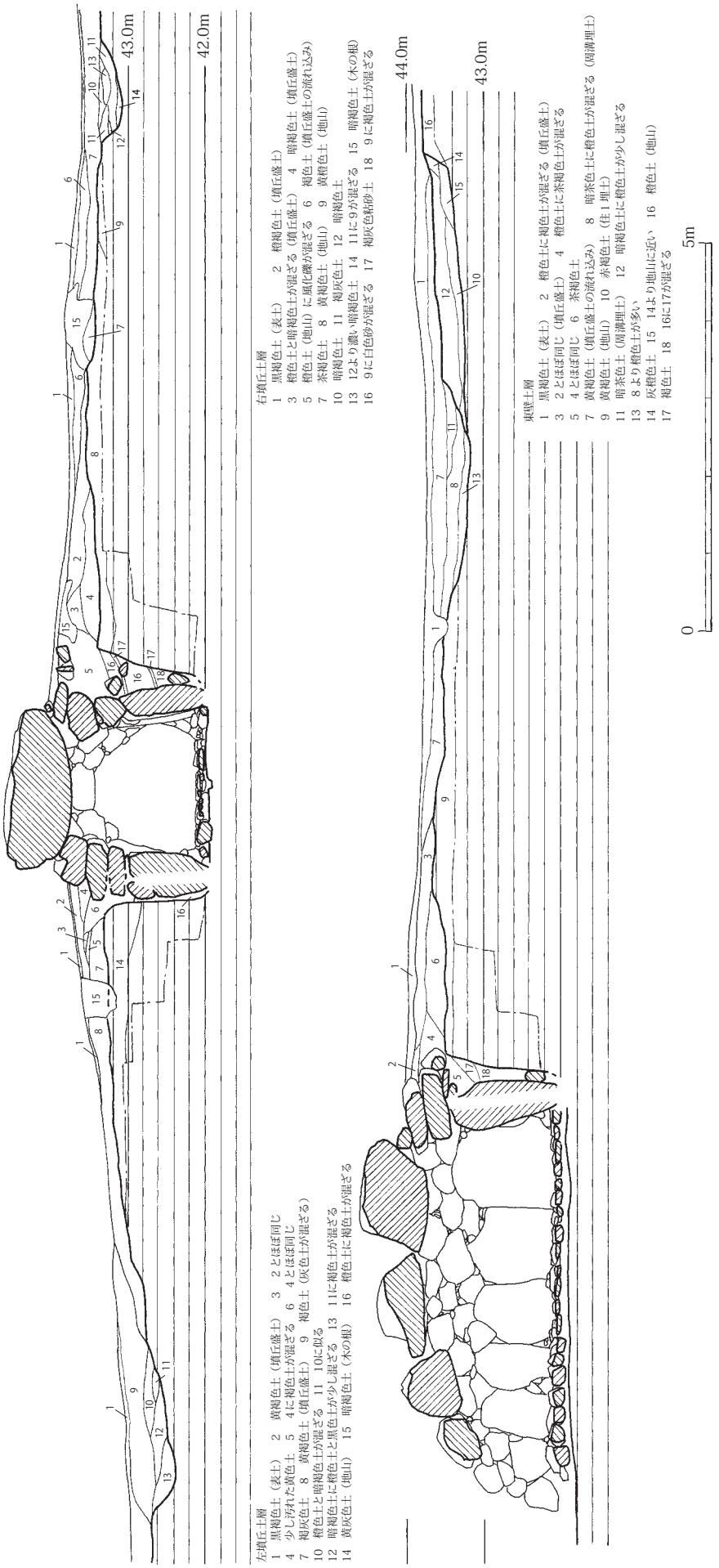
遺構検出出土土器

第 24 図１～５は須恵器である。１と２は杯身片である。1 は復元口径 9.6 ㎝を測る。受け部が浅く蓋の可能性もある。3 と 4 は瑯の破片か。３は口縁部片か。４は体部片である。５は甕片で、内外面横ナデである。復元口径 21 ㎝を測る。６～８は土師器である。６は壺又は甕の口縁部片である。復元口径 17 ㎝を測る。7 は甕片で、頸部から口縁端部に向かって大きく



第 22 図　1・2号墳地形測量図　(1/200)

外に開く。８は高杯脚部片である。内外面とも磨滅し、調整不明である。９は弥生土器の肩部片で、断面台形状の突帯が付く。外面は摩滅するが、内面はナデである。



第 23 図　1号墳墳丘土層図　(1/80)

周溝出土土器

10 と 16 は土師器である。10 ～ 13 は甕で、いずれも摩滅していて調整不明である。12 の内面のみケズリである。14 ～ 16 は高杯片である。14 は口縁部片である。15 と 16 は脚部片である。

墓道

墓道は石室開口部は幅広で、西側斜面に向かっ窄まりながら緩やかに下っている。長さ約 8m、最大幅 2.1m を測る。開口部よりの上面付近で須恵器片が出土した。

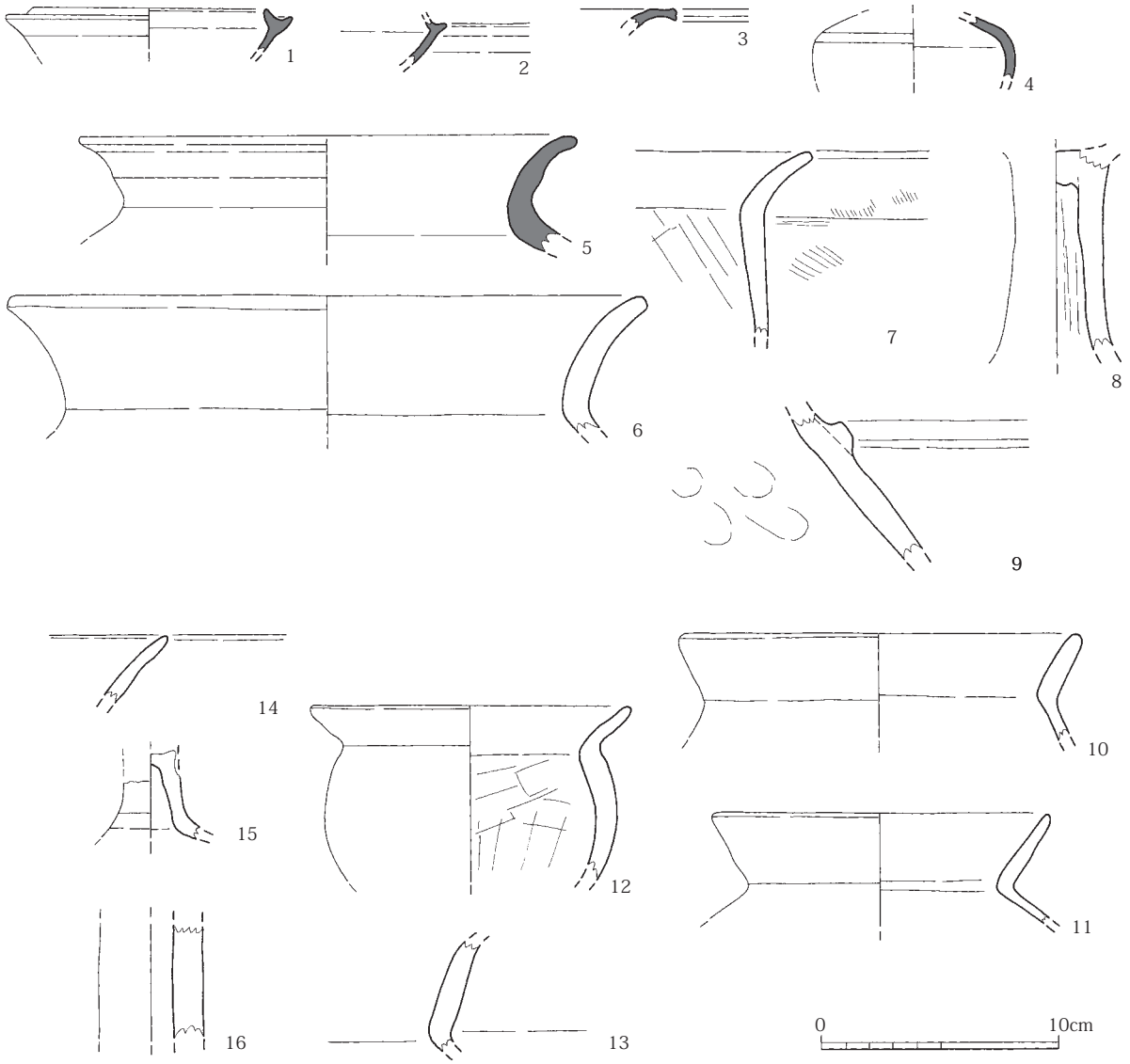
墓道出土土器

第 25 図 1 ～ 4 は須恵器である。1 は高杯脚部片で、2 と 3 は甕の口頸部片である。2 は外面口縁端部下に「×」印のヘラ記号がある。復元口径 24.0 ㎝を測る。4 は甕の体部下半～底部片で、丸底である。外面は刷毛目が主体であるが、底部付近のみ格子目タタキになる。内面は同心円文タタキである。

主体部

石室は単室構造の横穴式石室で、長さ 310 ㎝、最大幅 200 ㎝、最大高 270 ㎝を測る。石室に使用された石材は花崗岩である。

石室は開口していたが、



第 24 図　1号墳出土土器実測図　(1/3)

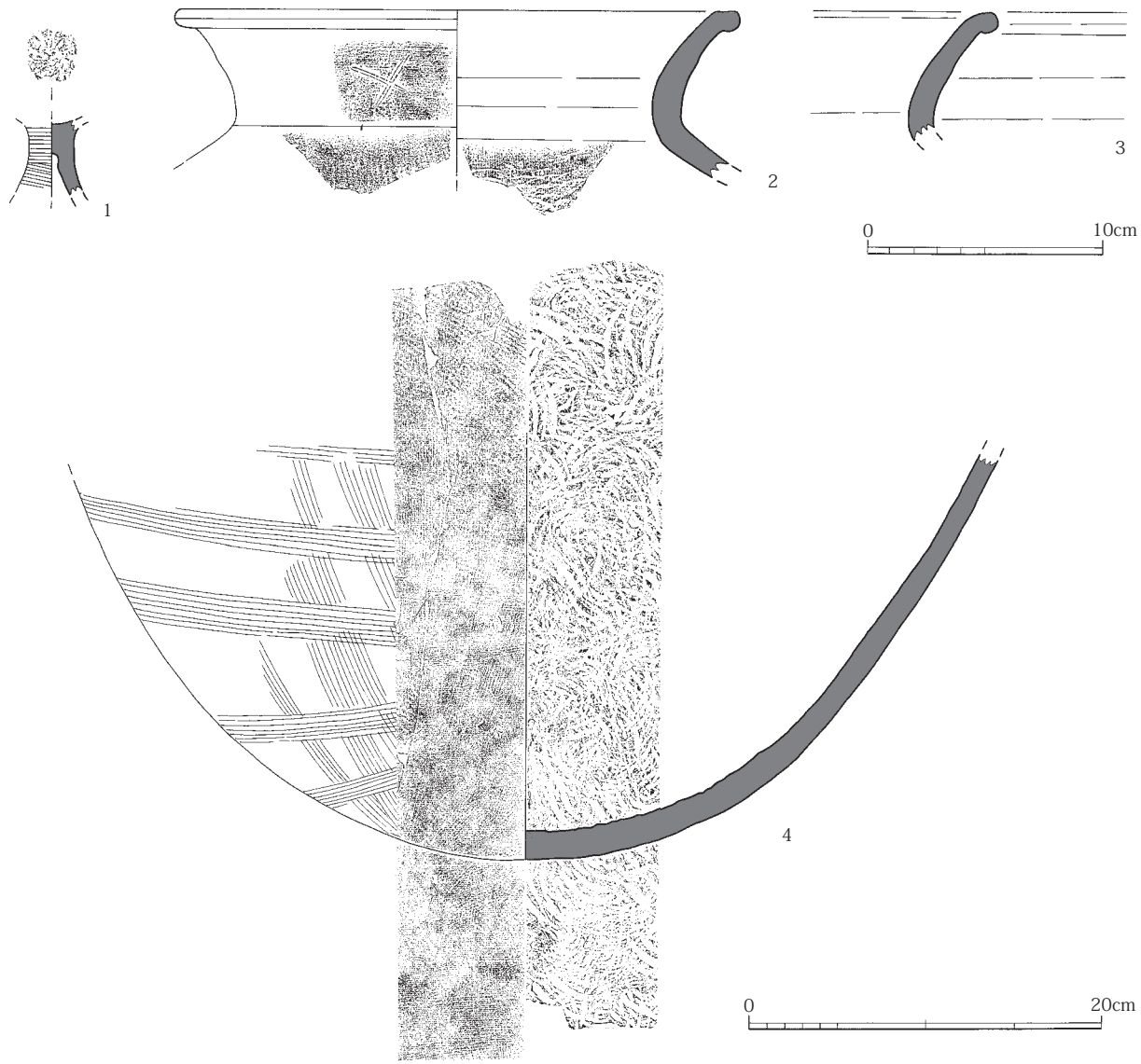
残存した閉塞石は 40 ㎝以下の石を長さ 210 ㎝、高さ 60 ㎝の範囲に積み上げていた。

羨道は長さ 210 ㎝、最大幅 100 ㎝を測る。敷石は 30 ㎝以下の大きな花崗岩を左右側壁際とその間の敷石中央の３列に整然と並べられている。仕切り石は羨道で使用された敷石と同じ石材を３つ並べて据え置く安易なものであった。

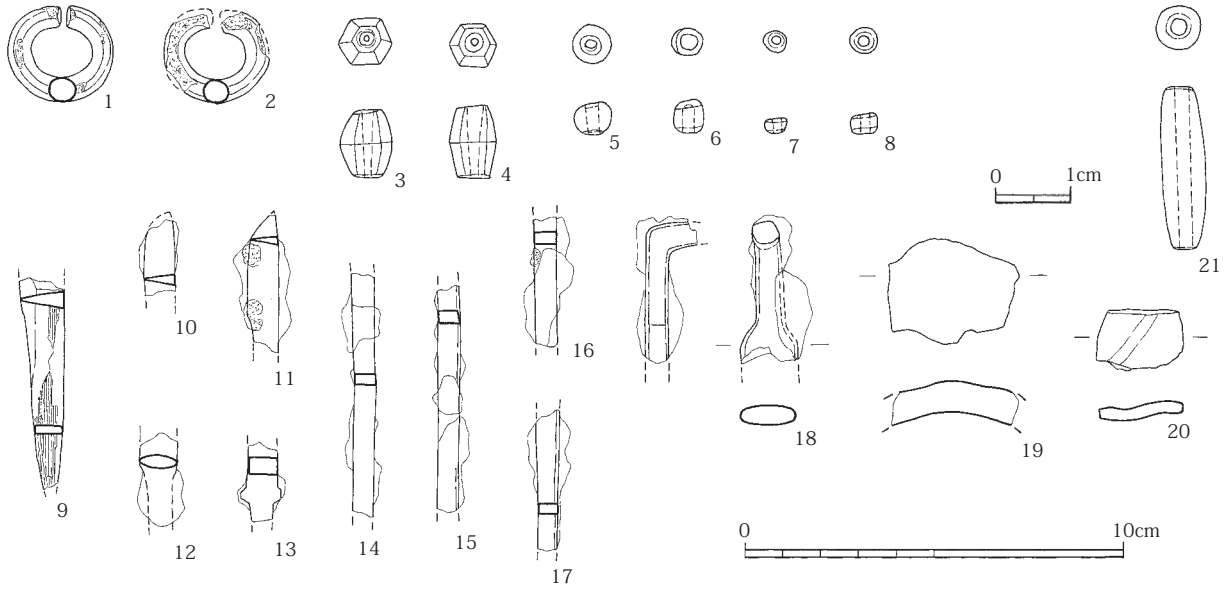
玄室は左右側壁とも高さ 100 ㎝以上の腰石を縦置きに一段据え置き、その上 20 ～ 50 ㎝の石を２～３段重箱状に積み上げている。奥壁は腰石の中でも一番大きな約 150 ㎝の石を据え置き、その上に側壁と同様に天井石まで２段積み上げている。天井石は横長の約 150 ～ 210 ㎝の大石を４つ並べ置かれている。敷石は羨道とは異なり 30 ㎝と 10 ㎝以下の大小の石を使用しているが、盗掘を受けたため所々で失っている。土器は出土していないが、耳環２点とガラス玉１点が石室中央からやや奥壁側で出土している。残りの遺物は石室内埋土を洗浄して結果、得られたものである。

出土遺物

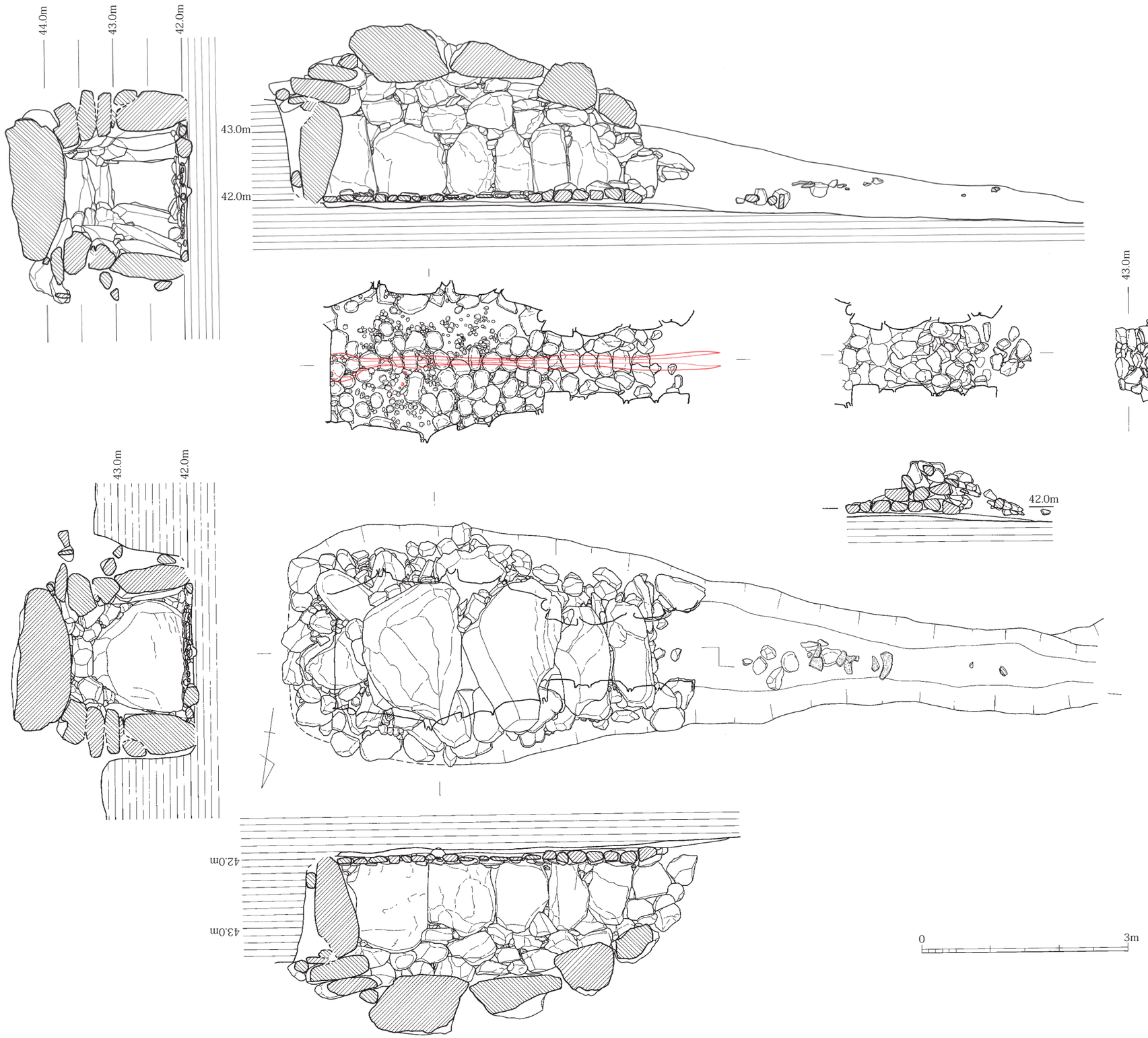
第 26 図１と２は石室内出土の耳環で、いずれも銅地銀張である。２の方が腐食が激しく残存状況は良くない。重量は１が 10.4g、２は 8.96g。３と４も石室内出土の水晶製の切子玉である。平面六角形状にカットし、片面のみを穿孔する。５～８はガラス玉である。５～７は石



第 25 図　1 号墳墓道出土土器実測図　（4は 1/4、他は 1/3）



第 26 図　1 号墳出土遺物実測図　（6～8は 1/1、他は 1/2）



第 27 図　1 号墳石室実測図　(1/60)

室内出土、８のみ羨道敷石下出土である。５は淡い緑色、６～８は空色である。重量は 1.09、0.06、0.02、0.04g を測る。９は石室出土の刀子片で、茎には木質が遺存する。僅かに段がつく。10 ～ 17 は鉄鏃である。10 と 11 は片刃箭式か。12 は錆膨れが著しい。13 は刺篦被部分か。10 は石室出土、11 ～ 13 は閉塞石出土。14 ～ 17 は墓道出土の鉄鏃頸部片である。14 は上部の厚さが薄くなるので、鏃身に近い部分か。いずれも接合はしなかった。18 ～ 20 は墓道出土の不明鉄製品である。18 は馬具片か。19 は外面は剥離が著しく旧状を呈していない。20 は表面凹凸が見られる。21 は表土下出土の土錘である。

２号墳（図版 15・16、第 28・29 図）

墳丘・周溝

２号墳は１号墳の北側に位置し、墳丘の大部分が調査区外になる。現状では墳丘の盛土の大部分を流失し、僅かに残存する墳丘には木々が覆い被さり、茂っている。そのため墳丘は１号墳と同様に、残りは良くない。残存する墳丘や周溝の状況から墳丘径５ｍ以上の円墳の可能性がある。南側に設定したトレンチの土層観察からは、黄褐色土や褐灰色土を使って墳丘を形成したと思われる。

周溝は南側で僅かに一部検出でき、幅 90 ～ 150 ㎝、深さ 10 ㎝を測る。底面には須恵器の甕片が散乱している。破砕散布などの祭祀の状況を表しているのかもしれない。

周溝出土土器

第 28 図１～８は須恵器である。1 は杯蓋で残存率２割程度で、天井部を欠く。復元口径 8.6 ㎝と小さい。２は口縁と受け部との差があまりないが、器高は高いので杯身片か。復元口径 14 ㎝を測る。３は杯身というより椀に近い形状である。全体的に厚手な作りで、外面には放射状にいくつも斜線状のヘラ記号が入る。４は高杯脚部又は壺の高台片か。５は壺の口縁～肩部片で、壺は復元口径 8.6 ㎝と口縁は窄まっている。内外面とも回転ナデであるが、外面頸部下はカキ目を施す。６と７は甕の口縁部片である。それぞれ内外面は回転ナデで、復元口径 15 ㎝、12.6 ㎝を測る。８は甕体部下半片で、外面は斜め方向の刷毛目の後に平行タタキを施す。内面は同心円文タタキを施す。

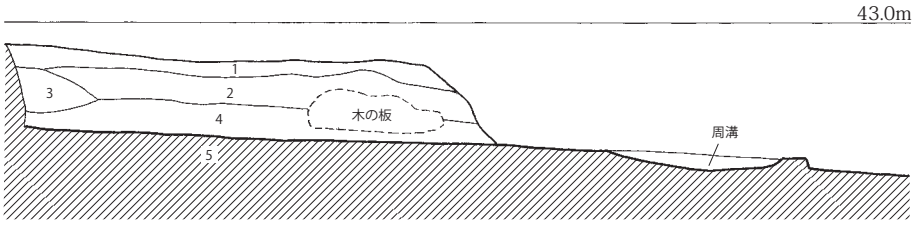
墓道

墓道には黄褐色土が堆積していた。羨道入口部分には鉄桶などが置かれ、撹乱され、長さ 128 ㎝、幅 50 ～ 250 ㎝を測る。羨道に向かって下がっているが、西側の墓道入口に向かって一度立ち上がり、そして徐々に下がっている状況が伺える。

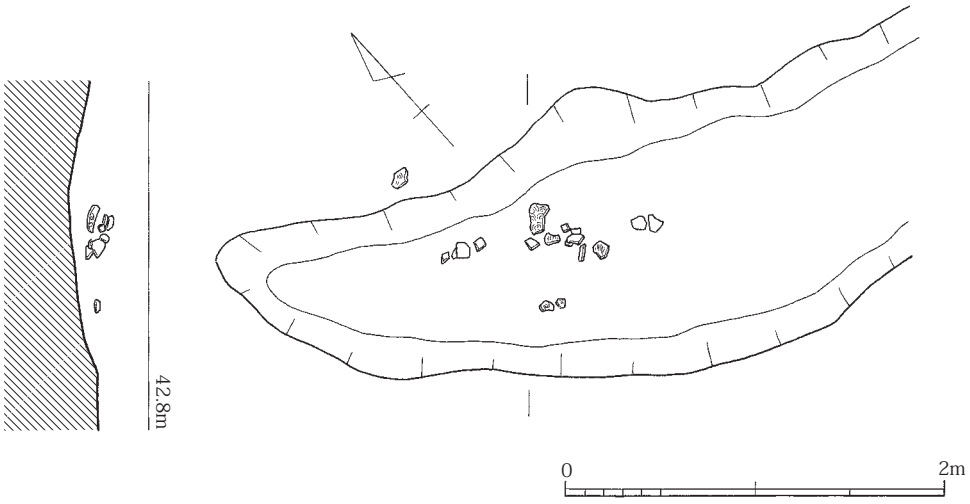
墓道出土土器

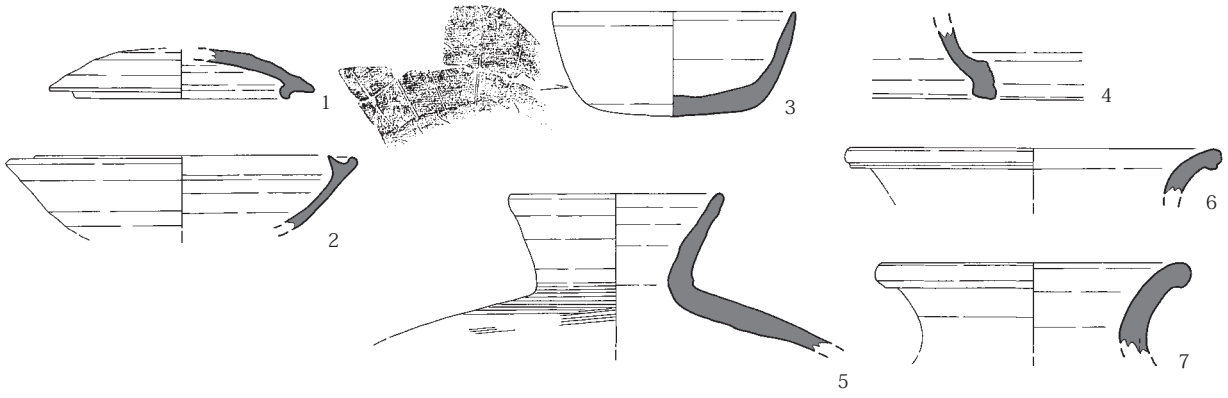
第 28 図９～ 13 は須恵器である。９は杯蓋である。内外面とも回転ナデ、外面底部のヘラケズリを施す。復元 11 ㎝を測る。10 は杯蓋片である。11 と 12 は高杯片で大部分を欠く。12 は外面接合部分にカキ目を施す。14 は壺の口縁部片か。口縁端部に向かって薄く、外へ開く。復元口径 7.2 ㎝を測る。13 は甕の口縁部片か。口縁端部は「へ」の字状に外へ跳ねる。

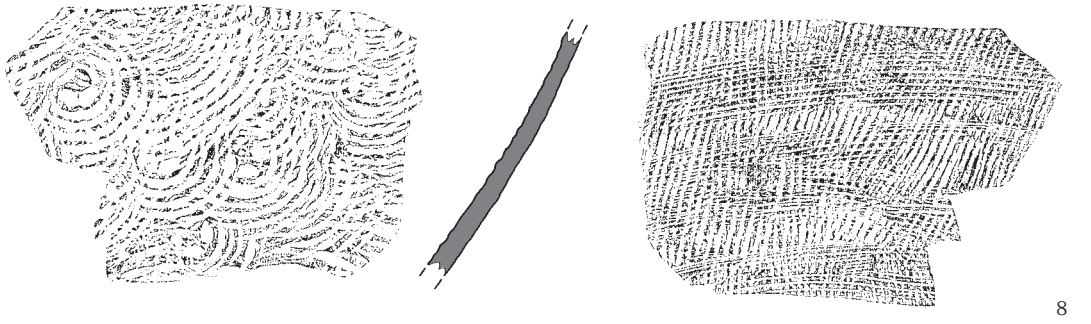
なお、２号墳の石室自体は調査区外で埋もれており詳細不明である。

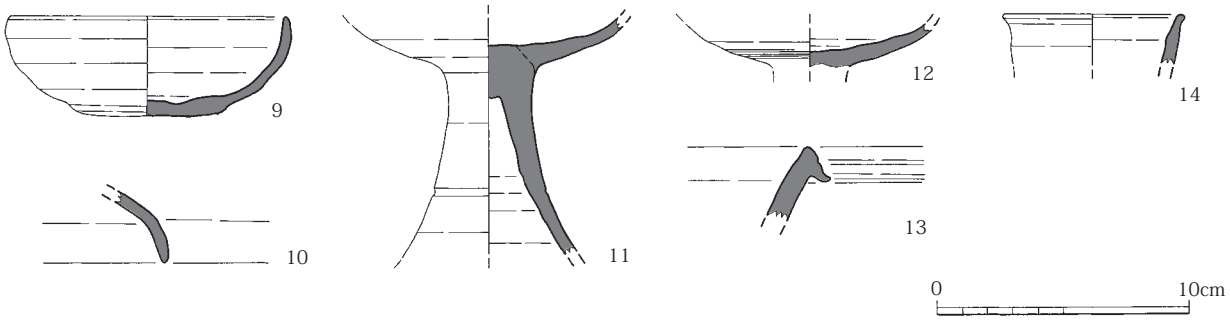


1　暗褐色土（表土）
2　褐色土
3　黄褐色土（2号墳　墳丘盛土）
4　褐灰色土（2号墳　墳丘盛土）
5　黄橙色土（地山）







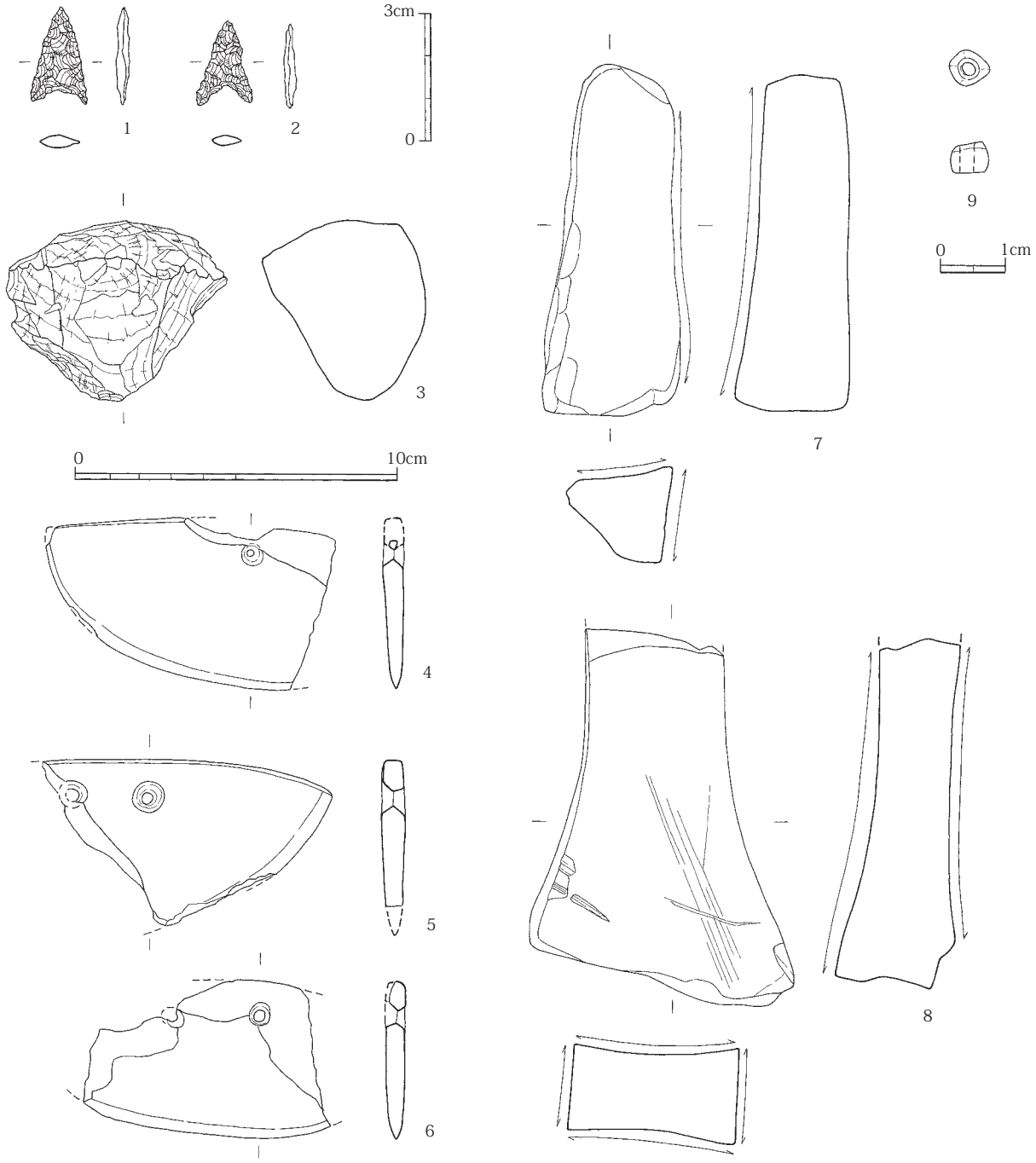


第 28 図　2号墳墳丘土層・周溝および出土土器実測図　(1/40・1/3)

第 29 図　2号墳墓道実測図　(1/60)

5　その他遺物（図版 20、第 30 図）

１は姫島産黒曜石製の石鏃で、形状は二等辺三角形状で、抉りは弧を描く。３号住居跡出土。２は黒曜石製の石鏃で、形状は二等辺三角形で、抉りは三角形状になる。遺構検出出土。３は灰白色を呈する珪質岩の石核である。全ての面で剥離した痕跡が見られる。１号墳周辺出土。４～６は輝緑凝灰岩製の石庖丁である。孔は両方向から突く。４は２号住居跡出土で、半分以上は欠ける。５と６は５号住居跡出土である。５は半分ほどしか残存し、６は両端が欠ける。７と８は粘板岩製の５号住居跡出土の砥石である。７は長辺の２面を使用しするが、８は４面とも使用して浅い擦り傷が一部残る。９は２号住居跡出土のガラス玉である。色調は空色で、0.18g を測る。



第 30 図　石製品実測図　（1～3は 2/3、9は 1/1、他は 1/2）

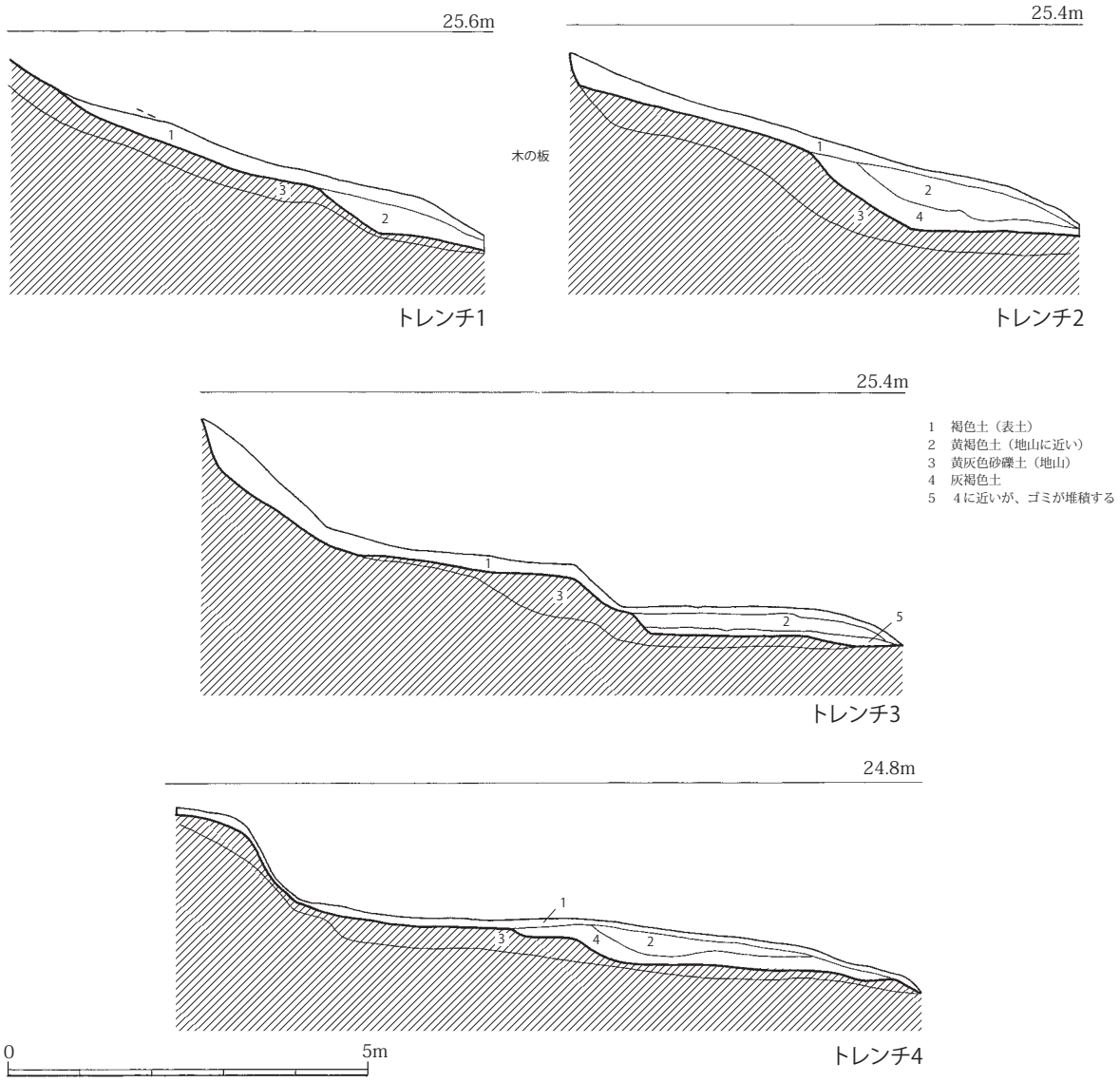
6　宇島鉄道について（図版 17・18、第６・31 図）

豊前市の宇島駅から大分県中津市耶馬溪駅を通る宇島鉄道の路線が、調査区東斜面下を走っていたと言われる。現在、調査区にはその形跡はない。しかし調査区から 150m 北東側には中唐原駅跡地と記された看板のみが立つ。

そのため宇島鉄道の路線が敷設されたと考えられる丘陵東斜面下にトレンチ１～４を設定し、路線の痕跡の確認を行った。トレンチ１・２は調査区南側に位置し、現況では路線の痕跡は確認できない地形である。トレンチ３・４は調査区北側に位置し、現況では畑などを耕作後に荒地となった場所である。

土層観察の結果、斜面を地山整形した痕跡を確認し、表土下に 2 層ほど堆積を確認できたが、いずれのトレンチからは宇島鉄道の線路が敷設された明瞭な痕跡は確認できなかった。今回検出された地山整形の痕跡を宇島鉄道の路線を敷設と結びつけるもののかは不明である。今後の周辺の調査により、確認できるのではないかと思われる。

なお福岡県文化財調査報告書第 252 集塔田五反田遺跡では宇島鉄道の調査が行われている。



第 31 図　トレンチ実測図　(1/100)

7　小結

今回の調査では、竪穴住居跡８軒、土坑 19 基、溝状遺構１条、古墳２基を検出した。

縄文時代の遺構では、２・12・13 号土坑などの落し穴がこの時期の可能性が挙げられる。土器が出土していないので詳細な時期は不明である。弥生時代の遺構の出土土器は少ないが、８・９号土坑がある。

住居跡は、弥生時代後期の８号住居跡、古墳時代前期の１・２号住居跡と古墳時代終末から飛鳥時代（７世紀）の３・５・６・７号竪穴住居跡がある。４号竪穴住居跡は５竪穴号住居跡に切られることからそれ以前の住居跡と思われる。

さらに古墳時代後期を示す遺構としては１・２号墳がある。主に１号墳のみの調査のため、２号墳については詳細は不明である。しかし１号墳同様な円墳で内部主体が単室横穴式石室であると推測される。四ッ塚山古墳群は同丘陵の南側平坦部で 4 基ほど残存しており、これらと合わせて１つの群集墳として存在していたと思われる。

宇島鉄道については先述したとおり、良好の結果は得られなかった。だが鉄道敷設に伴うかは不明であるが、地山整形の痕跡は確認できた。周辺には中唐原駅跡などあるので、それらに伴う調査で、今後良好な結果が得られるのかもしれない。

最後に１号竪穴住居跡検出の 1 号溝状遺構であるが、溝が付設する住居については弥生・古墳時代で類例が県内各地で多数報告されている。京築地域内では行橋市入覚大原遺跡Ｃ地区 SI0005、みやこ町大久保明神遺跡 20・30 号住居、大久保原田遺跡Ⅱ地点２号住居、黒田平田遺跡１・３・８・10 号住居、黒田平原遺跡１地区１号住居、２地区１・２号住居、黒田松ヶ迫遺跡１・５～７・９号住居、黒田蔵ヶ本遺跡Ⅰ区１号住居、国作八反田遺跡２号住居、山ノ神遺跡 SH001、上毛町下唐原伊柳遺跡 SH12 で確認されている。いずれの住居のコーナー付近に設置し、排水溝と報告されている場合が多い。唯一、山ノ神遺跡のみ本遺跡１号住居と同様に壁面中央に設置している状況である。今後、類例を精査して何らかで報告したい。

（参考文献）

末永弥義 2002『山ノ神遺跡』豊津町文化財調査報告書第 26 集　豊津町教育委員会

林充彦 2003『下唐原伊柳遺跡』大平村文化財調査報告書第 14 集　大平村教育委員会

辛嶋眞治 2009 『みやこ町内遺跡群Ⅲおよび豊前国分寺第５次調査』みやこ町文化財調査報告書第５集　みやこ町教育委員会

辛嶋眞治 2011 『みやこ町内遺跡群Ⅴ』みやこ町文化財調査報告書第７集　みやこ町教育委員会

辛嶋眞治 2012 『みやこ町内遺跡群Ⅵ』みやこ町文化財調査報告書第８集　みやこ町教育委員会

林潤也 2013 「Ⅷ-3　溝付き竪穴住居について」『乙金地区遺跡群６』大野城市文化財調査報告書第 106 集　大野城市教育委員会

山口裕平 2014 『入覚大原遺跡　天サヤ池西古墳群　下崎瀬戸溝遺跡』行橋市文化財調査報告書第 51 集　行橋市教育委員会

井上信隆・木村達美 2015 『砦見中園遺跡　国作八反田遺跡』みやこ町文化財調査報告書第 12 集　みやこ町教育委員会

photo. 2　中唐原駅跡

図　版

1　調査区周辺全景（北から）

2　調査区北側全景（真上から）

3　調査区南側全景（北西から）

1　1号竪穴住居跡（西から）

2　1号竪穴住居跡・11号土坑・1号溝状遺構（真上から）

1　11号土坑（西から）

2　2号竪穴住居跡（西から）

3　3号竪穴住居跡（東から）

図版4

1　4・5号竪穴住居跡（東から）

2　5号竪穴住居跡カマド（東から）

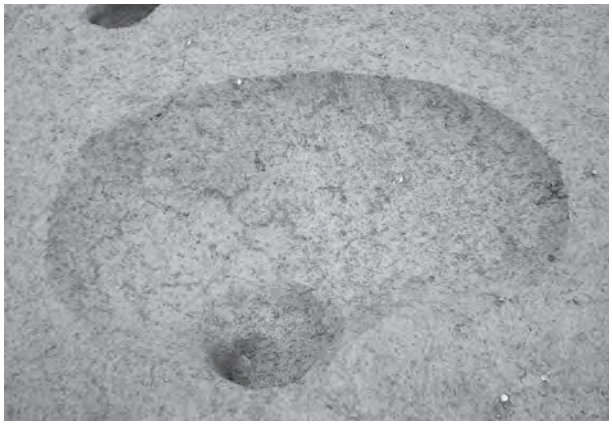
3　6号竪穴住居跡（東から）

4　6号竪穴住居跡カマド（東から）

1　7号竪穴住居跡（北から）

2　8号竪穴住居跡（西から）

3左　8号竪穴住居跡炉跡（西から）
　右　8号竪穴住居跡土器出土状況（北から）



1　1号土坑（南西から）

5　6号土坑（南から）

2　3号土坑（南西から）

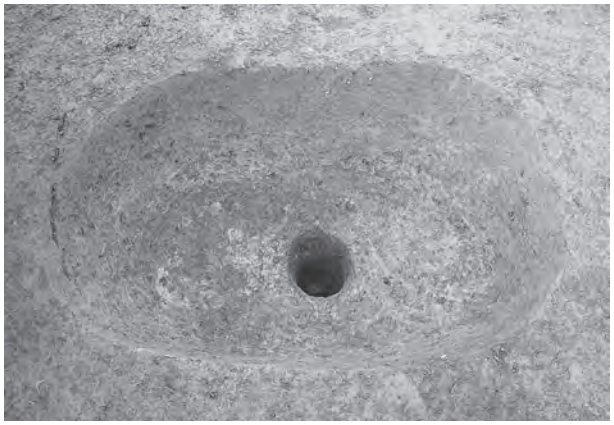
6　8号土坑（西から）

3　4号土坑（南西から）

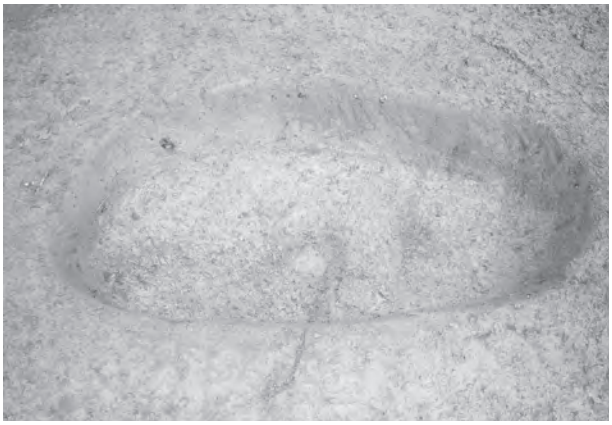
7　9号土坑（南西から）

4　5号土坑（南西から）

8　10 号土坑（南から）

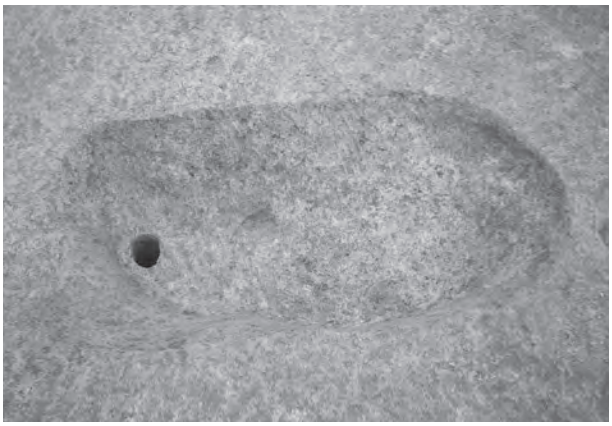


1　12 号土坑（南から）



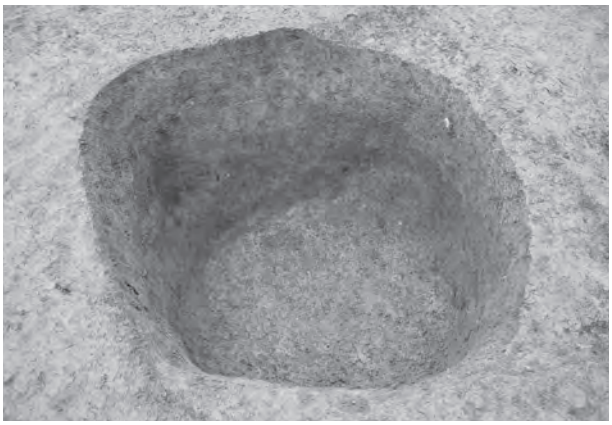
5　16 号土坑（南西から）

2　13 号土坑（西から）



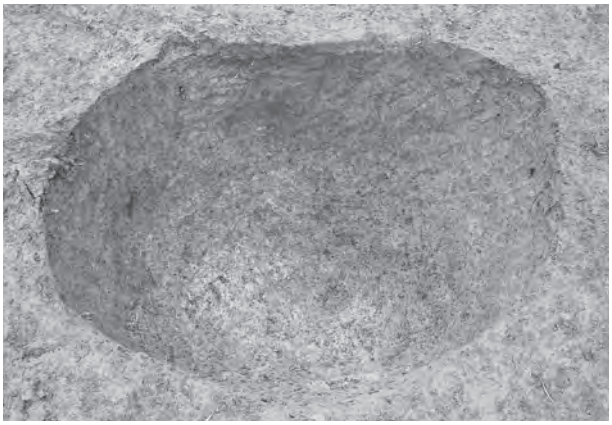
6　17 号土坑（南から）

3　14 号土坑（東から）



7　18 号土坑（北から）

4　15 号土坑（南西から）



8　19 号土坑（北から）

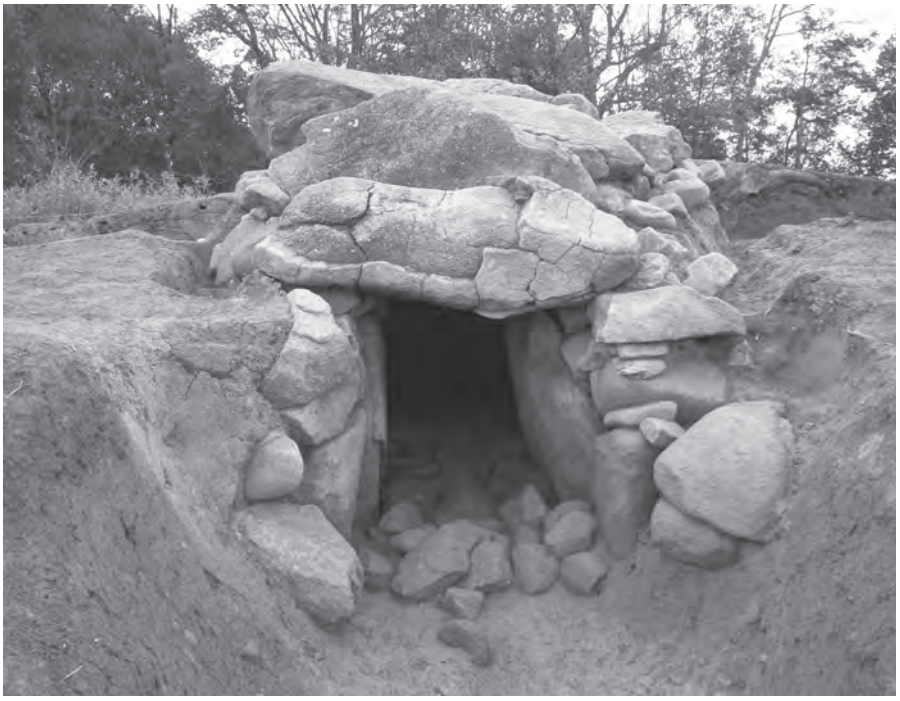
1　1号墳調査前（西から）

2　1号墳墓道（西から）

3　1号墳墓道土器出土状況（北西から）

1　1号墳全景（真上から）

2　1号墳閉塞石（西から）



3　1号墳閉塞石除去後（西から）

1　1号墳羨道左側壁（西から）

2　1号墳羨道右側壁（西から）

3　1号墳仕切り石（西から）

1　1号墳玄室左側壁（東から）

2　1号墳玄室右側壁（東から）

3　1号墳玄室奥壁（西から）

1　1号墳左右袖石（東から）

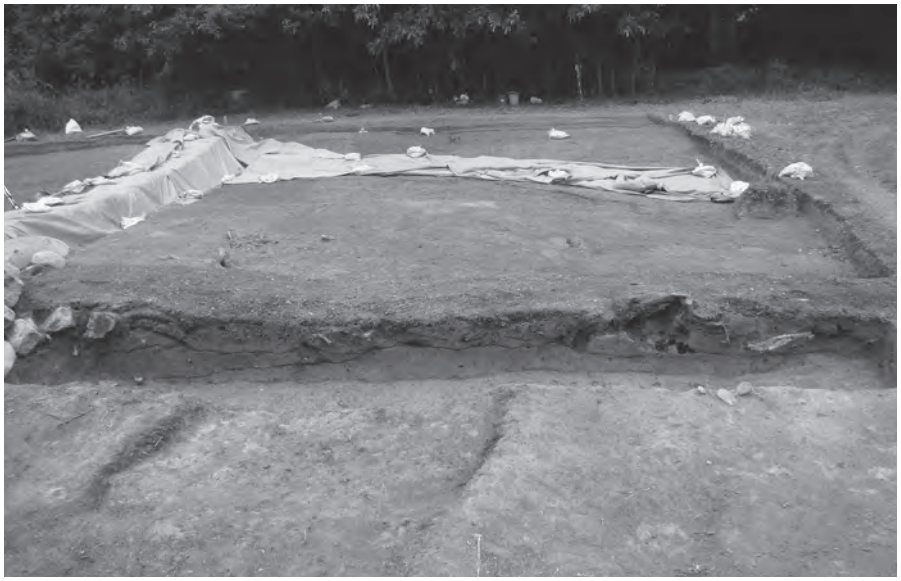
2　1号墳玄室敷石（東から）

3　1号墳玄室敷石（西から）

1　1号墳耳環・ガラス玉出土状況（南から）

2　1号墳石室掘り方（北西から）

3　1号墳石室掘り方（南西から）



1　1号墳右墳丘土層（西から）

2　1号墳左墳丘土層（西から）

3　1号墳東側墳丘土層（南から）

1　2号墳調査前（西から）

2　2号墳撹乱除去後（西から）

3　2号墳墓道土層（南西から）

1　2号墳墓道土層（西から）

2　2号墳右墳丘土層（西から）

3　2号墳右周溝（西から）

1　宇島鉄道跡調査前遠景
（西から）

2　宇島鉄道跡調査前近景
（西から）

3　1トレンチ（東から）

1　2トレンチ（東から）

2　3トレンチ（東から）

3　4トレンチ（東から）

8 図 1

8 図 7

8 図 8

8 図 11

10 図 1

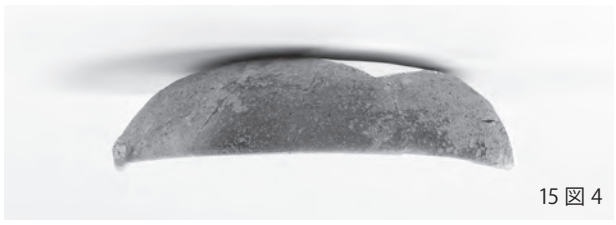
13 図 9

13 図 10

13 図 11

13 図 12

13 図 13


15 図 4

15 図 9

出土遺物1

25 図 4

28 図 5

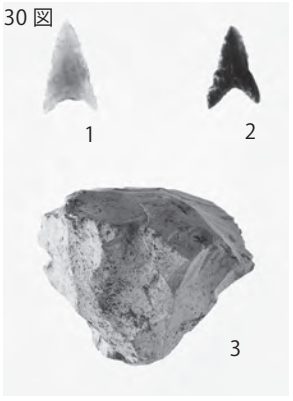
28 図 2

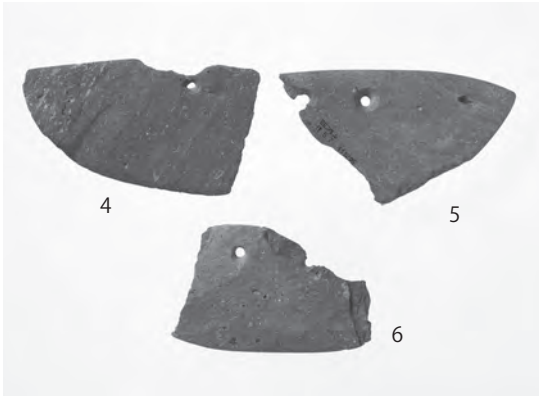
28 図 9

28 図 3

28 図 11

30 図

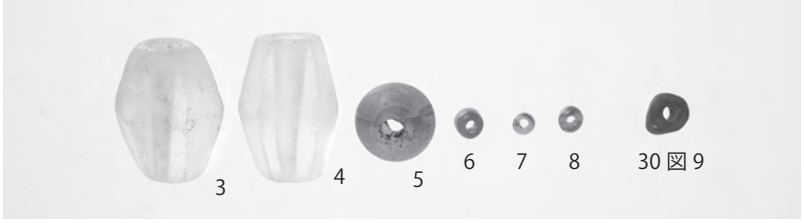

1 2 3


4 5 6

7 8

26 図

1 2


3 4 5 6 7 8 30 図 9

9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

21

26 図

出土遺物2

鏡迫古墳群

Ⅳ　鏡迫古墳群

1　遺跡と調査の概要

「鏡迫古墳群」は、『福岡県遺跡分布図』に収録された周知の埋蔵文化財包蔵地である。東九州自動車道の建設では、鏡迫古墳群が分布する丘陵先端部を掘削して道路を建設するため、建設地の記録保存調査の必要が生じた。建設地は地元の上唐原地区の墓地（通称「上唐原墓地」）として連綿と利用されてきた一画でもある。なお、記録保存調査の前に、上唐原墓地の改葬が実施された。

上唐原墓地の改葬後、調査範囲の遺構面深度と遺跡の残存状況を確認するために、平成25年８月28日よりトレンチ調査を実施した。調査の結果、表土直下に弥生～古墳時代の遺構面を検出し、これらが近世以降の土葬墓や火葬墓（上唐原墓地）と重複して存在する状況を確認した。弥生～古墳時代の遺構面を掘削して営まれた土葬墓・火葬墓については、現在では大半が無縁仏となっている。トレンチ調査成果をふまえた協議の結果、記録保存調査の過程で発見された無縁仏の遺骨や墓標については、適宜、上唐原地区の共同墓地に改葬することになった。このため、近世以降の土葬墓・火葬墓については、基本的に記録保存調査の対象外とした。

改葬後に上唐原墓地に遺された墓地のコンクリート基礎や表土の除去は、重機を投入して実施した。山林に囲まれた丘陵先端に位置していたため、重機や土砂の搬入・搬出は困難を極めた。コンクリート基礎と表土の除去後、遺構検出を開始した。検出開始直後から、眺望のよい丘陵先端を中心に新旧の遺構（墓）が密集する状況が確認された。遺存状態のよい遺構については、平面形態や埋土の状況から弥生～古墳時代の土壙墓をおおむね識別できたため、簡易な遺構略測図を作成し、遺跡の全容把握に努めた。この作業と並行して、近世以降の土葬墓や火葬墓を掘り下げ、遺骨の回収と遺跡の攪乱状況の把握を行った。また、調査区北端では落ち葉を払った際に、供献須恵器群（祭祀遺構）の一部が検出された。検出地点は崖面に接しており、長期間にわたり土砂の堆積が薄かったのだろう。祭祀遺構に接する崖面は複数回の円弧滑りを起こしており、周辺土砂の流出量自体も多いことが推測された。

調査の結果、弥生時代～古墳時代にかけての土壙墓48基、溝４条、祭祀遺構１基を検出した。土壙墓48基のうち22基には石蓋が遺存していたが、残りの26基は石蓋を確認できなかった。木蓋等の有機質部材の可能性も考慮しつつ、埋葬土壙埋土の調査を進めたが、有機質天井の腐朽による崩落痕跡は確認できなかった。墓壙上面に遺された目張り粘土の状況は石蓋土壙墓のものと遜色がなく、検出遺構自体も同様の形態をしている。以上の様相をふまえると、48基の土壙墓はすべて石蓋土壙墓で構成されていたと判断できる。

調査区南側では土壙墓床面を辛うじて検出する状況にあった。上唐原墓地の造営等による重機を用いた面的な削平と見られる。検出遺構が希薄な調査区南側については、遺構消失による空白を考慮すべきであり、隣接する調査区外にも別支群の石蓋土壙墓群が展開している可能性がある。記して将来の課題とする。

平成26年３月24日までに記録保存調査と埋め戻し作業を完了した。調査面積は2,000㎡である。なお、記録保存調査では、調査区内に国土座標系に併せて杭を設定した。この杭を基準に遺跡の割り付けを行い、20分の１の図面や100分の１の地形測量図も作成した。これらの図面作成と並行して、ラジコンヘリやドローンを用いた空撮も実施した。

２　遺構と遺物

１）遺跡の立地

地形と土壙墓の分布　鏡迫古墳群は旧豊前国に位置し、福岡県と大分県の境となる山国川沿いの丘陵地に位置する。本丘陵は山国川の氾濫作用により形成された広義の河岸段丘で形成されている。鏡迫古墳群は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、調査地から南側にのびる尾根を上ると、直径約 30 ｍの円墳を主墳とする古墳時代後期の群集墳が確認できる。これらの群集墳は、現地表面でも周溝の輪郭が確認できるほど遺跡の残存状態がよい。ただし、一部の古墳では石材の抜き取りがなされており、主墳も過去に開口していたようである。

調査地は平野に突き出た丘陵北端の頂上に位置する。調査地内の土壙墓の分布には粗密があり、明らかに丘陵頂部に土壙墓が集中し、緩斜面を下るほど土壙墓は少なくなる。したがって、限られた調査範囲ではあるが、弥生時代～古墳時代に営まれた石蓋土壙墓群の中心墓域を記録保存調査の対象としたと見てよいだろう。ただし、上述したように調査区南側は面的な削平を受けている点は注意を要する。また、丘陵全体が弧状に平野に面しているため、調査地南側の尾根上方にも、別支群の墓域が展開している可能性も排除できない。

遺跡の土層　調査着手前の調査地は、丘陵頂部に上唐原墓地が営まれており、その表面はコンクリート基礎や近世以降の土葬墓で覆われていた。調査地北側は崖面を形成し、急斜面に腐葉土が堆積する状況にあった。調査地南側（溝１～３に囲まれた範囲）は平坦面を形成していたが、表面は雑木が繁茂し腐葉土に覆われていた。コンクリート基礎を除く表土は、斜面で厚さ 30 ㎝、平坦面で厚さ 10 ～ 20 ㎝程度の堆積であった。

表土を除去した段階で、石蓋土壙墓群が造営された遺構面を検出した。石蓋土壙墓は丘陵頂部付近では黄褐色粘質土、やや斜面を下ると安山岩礫を多量に含む黄灰褐色土から掘り込まれていた。丘陵頂部に堆積する黄褐色粘質土の厚みは薄く、すべての石蓋土壙墓が黄褐色粘質土を掘り抜いて、安山岩礫包含層となる黄灰褐色土を死床としていた。なお、各石蓋土壙墓の墳丘検出に努めたが、残りのよい遺構でも石蓋を被覆する程度の盛土しか確認できなかった。また、すべての石蓋土壙墓で土砂が流入していたこともあり、人骨は全く遺存していなかった。

２）遺構

（１）土壙墓

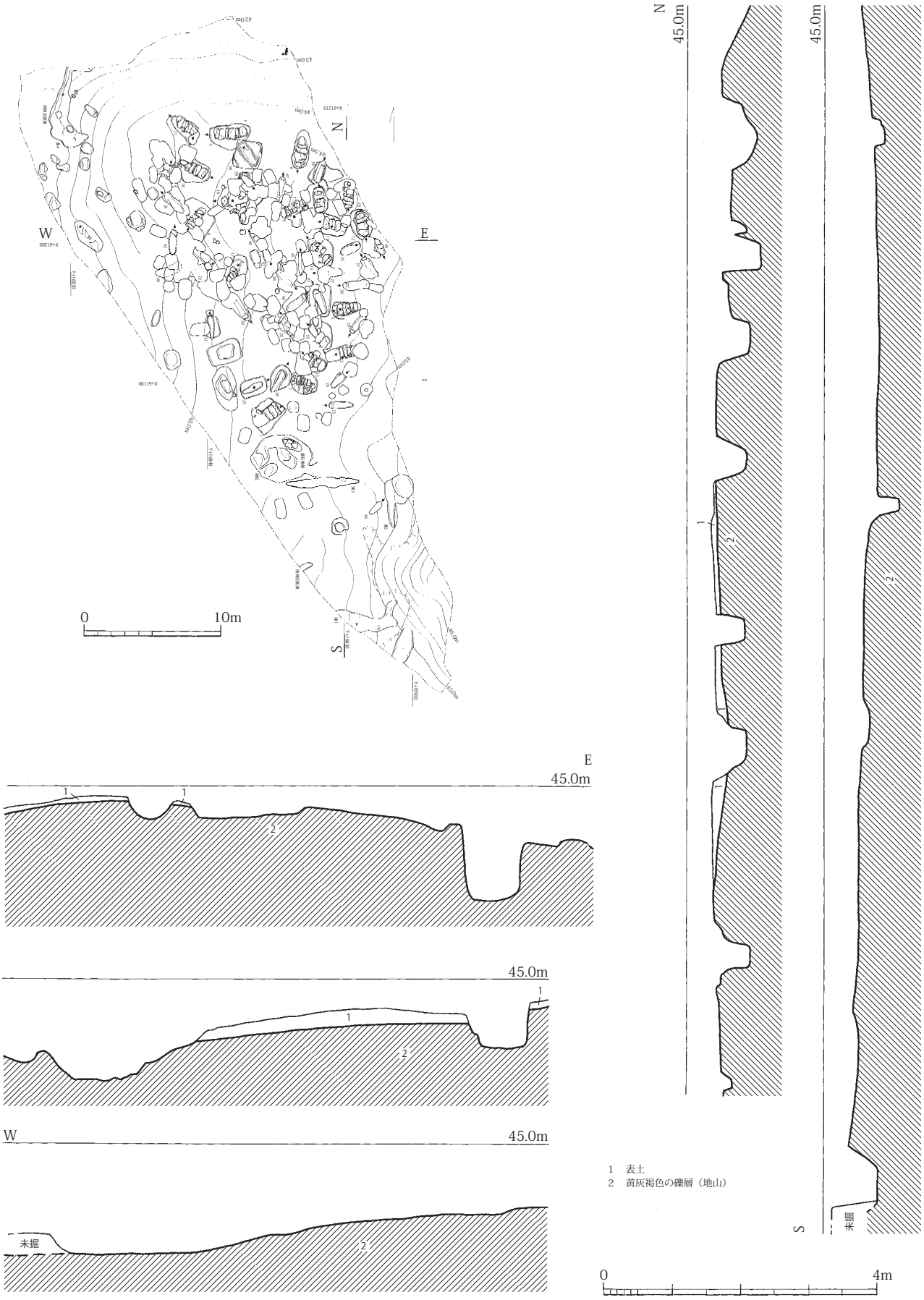
１号土壙墓（図版 21、第 35 図）

土壙墓群南側で検出した石蓋土壙墓である。他の土壙墓との切り合いはないが、遺構南側（遺体脚部側）が近世墓による攪乱を受ける。墓壙上面の残りはよく、長さ 250 ㎝×幅 180 ㎝の菱形に近い歪な方形で深さ 10 ㎝ほどの浅い掘り込みが確認できる。墓壙の深さは石蓋の厚みに対応しており、石蓋上面と旧地表面の高さはほぼ同じとなる。

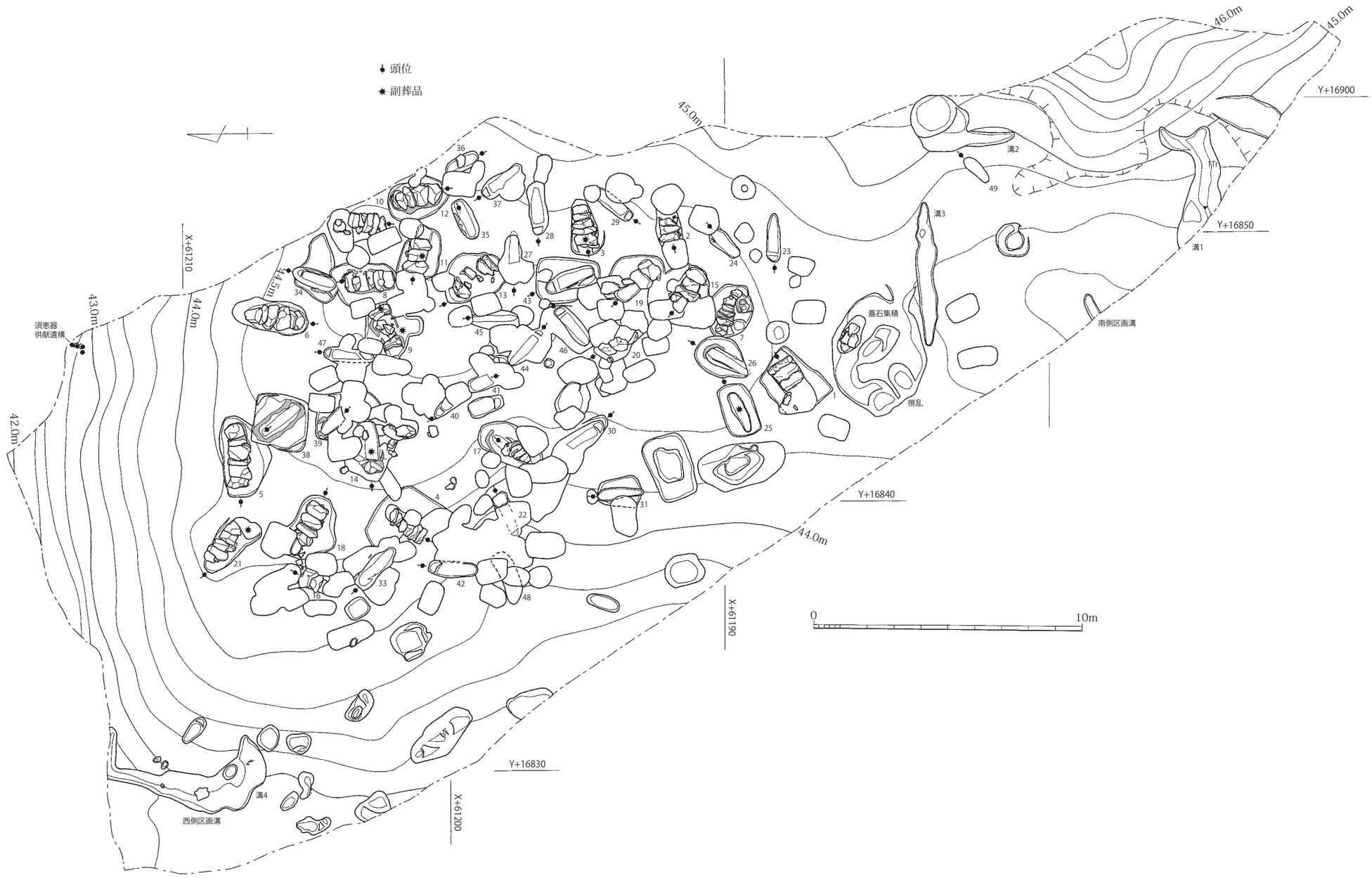
埋葬土壙は長さ 230 ㎝×幅 70 ㎝で、深さは 60 ㎝である。埋葬土壙は２段掘り状を呈しており、床面から 20 ㎝ほどの高さにわずかな平坦面が見られる。また、埋葬土壙の北東側に枕状の削り残しがあることから、埋葬遺体の頭位が識別できる。枕を含めた床面全体に赤色顔料を敷く。

石蓋は遺体の頭部側から順番に端部を重複させて被せている。粘土による目張りは認められ

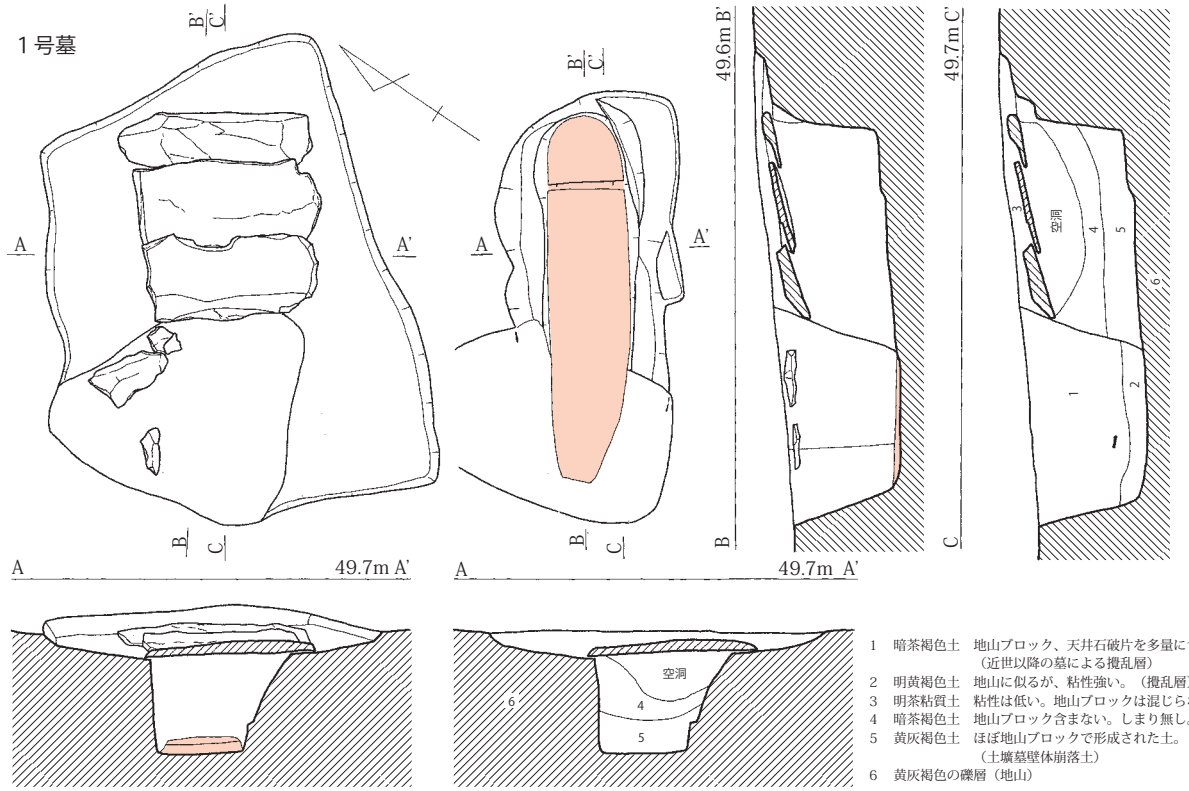
第 32 図　鏡迫古墳群調査地周辺地形図　(1/2,500)



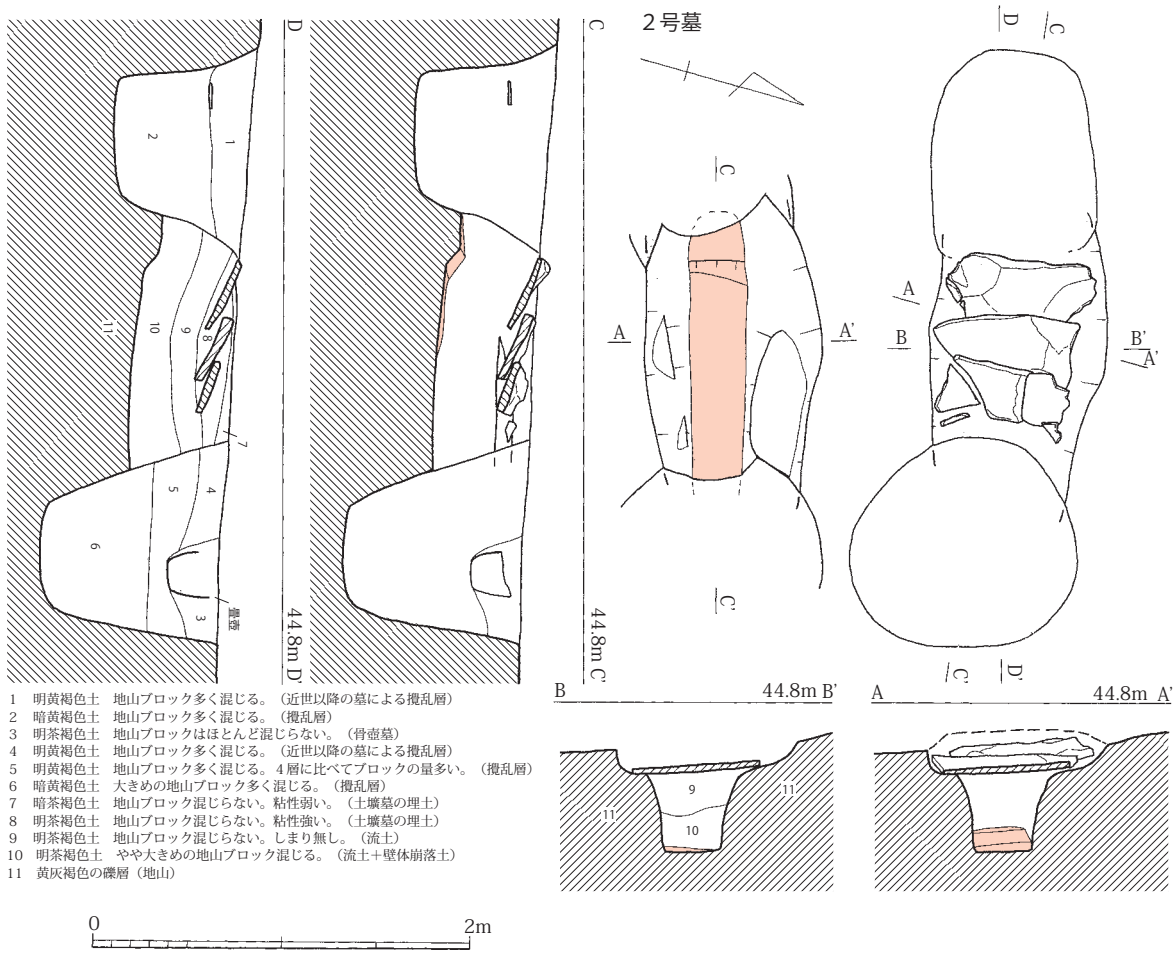
第 33 図　鏡迫古墳群基本層序図　(1/400・1/80)



第 34 図　鏡迫古墳群遺構配置図　(1/160)



1　暗茶褐色土　地山ブロック、天井石破片を多量に含む。しまり無し。（近世以降の墓による攪乱層）
2　明黄褐色土　地山に似るが、粘性強い。（攪乱層）
3　明茶粘質土　粘性は低い。地山ブロックは混じらない。（土壙墓埋土）
4　暗茶褐色土　地山ブロック含まない。しまり無し。（流土）
5　黄灰褐色土　ほぼ地山ブロックで形成された土。しまり無し。（土壙墓壁体崩落土）
6　黄灰褐色の礫層（地山）



1　明黄褐色土　地山ブロック多く混じる。（近世以降の墓による攪乱層）
2　暗黄褐色土　地山ブロック多く混じる。（攪乱層）
3　明茶褐色土　地山ブロックはほとんど混じらない。（骨壺墓）
4　明黄褐色土　地山ブロック多く混じる。（近世以降の墓による攪乱層）
5　明黄褐色土　地山ブロック多く混じる。4層に比べてブロックの量多い。（攪乱層）
6　暗黄褐色土　大きめの地山ブロック多く混じる。（攪乱層）
7　暗茶褐色土　地山ブロック混じらない。粘性弱い。（土壙墓の埋土）
8　明茶褐色土　地山ブロック混じらない。粘性強い。（土壙墓の埋土）
9　明茶褐色土　地山ブロック混じらない。しまり無し。（流土）
10　明茶褐色土　やや大きめの地山ブロック混じる。（流土＋壁体崩落土）
11　黄灰褐色の礫層（地山）

0　2m

第35図　1・2号墓実測図　(1/40)

なかった。３枚残る石蓋はいずれも玄武岩製で、裏面のみを赤色顔料で塗布している。石蓋重複部分にも赤色顔料が認められるため、埋葬土壙への架構以前に裏面を決めて塗布していることが分かる。

近世墓は１号土壙墓の脚部側に掘削された。近世墓掘削時には石蓋は埋没した状態にあり、掘削途中で石蓋３～４枚分を外している。結果的に近世墓は１号土壙墓の床面を再利用した状態にあり、床面には１号土壙墓に帰属する赤色顔料がほぼ遺存していた。また、外された石蓋の小片が近世墓埋土上面で裏返った状態で面的に検出された。

１号土壙墓に帰属する遺物は、墓壙上面の検出時に出土した高杯脚部片（第 56 図７）がある。

２号土壙墓（図版 21、第 35 図）

土壙墓群東側で検出した石蓋土壙墓である。他の土壙墓との切り合いはないが、遺構東側と西側が近世墓による攪乱を受ける。墓壙上面は面的に削平を受ける。

埋葬土壙は幅 90 ㎝で、深さは 50 ㎝である。攪乱により、長さは 130 ㎝ほどしか残らないが、本来の長さはおおよそ 160 ㎝と見られる。緩斜面上方側で枕状の削り出しが確認できた。枕を含め、遺存する床面全体に赤色顔料が敷き詰められていた。

石蓋は遺体の頭部側から順番に端部を重複させて被せている。粘土による目張りは確認できなかった。石蓋は３枚分が残るが、脚部側の石蓋は近世墓の掘削により砕けていた。石蓋はいずれも玄武岩製で、裏面のみを赤色顔料で塗布している。

近世墓１基が土壙墓の頭部側、近世墓２基が土壙墓の脚部側に掘削されており、頭部側で石蓋１～２枚、脚部側で石蓋１～２枚が外されている。脚部側の近世墓２基は意図的に重複させて、土葬遺体を埋葬した土壙内に火葬骨壺を埋葬する。

２号土壙墓に帰属する遺物はない。

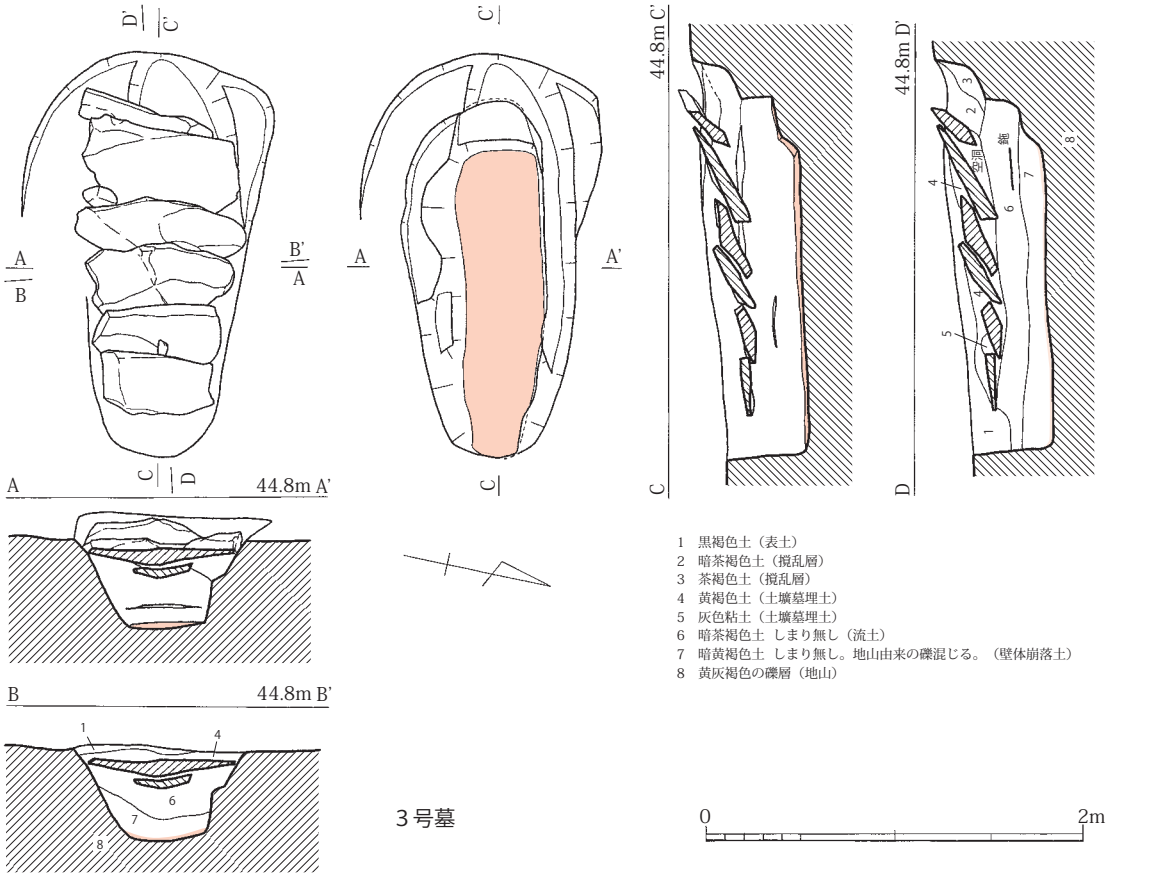
３号土壙墓（図版 22、第 36 図）

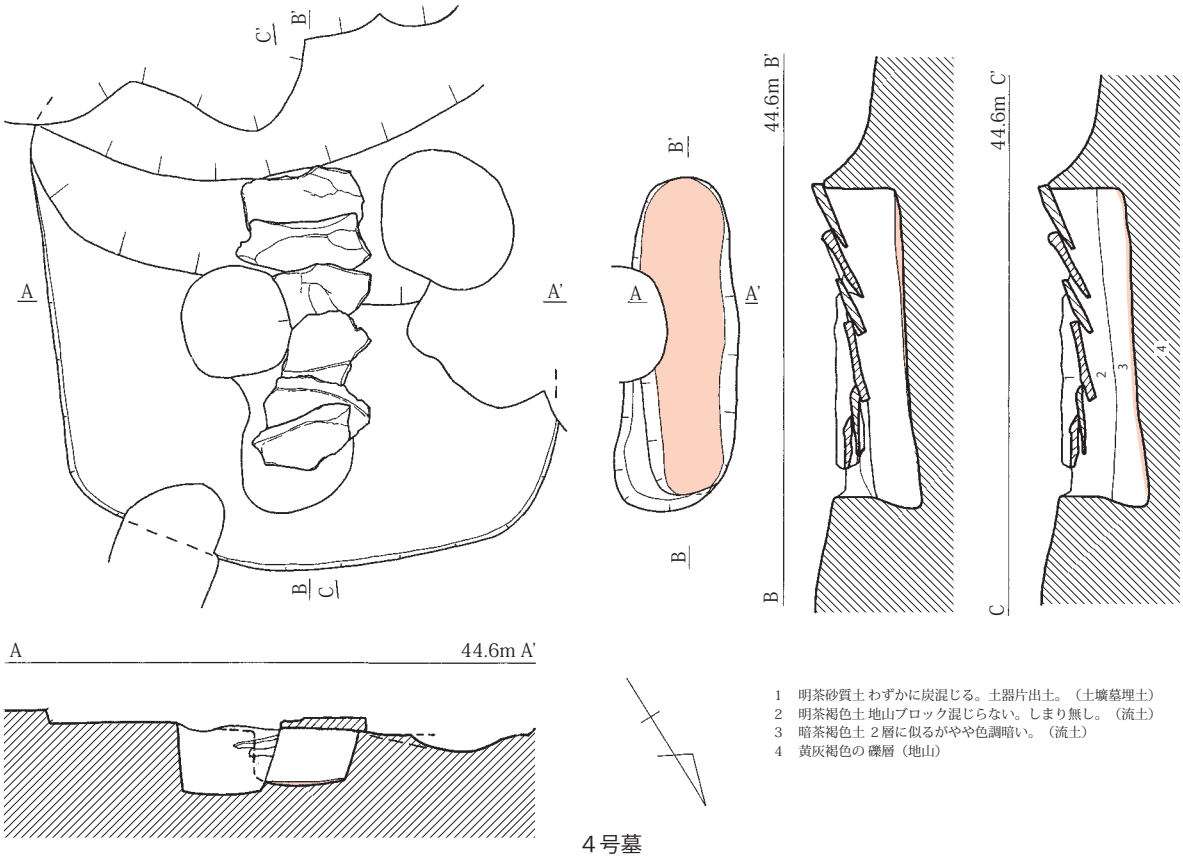
土壙墓群東側で検出した石蓋土壙墓である。他の土壙墓との切り合いはなく、石蓋はすべて完存していた。検出できた墓壙上面は長さ 210 ㎝×幅 130 ㎝の楕円形を呈する。深さは２ｍにも満たない。

埋葬土壙は長さ 210 ㎝×幅 90 ㎝で、深さは 50 ㎝である。埋葬土壙は２段掘り状を呈しており、床面から 30 ㎝ほどの高さにわずかな平坦面が見られる。本来は埋葬土壙の両側面に存在したが、遺体右手側はすでに崩落していた。埋葬土壙の西側に枕状の削り出しがあることから、埋葬遺体の頭位が識別できる。枕を含めた床面全体に赤色顔料を敷く。

石蓋は６枚の玄武岩板と１個の安山岩礫で構成されていた。遺体頭部側の石蓋は二次的に動かされており、やや捲れた状態で埋没していた。また、埋葬土壙の肩が自然風化でやや崩れており、石蓋は全体に沈降した状態にあった。石蓋の隙間には粘土は遺存していなかったが、墓壙の一部で粘土を検出した。石蓋の架構にあたっては、部分的に粘土による目張りを施したと判断できる。石蓋の裏面のみに赤色顔料が塗布されている。

本遺構に帰属する遺物は、鉇と針（第 56 図 35）がある。鉇と針は錆着した状態で遺存しており、長軸を揃えた状態で置かれていたと分かる。鉇と針は埋葬土壙内に堆積した流土（土層６暗茶褐色土）から出土した。検出位置からみて、もともとは遺体頭部を被覆した石蓋端部に沿って





第 36 図　3・4号墓実測図　(1/40)

置かれていたものが崩落したと判断できる。

４号土壙墓（図版 23、第 36 図）

土壙墓群西側で検出した石蓋土壙墓である。33 号土壙墓と切り合う位置にあるが、両遺構が接する場所に近世墓が掘削されており、前後関係は判断できない。墓壙上面は比較的残りがよいが、南側は削平を受ける。検出できた墓壙は幅 260 ㎝で、遺存する長さが 230 ㎝である。深さは 10 ㎝ほどで、石蓋の厚みと対応関係にある。本来の墓壙は長さ 260 ㎝×幅 260 ㎝の隅丸正方形だったとみられる。

埋葬土壙は長さ 170 ㎝×幅 60 ㎝で、深さは 30 ㎝である。枕状の削り出しはなく、床面は平坦であるが、ゆるやかな傾斜がつく。埋葬土壙の南側が、幅も広く、傾斜の上方となることから、遺体頭部は南側にあったと判断する。また、遺体脚部側とみられる埋葬土壙北側端部は、幅狭かつ袋状に掘り込まれている。

石蓋は６枚の玄武岩板で構成されていた。粘土による目張りは確認できない。石蓋の裏面のみに赤色顔料が塗布されている。遺体右手側が近世墓による攪乱を受け、遺体胴部上面を中心にやや二次的に動いている。石蓋は近世墓の掘方に沿って、円形状に割られているため、近世墓掘削時は完全に埋没していたと判断できる。

本遺構に帰属する遺物はない。

５号土壙墓（図版 23、第 37 図）

土壙墓群の北端で検出した石蓋土壙墓である。38 号土壙墓と切り合い関係にあり、「５号土壙墓→ 38 号土壙墓」となる前後関係が確実視できる。墓壙上面の残りがよく、長さ 300 ㎝×幅 140 ㎝の楕円形で、深さは 40 ㎝ほどである。ただし、墓壙南側は攪乱（土層１）を受けている。

埋葬土壙は長さ 210 ㎝×幅 80 ㎝で、深さは 50 ㎝である。西側に枕状の削り残しがあることから、埋葬遺体の頭位が識別できる。枕を含めた床面全体に赤色顔料を敷く。

石蓋は６枚の玄武岩板で構成され、裏面のみに赤色顔料が塗布されている。遺体胴部上面を中心に少し二次的に動いているが、目張り粘土の遺存状態からほぼ原位置に近いと判断できる。石蓋は遺体頸部上面に被せた後に、端部を重複させながら脚部側へと順番にならべている。遺体頭部上面の石蓋は最後に被せられた可能性もある。

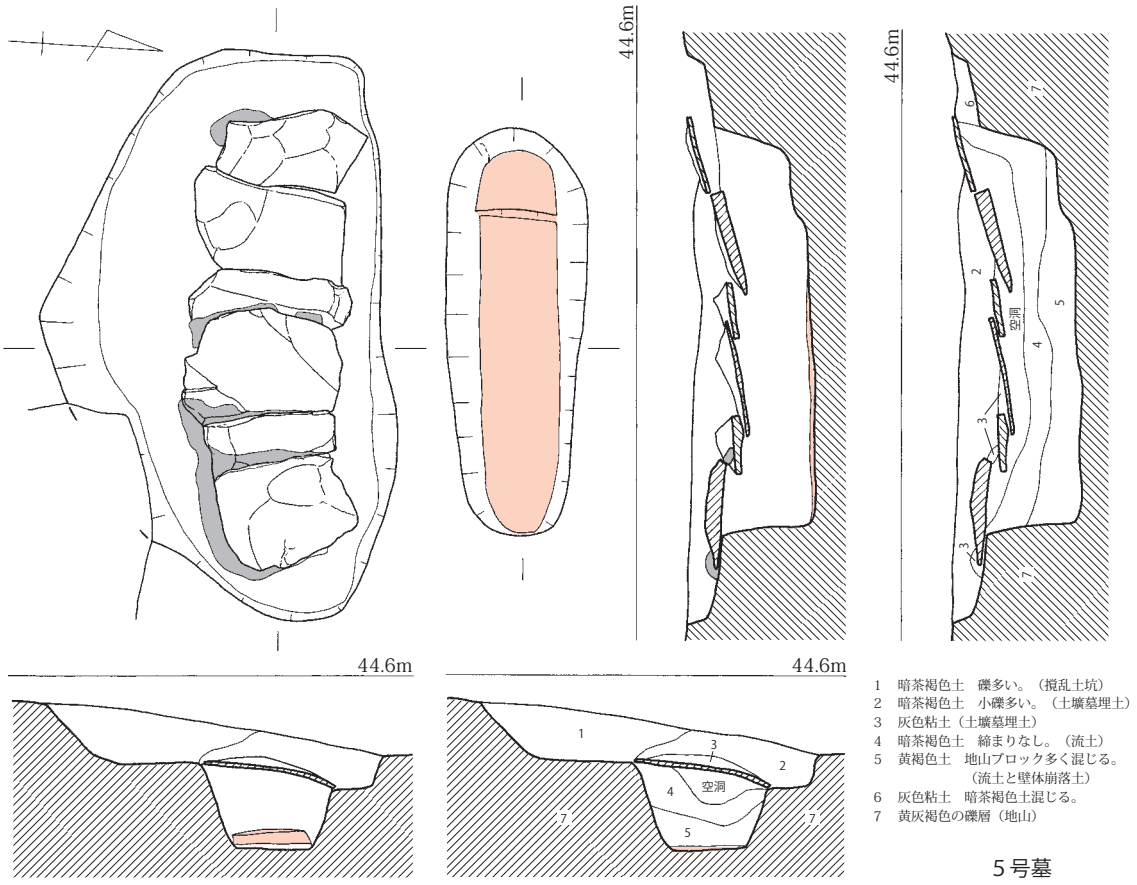
６号土壙墓（図版 24、第 37 図）

土壙墓群の北端で検出した石蓋土壙墓である。他土壙墓との切り合いはなく、石蓋はすべて完存していた。検出できた墓壙上面は長さ 280 ㎝×幅 110 ㎝の長楕円形を呈する。深さは４㎝にも満たない。

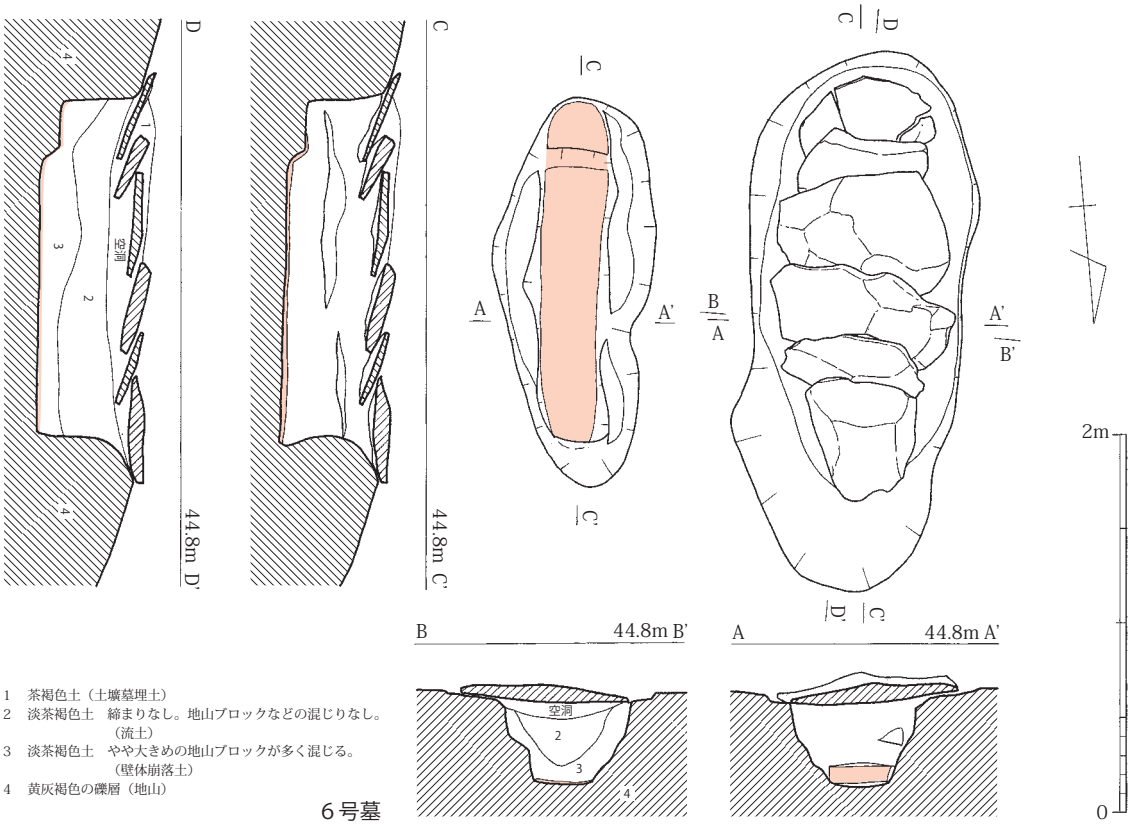
埋葬土壙は長さ 200 ㎝×幅 90 ㎝で、深さは 50 ㎝である。南側に枕状の削り残しがあることから、埋葬頭位が識別できる。両側壁には二段掘り状となる平坦面が確認できるが、遺存状態はわるい。枕を含めた床面全体に赤色顔料を敷く。

石蓋は６枚の玄武岩板で構成され、裏面のみに赤色顔料を塗布する。石蓋は原位置を保っているが、目張りの粘土は検出されなかった。石蓋の架構は遺体頭位側から順番になされていた。

本遺構に帰属する遺物はない。埋葬土壙は石蓋により完全に被覆される状態にあったが、床



5号墓



6号墓

第 37 図　5・6号墓実測図　(1/40)

面には壁体崩落土（土層３）が約 20 ㎝も堆積していた。また、天井石隙間からの流入土（土層２）も相当量認められた。

７号土壙墓（図版 24、第 38 図）

土壙墓群の中央からやや南側で検出した石蓋土壙墓である。26 号土壙墓の掘削により墓壙上面が削平を受けるため、26 号土壙墓に先行して営まれたことが分かる。本来的には 15 号土壙墓とも切り合い関係にあるが、近世墓の掘削により重複部分を消失していた。また、他２基の近代墓（火葬墓）が墓壙の北側で重複し、部分的に石蓋土壙墓の天井石を破壊していた。墓壙上面は残存範囲で長さ 200 ㎝×幅 160 ㎝の楕円形となる。深さは約 10 ㎝である。

埋葬土壙は長さ 150 ㎝×幅 40 ㎝で、深さは 30 ㎝である。床面には明確な枕状の削り出しは確認できなかったが、床面西側がわずかに微高していた。

石蓋は大きく７枚の玄武岩板で構成されていたが、東側石材は近代墓（火葬墓）によって二次的に移動していた。石蓋の架構は遺体頭位側から脚位側へ順番に行っているが、遺体胸部上の石材のみ順番が逆転している。石蓋中央部の上面の隙間では、目張り粘土が確認できた。

本遺構に帰属する遺物は確認できなかった。

８号土壙墓（図版 24、第 38 図）

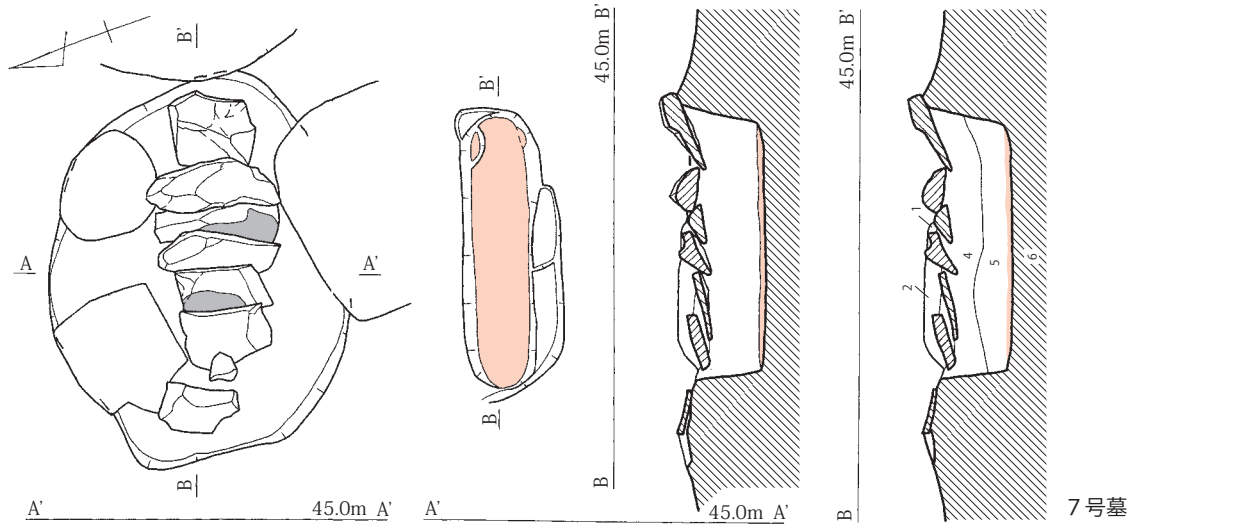
土壙墓群北側で検出した石蓋土壙墓である。９・34 号土壙墓の造営により、部分的に削平を受けている。本来は 11 号土壙墓とも切り合い関係にあったが、両遺構の重複箇所に近世墓が掘削されており、層位的な前後関係は把握できなかった。土壙墓中央に近代の火葬墓が営まれており、北から２枚目の石蓋のみが二次的に移動していた。残りの４枚の石蓋はおおよその原位置を保っており、石蓋周囲の粘土による目張りも確認できた。検出できた墓壙上面は長さ 220 ㎝×幅 150 ㎝の菱形状となる。深さは 10 ㎝にも満たない。

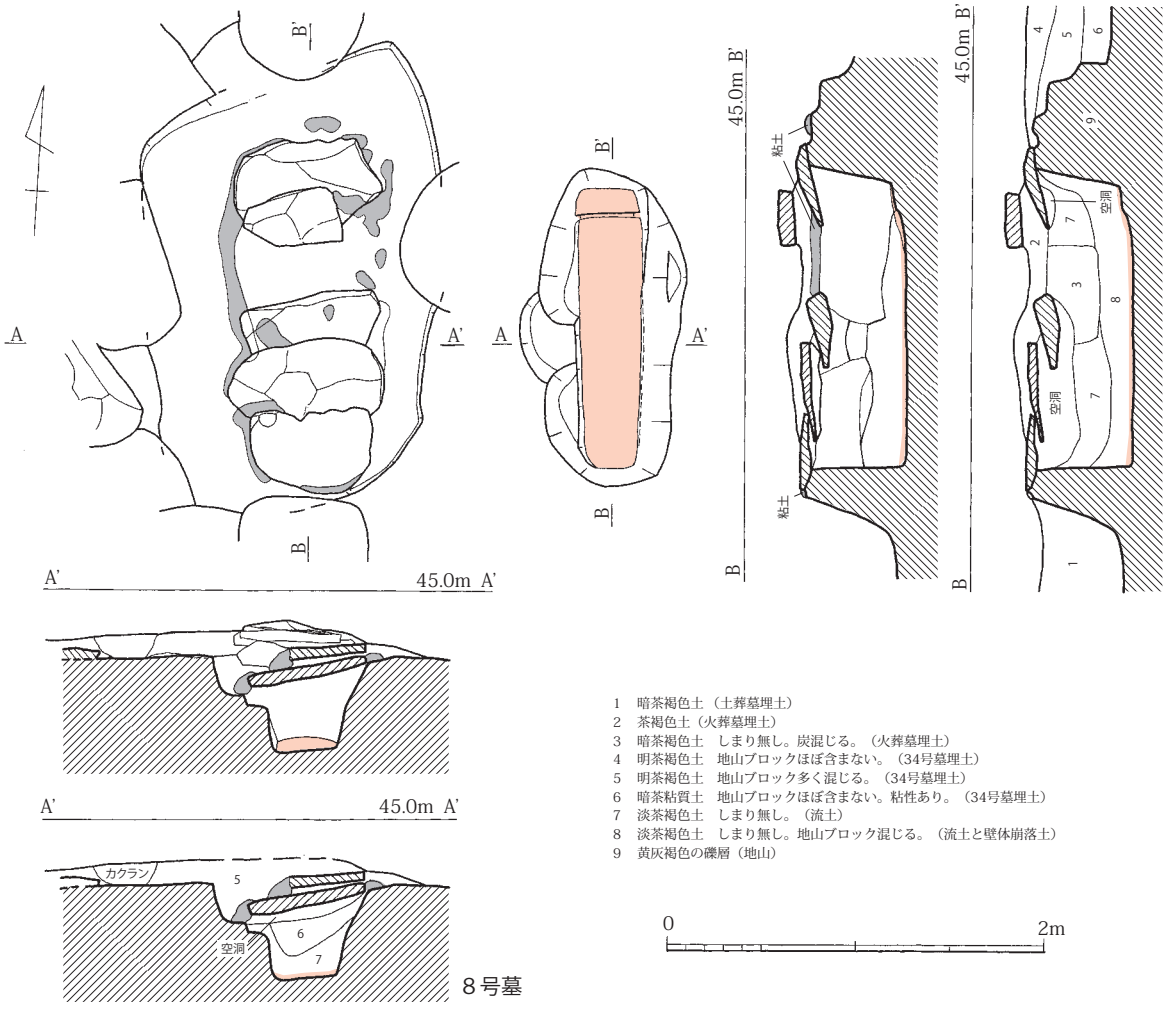
埋葬土壙は長さ 170 ㎝×幅 80 ㎝で、深さは 50 ㎝である。埋葬土壙は東側のみ２段掘り状となる。埋葬土壙の掘削範囲が広すぎたためか、石蓋の一部は斜めに傾斜をつけた状態で被せられていた。床面北側に枕状の削り出しがあることから、埋葬遺体の頭位が識別できる。枕を含めた床面全体に赤色顔料を敷く。

石蓋は４枚の玄武岩板をおおよその原位置で検出し、１枚の玄武岩板が遊離した状態で検出した。遊離している石蓋の大きさから見て、本来は計６枚以上の石蓋で構成されていたと見られる。石蓋の架構は、遊離石材部分は厳密に判断できないが、遺体頭位側から順番になされていたと判断できる。粘土による目張りは綿密に施されており、築造当時は完全に密閉された状態にあった。石蓋は裏面のみに赤色顔料が塗布されている。

９号土壙墓（図版 25、第 39 図）

土壙墓北側で検出した石蓋土壙墓である。本来は８・47 号土壙墓とも切り合い関係にあったが、両遺構の重複箇所に近世墓２基が掘削されており、層位的な前後関係は把握できなかった。土壙墓中央が攪乱を受けており、東側２枚と西側１枚の石蓋以外は二次的に動かされている。破砕された石蓋の多くは攪乱土壙の上層埋土に裏返った状態で埋没していた。攪乱範囲も含めた石蓋の周囲には粘土による目張りが確認できる。検出した墓壙上面は長さ 220 ㎝×幅





第 38 図　7・8号墓実測図　(1/40)

160 ㎝で、深さは４㎝程度である。

埋葬土壙は長さ 190 ㎝×幅 70 ㎝で、深さは 50 ㎝である。埋葬土壙壁面の多くは崩落していたが、部分的に２段掘り状となっていた。床面東側に枕状の削り出しがあることから、埋葬頭位が識別できる。枕を含めた床面全体に赤色顔料を敷く。

埋葬土壙の大きさから見て、本来の石蓋は計５～６枚で構成されていたと見られる。遺体脚位側のみ石蓋架構の前後関係が判別でき、頭位側から脚位側に石蓋を被せていることが分かる。粘土による目張りは綿密に施されており、築造当時は完全に密閉された状態にあった。石蓋は裏面のみに赤色顔料が塗布されている。

床面枕部分からやや浮いた状態で、素環刀刀子１点（第 56 図 36）を検出した。床面との間に若干の間層を挟むことから、遺体埋葬時に床面に置かれたものではない。出土層位である土層 10 は、壁面崩落土を含む自然堆積層であり、刀子は石蓋が原位置を保った状態のまま埋没したと判断できる。したがって、石蓋上面の供献品であった可能性も除外できる。以上をふまえると、刀子は遺体上の頸部から胸部にかけての範囲に置かれていたと判断できる。なお、床面付近の埋土を篩にかけた結果、微小なグリーンタフ製管玉１点（第 56 図 28）を確認した。出土層位は土層 10 であるが、厳密な出土位置は把握できなかった。

10 号土壙墓（図版 25、第 39 図）

土壙墓群東端で検出した石蓋土壙墓である。12 号土壙墓の築造により、削平を受ける。土壙墓の東側から北側にかけては、近世墓による攪乱が見られる。とくに、土壙墓北側は埋葬土壙自体も近世墓により削平を受けていた。墓壙上面の残りは悪く、残存長は 180 ㎝で残存幅 130 ㎝である。深さは５㎝である。

埋葬土壙は残存長 130 ㎝×幅 50 ㎝で、深さは 40 ㎝である。床面南側に枕状の削り出しがあることから、埋葬頭位が識別できる。枕を含めた床面全体に赤色顔料を敷くが、他の土壙墓に比べて量が少ない。

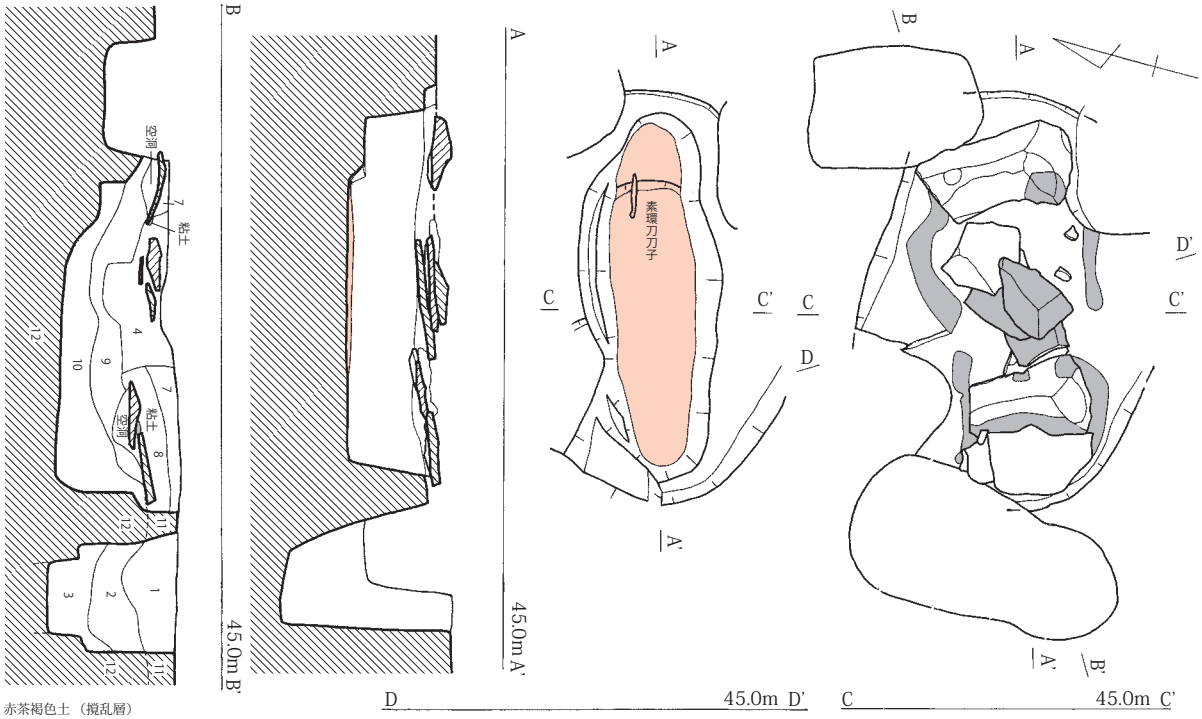
石蓋は大きく４枚の玄武岩板と３枚の花崗岩板で構成されていたと見られる。石蓋の架構は遺体頭位側から順番になされていた。また、原位置を保つ石蓋の周囲でも粘土は検出されず、もともと粘土による目張りがなされていなかったと判断できる。①赤色顔料が少ない点、②石蓋に花崗岩（調査地点周囲で産出）を代用する点、③粘土の目張りがない点は本土壙墓の特色である。

11 号土壙墓（図版 25、第 40 図）

土壙墓群北東側で検出した石蓋土壙墓である。８号土壙墓との前後関係は、近世墓による攪乱のため不明となる。墓壙上面は残存長 170 ㎝×幅 140 ㎝で、深さは 10 ㎝である。

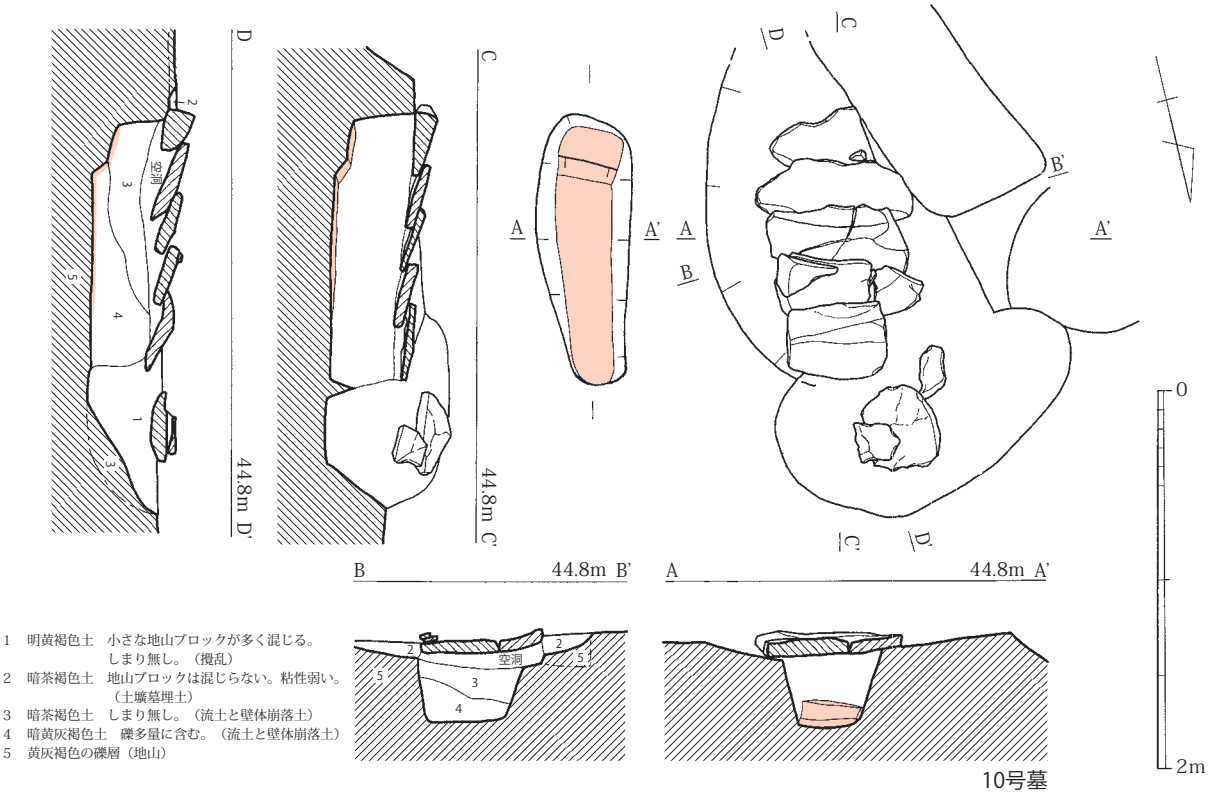
埋葬土壙は残存長 180 ㎝×幅 80 ㎝で、深さは 50 ㎝である。南側壁面を中心に２段掘り状となるが、崩落部分も目立つ。床面西側に枕状の削り出しがあることから、埋葬頭位が識別できる。枕を含めた床面全体に赤色顔料を敷く。

現状で確認できる石蓋は３枚の玄武岩板で、遺体頭位側から脚位側に向けて架構されている。石蓋の裏面のみ赤色顔料が塗られていた。また、石蓋や埋葬土壙との間で大きな隙間が生じた部分にのみ、粘土による目張りを行っている。



1　赤茶褐色土（撹乱層）
2　赤黒褐色土（撹乱層）
3　暗茶褐色土（撹乱層）
4　暗茶褐色土　地山ブロック混じる。しまり無し。
　　天井石が裏返しの状態で出土。（撹乱層）
5　暗茶褐色土　砂粒や地山ブロック多く混じる。（撹乱層）
6　暗茶褐色土　地山ブロック混じる。（撹乱層）
7　明茶粘質土　小さめの地山ブロックと炭がごくわずかに混じる。
　　（土壙墓埋土）
8　明茶粘質土　7層に似るが7層より粘性強い。（土壙墓埋土）
9　茶褐色土　しまり無し。（流土と壁体崩落土）
10　茶褐色土　地山由来の礫ブロック多い。素環刀出土。（流土と壁体崩落土）
11　赤褐色土　礫混じり。（地山）
12　黄灰褐色の礫層（地山）

9号墓



1　明黄褐色土　小さな地山ブロックが多く混じる。
　　しまり無し。（撹乱）
2　暗茶褐色土　地山ブロックは混じらない。粘性弱い。
　　（土壙墓埋土）
3　暗茶褐色土　しまり無し。（流土と壁体崩落土）
4　暗黄灰褐色土　礫多量に含む。（流土と壁体崩落土）
5　黄灰褐色の礫層（地山）

10号墓

第 39 図　9・10 号墓実測図　(1/40)

本遺構に伴う遺物には、土層９から出土した鉄鏃（第 56 図 31）がある。鉄鏃の出土位置と層位から見て、天井石が重複した隙間に置かれていたものが崩落したものと判断した。

12 号土壙墓（図版 25、第 40 図）

土壙墓群北東端で検出した石蓋土壙墓である。10 号土壙墓の一部を削平して築造されている。土壙墓東側に近代火葬墓２基が重複しているが、削平範囲は比較的狭い。墓壙上面は長さ 230 ㎝×幅 140 ㎝で、深さは 20 ㎝である。

埋葬土壙は長さ 190 ㎝×幅 70 ㎝で、深さは 50 ㎝である。床面南側に枕状の削り出しがあることから、埋葬頭位が識別できる。枕を含めた床面全体に赤色顔料を敷く。

石蓋はいずれも原位置を保っており、４枚の玄武岩板で構成されていた。石蓋の架構は遺体頭部側から脚部側に向けてなされていた。石蓋の周囲には綿密に粘土による目張りがなされており、築造時には完全に密閉された状態にあったと判断できる。以上の状態であったにも関わらず、埋葬土壙内部には大量の土砂が堆積しており、壁面崩落土と小動物（蛙・ミミズ等）の出入りに伴う流入土砂の堆積量の多さを改めて認識させられた。なお、埋葬土壙の床面直上に堆積する土層４は地山に由来する安山岩小礫を多く含み、壁面崩落土を多く含む。土層３は地山ブロックの量は少なく、粒子の細かい砂質状の流土の量が多かった。

13 号土壙墓（図版 26、第 41 図）

土壙墓群の中央から北東側で検出した石蓋土壙墓である。27 号土壙墓と重複する位置関係にあるが、近世墓による攪乱で前後関係を判別できなかった。土壙墓中央に近代火葬墓による攪乱があり、中央部の石蓋が二次的に動かされている。墓壙上面は長さ 250 ㎝×幅 190 ㎝で、深さは 20 ㎝である。

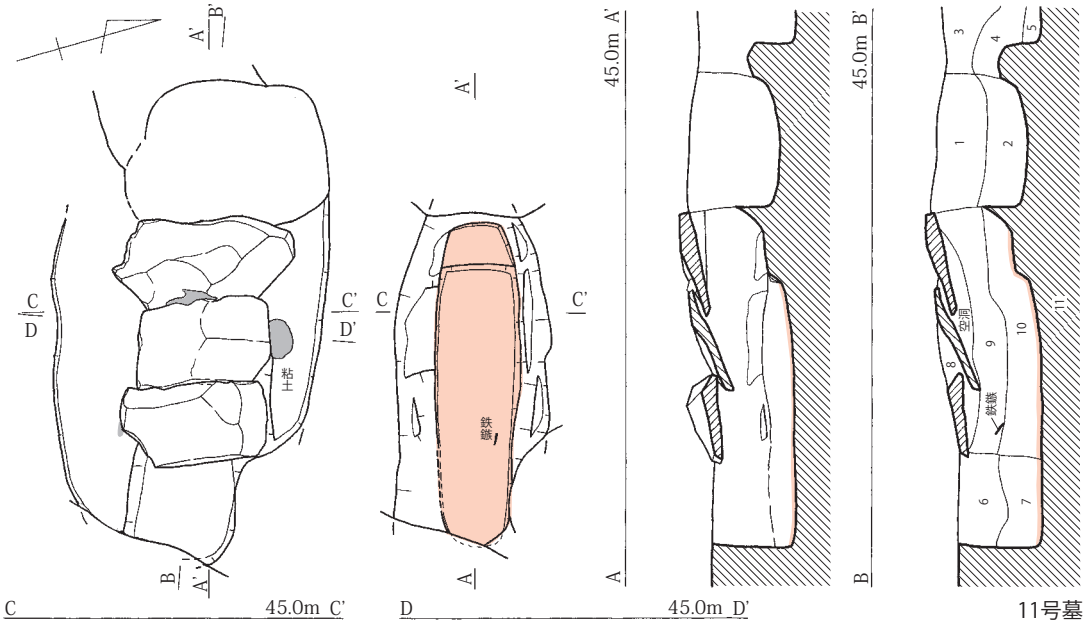
埋葬土壙は長さ 160 ㎝で、深さは 50 ㎝である。攪乱と壁面崩落により、埋葬土壙の幅は大幅に広がっているが、本来は 70 ㎝前後であったと見られる。床面北側に枕状の削り出しがあることから、埋葬頭位が識別できる。埋葬土壙床面に攪乱が及んでいないにも関わらず、赤色顔料は枕部と脚端側にしか確認できなかったため、本来的に赤色顔料を敷いた範囲が限られていたと判断した。

石蓋は遺体頭部上面の１枚と脚部上面の２枚のみが原位置を保っていた。いずれも玄武岩板である。脚部側２枚の前後関係を見ると、遺体頭部側から脚部側へ石蓋の架構がなされたと判断できる。攪乱範囲がひろく全容は不明だが、粘土による目張りは比較的入念になされている。

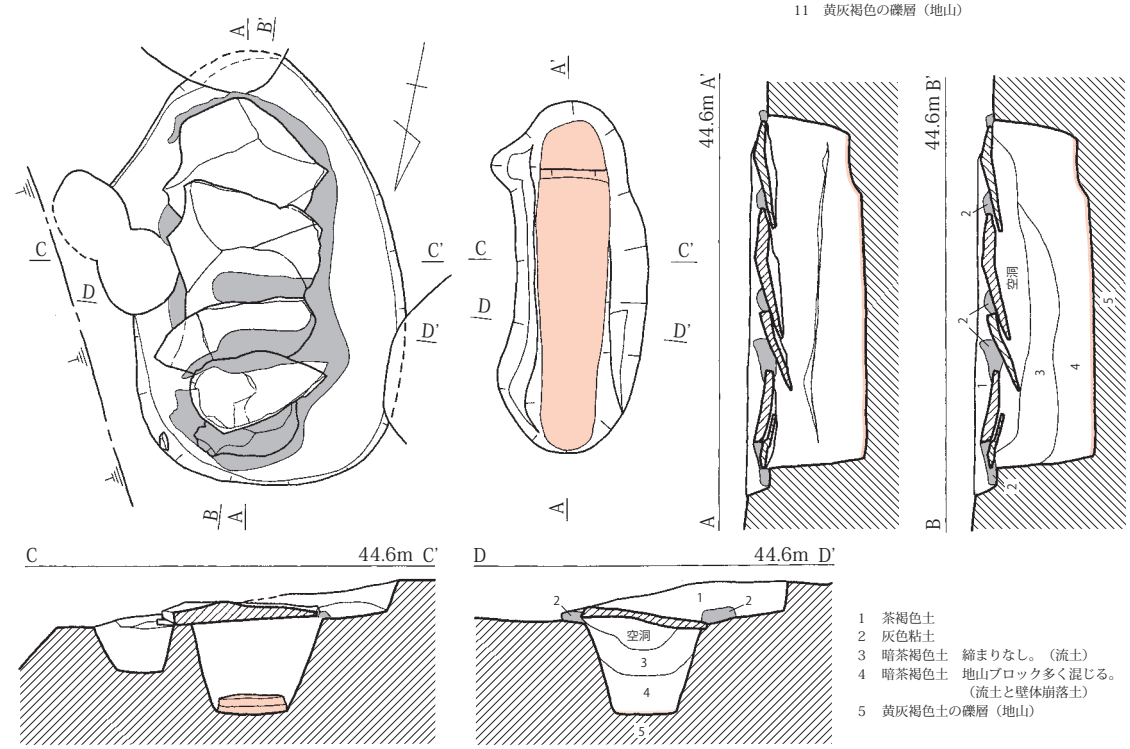
14 号土壙墓（図版 26、第 41 図）

土壙墓群中央の西側寄りで検出した石蓋土壙墓である。39 号土壙墓と重複するだけでなく、多くの近世・近代墓により削平を受けていた。部分的に遺存していた墓壙上面の重複関係から、14 号土壙墓は 39 号土壙墓を削平して築造されていたことが分かった。確認できる墓壙上面は、残存長 260 ㎝×残存幅 160 ㎝で歪な菱形を呈する。深さは 10 ㎝である。

埋葬土壙は長さ 190 ㎝×幅 50 ㎝で、深さは 50 ㎝である。床面西側に枕状の削り出しがあることから、埋葬頭位が識別できる。床面東側の遺体脚足側では壁面が袋状を呈するように掘削されていた。赤色顔料は床面全体に敷かれていたが、南側側壁を中心に削平が著しく、一部で



1　暗茶褐色土　しまり無し。（土葬墓埋土）
2　暗茶褐色土（土葬墓埋土）
3　茶褐色土　しまり無し。礫混じる。
4　暗茶褐色土
5　暗茶褐色土　人骨多い。
6　茶褐色土（土壙墓覆土）
7　茶褐色土　しまり無し。粘土ブロック混じる。（攪乱層）
8　茶褐色土　地山風化土。（攪乱層）
9　淡茶褐色土　しまり無し。（壁体崩落土）
10　淡茶褐色土　礫多い。（壁体崩落土）
11　黄灰褐色の礫層（地山）



1　茶褐色土
2　灰色粘土
3　暗茶褐色土　締まりなし。（流土）
4　暗茶褐色土　地山ブロック多く混じる。（流土と壁体崩落土）
5　黄灰褐色土の礫層（地山）

第 40 図　11・12 号墓実測図　(1/40)

赤色顔料が近世墓床面に拡散していた。南側側壁を除くと、おおむね埋葬土壙床面に攪乱は及んでいない。

石蓋は玄武岩板で、遺体頭部上の１枚のみが原位置を保っていた。他の石蓋は近世・近代墓の掘削時にほぼすべてが持ち出されている。わずかに脚部上の石蓋の一部が二次的に動いた状態で検出された。遺存する石蓋の周囲には入念に粘土の目張りがなされている。

本遺構に伴う遺物には、棺外供献された鉄鏃１点（第 56 図 33）　がある。鉄鏃は原位置を保った状態で、遺体頭部上に架構された石蓋外縁に沿って検出された。

15 号土壙墓（図版 26、第 42 図）

土壙墓群中央の南側で検出した石蓋土壙墓である。19 号土壙墓の一部を削平して、築造されている。土壙墓北西側を中心に近世・近代墓による攪乱を受け、一部の攪乱は埋葬土壙床面にも達している。確認できる墓壙上面は長さ 230 ㎝×残存幅 130 ㎝で、深さは８㎝程度である。

埋葬土壙は長さ 190 ㎝×幅 50 ㎝で、深さは 40 ㎝である。床面北西に枕状の削り出しがあることから、埋葬頭位が識別できる。なお、枕部床面は近世土葬墓の床面に再利用されており、赤色顔料自体も近代土葬墓床面に二次的に広がる状況にあった。赤色顔料は床面全体に敷かれていた。

土壙墓南東側の玄武岩板の石蓋４枚は原位置を保つが、近世土葬墓に接する石蓋は大部分を破損している。石蓋の架構は遺体頭部側から順番になされていた。粘土による目張りは石材間の隙間を重点的に埋めるように用いられていた。

16 号土壙墓（図版 26、第 42 図）

土壙墓群北西端で検出した石蓋土壙墓である。18 号土壙墓により、一部を削平されている。埋葬土壙の四方を囲むように近世墓が営まれていた。墓壙上面は部分的にしか残されていない。残存形状から復元すると、平面は楕円形を呈していた可能性がある。

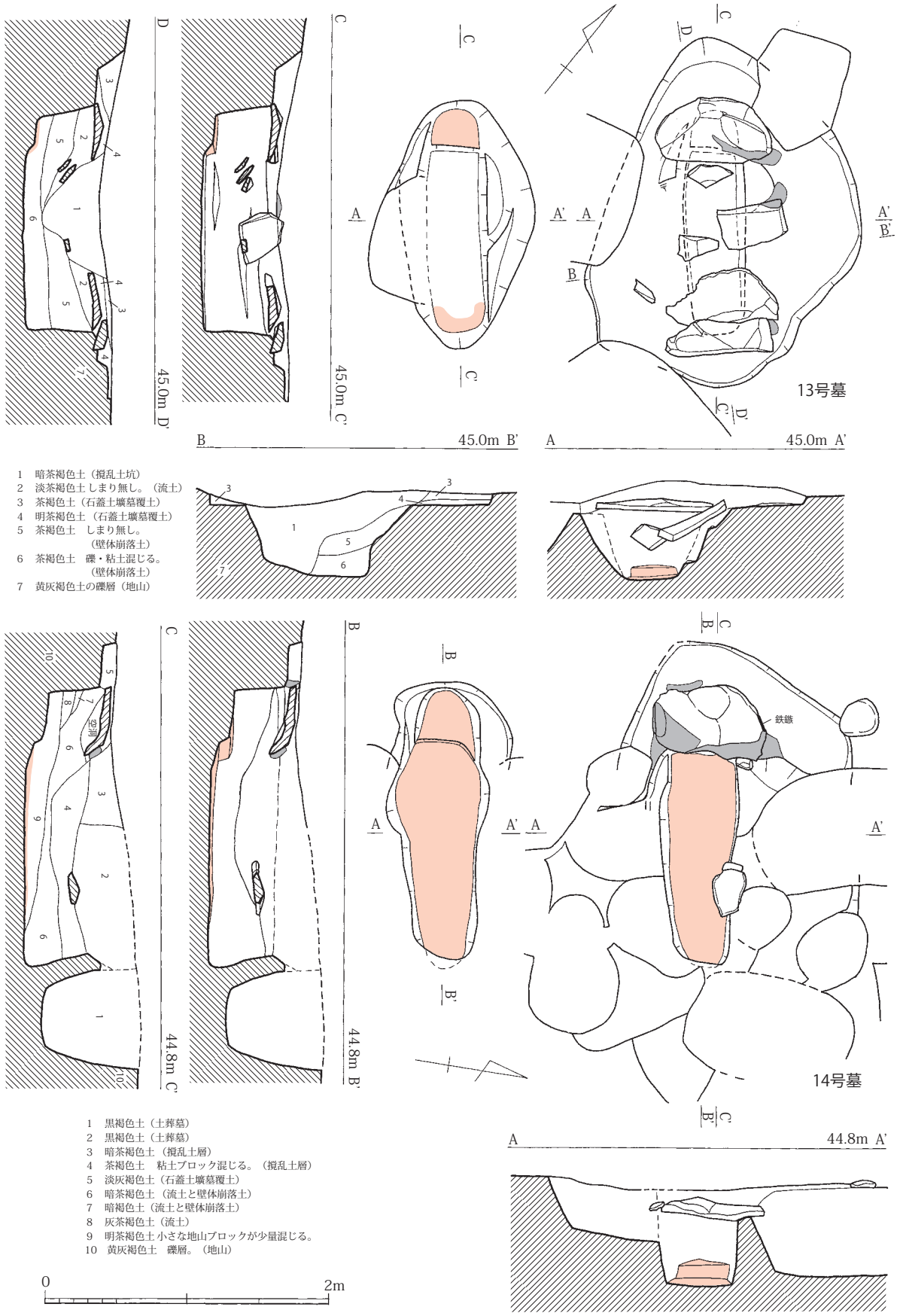
埋葬土壙は残存長 120 ㎝で、本来は長さ 180 ㎝前後であったと見られる。幅 440 ㎝で、深さは 30 ㎝と浅い。残存する床面に枕状の削り出しは見られないが、床面南側の幅が細く、床面北側の幅が広いことから、北側が埋葬頭位となる。埋葬土壙北端は近代墓の掘削により、床面自体が消失している。赤色顔料は床面全体に敷かれていた可能性が高い。

玄武岩板の石蓋２枚が中央部分に残されていた。埋葬土壙上からやや東側に押された状態で検出している。石蓋は遺体頭位側から架構されている。攪乱範囲が広いものの、残された石蓋の周囲でも粘土による目張りは確認できなかった。

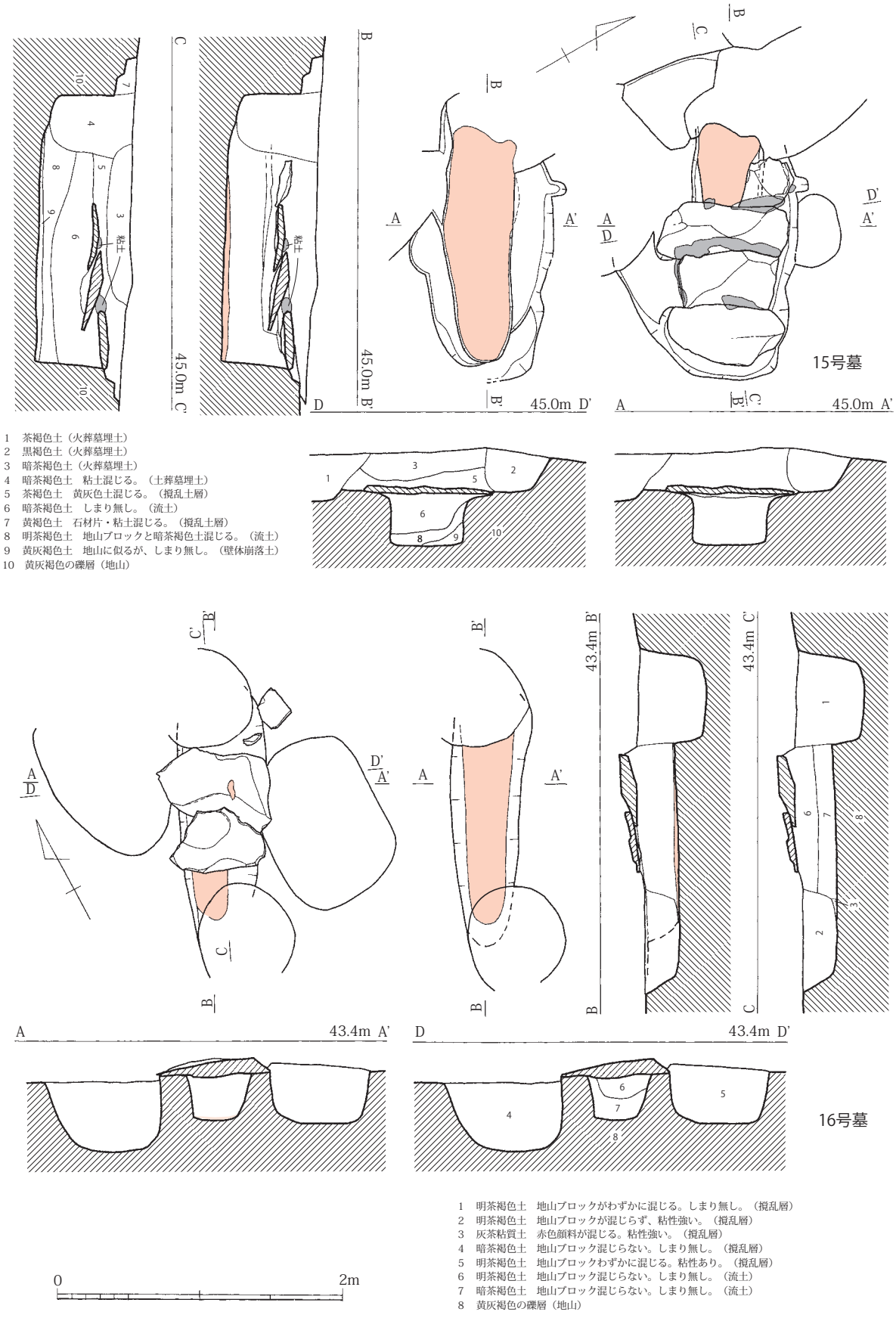
17 号土壙墓（図版 27、第 43 図）

土壙墓群中央西側で検出した石蓋土壙墓である。本来は 30 号土壙墓と切り合い関係にあったと見られるが、重複箇所は消失していた。本土壙墓も埋葬土壙の四方を囲むように近世墓が営まれていた。緩斜面上方は比較的良好に墓壙上面が残されており、平面は菱形に近い。墓壙上面は長さ 290 ㎝×幅 170 ㎝で、深さは 20 ㎝である。

埋葬土壙は長さ 180 ㎝×幅 40 ㎝で、深さは 30 ㎝である。床面北東側に枕状の削り出しがあることから、埋葬頭位が確認できる。枕部付近の床面は近世墓の床面に再利用される状況にあっ



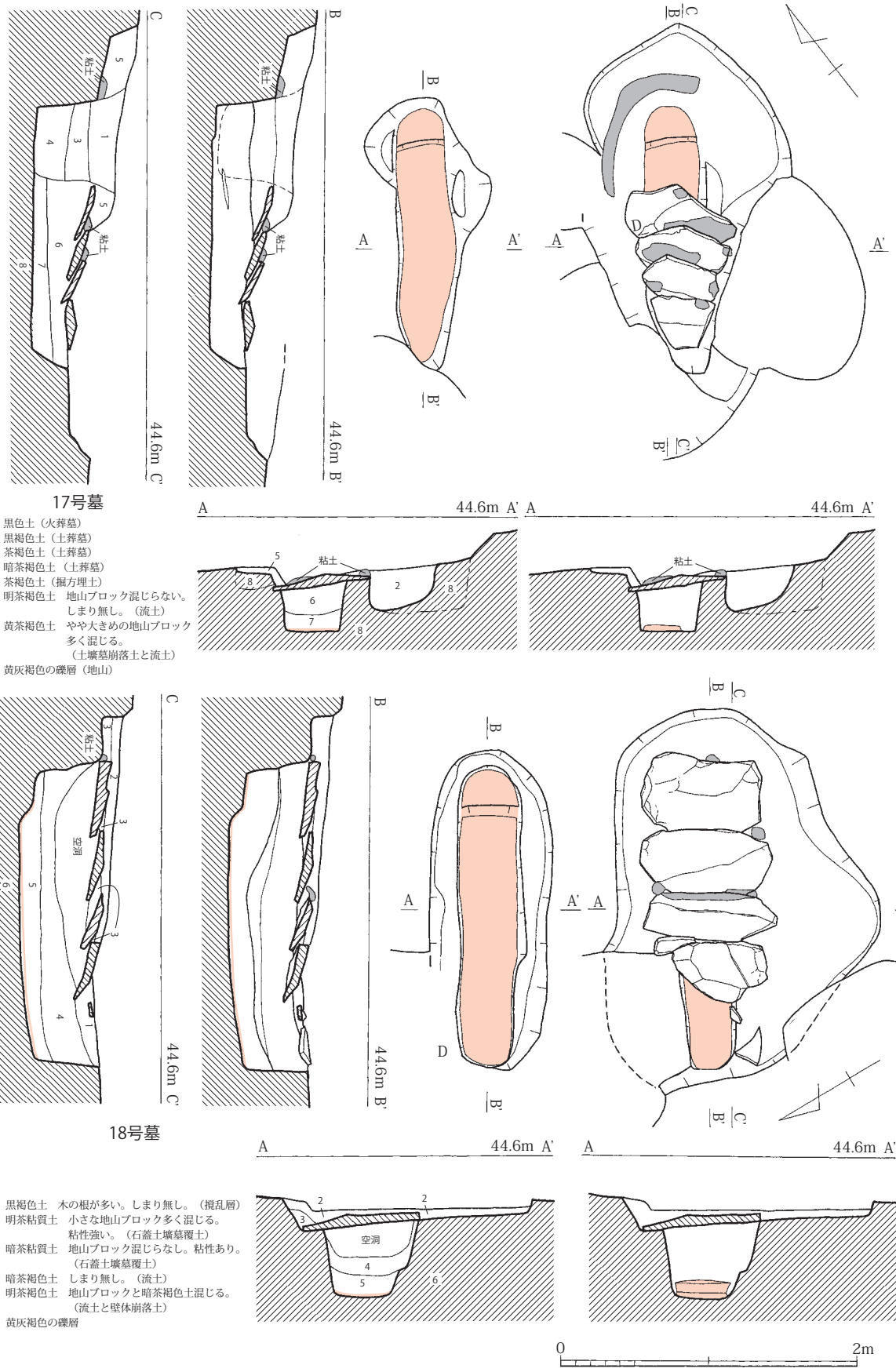
第41図　13・14号墓実測図　(1/40)



1　茶褐色土（火葬墓埋土）
2　黒褐色土（火葬墓埋土）
3　暗茶褐色土（火葬墓埋土）
4　暗茶褐色土　粘土混じる。（土葬墓埋土）
5　茶褐色土　黄灰色土混じる。（撹乱土層）
6　暗茶褐色土　しまり無し。（流土）
7　黄褐色土　石材片・粘土混じる。（撹乱土層）
8　明茶褐色土　地山ブロックと暗茶褐色土混じる。（流土）
9　黄灰褐色土　地山に似るが、しまり無し。（壁体崩落土）
10　黄灰褐色の礫層（地山）

1　明茶褐色土　地山ブロックがわずかに混じる。しまり無し。（撹乱層）
2　明茶褐色土　地山ブロックが混じらず、粘性強い。（撹乱層）
3　灰茶粘質土　赤色顔料が混じる。粘性強い。（撹乱層）
4　暗茶褐色土　地山ブロック混じらない。しまり無し。（撹乱層）
5　明茶褐色土　地山ブロックわずかに混じる。粘性あり。（撹乱層）
6　明茶褐色土　地山ブロック混じらない。しまり無し。（流土）
7　暗茶褐色土　地山ブロック混じらない。しまり無し。（流土）
8　黄灰褐色の礫層（地山）

第 42 図　15・16 号墓実測図　(1/40)



第 43 図　17・18 号墓実測図　(1/40)

た。赤色顔料は床面全体に敷かれていた。

石蓋は南西側４枚が原位置で残されており、いずれも玄武岩板であった。石蓋が外されていた北東側に関しては、埋葬土壙の周囲に粘土の目張りが残されており、おおよその石蓋架構範囲を判別できる。目張りに使用された粘土の量が多く、本来は入念に密閉されていた。石蓋は、遺体頭部側から脚部側に向けて順番に架構されている。

18 号土壙墓（図版 28、第 43 図）

土壙墓群北西側で検出した石蓋土壙墓である。16 号土壙墓の一部を削平して、築造されている。埋葬土壙北西側が近世墓による攪乱を受ける。墓壙上面は長さ 250 ㎝×幅 180 ㎝で、深さは 20 ㎝である。

埋葬土壙は長さ 210 ㎝×幅 60 ㎝で、深さは 50 ㎝である。床面東側に枕状の削り出しがあることから、埋葬頭位が確認できる。近世墓の掘削は埋葬土壙の床面近くまで達するものの、床面自体には到達していなかった。赤色顔料は床面全体に敷かれている。

石蓋は東側４枚が残されており、いずれも玄武岩板であった。西端の石蓋は近世墓の掘削により二次的に破損している。石蓋の架構は、遺体頭部側から脚部側に向けて順番になされていた。粘土による目張りは部分的になされており、とくに石蓋間の隙間が大きい中央部で綿密な目張りが確認できた。

19 号土壙墓（図版 28、第 44 図）

土壙墓群中央の南側で検出した石蓋土壙墓である。15 号土壙墓により、一部を削平される。また、北西側を中心に近世墓による改変を受ける。残存する土壙上面は、長さ 210 ㎝×幅 160 ㎝で、深さは 10 ㎝である。

埋葬土壙は長さ 20 ㎝×幅 60 ㎝で、深さは 50 ㎝である。床面北西側に枕状の削り出しがあることから、埋葬頭位が確認できる。近世墓の掘削により北西側の石蓋が外され、埋葬土壙内部の堆積層も削平を受ける。埋葬土壙床面まで削平は及んでおらず、床面全体で赤色顔料を確認した。

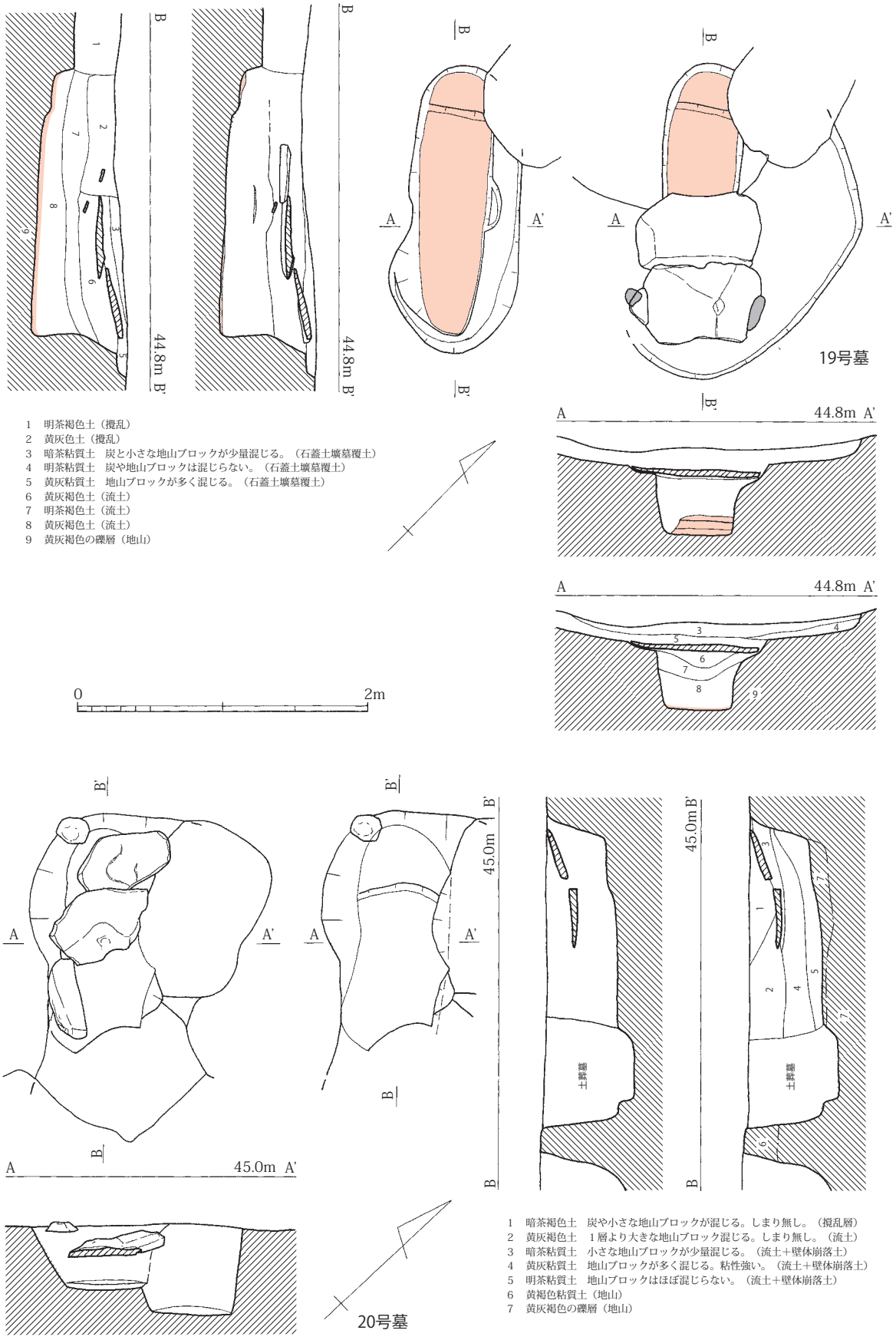
石蓋は南東側２枚が原位置で残されており、いずれも玄武岩板であった。石蓋の架構は、遺体頭部側から脚部側に向けてなされていた。部分的に粘土による目張りが確認できた。

20 号土壙墓（図版 27、第 44 図）

土壙墓群中央の南側で検出した石蓋土壙墓である。46 号土壙墓と重複する箇所は、近世墓により削平されていた。遺存状態は悪く、土壙上面は面的に削平されていた。

埋葬土壙自体も近世墓の掘削により、大きく削平されていた。残存する埋葬土壙は長さ 140 ㎝×幅 60 ㎝で、深さは 50 ㎝である。床面北西側に枕状の削り出しがあることから、埋葬頭位が確認できる。埋葬土壙埋土も上層は全体的に攪乱が及んでおり、自然堆積層は土層４・５のみとなる。床面で赤色顔料は確認できなかった。

石蓋は大半が抜かれており、残されていた玄武岩板の石蓋２枚も埋葬土壙内に落ち込んだ状態にある。攪乱を受けた埋土も注視したが、目張りの粘土は確認できなかった。



第 44 図　19・20 号墓実測図　(1/40)

21 号土壙墓（図版 27、第 45 図）

土壙墓群北西端で検出した石蓋土壙墓である。北西端と南東端を近世墓（火葬墓）による削平を受ける。墓壙上面は長さ 240 ㎝×幅 180 ㎝で、深さは 10 ㎝である。

埋葬土壙は長さ 210 ㎝×幅 70 ㎝で、深さは 40 ㎝である。両側壁と南東側壁面は、２段掘りとなる。床面北西側に枕状の削り出しがあることから、埋葬頭位が確認できる。遺体脚部側の近世墓は、石蓋土壙墓床面を再利用する状況にある。遺体頭部側の近世墓は、石蓋土壙墓の堆積層を大きく掘り込んでいるが、床面までは達していない。赤色顔料は床面全体に敷かれていた。

石蓋は北西端と南東端が外されており、中央の玄武岩板４枚が確認できた。本来の石蓋は６枚で構成されていた可能性が高い。残存する４枚の石蓋は基本的には原位置を保つが、中央部を中心にやや沈降している。石蓋の架構は、遺体頭部側から脚部側に向けてなされていた。粘土による目張りは部分的に確認できた。21 号土壙墓床面を再利用した近代火葬墓埋土火葬から、鉈１点（第 56 図 34）が出土した。

22 号土壙墓（図版 28、第 45 図）

土壙墓群西側で検出した石蓋土壙墓である。墓壙上面は東側の一部しか残らず、埋葬土壙自体も中央部を近世墓による攪乱で消失する。残存する墓壙上面の深さは約 10 ㎝である。

埋葬土壙は長さ 180 ㎝×幅 60 ㎝で、深さは 50 ㎝である。埋葬土壙東端の方が西端に比べて床面が幅広であることから、東側を埋葬頭位とすることが分かる。副葬品は確認できなかったが、残存範囲には多くの赤色顔料が敷かれていた。

石蓋は遺体頭部上に位置する東端１枚のみが残存していた。他の石蓋土壙墓と異なり、川原石が利用されていた。ほぼ原位置を保っていたが、周囲に粘土による目張りは確認できなかった。

23 号土壙墓（図版 28、第 46 図）

土壙墓群南端で検出した土壙墓である。埋葬土壙床面のみが辛うじて残存する状況にあり、遺構上部の大半は削平されていた。

残存する埋葬土壙は長さ 180 ㎝×幅 40 ㎝で、深さは 20 ㎝に満たない。埋葬土壙西側に枕状の削り出しがあることから、埋葬頭位が確認できる。床面全体に赤色顔料が敷かれていた。

24 号土壙墓（図版 28、第 46 図）

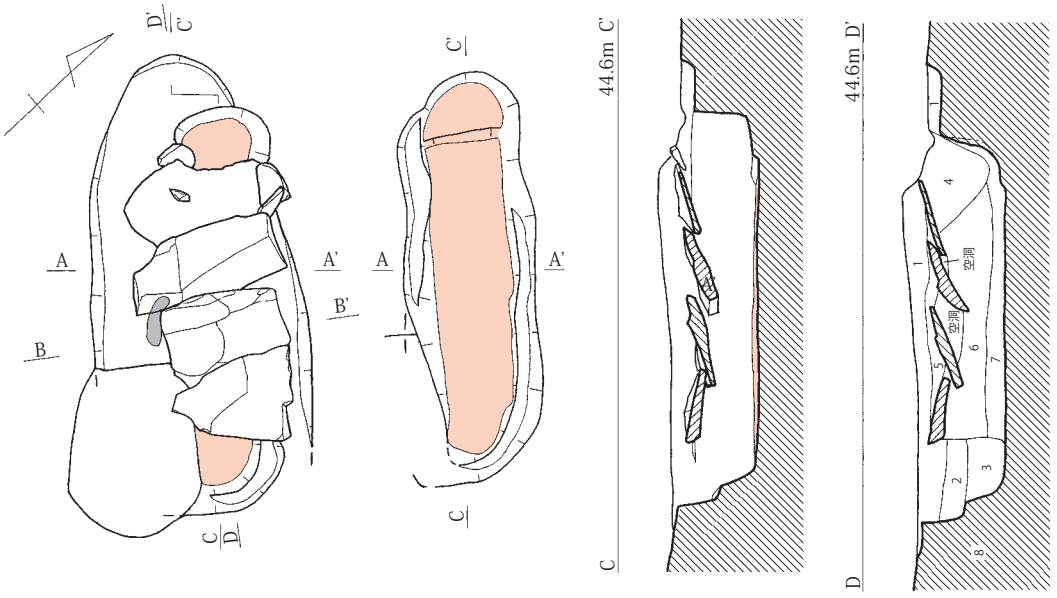
土壙墓群南東側で検出した土壙墓である。埋葬土壙床面のみが辛うじて残存する状況にあり、遺構上部の大半は削平されていた。加えて、埋葬土壙の北東側は近世墓により消失していた。

残存する埋葬土壙は長さ 130 ㎝×幅 60 ㎝で、深さは 20 ㎝である。床面に枕状の削り出しは確認できなかったが、主軸と立地が類似する 29 号土壙墓等の事例から見て、埋葬頭位は南西側にあった可能性が高い。残存範囲の床面には、赤色顔料が敷かれていた。

25 号土壙墓（図版 28、第 46 図）

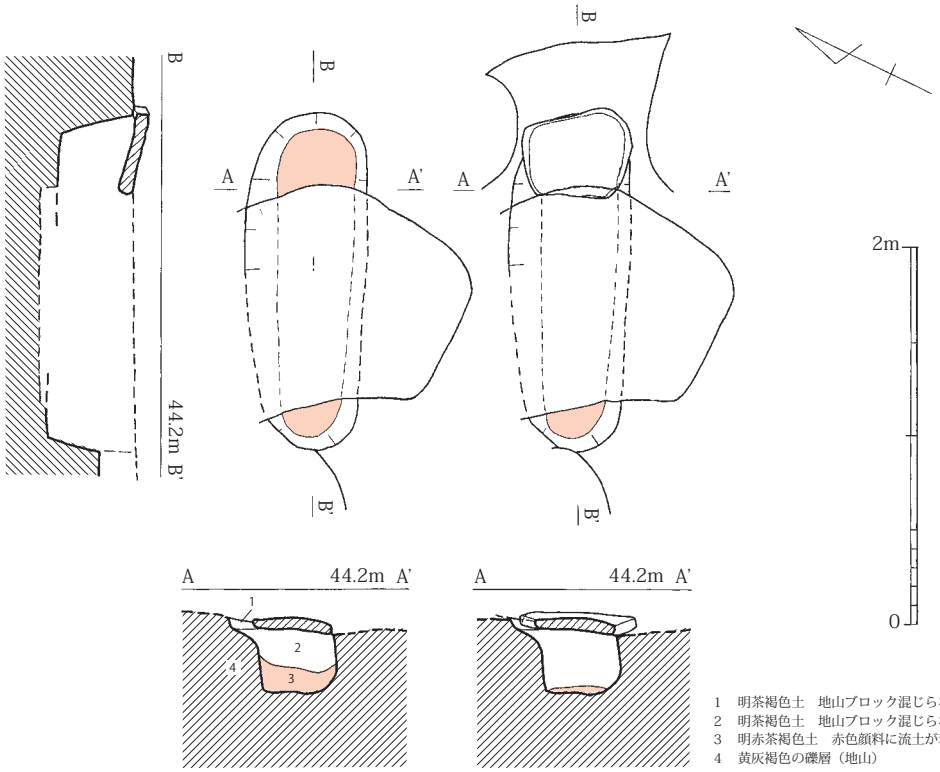
土壙墓群南側で検出した土壙墓である。墓壙上面を含め遺構全体の残りは良かったが、蓋石はすべて持ち去られていた。墓壙上面は長さ 210 ㎝×幅 120 ㎝の方形で、深さは 20 ㎝である。

埋葬土壙は長さ 160 ㎝×幅 40 ㎝で、深さは 30 ㎝である。床面に枕状の削り出しは確認でき



1　21号墓

1　明茶褐色土　炭や小さな地山ブロック多く含む。（流土）
2　明茶褐色土　しまり無し。 天井石が外れた後の流土
3　暗茶褐色土　3層に似るがやや炭混じる。
4　暗茶褐色土　地山ブロック多く混じる。しまり無し。
（火葬墓による撹乱層）
5　暗茶粘質土　炭や地山ブロックが混じらない。（土壙墓埋土）
6　明茶褐色土　地山ブロック混じらない。しまり無し。（流土）
7　明茶褐色土　7層に似るがやや黄味がある。
8　黄灰褐色の礫層（地山）



1　明茶褐色土　地山ブロック混じらない。（流土）
2　明茶褐色土　地山ブロック混じらない。しまり無し。（流土）
3　明赤茶褐色土　赤色顔料に流土が若干混じる。（赤色顔料＋流土）
4　黄灰褐色の礫層（地山）

22号墓

第 45 図　21・22 号墓実測図　(1/40)

なかったが、斜面上方の東側が幅広であることや隣接する1号土壙墓の埋葬頭位を参考にすると、25号土壙墓は遺体頭部を北東に向けて埋葬していたと判断できる。完存する床面を精査したが､赤色顔料は検出できなかった。もともと､赤色顔料は使用されていなかったと見られる。

26号土壙墓（第46図）

土壙墓群南側で検出した土壙墓で、7号土壙墓の一部を壊して築かれている。墓壙上面を含め遺構全体の残りは良かったが、蓋石はすべて外されていた。墓壙の北東側に目張り粘土が遺存することや石蓋の破片を検出したことから、石蓋の使用は確実視できる。墓壙上面は長さ220㎝×幅150㎝の平面略菱形で、深さは10㎝である。

埋葬土壙は長さ180㎝×幅60㎝で、深さは40㎝である。床面に枕状の削り出しは確認できなかったが、斜面上方の北東側が幅広であることや隣接する1号土壙墓の埋葬頭位を参考とすると、26号土壙墓は遺体頭部を北東側に向けた埋葬していたと判断できる。床面全体で赤色顔料を検出した。

27号土壙墓（図版29、第47図）

土壙墓群中央の東側で検出した土壙墓である。墓壙上面が面的に削平されるとともに、西側を中心に近世墓による攪乱を受けていた。遺構埋土に目張りに用いたと思われる粘土がブロック状に流れ込んでいたことから、石蓋の使用は想定できる。

残存する埋葬土壙は長さ120㎝×幅60㎝で、深さは50㎝である。西側の近世墓はほぼ27号土壙墓の埋葬土壙内に収まる配置となることから、埋葬土壙の本来の長さはおおむね180㎝程度と判断できる。枕状の削り出しは確認できなかったが、埋葬土壙東側の幅が狭い点や同一立地で主軸を同じくする3・28号土壙墓の埋葬頭位を参照すると、27号土壙墓の埋葬頭位は西位であったと判断できる。残存する床面では赤色顔料が薄く確認できた。

28号土壙墓（図版29、第47図）

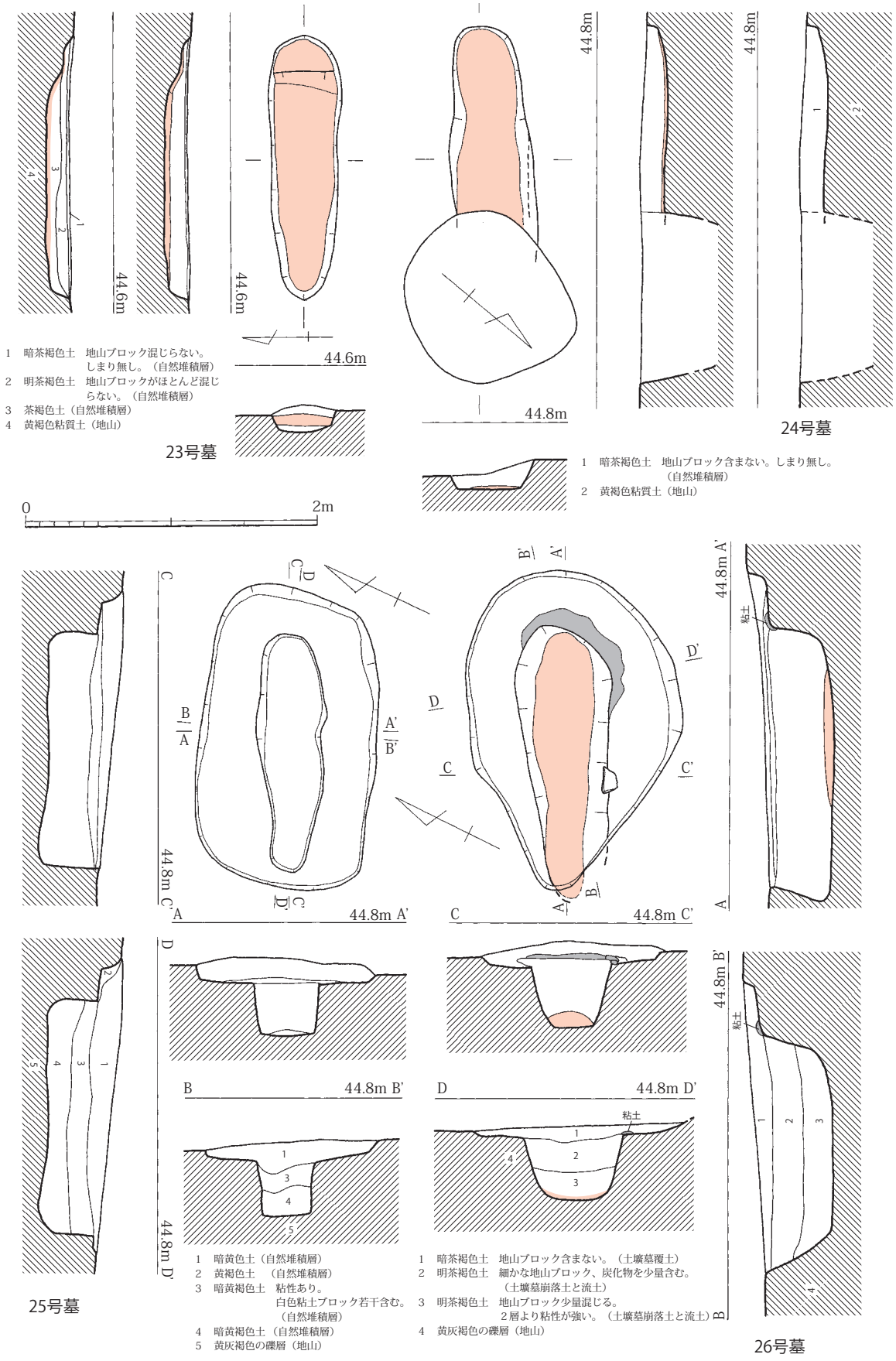
土壙墓群東側で検出した土壙墓である。墓壙上面は面的に削平されており、石蓋も確認できなかった。ただし、遺構埋土に目張りに用いたと思われる粘土が流れ込んでいたことから、石蓋の使用は想定できる。

埋葬土壙はほぼ完存するが、東端が近世墓によりわずかに削平されていた。残存する埋葬土壙は長さ190㎝×幅70㎝で、深さは50㎝である。埋葬土壙床面に枕状の削り出しがあることから、埋葬頭位が確認できる。床面全体で赤色顔料を検出した。

29号土壙墓（図版29、第47図）

土壙墓群東端で検出した土壙墓である。墓壙上面が面的に削平され、埋葬土壙自体も東側を中心に近世墓により攪乱を受けていた。

残存する埋葬土壙は長さ170㎝×幅50㎝で、深さは30㎝である。埋葬土壙床面に枕状の削り出しがあることから、埋葬頭位が確認できる。床面の大部分が遺存していたが、精査したにも関わらず赤色顔料は検出できなかった。もともと、赤色顔料を使用していなかったと判断できる。



第 46 図　23 ～ 26 号墓実測図　(1/40)

30 号土壙墓（図版 29、第 47 図）

土壙墓群中央西側で検出した土壙墓である。遺構上部が面的に削平されており、墓壙上面はわずかに南東側で確認できた。埋葬土壙も北西側で近世墓による攪乱を受けていた。埋葬土壙の堆積土に目張りに用いたと思われる粘土が含まれていたことから、石蓋の使用が想定できる。

残存する埋葬土壙は長さ 180 ㎝×幅 70 ㎝で、深さは 40 ㎝である。埋葬土壙床面に枕状の削り出しがあることから、埋葬頭位が確認できる。残存する床面全体で赤色顔料を検出した。

31 号土壙墓（図版 29、第 48 図）

土壙墓群南東側で検出した土壙墓である。西側を中心に削平を受けていた。残存する墓壙上面は長さ 170 ㎝×幅 120 ㎝の平面略方形で、深さは 10 ㎝である。

埋葬土壙は長さ 170 ㎝×幅 40 ㎝で、深さは 30 ㎝である。枕状の削り出しは確認できなかったが、埋葬土壙北側が幅広となることから、遺体は北位を埋葬頭位としたと判断できる。埋葬土壙北端の床面からやや浮いた場所で部分的に赤色顔料を検出した。加えて、床面自体も精査したが、赤色顔料は検出できなかった。以上の調査所見をふまえると、赤色顔料は遺体頭部付近に撒かれるように使用されていたと想定できる。

33 号土壙墓（図版 30、第 48 図）

土壙墓群西端で検出した土壙墓である。埋葬土壙を囲むように近世墓が営まれており、墓壙上面は消失していた。また、埋葬土壙床面は辛うじて遺存していたが、堆積土自体も大部分が攪乱を受けていた。一部で目張り粘土を原位置で確認しており、石蓋の使用が想定できる。

埋葬土壙は長さ 190 ㎝×幅 70 ㎝で、深さは 50 ㎝である。埋葬土壙北西側でわずかに枕状の削り出しが確認できた。床面全体で赤色顔料を検出した。

34 号土壙墓（図版 30、第 48 図）

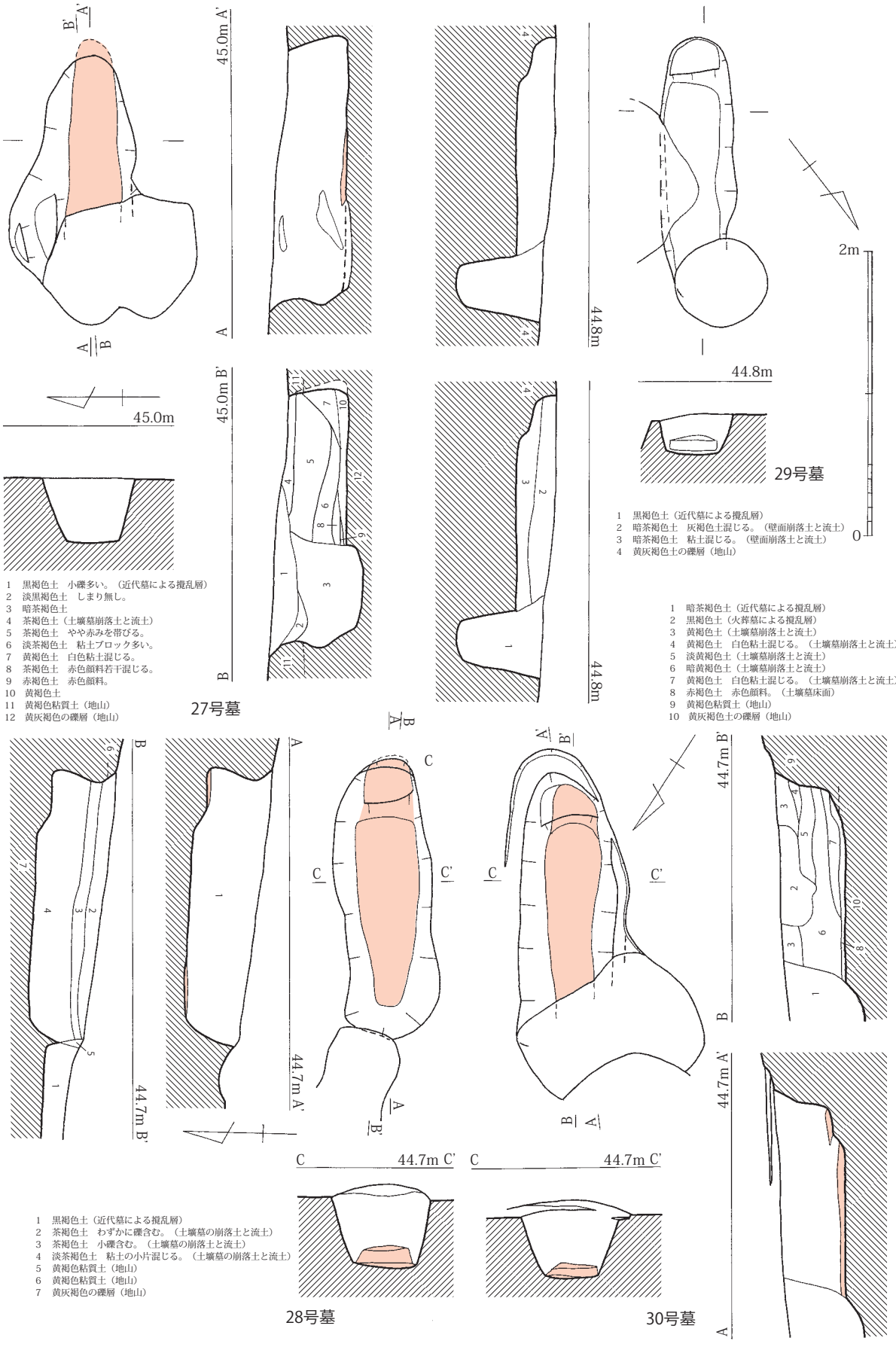
土壙墓群北側で検出した土壙墓である。遺構上部が面的に削平を受けるものの、墓壙上面はおおむね遺存していた。石蓋は遺存していなかったが、目張り粘土を原位置で検出することができた。残存する墓壙上面は長さ 170 ㎝で、深さは 10 ㎝である。

埋葬土壙は長さ 160 ㎝×幅 60 ㎝で、深さは 40 ㎝である。埋葬土壙北側で枕状の削り出しがあるため、埋葬頭位を確認できる。床面全体で赤色顔料を検出した。

35 号土壙墓（図版 30、第 48 図）

土壙墓群北東側で検出した土壙墓である。遺構上部が面的に削平を受けており、墓壙上面は消失していた。埋葬土壙を囲むように目張り粘土を検出したことから、石蓋の使用が想定できる。

埋葬土壙は長さ 150 ㎝×幅 60 ㎝で、深さは 40 ㎝である。枕状の削り出しがなく、埋葬土壙の幅も両端の顕著な違いがないことから、埋葬頭位を断定することはできない。ただし、同一立地で主軸が類似する 27・28 号土壙墓を参照すれば、遺体頭位は西位であったと推定できる。床面全体で赤色顔料を検出した。



第 47 図　27 ～ 30 号墓実測図　(1/40)

36 号土壙墓（第 49 図）

土壙墓群北東端で検出した土壙墓である。遺構上部が面的に削平を受けており、わずかに埋葬土壙床面を検出した。埋葬土壙中央で玄武岩板 1 枚を検出したが、二次的に堆積したものである。もともとの帰属遺構は不明だが、本土壙墓を含む周囲の土壙墓で使用された石蓋の一部と判断できる。

残存する埋葬土壙は長さ 130 ㎝×幅 50 ㎝で、深さは 20 ㎝である。他の土壙墓に比べて長さが著しく短い。枕状の削り出しがなく、埋葬土壙の幅も両端の顕著な違いがないことから、埋葬頭位を断定することはできない。遺構埋土には赤色顔料が含まれていた。

37 号土壙墓（図版 30、第 49 図）

土壙墓群北東側で検出した土壙墓である。遺構上部が面的に削平されており、墓壙上面は消失していた。埋葬土壙はおおむね遺存しているが、南側を中心に近世墓による攪乱を受けていた。

埋葬土壙は長さ 170 ㎝×幅 60 ㎝で、深さは 40 ㎝である。床面北側に枕状の削り出しがあることから、埋葬頭位を確認できる。なお、埋葬土壙北側は近世墓による床面の再利用が認められた。床面全体で赤色顔料を検出した。

38 号土壙墓（図版 30、第 49 図）

土壙墓群北側で検出した土壙墓である。５号土壙墓の一部を破壊して、築かれていた。

墓壙上面と埋葬土壙はほぼ完存している。墓壙上面は長さ 250 ㎝×幅 270 ㎝の平面菱形で、深さは 30 ㎝である。北東端と南西端は 2 段掘り状に掘削されていた。埋葬土壙の周囲は念入りに目張り粘土が置かれており、石蓋の使用が想定できる。石蓋はすべて外されていたものの埋葬土壙の堆積土に乱れはなく、内部は攪乱を受けていない。

埋葬土壙は長さ 180 ㎝×幅 70 ㎝で、深さは 50 ㎝である。枕状の削り出しは確認できないが、床面北西端にのみ赤色顔料が敷かれていた。また、埋葬土壙南東側の壁面は袋状に掘削されていた。以上をふまえると、遺体は北西側に頭を向けて埋葬していたと判断できる。

39 号土壙墓（図版 31、第 50 図）

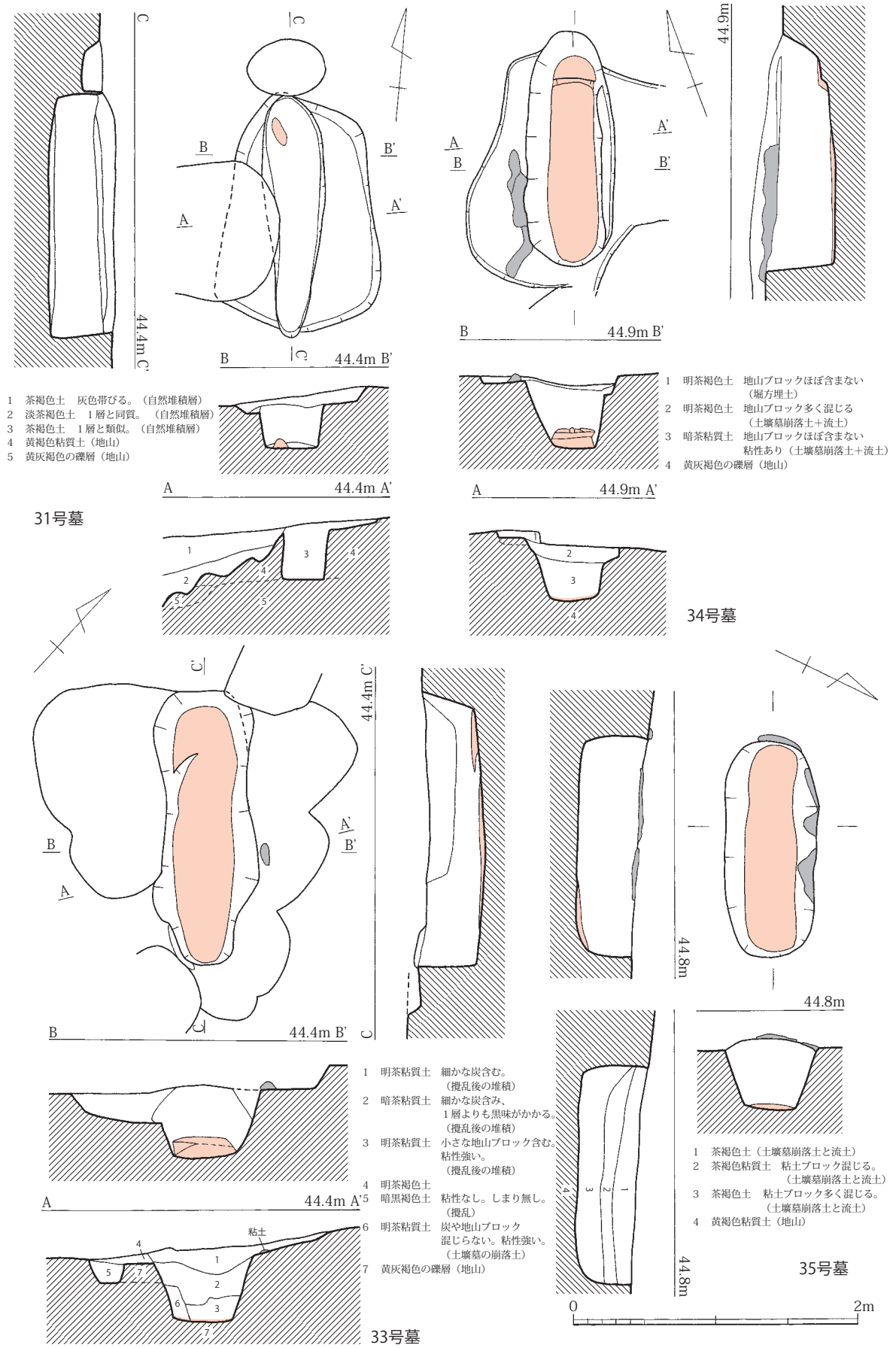
土壙墓群中央北側で検出した土壙墓である。複数の近世墓により、攪乱を受けている。墓壙上面が部分的に遺存しており、墓壙の切り合い関係から 14 号土壙墓に先行することが確認できた。目張り用粘土も原位置で部分的に検出しており、石蓋の使用が想定できる。

残存する埋葬土壙は長さ 100 ㎝×幅 50 ㎝で、深さは 40 ㎝である。枕状の削り出しは確認できない。隣接し、同一主軸で立地を同じくする 38 号土壙墓を参照すると、埋葬頭位は北西位であったと考えられる。この想定は、残存範囲での埋葬土壙の幅とも矛盾しない。

40 号土壙墓（図版 31、第 50 図）

土壙墓群中央西側で検出した土壙墓である。遺構上部は面的に削平されており、墓壙上面は消失している。埋葬土壙も東側を中心に、近世墓による攪乱を受ける。

残存する埋葬土壙は長さ 80 ㎝×幅 50 ㎝で、深さは 40 ㎝である。北西側に枕状の削り出し

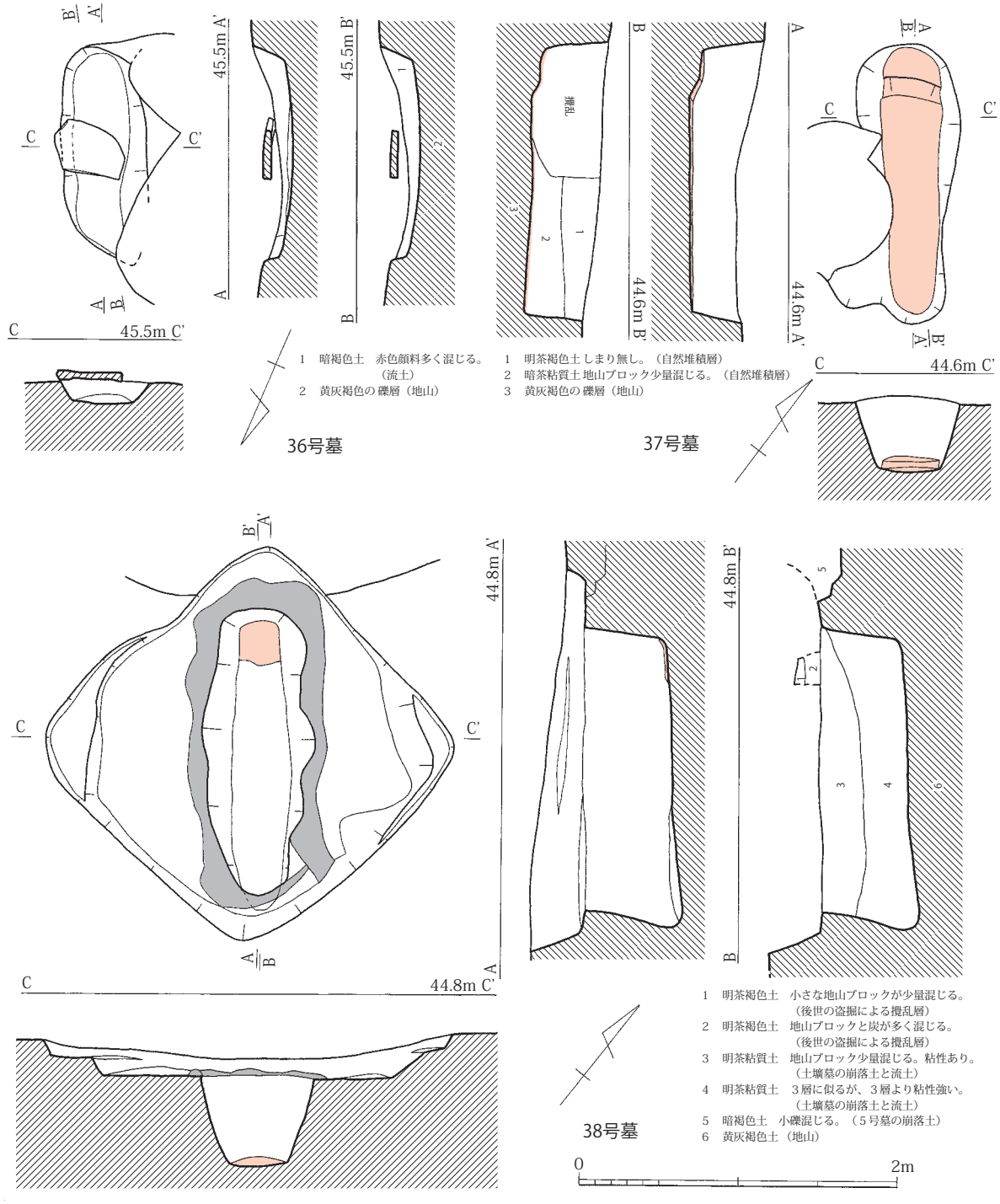


第 48 図　31・33 ～ 35 号墓実測図　(1/40)

が確認できることから、埋葬頭位を識別できる。残存する埋葬土壙の床面では、面的に赤色顔料を検出した。

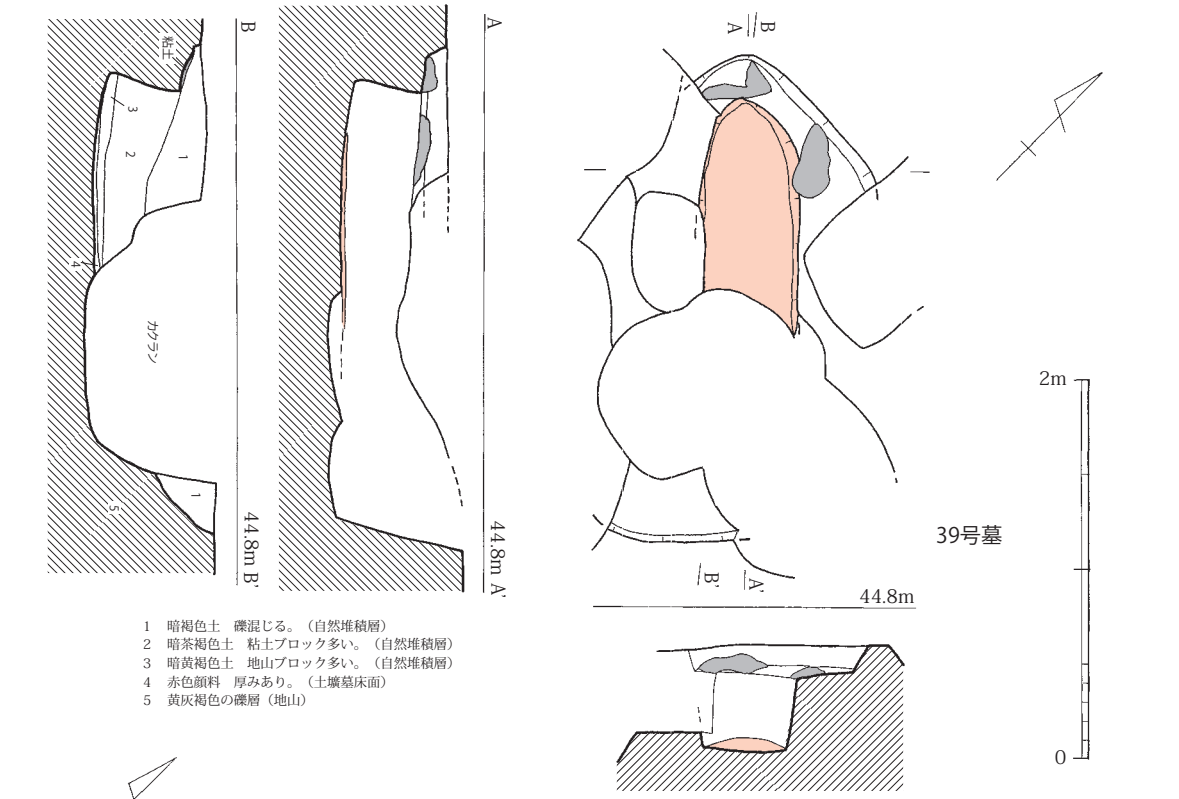
41 号土壙墓（第 50 図）

土壙墓群中央西側で検出した土壙墓である。遺構上部は面的に削平されており、墓壙上面は消失している。埋葬土壙も東側を中心に、近世墓による攪乱を受ける。

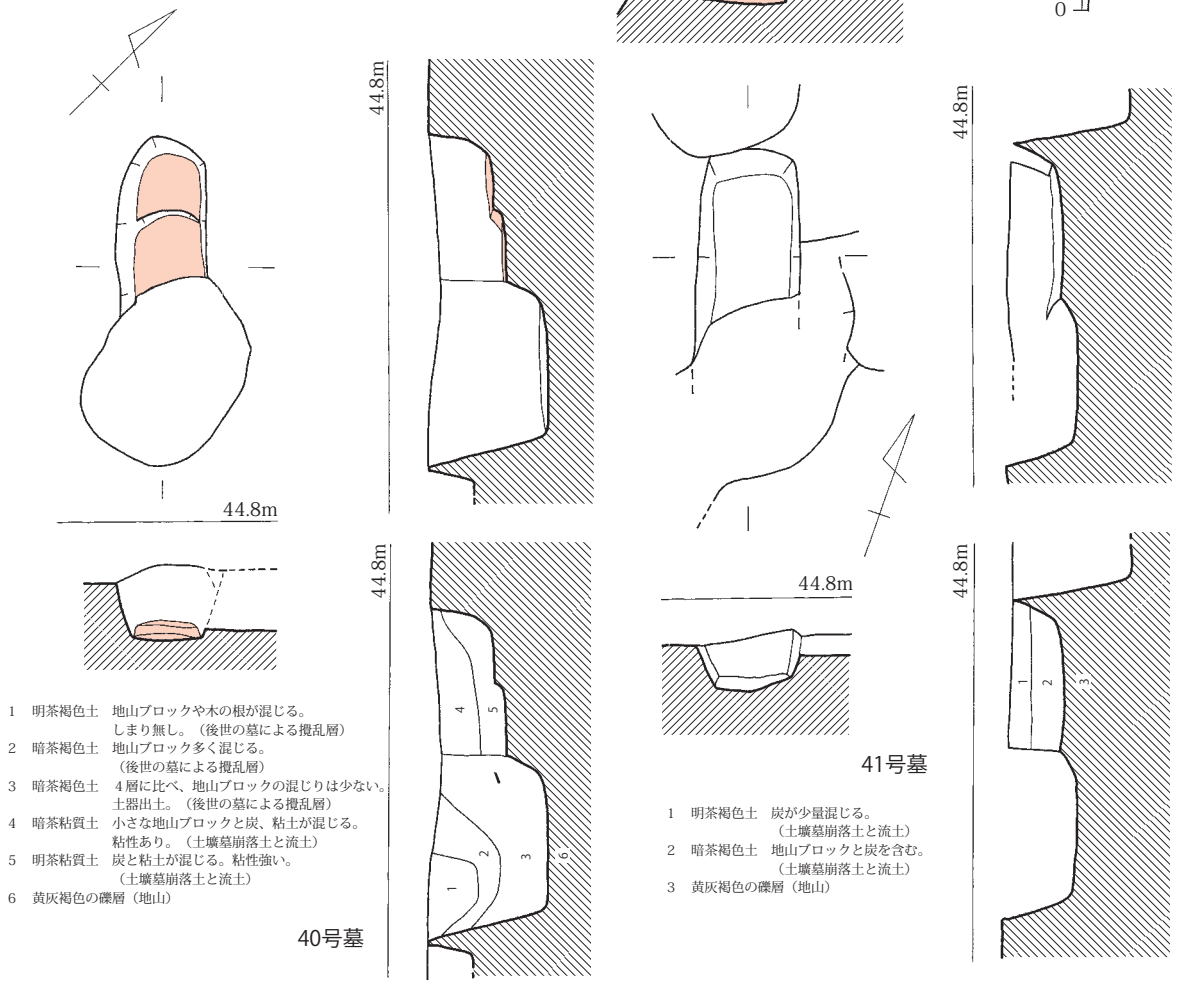


第 49 図　36 ～ 38 号墓実測図　(1/40)

残存する埋葬土壙は長さ 80 ㎝×幅 50 ㎝で、深さは 30 ㎝である。枕状の削り出しや赤色顔料は確認できなかった。隣接し、同一主軸で立地を同じくする 40 号土壙墓を参照すると、埋葬頭位は北西位であったと想定できる。



1　暗褐色土　礫混じる。（自然堆積層）
2　暗茶褐色土　粘土ブロック多い。（自然堆積層）
3　暗黄褐色土　地山ブロック多い。（自然堆積層）
4　赤色顔料　厚みあり。（土壙墓床面）
5　黄灰褐色の礫層（地山）



1　明茶褐色土　地山ブロックや木の根が混じる。
　　しまり無し。（後世の墓による攪乱層）
2　暗茶褐色土　地山ブロック多く混じる。
　　（後世の墓による攪乱層）
3　暗茶褐色土　４層に比べ、地山ブロックの混じりは少ない。
　　土器出土。（後世の墓による攪乱層）
4　暗茶粘質土　小さな地山ブロックと炭、粘土が混じる。
　　粘性あり。（土壙墓崩落土と流土）
5　明茶粘質土　炭と粘土が混じる。粘性強い。
　　（土壙墓崩落土と流土）
6　黄灰褐色の礫層（地山）

1　明茶褐色土　炭が少量混じる。
　　（土壙墓崩落土と流土）
2　暗茶褐色土　地山ブロックと炭を含む。
　　（土壙墓崩落土と流土）
3　黄灰褐色の礫層（地山）

第 50 図　39 ～ 41 号墓実測図　（1/40）

42 号土壙墓（図版 31、第 51 図）

土壙墓群西端で検出した土壙墓である。遺構上部は面的に削平されており、墓壙上面は消失している。埋葬土壙も東側を中心に近世墓による攪乱を受ける。

埋葬土壙は長さ 180 ㎝×幅 50 ㎝で、深さは 40 ㎝である。枕状の削り出しがあり、埋葬頭位を識別できる。床面全体に赤色顔料が敷かれていた。土壙内に溜まった自然堆積層（土層２）では、一部で土器片が重層的に出土した。42 号土壙墓に二次的に堆積した土器片（第 56 図 11・12）である。

43 号土壙墓（図版 31、第 51 図）

土壙墓群のほぼ中央で出土した土壙墓である。遺構上部の残りは良いが、石蓋はすべて外されていた。また、墓壙は部分的近世墓による攪乱を受ける。遺構上面は長さ 250 ㎝×幅 180 ㎝で、平面形は歪な菱形となる。

埋葬土壙は長さ 190 ㎝×幅 70 ㎝で、深さは 40 ㎝である。枕状の削り出しがあり、埋葬頭位を識別できる。床面全体に赤色顔料が敷かれていた。

44 号土壙墓（図版 32、第 51 図）

土壙墓群の中央で検出した土壙墓である。遺構上部が面的に削平され、埋葬土壙も攪乱を受ける。

残存する埋葬土壙は長さ 170 ㎝×幅 60 ㎝で、深さは 50 ㎝である。枕状の削り出しがあり、埋葬頭位を識別できる。床面全体に赤色顔料が敷かれていた。

45 号土壙墓（図版 32、第 52 図）

土壙墓群のほぼ中央で検出した土壙墓である。遺構上部が面的に削平され、埋葬土壙も攪乱を受ける。

残存する埋葬土壙は長さ 170 ㎝×幅 50 ㎝で、深さは 20 ㎝である。枕状の削り出しは確認できなかったが、北側床面がわずかに高い。床面を含め、赤色顔料は未検出である。

46 号土壙墓（図版 32、第 52 図）

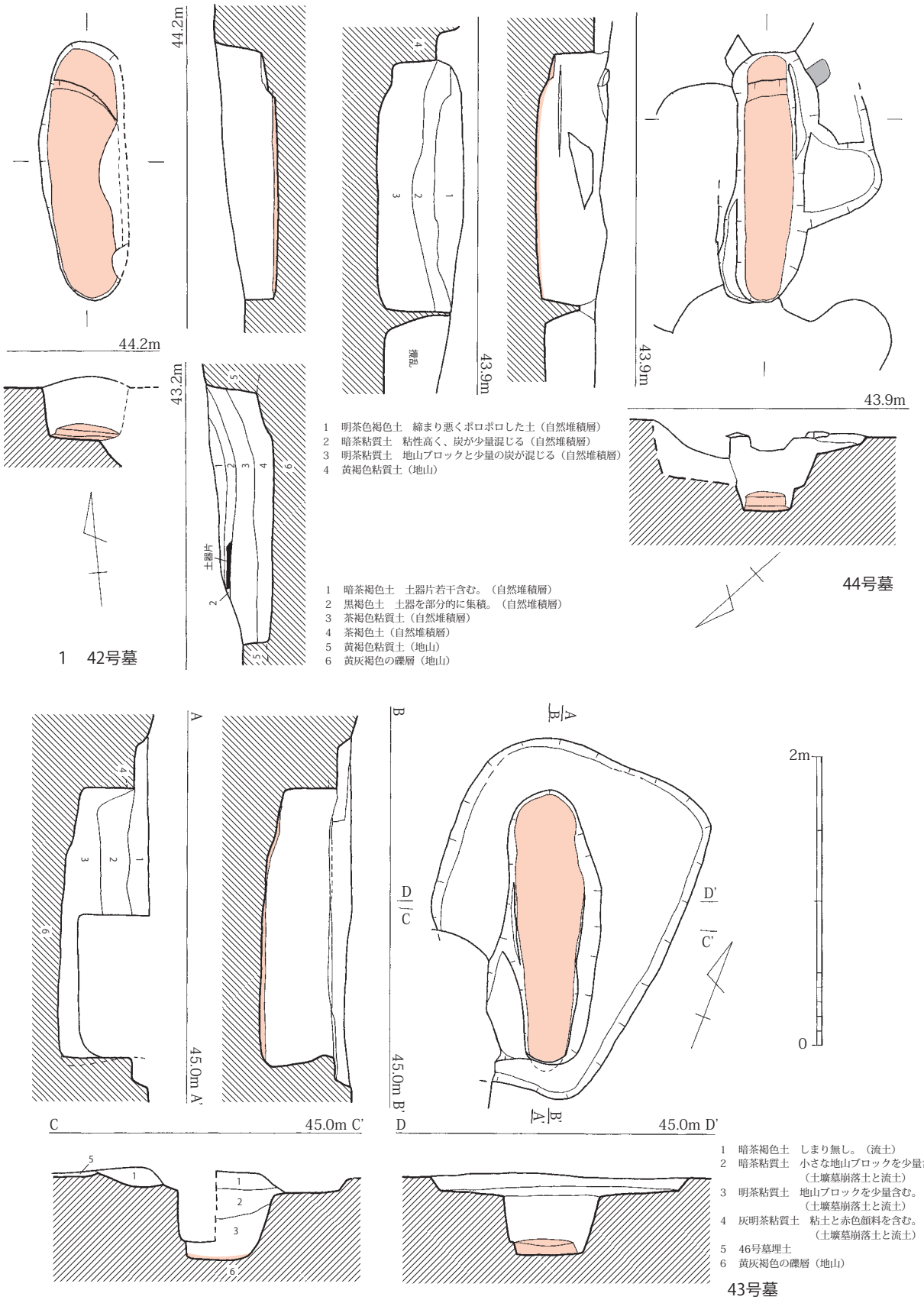
土壙墓群の中央で検出した土壙墓である。埋葬土壙を含め、近世墓による攪乱が著しい。辛うじて確認できた墓壙上面は長さ 200 ㎝×幅 110 ㎝で、平面形は歪な菱形となる。

埋葬土壙は長さ 170 ㎝×幅 50 ㎝で、深さは 50 ㎝である。枕状の削り出しがあり、埋葬頭位が識別できる。床面全体に赤色顔料が敷かれていた。46 号土壙墓は石蓋に被覆された状態で、壁面崩落土を中心とする土層５が堆積する。そして、石蓋が外された後に土層３・４が堆積した。埋葬土壙がほぼ埋没した状態で、さらに土層３・４を部分的に掘削して近代墓（火葬墓）を造営している。

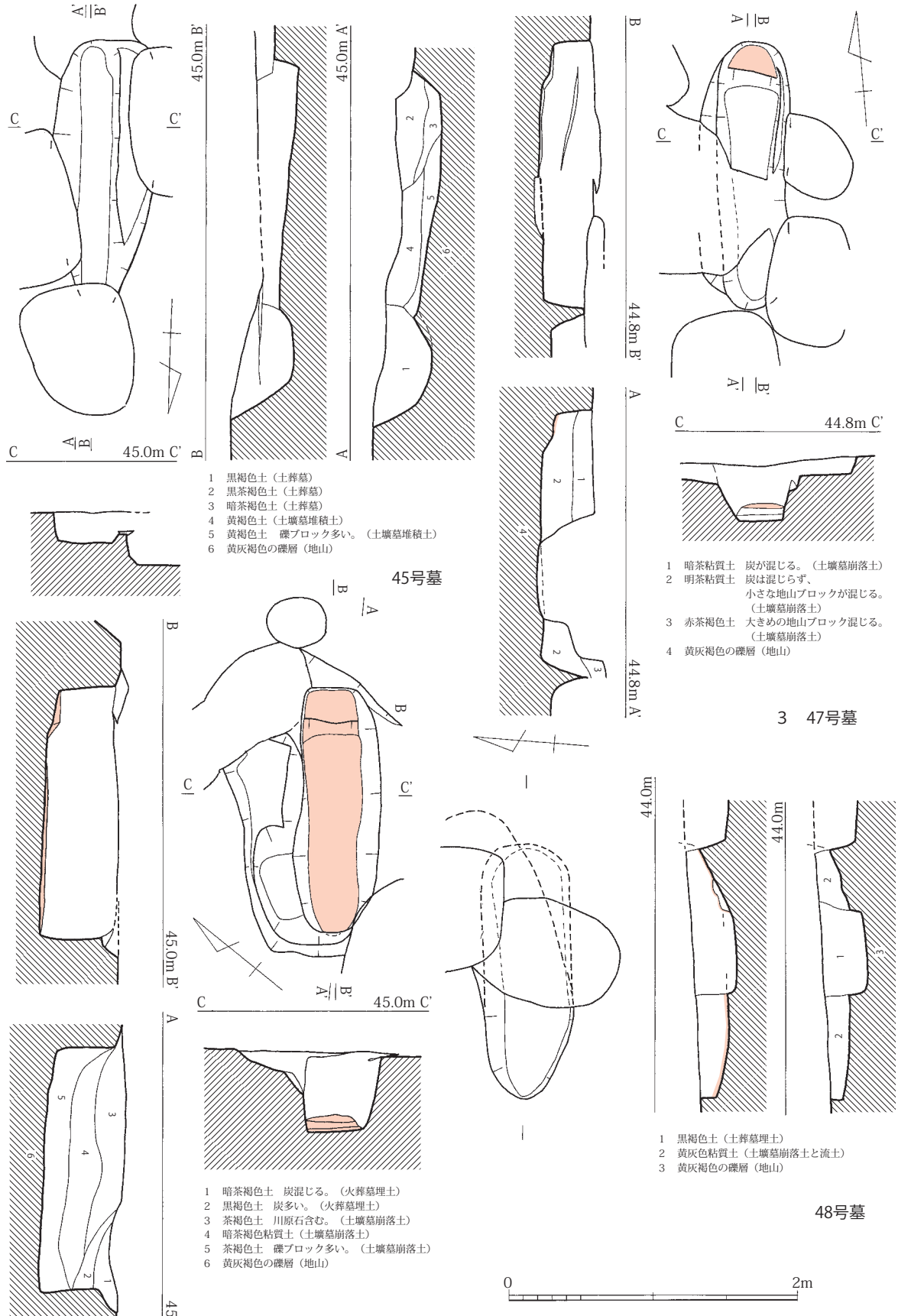
47 号土壙墓（第 52 図）

土壙墓群中央の北側で検出した土壙墓である。埋葬土壙を含め、近世墓による攪乱が著しい。

残存する埋葬土壙は長さ 180 ㎝×幅 60 ㎝で、深さは 40 ㎝である。床面中央に近世墓の攪乱



第 51 図　42 ～ 44 号墓実測図　(1/40)



第 52 図　45 ～ 48 号墓実測図　(1/40)

が及んでいるが、消失した範囲は比較的狭い。その状態で、赤色顔料は枕状の削り出し部のみで検出された。埋土上層で鉄鏃茎部片１点（第 56 図 32）が出土した。

48 号土壙墓（図版 32、第 52 図）

土壙墓群西端で検出した土壙墓である。埋葬土壙を含め、遺構の大部分を消失していた。

残存する埋葬土壙は長さ 170 ㎝×幅 60 ㎝で、深さは 20 ㎝である。部分的に枕状の削り出しが認められ、埋葬頭位を識別できる。

49 号土壙墓（図版 32、第 53 図）

土壙墓が密集する地点から外れた調査区南側で検出した土壙墓である。遺構は大半が面的に消失しており、埋葬土壙の床面のみが部分的に検出された。床面には面的に赤色顔料が敷かれていた。

本遺構の残存状態に加えて、23・24 号土壙墓の削平状況をふまえると、調査区南東側を中心に弥生時代の遺構面から 50 ～ 100 ㎝程度は削平を受けており、49 号土壙墓の周囲にも他の土壙墓が存在した可能性が高い。

（２）溝状遺構

南側区画溝（図版 33、第 53 図）

調査区南端で検出した溝１～３で、ほぼ東西南北軸に沿った状態で検出した。地表面直下で検出しており、検出層位で時期を特定することはできない。

区画溝１は床面の起伏が著しく、雨水の流水により床面が削られる状況が伺えた。上層埋土からは弥生土器の小片が出土している。また、溝２沿いにある 49 号土壙墓の削平状況から見て、本地点は石蓋土壙墓群築造時の地表面（遺構面）から 50 ～ 100 ㎝掘り下げられている。これらの溝については、調査区外を含めた遺跡全体の様相から再評価する必要があるが、石蓋土壙墓群の区画溝の可能性がある。

西側区画溝（図版 33、第 54 図）

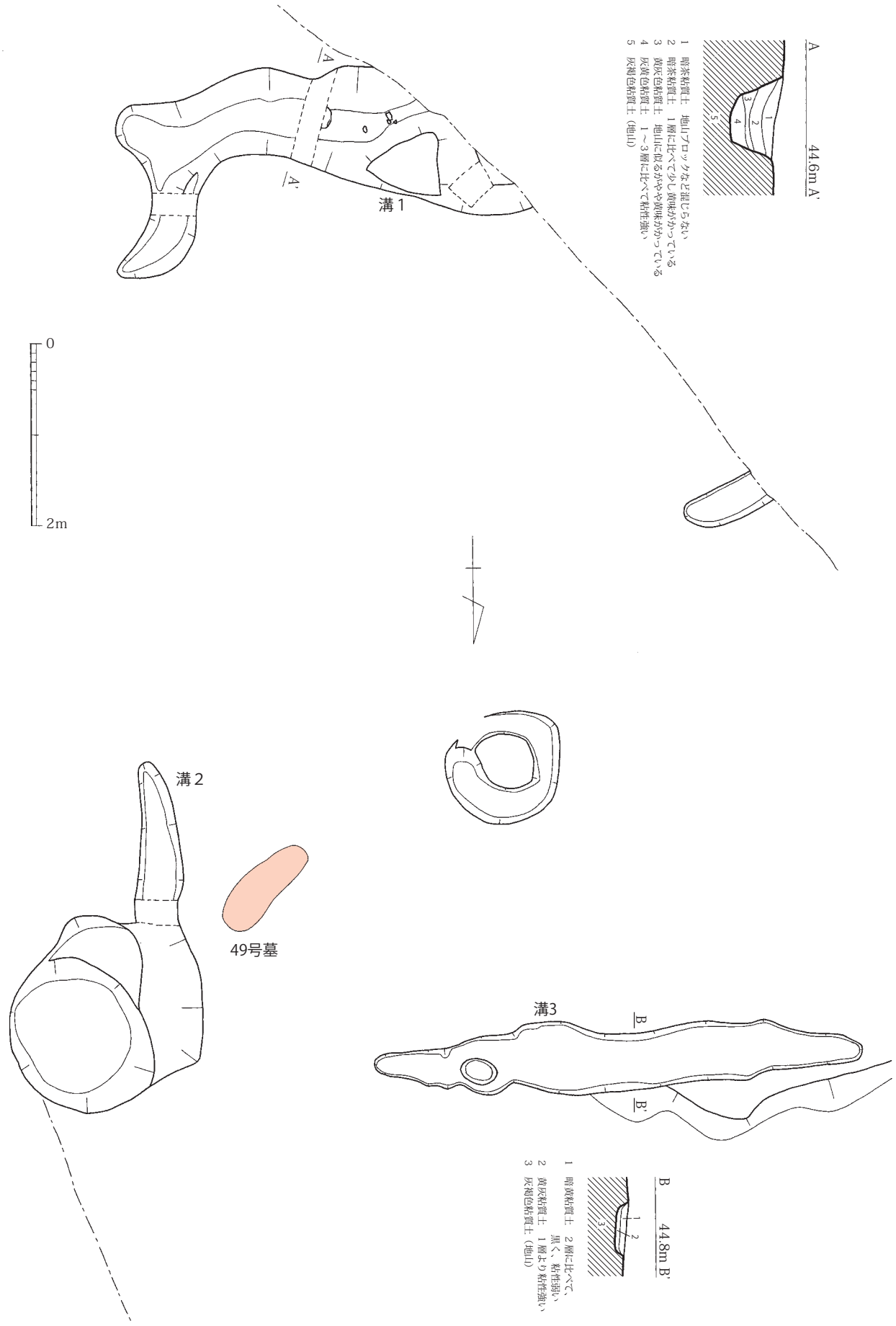
調査区西端で検出した溝４で、地表面直下で検出した。南側区画溝と同様に、検出層位で時期を特定することはできない。

検出範囲では、ほぼ東西南北軸に沿った形状となる。溝４の堆積状況を見ると、土層１・２はしまりが無く、炭化物の堆積が見られた。また、土層１の上面では斜面上方の石蓋土壙墓群に被覆された石蓋の破片が堆積していた。これらの堆積状況から見て、近年まで本溝の凹みが地表面に露出していたことが伺える。最下層の土層３は粘質土を多く含み、一定期間は雨水が流水する状況にあったと見られる。床面直上からは、完形の坏１点（第 56 図１）が検出された。

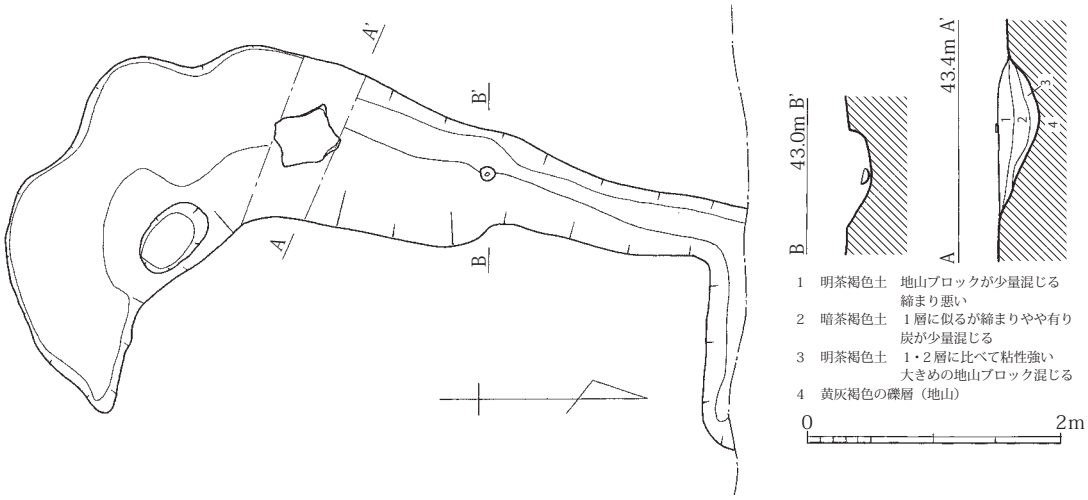
（３）その他の遺構

須恵器供献遺構（図版 34、第 55 図）

調査区北端で確認した須恵器供献遺構で、埋土上面に計７点の須恵器（第 56 図 16 ～ 22）が伏せた状態で置かれていた。基本的には１枚ずつ伏せて置かれていたが、２枚重ねのものが



第53図　区画溝実測図1　(1/60)



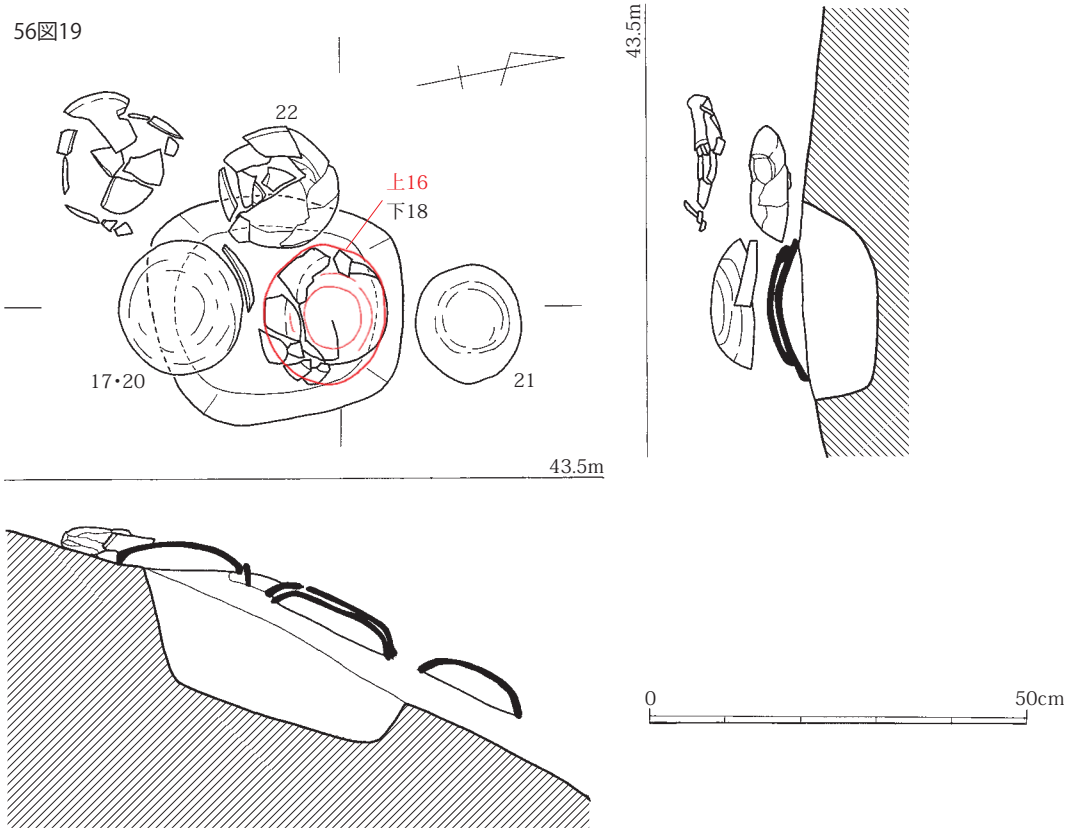
第 54 図　区画溝実測図 2　(1/60)

２組確認できた。古代以降に生じたと見られる崩落壁面（堆積土に黒色土器片（第 56 図 24）含む）に隣接しており、過去に崖下に崩落した供献須恵器が存在した可能性がある。須恵器供献遺構は緩傾斜から急傾斜に変わる傾斜変換点上に位置することもあり、土砂の自然堆積は希薄で、供献須恵器は落ち葉を払った段階で検出に至った。

供献須恵器の出土状況を記録した後に下層の遺構検出を行ったところ、長さ 60 ㎝×幅 60 ㎝の平面略方形の土坑を検出した。床面は傾斜し、深さは約 20 ㎝である。埋土はすべて土篩にかけて微細な遺物の検出にも努めたが、遺物は確認できなかった。

集石遺構（第 34 図）

調査区南側で確認された略円形の攪乱土坑床面で検出された集石遺構である。近世墓造営時に外した石蓋土壙墓の石蓋を集石させたものと見られる。



第 55 図　須恵器出土状況実測図（1/10）

３）遺物

（１）土器（図版 35・36、第 56 図）

坏（１） 直径 10.2 ㎝の丸底の坏で、高さは３㎝である。口縁部がわずかに破損しているが、ほぼ完存する。内外面は全体的に摩耗しており、とくに外面の器面は剥落が著しい。残存する器面を見ると、底部の大部分は黒斑に覆われており、正立状態での焼成が想定できる。西側区画溝（溝４）の床面直上から出土した。

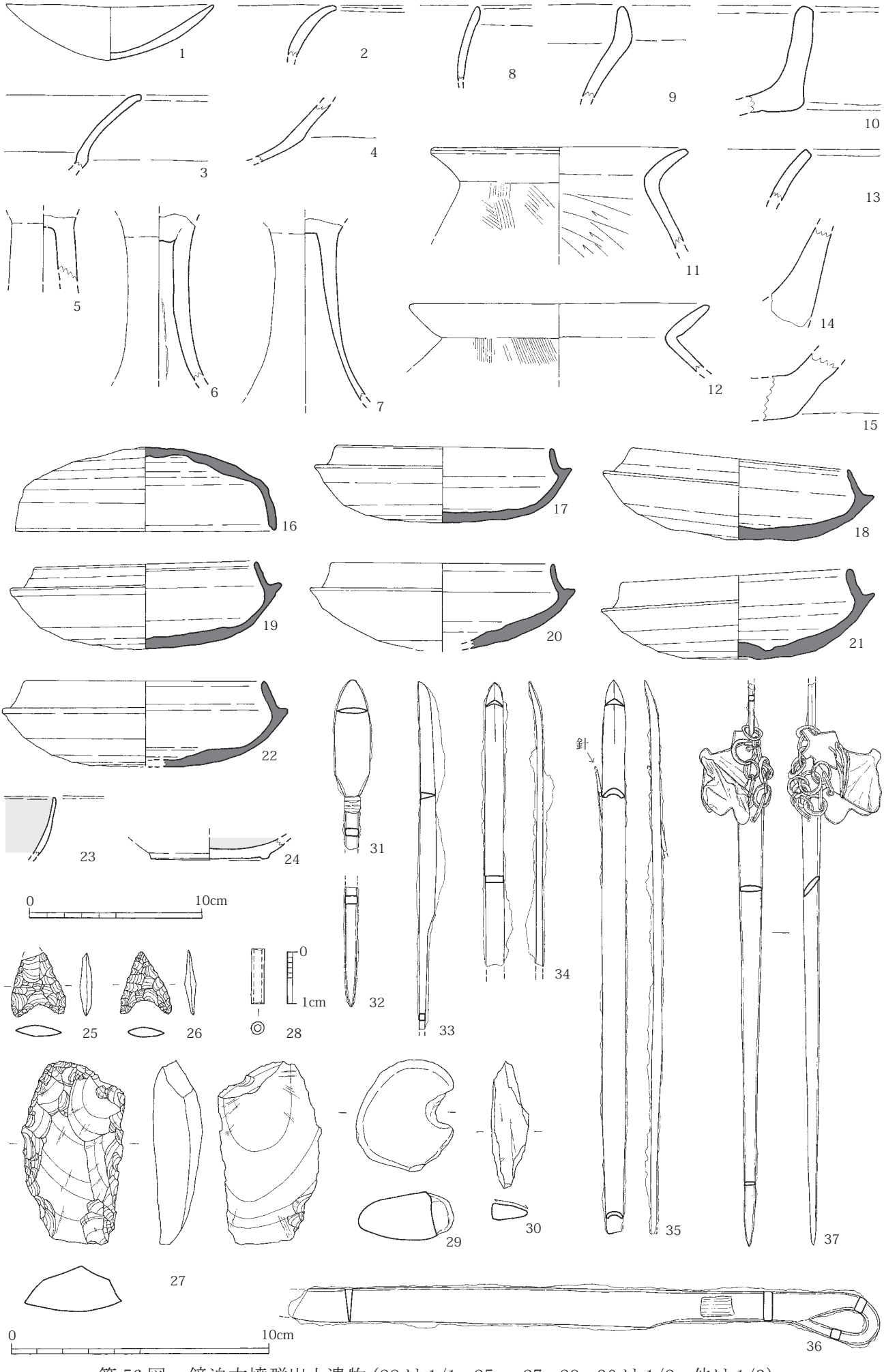
高坏（２～７） ２・３は高坏口縁部の破片である。口縁部先端に向けて外反する形状で、内外面ともにナデ調整である。２は 33 号土壙墓を切り込む近世土壙墓埋土から出土した。３は 22 号土壙墓を切り込む近代火葬墓埋土から出土した。４は高坏坏部の破片である。口縁部が立ち上る屈曲点での粘土接合が確認できる。直径 0.3 ㎝前後の砂粒を多く含み、胎土は粗い。調査区東側の表土から出土した。５～７は高坏脚部の破片である。いずれも坏部との接合面で剥離し、脚部下半を欠損する。５は外面がタテ方向のナデ調整で、ケズリに近い仕上がりとなる。内面は棒状工具によるケズリ調整。６も５と同様の調整であるが、焼成前に脚部を握ったせいか、やや扁平に潰れている。７は５・６に比べて器壁が薄く、精巧なつくりである。内外面は摩耗により、器面が薄く剥離している。脚部下半に黒斑が見られ、正立状態での焼成を推測させる。５・６は表土から出土した。７は１号石蓋土壙墓の蓋石を検出する際に出土した。

壺（８～ 10） ８は長頸壺の口縁部先端で、先端がわずかに肥厚する。９・10 は複合口縁壺の口縁部先端である。９は内湾気味に屈曲するが、形骸化が著しい。10 は器壁の厚みが１㎝以上もある大型品である。外面は摩滅しているが、内面には板状工具を用いたヨコ方向のナデ調整が確認できる。８は 33 号土壙墓を切り込む近世土壙墓埋土から出土した。９は調査区北端の供献須恵器群斜面下の崩落面埋土から出土した。10 は 39 号土壙墓を切り込む近世土壙墓から出土した。

甕（11 ～ 15） 11 ～ 13 は甕口縁部の破片である。11 はおおよそ全周 4 分の 1 が残存し、口径 15.0 ㎝に復元できる。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整である。胴部は外面がナナメ方向のハケ調整で､内面が板状工具によるケズリ調整である。12 もおおよそ全周４分の１が残存し、口径 17.4 ㎝に復元できる。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整である。胴部は外面がナナメ方向のハケ調整で、内面が板状工具によるケズリ調整である。13 は内外面ともにナデ調整である。11・12 は 42 号土壙墓埋土上層からまとまって出土しており、他に接合できなかった小片が複数ある。13 は表土から出土した。

14・15 は胴部下端から底部にかけての破片で、外面は摩耗が進む。内面はともにナデ調整で、胎土の粒子は細かい。14 は 16 号土壙墓を切り込む近代土壙墓埋土から出土し、15 は 40 号土壙墓を切り込む近代土壙墓埋土から出土した。

須恵器坏(16 ～ 22) 16 は坏蓋で､17 ～ 22 は坏身である。16 はわずかに破損が見られるものの、ほぼ完存する。口径 15.2 ㎝で、高さは 4.9 ㎝。口縁部先端に形骸化した段が認められる。外面は回転ナデの後に、頂部を中心に丁寧な回転ヘラケズリを施す。内面は回転ナデ調整で、頂部を中心に回転ナデが強い。内面頂部のみ回転ナデ調整後にヨコナデ調整を施し、指頭痕が数か所で確認できる。成形後の乾燥・窯詰め段階で、外面方向から歪ませてしまっており、内外面に補修のためのナデ調整や指頭痕が認められる。17 は坏身の完形品である。最大径 15.0 ㎝で、高さは 4.5 ㎝である。外面は回転ナデの後に、底部を中心に丁寧な回転ヘラケズリを施す。内



第 56 図　鏡迫古墳群出土遺物（28 は 1/1、25 ～ 27・29・30 は 1/2、他は 1/3）

面は回転ナデ調整で、底部には同心円状タタキ当て具の痕跡が確認できる。これらと重複して、部分的にナデ調整や指頭痕が認められる。18 は口縁部の一部が U 字形に破損した坏身である。破損面の風化は古い。最大径 15.9 ㎝で、高さは 5.2 ㎝である。外面は回転ナデの後に、底部を中心に丁寧な回転ヘラケズリを施す。内面は回転ナデ調整で、底部にはナデ調整や指頭痕が認められる。19 は底部がわずかに欠損するが、ほぼ完形品である。最大径 15.9 ㎝で、高さは 5.1 ㎝。外面は回転ナデの後に、底部を中心に回転ヘラケズリを施す。内面は回転ナデ調整である。20 は半分程度が残る坏身である。最大径 15.4 ㎝で、高さは 5.0 ㎝に復元できる。外面は回転ナデの後に回転ヘラケズりを施すが、範囲は狭い。内面は回転ナデ調整である。22 と同様に二次的に小片に割れている。21 は完形の坏身である。最大径 15.9 ㎝で、高さは 5.3 ㎝である。外面は回転ナデの後に、底部を中心に回転ヘラケズリを施す。内面は回転ナデ調整で、底部に強く指頭痕が残る。16 と同様に成形後の歪みが認められるが、とくに補修はしていない。22 はおおよそ半分が残る坏身である。最大径 16.6 ㎝で、高さは 5.0 ㎝に復元できる。外面は回転ナデの後に、底部を中心に回転ヘラケズリを施す。内面は回転ナデ調整である。供献後に二次的に踏まれたためか、微細な小片に分かれていた。16 ～ 22 はいずれも調査区北端で検出された供献須恵器である。

黒色土器埦（23・24） 23 は口縁部端の破片で、内面が黒色に燻されている。24 は底部の破片で、低い高台が貼り付けられている。内面のみが黒色に燻されている。23 は西側区画溝（溝４）の埋土上層から出土した。24 は調査区北端の供献須恵器群斜面下の崩落面埋土から出土した。

（２）石製品（図版 36、第 56 図）

石鏃（25・26） 25・26 は打製の無茎石鏃で、いずれも姫島産黒曜石が使用されている。調査区からは、他にも姫島産黒曜石の小片が３点出土している。25 は 38 号土壙墓を切り込む近代土壙墓埋土、26 は 13 号土壙墓を切り込む近代土壙墓から出土した。

スクレイパー（27） 27 は側面を細かく打って、刃部を意識的に成形している。石材はチャートを用いる。調査区南側の表土から出土した。

管玉（28） 長さ 1 ㎝で、直径 0.3 ㎝にも満たない微細な管玉である。石材はグリーンタフを用いる。９号土壙墓の床面近くの埋土から出土した。

不明石製品（29・30） 29 は、直径 4 ㎝程度の凝灰岩礫端部を円柱状に刳り貫いたものである。21 号土壙墓埋土から出土した。30 は片岩製石製品の小片である。表面を滑らかに研磨しており、石斧の破片であろうか。30 号土壙墓を切り込む近代土壙墓埋土から出土した。

（３）金属製品（図版 36、第 56 図）

鉄鏃（31 ～ 33） 31 は有茎式柳葉鏃で、茎部を欠損する。茎部には口巻きの断片が認められる。32 は有茎式鉄鏃の茎部の破片と見られる。33 は有茎式片刃鏃で、茎部端を欠損する。一般的な刀子に比べて刃部の幅が狭く、加えて細く長い茎部の存在を重視して鉄鏃と判断した。31 は 11 号土壙墓の埋土上層から出土しており、もともとは石蓋の隙間に副葬されていたものと判断できる。32 は 47 号土壙墓の埋土上層から出土した。33 は 14 号土壙墓から出土した。

鉈・針（34・35） 34・35 は鉄製の鉈である。いずれも刃部が反り、断面三角形の形状となる。35 は極めて遺存状態が良く、錆による変色を除けば、ほぼ当時の形状を遺していた。35 とほ

ぼ鉈と軸を揃えた状態で、鉄針１点が錆着していた。鉄針の残存全長は 3.2 ㎝で、直径は 0.1 ㎝である。34 は 21 号土壙墓を切り込んで造営された近代火葬墓埋土下層（21 号土壙墓床面直上）から出土した。35 は３号土壙墓の埋葬土壙内の埋土上層から出土した。

刀子（36） 36 は素環刀刀子で、刃部先端を欠損する。残存長は 23.0 ㎝。茎部にわずかに木製柄の痕跡が見られる。９号土壙墓の床面から出土した。

簪（37） 銅製の簪で 48 号土壙墓東端に接する近世土葬墓から出土した。遺骨がまったく遺存していなかったため、文化財として回収した。木片や繊維が錆着している。

３．考察

１）鏡迫古墳群における石蓋土壙墓の築造・埋葬過程

工程Ⅰ：墓壙上面の掘削　埋葬土壙が収まる広さで、深さ 10 ～ 20 ㎝程度の浅い墓壙を掘削する。鏡迫古墳群の場合、丘陵頂部に薄く黄褐色粘質土が堆積しており、標高が高い場所にある石蓋土壙墓を中心に黄褐色粘質土上面から墓壙を掘り込みがなされる。そして、黄褐色粘質土の下層にある黄灰褐色土（安山岩礫包含層）の上面で、墓壙上面の掘削を止める事例が多い。

墓壙上面の平面形態は明確に定まってはいないが、略菱形・楕円形・略方形・方形を基調とした４種類に分類できる。いずれの平面形態でも石蓋土壙墓の構造は類似するため、墓壙上面の平面形態は、石蓋土壙墓の本質的構造とは無関係の属性と見てよいだろう。また、掘削土は石蓋被覆土（低墳丘）に利用されたと見られる。

工程Ⅱ：埋葬土壙の掘削　墓壙中央に遺体を納める埋葬土壙を掘削する。上述したように、安山岩礫を多量に含む黄灰褐色土を掘り進めて、埋葬土壙がつくられる。この黄灰褐色土は、花崗岩風化土等に比べると掘りにくくはあるが、安山岩礫自体は極めて軟質であり、硬質木材の土掘具でも掘削は可能である。

埋葬土壙の掘り方は、大別して２種類が確認できた。一つは、埋葬土壙の横幅を広めに掘削し、掘削途中で横幅を狭めて掘削するタイプで、いわゆる「二段掘り」の埋葬土壙である。もう一つは、掘削幅を途中で変えずにそのまま掘り進めるタイプで、いわゆる「素掘り」の埋葬土壙である。そして、両タイプに共通する掘削方法に、「抉り状掘削」がある。これは、埋葬土壙の長軸端で多く見られ、床面近くのみを局所的に抉り込むように掘り込む状況が確認できた。また、鏡迫古墳群の石蓋土壙墓では、埋葬土壙床面に「枕」を地山削り出しで製作していた。

工程Ⅲ：遺体の埋葬　掘削した埋葬土壙に遺体を埋葬する。鏡迫古墳群では遺体がまったく遺存していなかったため、本工程に関する情報は大きく欠落するが、抽出できる情報を以下に記す。

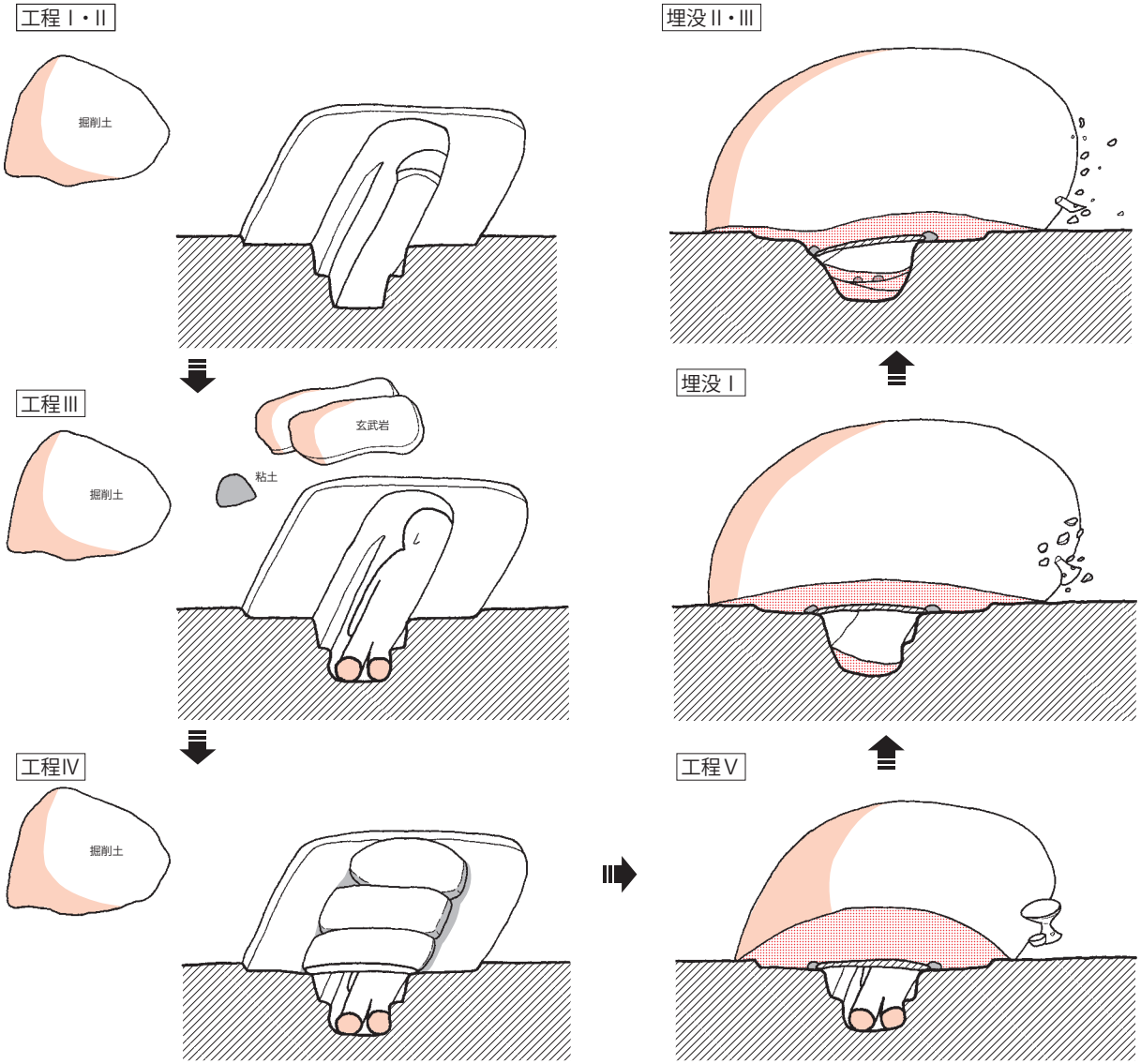
床面に枕状の削り出しがあることから、遺体は仰臥伸展葬で埋葬されたと判断する。埋葬土壙床面の平面形態は、遺体頭部から上腕部にかけて横幅を広げ、脚先にかけて横幅を減じており、まさしく「遺体の平面形態」と相似形の形となっている。加えて、36 号土壙墓のような長軸 1.2 ｍの小型土壙墓も見られるため、遺体の体格にあわせて埋葬土壙が掘削されたと考えられる。したがって、工程Ⅱでふれた「抉り状掘削」は、遺体埋葬時の微調整で実施されたことも想定できる。

このように埋葬土壙は遺体と強い相関関係にあると判断でき、両者の大きさや形状は近似していたと考えられる。しかし、近似した大きさであるが故に、実際の埋葬に際しては、遺体を床面に降ろす方法が問題となる。ここで注目できるのが、工程Ⅱで見られた「二段掘り」であ

る。二段掘りの結果、埋葬土壙床面（遺体幅）よりも埋葬土壙上面（埋葬作業幅）が幅広となる。つまり、二段掘りで確保した空間に手を差し込みながら遺体を降ろすことで、より丁寧に遺体埋葬を行えたのではないだろうか。

また、鏡迫古墳群の石蓋土壙墓では、遺体埋葬に先立って、床面に赤色顔料を敷いている。赤色顔料の使用量には個体差が認められ、床面全体に５㎝程度の厚みで敷く事例もあれば、枕のみに薄く赤色顔料を事例もある。加えて、31 号土壙墓では、遺体頭部付近の床面からやや浮いた状態で、赤色顔料が局所的に堆積していた。遺体を埋葬した後に、遺体の上に撒いた赤色顔料もあるのだろう。

副葬品には鉄製武器・工具と管玉が確認できた。このうち、遺体が装着していたと見られるのが、９号土壙墓で出土したグリーンタフ製の管玉である。また、鉄製素環刀刀子は、枕状の削り出し上面から、やや浮いた状態で検出された。その出土状況から見て、もともとは遺体胸部に置かれていたものと考えられる。以上が埋葬土壙内に副葬されたもの（棺内副葬に相当）で、他の鉄製武器・工具は石蓋上面や墓壙上面に供献されたもの（棺外供献に相当）となる。



第 57 図　石蓋土壙墓の築造・埋没過程

工程Ⅳ：石蓋の架構　遺体を埋葬土壙に寝かせた後、石蓋を架構する。石蓋の石材はほぼすべてが玄武岩製で、本丘陵では産出しない。石蓋土壙墓の造営に際し、遠方より運んでいることは確実視できるが、その産地は不明である。また、石蓋に使用した玄武岩は、層状に打ち割って使用しており、一部の蓋石には端部を複数回の打撃により調整加工した痕跡が認められた。本丘陵を構成する安山岩・花崗岩礫は、石蓋の隙間を埋める程度の補助的利用が認められる。

石蓋を架構するにあたり、埋葬土壙上面に青灰色の粘土を配置する。石蓋の隙間を埋めるとともに、石蓋の固定にも機能する。石蓋上面の隙間にも粘土を詰める事例が複数みられたため、埋葬空間の密封を意図したのは間違いないだろう。また、石蓋の下面（埋葬土壙側・遺体側）は、全体に赤色顔料が塗られる。石蓋同士が重なる範囲にも、赤色原料が塗られており、架構作業前に塗布されたことが確実視できる。赤色顔料の塗布は原位置を留める石蓋だけでなく、攪乱により地表面に散乱していた石蓋にも確認できたため、造営集団全体で共有した儀礼行為であったと判断できる。また、造営集団全体で共有した行為として、石蓋の架構順番がある。石蓋はいずれも一部を重複させるように積んでおり（鎧積み）、その重複関係から石蓋の架構順番を特定できる。残存する石蓋土壙墓を対象に架構順番を検証したところ、すべてで遺体頭部側から石蓋を架構していた。石蓋の架構順番は、石蓋土壙墓の構造とは無関係な属性であるため、この行為にも造成集団が共有した葬送儀礼が反映していると結論できる。

石蓋の架構後には、鉄製工具の供献行為が見られる。14 号土壙墓では、石蓋周囲の目張り粘土に埋まるように鉄鏃（第 56 図 32）が置かれていた。また、３・11 号土壙墓では、埋葬土壙内の堆積土上層から、鉋・鉄針（第 56 図 35）が出土した。石蓋が二次的に移動した際に埋

第 58 図　石蓋土壙墓の支群構成（1/320）

葬土壙内に流れ込んだものと判断でき、もともとは石蓋上面や石蓋同士の隙間に置かれていた供献品であろう。

工程Ⅴ：低墳丘の築造　鏡迫古墳群では調査地の主要部分が面的に削平を受けていたため、低墳丘と見られる盛土は、石蓋上面の被覆土を部分的にしか確認できなかった。石蓋の目張りに使用した粘土は乾燥に弱く、露出状態で放置するとブロック状に崩れる。この条件下で、石蓋の目張りが遺存している点をふまえると、少なくとも石蓋全体を被覆するように盛土がなされていたと判断できる。また、石蓋土壙墓が高密度で分布する状況下で、埋葬土壙同士に切り合い関係が認められないことも、低墳丘の存在を肯定する。ただし、墓壙上面については多くの石蓋土壙墓で重複する事例が認められる。したがって、低墳丘の平面規模は石蓋よりも広い範囲で、墓壙上面よりも狭い範囲が想定できる。

上記の検討では、遺体と埋葬土壙の形態・規模が相関関係にあるとの結論に至った。この結論は、石蓋土壙墓の築造が被葬者の死亡を経て開始されたことと同義である。戦争・事故等による複数人の同時死亡を除外すれば、基本的に被葬者各人の死亡をもって累代的に石蓋土壙墓群が形成されたと判断できる。

2）石蓋土壙墓の埋没過程

鏡迫古墳群で検出された石蓋土壙墓は、いずれも埋葬土壙内に土砂が流入して埋没状態にあった。注目すべきは、近世以降の「上唐原墓地」造営により石蓋が破損・除去された事例のみならず、すべての石蓋が原位置を留める事例も、例外なく土砂の堆積・流入が見られた点である。以下では、石蓋が完存した石蓋土壙墓の調査所見を中心に、遺構の埋没過程を整理することで、本遺跡の特性を抽出する。

埋没Ⅰ　床面に敷かれた赤色顔料の直上には、安山岩礫片を含む黄灰褐色土が混じる茶褐色土が、しまりの無い状態で10～20㎝堆積していた。安山岩礫片を含むため、この堆積は基盤層（地山）に由来すると判断できる。また、この黄灰褐色土は均一に混ざらず、いずれもブロック状に堆積していた。加えて、黄灰褐色土の堆積は、埋葬土壙を「二段掘り」する土壙墓で目立った。これらの所見を統合すると、赤色顔料直上に堆積した土砂は、埋葬土壙壁面の崩落土と識別できる。鏡迫古墳群では、埋葬土壙の二段掘りが複数の土壙墓で確認できたが、その痕跡は断片的にしか残されていなかった。つまり、壁面を二段掘りにした分、壁面の表面積が増え、壁面の風化崩落の危険性がより高まったと考えられる。

埋没Ⅱ　安山岩小礫を混じる茶褐色土の上層には、安山岩小礫に加えて、青灰色粘土片を多く含む砂質性の茶褐色土が堆積していた。青灰色粘土は丘陵上部の基盤層には含まれず、石蓋の目張り用に他所（谷底等）から持ち込んだ土砂となる。このため、この青灰色粘土片は石蓋の目張り粘土が崩落したものと断定できる。また、3号土壙墓で顕著だが、石蓋自体が沈降する事例も複数確認できた。石蓋目張り粘土の剥落だけでなく、土圧・踏圧や自然風化により、埋葬土壙上部についても壁面崩落が生じていると考えられ、石蓋との接触箇所（埋葬土壙の「肩」）が構造的に弱い箇所となる。加えて、抉り状掘削の存在も構造的な脆さを助長している。

埋没Ⅲ　上記の堆積土砂と石蓋裏面の間には、狭い空間が残される。この空間には蛙をはじめとした小動物が数多く出入りしており、とくに「越冬地」として利用されている状況にあった。石蓋の隙間から内部に侵入しており、小動物とは言え、長期間の累積が砂粒流入の要因の一つ

表２　土壙墓一覧表

画期	支群	土壙墓	墓壙平面				埋葬土壙		枕	抉り	頭位から	赤色
	頭位・立地	番号	略菱形	楕円	略方形	方形	二段掘り	素掘り		掘削	蓋石架構	顔料
画期１ 弥生終末 （古段階）	Ⅰ群 東位・頂部	9号	○				○		○			○
		17号	○				△		○		△	○
		24号										○
		46号	○				△		○			○
画期２ 弥生終末 （新段階）	Ⅱ群 西位･北西緩斜面	5号	○				△		○		△	○
		14号	○					△		○		○
	Ⅲ－１群 北西位・頂部	7号	○					○	×		△	○
		8号	○				○		○		△	○
		13号	○				○		○			△
		15号	○				△		○		△	○
		19号	○					○	○	○	△	○
		20号						○	○			×
		34号						○	○			○
		40号						○	○			○
		43号	○				○		○	○		○
		45号										×
		47号					○		○			△
	Ⅲ－２群 北西位･北西緩斜面	21号		○			○		○		○	○
		33号					△		×			○
		38号	○					△	△	○		△
		39号	○					△		○		○
画期３ 古墳早期	Ⅳ群 南位・北東斜面	6号		○			○		○	○	○	○
		10号	○				△		○		○	○
		12号		○			△		○		○	○
		36号							×			○
	Ⅴ群 西位・東斜面	2号		○				○	○		○	○
		3号		○			○		○		○	○
		11号		○			○		○	△	○	○
		23号							○			○
		27号		△				○		○		○
		28号		△				○	○	○		○
		29号							○			×
		35号						○	×			○
		37号						△	○			○
		49号										○
	Ⅵ群 南東位・西斜面	30号		○				△	○			○
		41号										×
		44号	△				○		○			○
	Ⅶ群 東位・西斜面	18号	○				○		○		○	○
		22号			△			○				○
		48号							○			×
	Ⅷ群 北位・西裾	16号		△				○			△	○
		42号						○	○			○
画期４ 古墳前期	Ⅸ群 東位・南斜面	1号			○		○		○		○	○
		25号				○		○	×			×
		26号		○				△	×	○		○
	Ⅹ群 北位・南斜面	31号			○			○	×	○		△
	Ⅺ群 南西位・南斜面	4号				○		○	×	○	△	○

となったと判断できる。

以上が鏡迫古墳群の石蓋土壙墓の埋没過程であり、その特性として、遺構壁面の脆弱性が上げられる。この脆弱性は、基盤層となる安山岩礫を包含する黄灰褐色土の性質に起因する。本遺跡の土壙墓は例外なく黄灰褐色土を掘削して築造されているため、後世の攪乱の有無に関わらず、すべての埋葬土壙に厚く土砂が堆積していた。人骨の遺存がまったく確認できなかったのも、遺構壁面崩落等による密封性の低さが大きな要因と言える。

3）石蓋土壙墓群の形成過程

上記の検討過程で、被葬者各人の死亡をもって累代的に石蓋土壙墓群が形成されたとの結論に至った。次に問題となるのが、累代的な石蓋土壙墓群が「どのような造営原理に基づいて形成されたのか」である。

この問題を探る上で、最も基礎的な論拠となるのが「①土壙墓の先後関係（切り合い関係）」である。鏡迫古墳群は遺構密集度が高く、土壙墓同士の重複関係は多い。ただし、上唐原墓地の造営による遺構攪乱のため、大半の土壙墓で先後関係は把握できなかった。

次に注目したのが、「②土壙墓の掘削方法」である。上述したように、本遺跡の土壙墓には墓壙の形態や掘削方法にバリエーションが見られる。また、石蓋土壙墓を含む竪穴系埋葬施設は、その築造と遺体埋葬が連動するため、「③土壙墓の使用方法」もあわせて検証した。使用方法には、副葬品の検討も含む。

また、「④土壙墓の占地状況」も注目できる。本遺跡の土壙墓は丘陵頂部および平野側斜面に高密度に分布するが埋葬土壙自体の切り合いはなく、明らかに既存の石蓋土壙墓を避けて、新規の石蓋土壙墓を築造する様相が認められる。加えて、「⑤埋葬遺体の頭位」と土壙墓の占地状況にも一定の法則性が見られる。

以上の①～⑤項目を検討した。②・③は「石蓋土壙墓の型式学的検討」、④・⑤が「石蓋土壙墓群の支群構成の検討」としての役割を担い、①は両検討仮説の検証を担った。検討の結果、鏡迫古墳群の石蓋土壙墓群の形成には、大きく４つの画期が見出された。以下にその様相を記す。

【画期１：石蓋土壙墓群の築造開始】

遺構が最も集中する丘陵頂部で、先後関係の検討から最も古相の石蓋土壙墓と判断できるのは、北東側に埋葬遺体の頭位を向ける石蓋土壙墓である。その中でも、丘陵頂上に占地するのが９号石蓋土壙墓である。本石蓋土壙墓は墓壙平面が略菱形を呈し、埋葬土壙は二段掘りで掘削される。赤色顔料を床面全体に敷き、グリーンタフ製管玉や素環刀刀子が副葬品として納められていた。副葬品の量・質でいわゆる「階層性」を問う場合、９号土壙墓が本墓域で最高位に位置づけられる。９号土壙墓と同一頭位で同一構造の 46 号土壙墓も 43・44 号土壙墓に切り込まれており、確認できる先後関係の中では最も古い。やや丘陵頂部から斜面を下るが、24 号土壙墓も同時期に築造された可能性がある。以上をふまえると、鏡迫古墳群は丘陵頂部に占地する９号土壙墓を中心に、６ｍほどの空閑地を確保した状態で石蓋土壙墓群（Ⅰ群）が築造されていったと考えられる。

【画期２：丘陵頂部における石蓋土壙墓群の過密化】

丘陵頂部に墓壙上面が重複する状態で、石蓋土壙墓群（Ⅲ群）が築造される。埋葬頭位はいずれも北西から北方向を向いており、９・24・46 号土壙墓とは約 90 度のズレがある。また、

北西頭位の土壙墓は墓壙上面が重複するように隣接するものが多く、相互に時間差をもって築造されている様相が伺える。丘陵頂部の空閑地を埋めるように、順次築造されていったのだろう。Ⅰ群に属する 26 号土壙墓がⅢ群の 7 号墓を切り込んでいることから、Ⅰ群とⅢ群の造営には重複期間があることが分かる。

また、丘陵頂部から北西側にのびる緩斜面には埋葬頭位を西に向ける５・14 号土壙墓（Ⅱ群）が立地する。これらはⅢ群に属する 38・39 号土壙墓に切り込まれており、Ⅲ群に先行する石蓋土壙墓と判断できる。Ⅰ群との明確な先後関係は不明である。

墓壙の平面形態を含め、Ⅰ群とⅡ・Ⅲ群に石蓋土壙墓の構造自体には大きな変化は見られない。数量が十分ではないが、Ⅲ群の埋葬土壙に確実に素掘りのものが見られる点が差異点となる。

【画期３：丘陵斜面での石蓋土壙墓の過密化】

丘陵北側・東側斜面で石蓋土壙墓が過密化する。北側斜面の石蓋土壙墓群（Ⅳ群）は南側を埋葬頭位とし、東側斜面の石蓋土壙墓群（Ⅴ群）は西側を埋葬頭位とする。丘陵頂部からやや降った斜面に同一等高線に並んで築造されたため、あたかも列をなしたかのような分布状況となっている。Ⅴ群はⅢ群の土壙墓を切り込んで築造されている。Ⅳ群はいずれの群とも重複しない。

Ⅳ・Ⅴ群はⅠ～Ⅲ群と石蓋土壙墓の平面形態に顕著な違いが見出せる。墓壙上面が楕円形を呈し、略菱形や方形のものが全く含まれない。Ⅳ・Ⅴ群には３・６号土壙墓をはじめとした遺存状態がよい土壙墓を多数含んでおり、資料数的にも平面形態の違いは認めてよい。また、Ⅲ群に比べて素掘りの数量が増え、二段掘りと素掘りの比率が逆転している。

丘陵南側斜面には、Ⅳ・Ⅴ群と同一構造で埋葬頭位が異なる土壙墓が複数立地する。散在するがおおむね南東位の土壙墓群（Ⅵ群）、東位の土壙墓群（Ⅶ群）、北位の土壙墓群（Ⅷ群）で構成される。先後関係が把握できず、遺構の遺存状態も悪いため、時期特定は難しい。占地の様相から、おおむねⅣ・Ⅴ群に後出すると考える。

【画期４：石蓋土壙墓の築造停止】

丘陵頂部から下った辺縁部に、墓壙平面が略方形・方形となる石蓋土壙墓が築造される。埋葬頭位が東位となる１・25・26 号土壙墓（Ⅸ群）、北位となる 31 号土壙墓（Ⅹ群）、南西位となる４号土壙墓（Ⅺ群）の４基で構成される。このうち、枕状の削り出しと二段掘りがなされるのは１号土壙墓のみで、残りの４・25・31 号土壙墓には枕がなく、素掘りで埋葬土壙が掘削される。先後関係による遺構の時期特定はできないが、遺構の構造的特徴と占地状況から見て、Ⅸ群・Ⅹ群・Ⅺ群が最新相の土壙墓群と評価してよいだろう。この中でも、とくに特異なのが４号土壙墓である。４号土壙墓は平面方形の大型墓壙をもつが、このような墓壙は石蓋土壙墓の構造上、不必要な属性である。墓壙形態が「円形」から「方形」に転じる背景には、同時期の首長墓に用いられた竪穴式石室の形態（築造方法）模倣があると考えられる。つまり、鏡迫古墳群の石蓋土壙墓群は、古墳社会への移行と連動した古墳墓制の造墓秩序に組み込まれる過程で造墓活動を停止している。なお、最高位となる９号土壙墓は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての造墓秩序の中で評価すれば、地域の中位階層の墳墓と位置づけられる。

４．小結

最後に調査地（鏡迫古墳群の一画）の遺跡形成過程を整理する。

調査地における人類の活動痕跡は、スクレイパーの出土から始まる。近隣の皿山古墳群でも三稜尖頭器が出土しており、調査地周囲の丘陵が旧石器時代後期から狩猟場（生活空間）に利用されていたことがうかがえる。また、姫島産黒曜石をはじめとする石鏃も出土しており、縄文時代にも狩猟場と利用されていたようだ。

弥生時代前期から後期にかけての資料は希薄であるが、磨製石器片の存在は樹木伐採等の存在を推測させる。本丘陵の眼下には環溝集落も営まれており、集落を支える後背山林であったと考えられる。

土地改変を伴う人類の活動痕跡としては、石蓋土壙墓群が初現となる。しかし、石蓋土壙墓群の上部（低墳丘等）は例外なく後世の削平を受けており、墳墓上や周囲に供献された資料はすべて失われていた。石蓋土壙墓群の時期特定可能な資料としては、調査区内の表土や区画溝埋土、近世墓等による撹乱埋土等から出土した土器片（二次的堆積資料）がある。これらの二次的堆積の土器片は布留式甕の在地模倣甕片や大型の複合口縁壺片を含み、古墳時代前期に造営された石蓋土壙墓の存在を確実視できる。上述した画期３・４は古墳時代前期の範疇に収まるとみてよいだろう。数量は少ない弥生時代終末期の土器片は、画期１・２に造営された石蓋土壙墓群に伴うものと見られる。

石蓋土壙墓群の造営期間は古墳時代前期に収まり、古墳時代中期から後期前半にかけては空白期間となる。調査地外の鏡迫古墳群についても、当該期の墳墓が含まれるかは不明である。鏡迫古墳群の主墳は巨石を用いた横穴式石室であることから、本丘陵での古墳時代後期の造墓活動は確実視できる。調査地で確認された祭祀遺構は、この段階の造墓活動に伴うものと判断できる。

奈良～平安時代の遺物には、黒色土器片がある。これは調査地斜面で確認された地滑り跡に堆積した埋土から出土した。丘陵斜面の崩落が古代にも発生していたことをうかがわせる。中世段階の資料は未確認である。

近世以降に本丘陵は再び墓地（上唐原墓地）として利用される。石蓋土壙墓群の大幅な改変は近代になってからと考えられ、調査地南側は重機による面的削平が顕著であった。

鏡迫古墳群出土の赤色顔料について

九州国立博物館博物館科学課　志賀智史

１．はじめに

福岡県上毛町に所在する鏡迫古墳群からは弥生時代終末期～古墳時代前期に属する石蓋土壙墓 48 基が出土し、このうち 42 基で赤色顔料が使用されていた。ここではこれら赤色顔料について分析調査を行なった。分析資料は各土壙墓の床面１箇所から発掘現場担当者が採取したものの提供を受けた。

弥生時代～古墳時代の墳墓出土赤色顔料は、現在までの調査によって水銀を主成分とする朱（HgS，鉱物名称は辰砂 Cinnabar）と、赤色の酸化鉄を主成分とするベンガラ（ α -Fe203，鉱物名は赤鉄鉱 Hematite 等）の二種類が知られている。

２．調査方法

（１）顕微鏡観察

顕微鏡観察は赤色物の有無、付着状況、二種類の赤色顔料の混在状況、粒子形態等を知るために行った。資料を十分自然乾燥させた後に調査を行なった。

実体顕微鏡（7-100 倍）では、白色光に近い光で資料を直接観察した。朱はショッキングピンク色～オレンジ色に見え、ベンガラであれば暗赤色他に見える。この観察では、赤色顔料の有無だけでなく、包含土壌とのあり方や有機質遺物の有無など、赤色顔料の使われ方や用途などを考えるための基礎的な観察も同時に行っている。

生物顕微鏡（50-400 倍）では、実体顕微鏡による観察結果をふまえて作成したプレパラートを、側射光および透過光にて観察した。側射光では朱はルビー色の樹脂状光沢を持つ透き通った粒子に、ベンガラは暗赤色他の微粒子が見える。

電子顕微鏡（500-5 万倍）では、粒子形態の詳細を観察した。

（２）蛍光Ｘ線分析

主成分元素を知るために行った。朱は水銀（Hg）が、ベンガラは鉄（Fe）が検出される。ただし鉄は土壌にも含まれている。測定にはポータブル型蛍光Ｘ線分析装置を用いた。

（３）Ｘ線回折・顕微ラマン分光分析

結晶構造もしくは分子構造を知るために行なった。朱は辰砂（Cinnabar）が、ベンガラは赤鉄鉱（Hematite）他が同定される。Ｘ線回折は資料を粒度調整して測定した。顕微ラマン分光分析は生物顕微鏡観察用の資料を測定した。

３．調査結果のまとめと考察

調査結果は表 1 の通りである。以下では、これまでの知見を交え若干の考察を行う。

（１）検出された赤色顔料の種類

土壙墓 42 基からは朱とベンガラが検出された。一つの土壙墓から朱とベンガラの両方が検出されたものは 30 基、ベンガラだけが検出されたものは 12 基あり、圧倒的に前者の例が多い。朱のみが単独で検出された土壙墓は認められなかった。

朱とベンガラの両者が検出された土壙墓については、ほとんどの資料でベンガラが主体であった。両者は完全には混在しておらず、ある程度分離できる状況であったため（図２）、意図的に混ぜて使用されたものとは考えられない。この点については後述する。

（２）朱

朱の遺存状況　粉末の朱が凝集しているものが多い（図２，８,15)。目視や実体顕微鏡の低倍率で朱が確認できない資料でも、高倍率で観察すると、朱粒子が人骨片様の白色物や人体由来と推定される樹脂様膠着物に混じった状態で確認されるものも認められる。24 号墓では実体顕微鏡観察で朱が認められず、蛍光Ｘ線分析でも水銀が検出されなかったが、上記のような部分からサンプリングし生物顕微鏡で観察すると、何粒かの朱粒子が確認できた。この朱粒子については念のため顕微ラマン分光分析をおこない辰砂を同定している。9 号墓と 12 号墓では実体顕微鏡観察や生物顕微鏡観察では朱が確認できなかったが、蛍光Ｘ線分析では水銀の低いピークを確認したため、さらに顕微鏡で精査すれば朱が見つかる可能性も否定できない。

朱の粒度　墳墓で使用された朱は、弥生時代中期後半～末の甕棺墓とそれ以外の時期のもので粒子の大きさが異なることが指摘されており、前者の最大粒子径は約 20 μm 以下、後者の最大粒子径は約 20μm ～約 300 μm のものである（本田 1988,1995)。今回調査をおこなった各土坑墓における最大粒子径は約 12 ～ 70 μm であった。この中で朱が十分含まれている資料については最大粒子径が約 30μm 以上であった。朱が少ない資料については、最大粒子径が約 20 μm 以下となっており、十分な資料がサンプリングされていれば、もう少し大粒の粒子が含まれていた可能性がある。従って、本古墳群の朱の粒土は当該期の特徴を備えていると考えられる（図５，９)。

なお、朱が比較的多く含まれていた 10 号、13 号、47 号の土壙墓３基については、硫黄同位体比分析による朱の産地推定（Minami et al 2005）を試みたが、地山の混入が多かったためか、有効な数値が得られなかった。

（３）ベンガラ

ベンガラの遺存状況　ベンガラには、ほとんどの資料で直径約５㎜以下の小塊を含んでいた。この小塊は一見すると暗赤色であるが、内部や一部に暗紫色、紫色、茶色、黒色等の多様な赤色系統色の色調の部分が認められた（図２～４,11,14)。小塊の中には土壌の混入が認められないことから、ベンガラ粉末が埋蔵環境によって固まったのではなく、当初からこのような状況であったと考えられる。墳墓というベンガラの使用の場においてもこのような小塊を含むことから、完成品としてのベンガラは粒度調整を行わないことが一般的であったと考えられる。同様な小塊を含むベンガラは北部九州の墳墓でも一般的に認められる。なお、一部の資料には、地山の粘質土に由来する黄土色の酸化鉄が多数含まれていた。

ベンガラの鉱物組成　ベンガラ小塊について、代表的な色調である暗赤色、紫色、黒色の部分のＸ線回折を行なった。暗赤色と紫色の部分では赤鉄鉱を同定した。黒色部分では磁鉄鉱を同定した。ベンガラ小塊に見る多様な色調の構成は、原料となった鉄鉱石そのものというよりむしろ鉄鉱石の焼成による焼き斑である可能性が高い。焼成することによって、赤化、色調の調整、鉄鉱石の軟化、粉末化等を行ったものと思われる。赤鉄鉱の生成には約 800 度、磁鉄鉱の生成には約 1400 度の熱を加える必要であり、磁鉄鉱が同定されたベンガラはこのような高温を受けて生産されたと考えられる。

図１　６号墓出土の赤色顔料（２倍）
ベンガラ(P)を主体に朱も検出された。

図２　同墓朱の凝集塊（左）とベンガラ小塊（右）
（40倍）

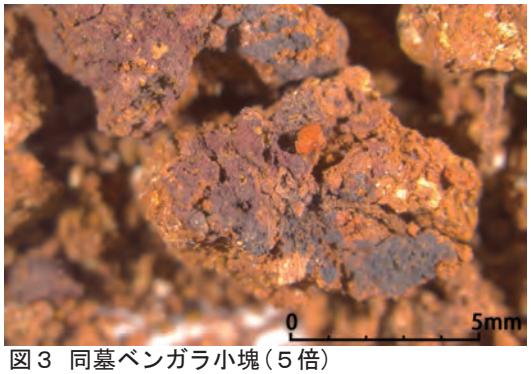


図３　同墓ベンガラ小塊（５倍）
暗赤色、紫色、黒色の小塊が見られる。

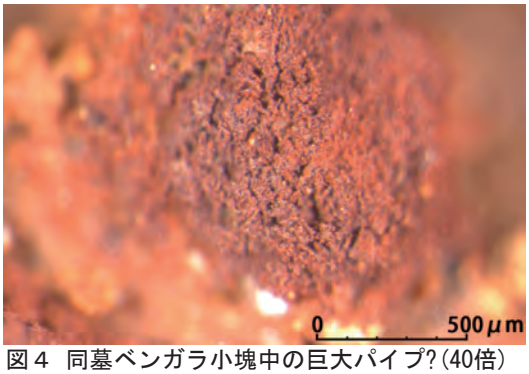


図４　同墓ベンガラ小塊中の巨大パイプ?（40倍）

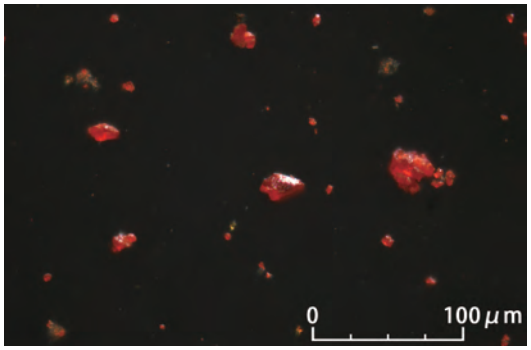


図５　同墓朱粒子（200倍）

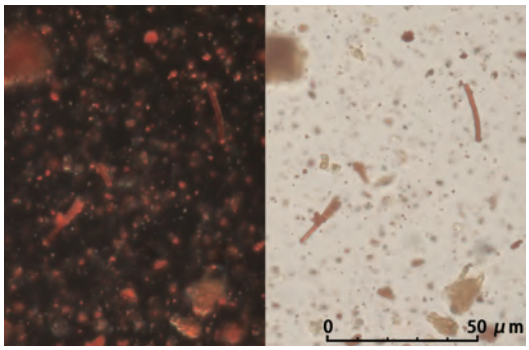


図６　同墓ベンガラ(P)粒子（左：側射光，右：透過光）
（400倍）

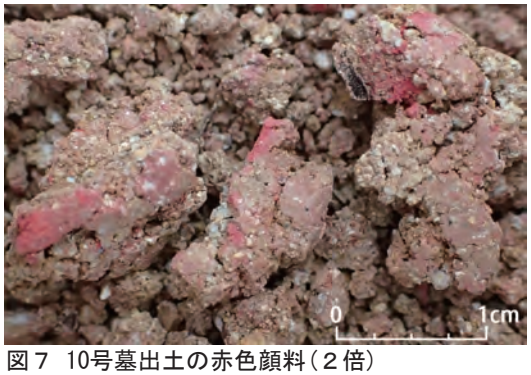


図７　10号墓出土の赤色顔料（２倍）
朱を主体にベンガラ(P)も検出された。

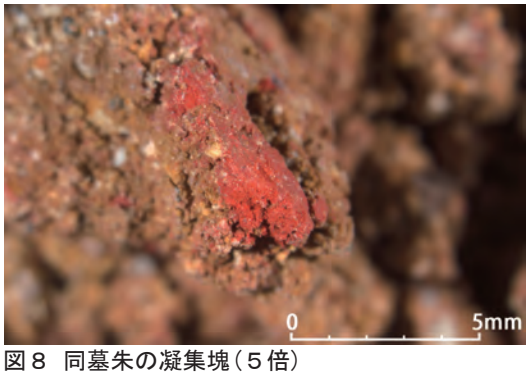


図８　同墓朱の凝集塊（５倍）

Photo. 3　図1～8

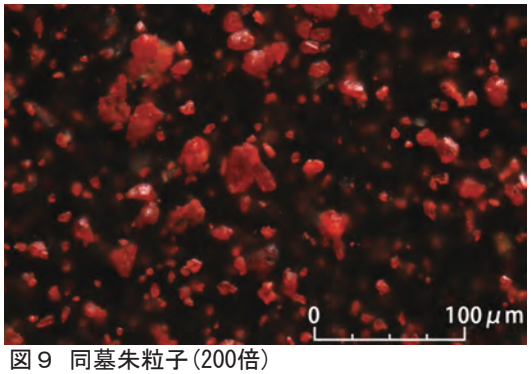


図９　同墓朱粒子(200倍)

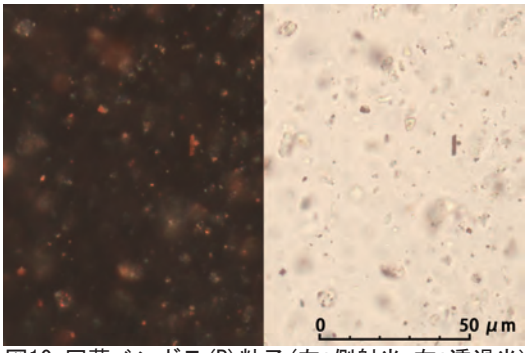


図10　同墓ベンガラ(P)粒子(左:側射光, 右:透過光)
(400倍)

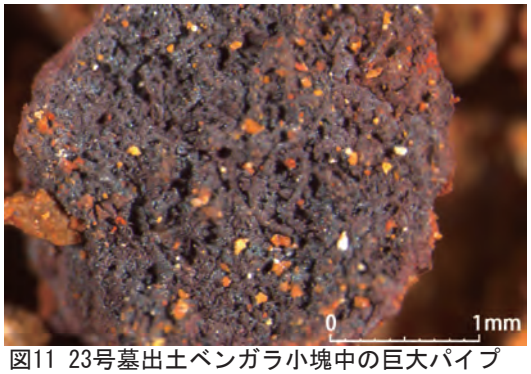


図11　23号墓出土ベンガラ小塊中の巨大パイプ
(20倍)

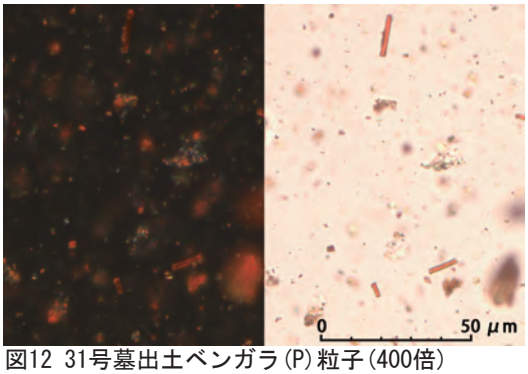


図12　31号墓出土ベンガラ(P)粒子(400倍)

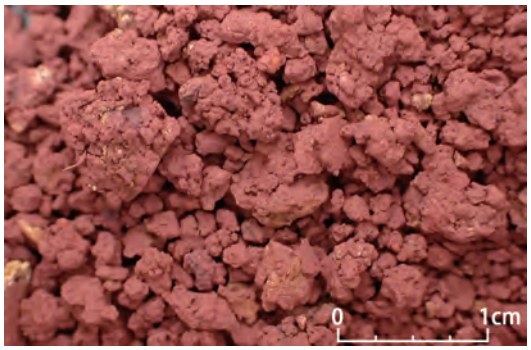


図13　46号墓出土の赤色顔料(２倍)
ベンガラ(非P)を主体に朱も検出された。

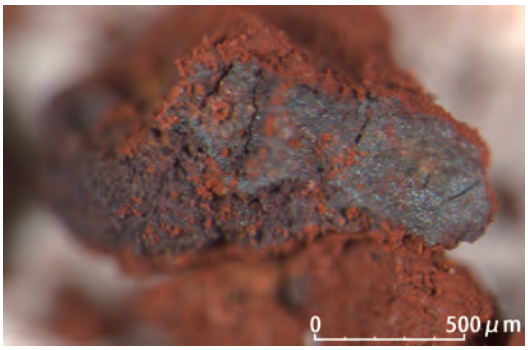


図14　同墓ベンガラ小塊(40倍)
暗赤色小塊の中に、紫色や黒色の部分が認められる。

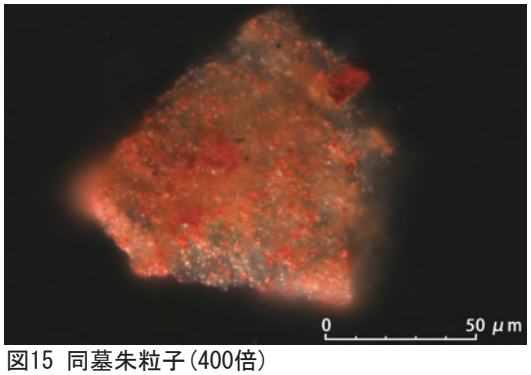


図15　同墓朱粒子(400倍)
凝集した朱。

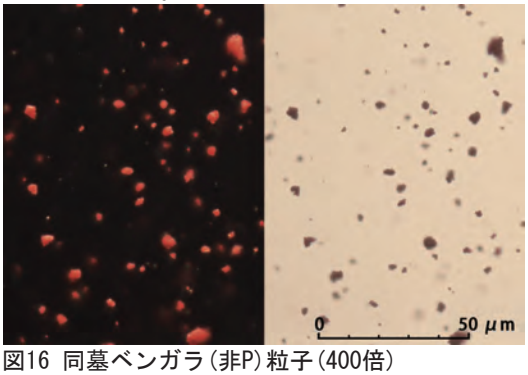


図16　同墓ベンガラ(非P)粒子(400倍)

Photo. 4　図9～16

表　分析結果一覧

時期	遺構名称	資料重量	調査方法					各分析結果				赤色顔料の種類	備考
			顕微鏡		XRF	X線回折	ラマン	生物顕微鏡	XRF	X線回折	ラマン		
			実体	生物									
画期１ 弥生終末 （古段階）	９号墓	60g	○	○	○	—	—	ベンガラ(P)	Fe,Hg	—	—	朱?,ベンガラ(P)	ベンガラ小塊あり。
	17号墓	43g	○	○	○	—	—	ベンガラ(非P)	Fe	—	—	ベンガラ(非P)	ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。
	24号墓	108g	○	○	○	—	○	朱,ベンガラ(非P)	Fe	—	辰砂,赤鉄鉱	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。朱の最大粒子径は12μm。
	46号墓	64g	○	○	○	○	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	赤鉄鉱,磁鉄鉱	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。朱の最大粒子径は15μm。
画期２ 弥生終末 （新段階）	５号墓	58g	○	○	○	—	—	ベンガラ(非P)	Fe	—	—	ベンガラ(非P)	ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。
	14号墓	38g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。朱の最大粒子径は20μm。
	７号墓	43g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。朱の最大粒子径は45μm。
	８号墓	26g	○	○	○	—	—	ベンガラ(非P)	Fe	—	—	ベンガラ(非P)	ベンガラ小塊あり。
	13号墓	29g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	朱が主体。ベンガラ小塊あり。朱の最大粒子径は30μm。
	15号墓	39g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。朱の最大粒子径は25μm。
	19号墓	79g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。朱の最大粒子径は35μm。
	34号墓	87g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。朱の最大粒子径は35μm。
	40号墓	40g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。朱の最大粒子径は18μm。
	43号墓	103g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。朱の最大粒子径は20μm。
	47号墓	34g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	朱が主体。ベンガラ小塊あり。朱の最大粒子径は33μm。
	21号墓	33g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。朱の最大粒子径は12μm。
	33号墓	48g	○	○	○	—	—	ベンガラ(非P)	Fe	—	—	ベンガラ(非P)	ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。
	38号墓	29g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。朱の最大粒子径は35μm。
	39号墓	44g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。朱の最大粒子径は15μm。
画期３ 古墳早期	６号墓	57g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり？。朱の最大粒子径は32μm。
	10号墓	23g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(P)	朱が主体。朱の最大粒子径は70μm。
	12号墓	65g	○	○	○	—	—	ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱?,ベンガラ(非P)	ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。
	36号墓	94g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。朱の最大粒子径は15μm。
	２号墓	47g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。朱の最大粒子径は30μm。
	３号墓	114g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。朱の最大粒子径は15μm。
	11号墓	150g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。朱の最大粒子径は30μm。
	23号墓	570g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。朱の最大粒子径は25μm。
	27号墓	67g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。朱の最大粒子径は27μm。
	28号墓	236g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。朱の最大粒子径は28μm。
	35号墓	125g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。朱の最大粒子径は15μm。
	37号墓	181g	○	○	○	—	—	ベンガラ(非P)	Fe	—	—	ベンガラ(非P)	ベンガラ小塊あり。
	49号墓	58g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。
	30号墓	64g	○	○	○	—	○	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	辰砂,赤鉄鉱	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。朱の最大粒子径は15μm。
	44号墓	63g	○	○	○	—	—	ベンガラ(非P)	Fe	—	—	ベンガラ（非P)	ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。
	18号墓	55g	○	○	○	—	—	ベンガラ(非P)	Fe	—	—	ベンガラ(非P)	ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。
	22号墓	54g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。朱の最大粒子径は15μm。
	16号墓	61g	○	○	○	—	—	ベンガラ(非P)	Fe	—	—	ベンガラ(非P)	ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。
	42号墓	45g	○	○	○	—	—	ベンガラ(非P)	Fe	—	—	ベンガラ(非P)	ベンガラ小塊あり。巨大パイプあり。
画期４ 古墳前期	１号墓	48g	○	○	○	—	—	ベンガラ(非P)	Fe	—	—	ベンガラ(非P)	ベンガラ小塊あり。
	26号墓	164g	○	○	○	—	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe	—	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラが主体。ベンガラ小塊あり。
	31号墓	24g	○	○	○	—	—	ベンガラ(P)	Fe	—	—	ベンガラ(P)	ベンガラ小塊あり。
	４号墓	61g	○	○	○	—	—	ベンガラ(非P)	Fe	—	—	ベンガラ(非P)	ベンガラ小塊あり。

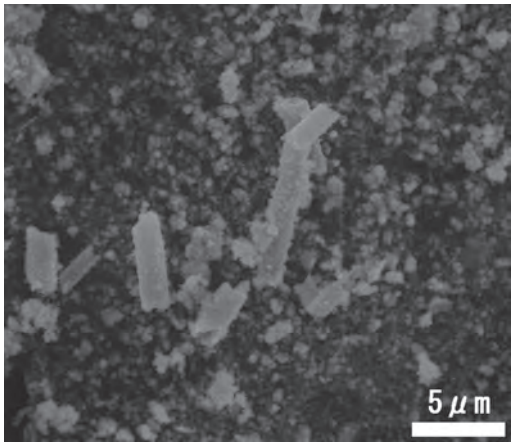


図17 ６号墓出土ベンガラ(P)のパイプ状粒子
(2500倍)

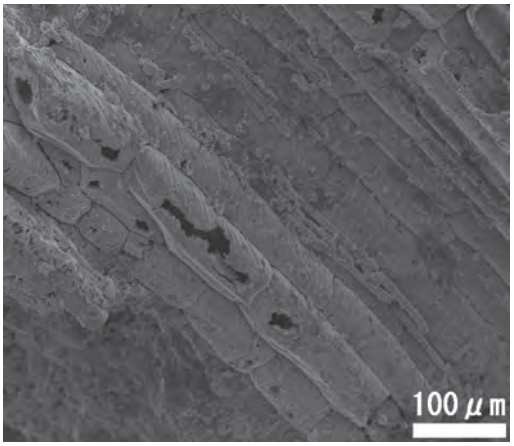


図18 ４号墓出土ベンガラ(非P)の巨大パイプ
(125倍)

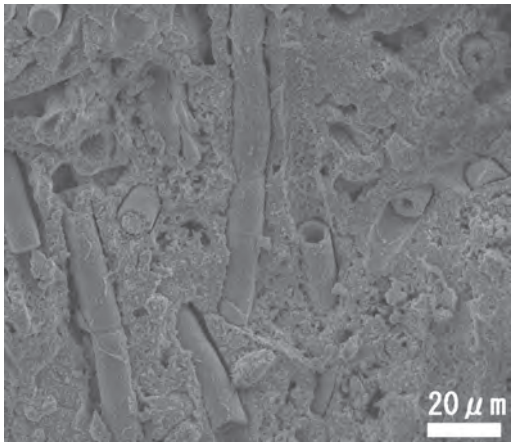


図19 18号墓出土ベンガラ(非P)の巨大パイプ
(500倍)

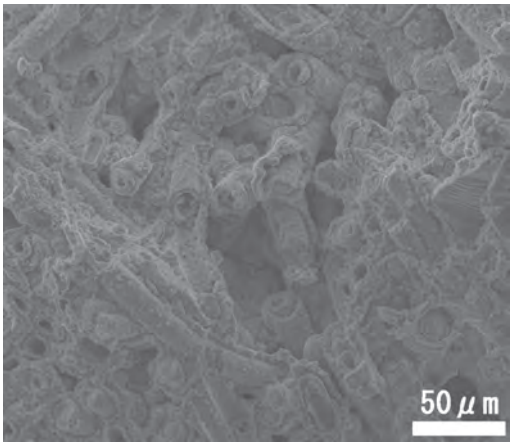


図20 30号墓出土ベンガラ(非P)の巨大パイプ
(250倍)

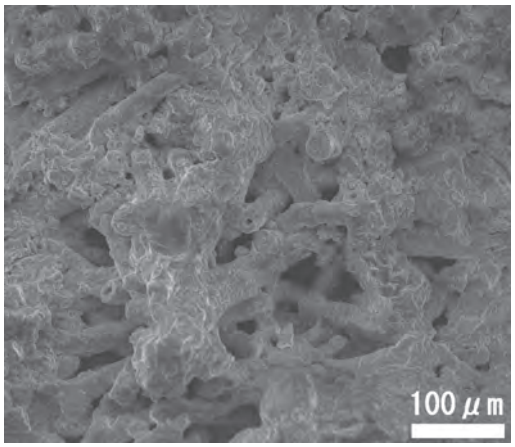


図21 36号墓出土ベンガラ(非P)の巨大パイプ
(125倍)

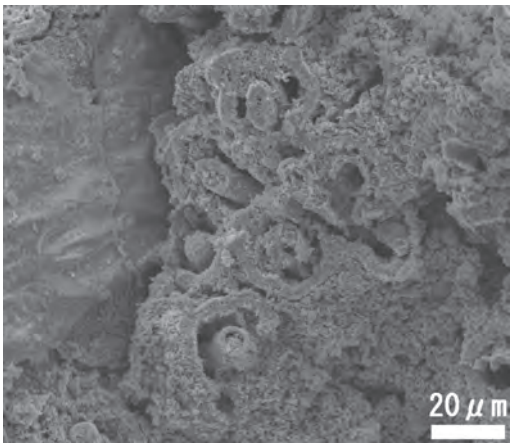
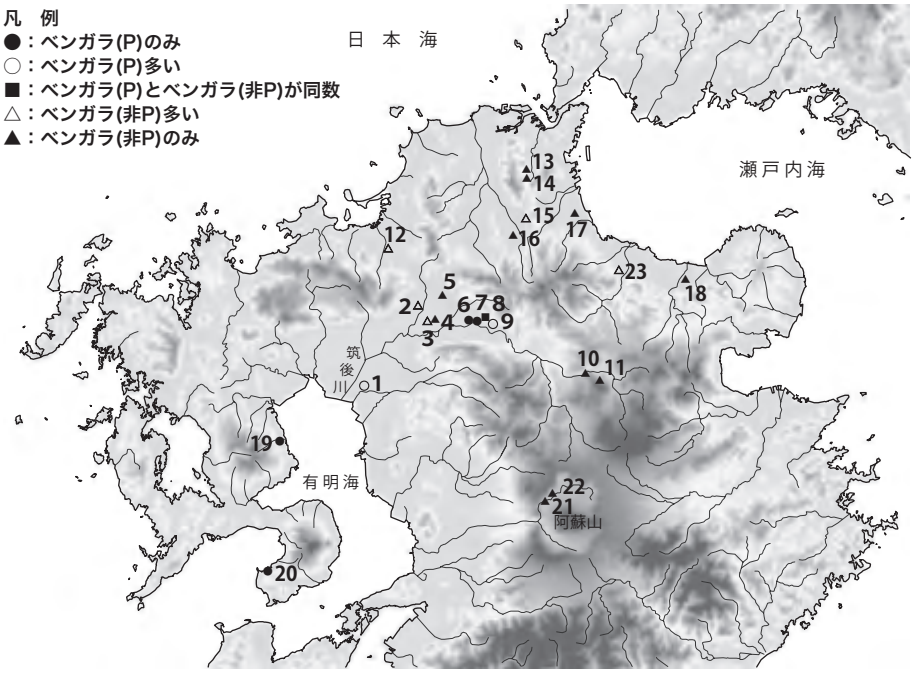


図22 46号墓出土ベンガラ(非P)の巨大パイプ
(500倍)

電子顕微鏡像

ベンガラ粒子の形態　ベンガラを粒子形態から直径約１μｍのパイプ状粒子を含むもの（ベンガラ（P））（図６,10,12,17）と、これを含まないもの（ベンガラ（非P））（図16）に細分した。ベンガラ（P）は２号墓、６号墓、９号墓、10号墓、31号墓の５基から、ベンガラ（非P）はその他の全ての土壙墓37基から検出された。圧倒的にベンガラ（非P）の採用が優勢である。

ベンガラ（P）に含まれているパイプ状の粒子は、鉄細菌の一種であるLeptothrixの鞘と考



分布図番号	所在地	遺跡名	時期	ベンガラ検出墳墓数	ベンガラの種類		墳墓形式※
					P	非P	
1	福岡県筑後市	高江辻	弥・後～古・初	12	8	4	箱石・石蓋土・木蓋土・石木蓋土・木・土
2	福岡県小郡市	横隈上内畑	弥・後～古・初	20	一部有	有	箱石・石蓋土
3	福岡県大刀洗町	甲条神社	弥・後	5	一部有	有	箱石・土
4	福岡県大刀洗町	甲条北松木	弥・終～古・初	8	0	8	箱石・石蓋土・土・甕他
5	福岡県筑前町	浦の原Ⅰ	弥・後・以前	1	0	1	木
	福岡県筑前町	浦の原Ⅱ	弥・後・中頃以前	2	0	2	木
6	福岡県朝倉市	大庭久保	弥・後	1	1	0	箱石
7	福岡県朝倉市	狐塚南	弥・後～古・前	2	2	0	箱石・石蓋土
8	福岡県朝倉市	下町外畑	古・前	4	2	2	箱石・石蓋土
9	福岡県朝倉市	外之隈	古・初	5	3	2	箱石・木
10	大分県玖珠町	瀧ノ原遺跡	弥・終～古・初	1	0	1	箱石
11	大分県玖珠町	陣ヶ台遺跡	古・前	5	0	5	箱石
12	福岡県福岡市	井尻B	弥・後・後～古・前	11	2	9	石蓋土・土
13	福岡県北九州市	祇園町第3地点	古・初	1	0	1	箱石
	福岡県北九州市	郷屋4次	弥・終～古・初	1	0	1	箱石
14	福岡県北九州市	高津尾	弥・後～弥・終	64	0	64	箱石・石蓋土・木・土
15	福岡県香春町	古坊	弥・終～古・初	9	1	8	箱石・石蓋土
16	福岡県川崎町	公門原	古・初	4	0	4	箱石
17	福岡県みやこ町	徳永川ノ上	弥・終～古・初	59	0	59	箱石・石蓋土・木蓋土・土・甕他
18	大分県宇佐市	川部南西	弥・終～古・初	15	0	15	箱石・石蓋土・木・土
19	佐賀県太良町	伊福箱崎	弥・後～古・初	1	1	0	石蓋土
20	長崎県雲仙市	門山	弥・終～古・初	1	1	0	箱石
21	熊本県阿蘇市	宮山	古・初	1	0	1	木
22	熊本県阿蘇市	狩尾湯の口	弥・終～古・初	1	0	1	箱石
23	福岡県上毛町	鏡迫	弥・後～古・初	42	5	37	石蓋土

第59図　ベンガラ検出墳墓

えられており（岡田 1997）、生物系のベンガラと呼ばれることもある。川の澱みや湖沼の水が赤くなっている部分、いわゆる赤水（色調としては褐色）は、多くの場合この鉄細菌によるものである。ここから褐色の沈殿物を採取し、800℃程度で焼成すると赤化（赤鉄鉱になる）し、ベンガラとして使用することができる。この鉄細菌は現在でも採取可能で、最も検出されやすい鉄細菌の一つと言われている。

ベンガラ（P）の生産や流通については、原料が一般的な鉄細菌であることから、その採取地も無数に存在する可能性がある。しかし、墳墓という社会的、政治的な施設での大量使用を前提とすれば、たとえば地域単位といったある程度限定した生産地が予想されよう。

一方、ベンガラ（非 P）は、パイプ状の粒子を含んでいないものを一括している。球状、鱗片状など多様な粒子形態を持ち、これらが共存していることが多い。特徴的な形態の粒子を持たない点から、針鉄鉱や赤鉄鉱、磁鉄鉱等の鉄鉱石が原料になったと考えられている（本田 1997）。鉱物系のベンガラと呼ばれることもある。鉄鉱石を産出する鉱山は、西日本では比較的大規模なものとしては熊本県阿蘇の褐鉄鉱や岐阜県金生山の赤鉄鉱がある。また鉄との関わりで考えれば、朝鮮半島からもたらされた可能性も視野に入れておく必要があろう。現段階で産出地を特定することは難しいが、ベンガラ（P）よりも限定した産出地が予想される。

ベンガラ粒子の形態からみた地域性　墳墓出土ベンガラには粒子形態の違いに地域性や編年等が認められることが明らかになりつつある（志賀 2008, 2009a 他）。最も赤色顔料が多用されている弥生時代終末期～古墳時代前期の墳墓でベンガラが使用される場合は、ベンガラ（P）が採用されることが一般的である。しかし北部九州ではベンガラ（非 P）が採用されることが多い。この地域の事例を分布図上にプロットしてみると、ベンガラ（非 P）の採用が目立つものの、筑後川中流域のより上流部、現在の朝倉市一帯にはベンガラ（P）の採用が主体となる墳墓も認められる（図 23）。このような北部九州で採用されるベンガラ（非 P）が特定の産地から一元的に供給されていたならば、多量の鉄鉱石を埋蔵する産出地や、採掘、生産、流通システムの存在が予想される。

村上恭通は、弥生時代後期の阿蘇地方が山間部でありながら北部九州系の青銅器や鉄器が数多く出土することから、その対価としてこの地で産出する褐鉄鉱から生産されたベンガラが北部九州へ流通していた可能性を指摘している（村上 2002）。この考えが正しければ、少なくとも弥生時代の北部九州においてベンガラ（非 P）が広範囲で採用されていることの説明が付き易い。ただし、古墳時代中期中頃の福岡市クエゾノ遺跡 1 号古墳では、朝鮮半島産の磁鉄鉱を素材としたベンガラ（非 P）も出土しており（本田 1995）、鉄鉱石の産出地も時期や地域によって変化、もしくは複数存在していた可能性も考えなければなるまい。

巨大なパイプ状の粒子　ベンガラ（非 P）の細分の可能性として、筆者が注目しているのが巨大なパイプ状の粒子である。鏡迫古墳群でも 37 基の土壙墓から出土したベンガラ（非 P）のうち 19 基のベンガラ小塊中に直径 10-50 μm の巨大なパイプ状のベンガラ粒子が纏まって認められた（図 4, 11, 18 ～ 22）。通常のベンガラ（P）のパイプ状粒子は直径 1 μm 程度（図 17）であり、これよりも 10 倍以上大きいことになる。巨大パイプの成因はよくわかっていないが、本田等による北九州市高津尾遺跡の石棺墓等の分析調査で最初に報告（本田・成瀬 1991）されて以来、福岡県香春町古坊遺跡、同筑後市高江辻遺跡、大分市玉沢地区条里跡、熊本県阿蘇市宮山遺跡・同平原 1 号墳等の弥生時代後期～古墳時代中期の墳墓や住居址等で報告されており（志

賀 2006, 2007, 2010, 2014)、北部九州を中心に分布している点は非常に興味深い。中でも阿蘇市宮山遺跡は、阿蘇の褐鉄鉱産出地の上にある遺跡で、住居跡からは、褐鉄鉱を原料とした焼成途中のベンガラ小塊が出土している。この褐鉄鉱は周辺から入手されたものである可能性が極めて高いが、現在採掘されている阿蘇の褐鉄鉱には、巨大なパイプ状の粒子は含まれていない。

今後ベンガラ（非 P）の中から的確に巨大パイプを探し出すことができれば、従来ベンガラ（非 P）と一括していたものを細分できる可能性がある。ただし、巨大なパイプ状粒子が不定形な粒子中に局所的に纏まっているため、実体顕微鏡でじっくり観察しなければ発見できない点は注意を要する。また、原産地での産状の調査も必要となってこよう。

（4）石蓋土壙墓内での赤色顔料の分布

当該期墳墓内での赤色顔料の分布　弥生時代～古墳時代の墳墓で使用された赤色顔料については、本田光子による北部九州を中心とした研究から、埋蔵施設にベンガラ、遺骸頭部に朱というように二種類の赤色顔料が使い分けられることが一般的であると考えられている。ベンガラは墓室内を彩る塗料として、朱は仙薬や神仙思想との関わりが指摘されている。この使い分けは、弥生時代中期後半の北部九州で始まり、後期後半に同地域で盛行、古墳時代になると全国に広まった（本田 1988, 1995）。この使い分けの状況を的確に捉えるためには、床面の主軸に沿って複数箇所、たとえば頭部、腹部、脚部の三カ所からのサンプリングが必要である（本田 1999）。特に、北部九州の箱式石棺墓では大量のベンガラに微量の朱という使い方が一般的であり、任意の位置からのサンプリング資料では、目的的な科学調査を行なっても朱の発見が困難なことも多い。また、発掘調査時には赤色顔料が認められなくても、念のため採取した土壌を顕微鏡観察すると赤色顔料が認められる場合もあり、その有無は発掘現場だけでは判断し辛いことも少なくない。本古墳群では、床面一箇所からしかサンプリングが行われていないが、次のような想定が可能である。

本土壙墓内での赤色顔料の分布　鏡迫古墳群の石蓋土坑墓内では、床面および石蓋が遺存するものについては石蓋下面（土壙墓内側）の全面で赤色顔料が認められている。壁面は崩落しているものも多く赤色顔料の付着は明確では無いが、その他の部分と同様に塗布もしくは散布されていたと考えられよう。今回の調査で朱とベンガラの両者が検出された土坑墓については、やはり埋葬施設内にベンガラが、遺骸の頭胸部に朱という使い分けがあったと推定できる。13 号墓では枕部と脚端側に赤色顔料が分布していたが、朱とベンガンが検出されており、脚端側は濃いものの全面にベンガラが、遺骸頭胸部には朱であったと推定できる。47 号墓と 38 号墓では枕部もしくは頭位にのみ赤色顔料が認められたが、ここでも朱とベンガンが検出されており、埋葬施設全面に薄くベンガラが、遺骸頭胸部には朱であったと推定できる。31 号墓では頭位部においてのみ床面から少し浮いた状態で赤色顔料が出土している。ベンガラのみが検出されたため、朱の代用として遺骸頭部に散布されたものと考えられる。

〈引用・参考文献〉

岡田文男 1997「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会第 14 回大会研究発表要旨集』, 38-39 頁

志賀智史 2006「古坊遺跡出土の赤色顔料」『古坊遺跡　高野ムカエ遺跡』福岡県教育委員

会 , 54-58 頁
志賀智史 2007「 玉沢地区条里跡第 9 次調査出土の赤色顔料 」『玉沢地区条里跡　第 9 次調査報告』大分市教育委員会 , 75-77 頁
志賀智史 2008「 前期前方後円 (方) 墳から出土するベンガラの地域性に関する研究 」『日本文化財科学会第 25 回大会研究発表要旨集』196-197 頁
志賀智史 2009「 奥山古墳の赤色顔料について 」『薩摩加世田奥山古墳の研究』鹿児島大学総合研究博物館 , 56-59 頁
志賀智史 2010「 高江辻遺跡出土の赤色顔料について 」『高江辻遺跡』筑後市教育委員会 , 40-52 頁
志賀智史 2014「長目塚古墳出土の赤色顔料について」『長目塚古墳の研究』杉井健編、175-194 頁
本田光子 1988「弥生時代の墳墓出土赤色顔料 - 北九州地方にみられる使用と変遷 -」『九州考古学』第 62 号 , 九州考古学会 , 39-49 頁
本田光子 1995「古墳時代の赤色顔料」『考古学と自然科学』第 31・32 号 (合併号), 日本文化財科学会 , 63-79 頁
本田光子 1999「墳墓出土赤色顔料の分析方法に関する基礎的研究　その 1- 発掘調査現場でのサンプリングについて -」『日本文化財科学会　第 16 回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 , 222-223 頁
本田光子・成瀬正和 1991「高津尾遺跡 16 区出土の赤色顔料について」『高津尾遺跡 4』北九州市教育委員会 , 233-244 頁
Minami, T., Imai, A., Bunno, M., Kawakami, K., Imazu, S. (2005) Using sulfur isotopes to determine the sources of vermillion in ancient burial mounds in Japan. Geoarchaeology 20: 79－84.
村上恭通 2002「鉄器の普及と生産・流通」『季刊考古学』第 80 号 , 雄山閣 , 59-63 頁

図　版

1　1号土壙墓検出状況（北東から）

2　1号土壙墓石蓋露出状況（南西から）

3　1号土壙墓堆積状況（南西から）

4　1号土壙墓完掘状況（南西から）

5　2号土壙墓（東から）

6　2号土壙墓完掘状況（東から）

1　3号土壙墓検出状況（東から）

2　3号土壙墓石蓋被覆土（北から）

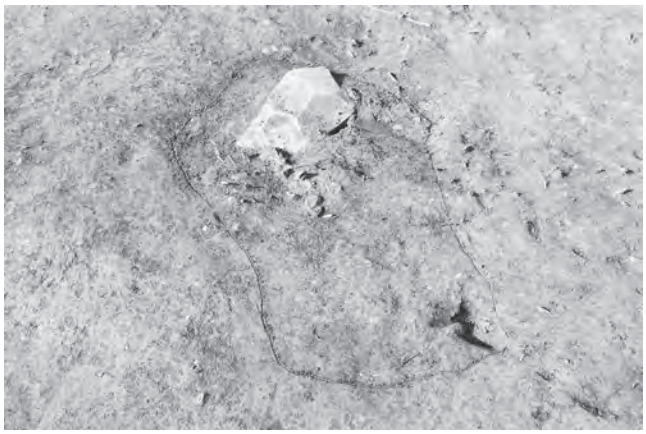
3　3号土壙墓堆積状況（北から）

4　3号土壙墓（東から）

5　3号土壙墓完掘状況（東から）

1　4号土壙墓（北東から）

2　4号土壙墓完堀状況（北東から）



3　5号土壙墓検出状況（東から）

4　5号土壙墓（西から）

5　5号土壙墓完掘状況（東から）

7　6号土壙墓（西から）

6　6号土壙墓検出状況（南から）

1　6号土壙墓埋没状況（北から）

2　6号土壙墓完掘状況（北から）

3　7・15・19・20 号土壙墓（北から）

4　8号土壙墓（北から）

5　8号土壙墓完掘状況（南から）

1　9号土壙墓検出状況（東から）

2　9号土壙墓素環刀刀子出土状況（北から）

3　9号土壙墓完掘状況（南から）

4　8・10 号土壙墓（北から）

5　10 号土壙墓完掘状況（西から）

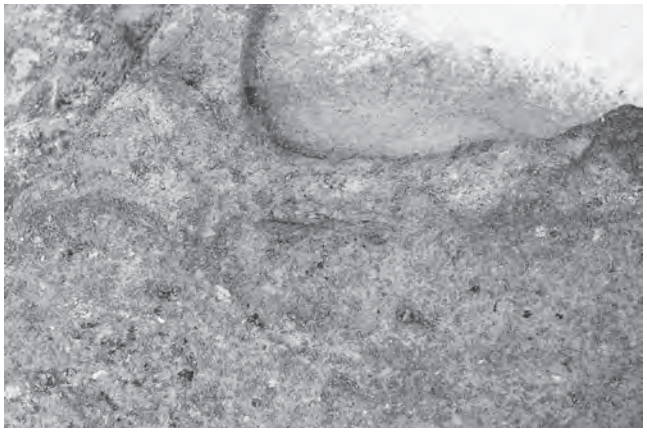
6　11 号土壙墓完掘状況（北から）

7　12 号土壙墓完掘状況（北から）

1　13 号土壙墓（北東から）

2　13 号土壙墓埋没状況（東から）

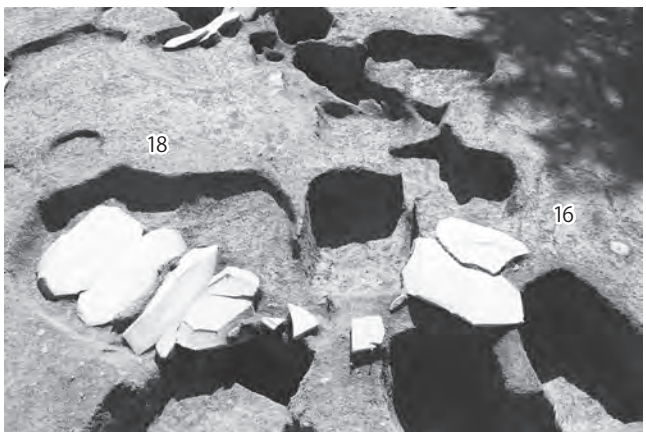
3　14 号土壙墓（西から）



4　14 号土壙墓鉄製品出土状況（真上から）

5　7・15・19 号土壙墓（北西から）

6　7・15・19 号土壙墓完掘状況（北西から）



7　16・18 号土壙墓（北から）

8　16 号土壙墓（南から）

1　17 号土壙墓（北西から）

2　17 号土壙墓完掘状況（南東から）

3　18 号土壙墓堆積状況（西から）

4　18 号土壙墓完掘状況（西から）

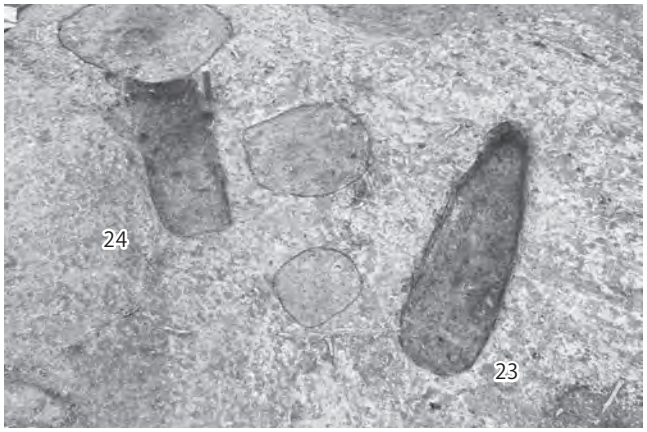
5　19 号土壙墓完掘状況（東から）

7　21 土壙墓堆積状況（東から）

6　21 号土壙墓（西から）

1　22 号土壙墓（南から）

2　22 号土壙墓完掘状況（南から）



3　23・24 号土壙墓（東から）

4　25 号土壙墓（南西から）

5　26 号土壙墓（南西から）

6　28 号土壙墓堆積状況（南東から）

1　27 号土壙墓（東から）

2　28 号土壙墓（東から）

3　29 号土壙墓堆積状況（東から）

4　29 号土壙墓（北東から）

5　30 号土壙墓（西から）

6　31 号土壙墓（東から）

1　33 号土壙墓（東から）

2　34 号土壙墓（南から）

3　35 号土壙墓（東から）

4　37 号土壙墓（南から）

5　38 号土壙墓（西から）

1　39 号土壙墓堆積状況（西から）

2　39 号土壙墓（真上から）

3　40 号土壙墓（西から）

5　42 号土壙墓堆積状況（南西から）

4　41 号土壙墓（東から）

6　43 号土壙墓堆積状況（南西から）

7　43 号土壙墓（南から）

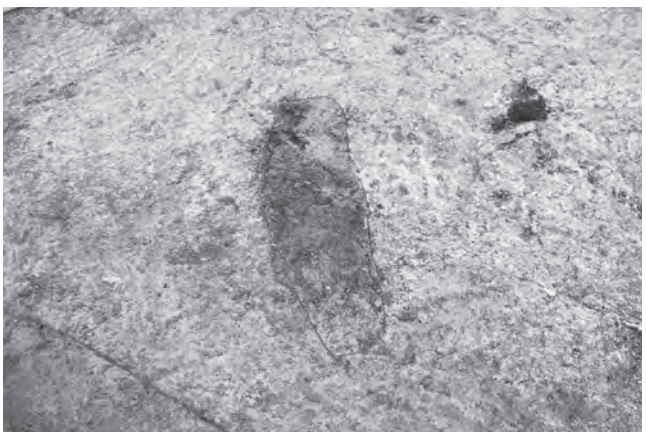
1　44 号土壙墓（北東から）

2　45 号土壙墓（東から）

3　46 号土壙墓（南から）

4　47 号土壙墓（真上から）

5　48 号土壙墓（東から）



6　49 号土壙墓（東から）

1　溝1（東から）

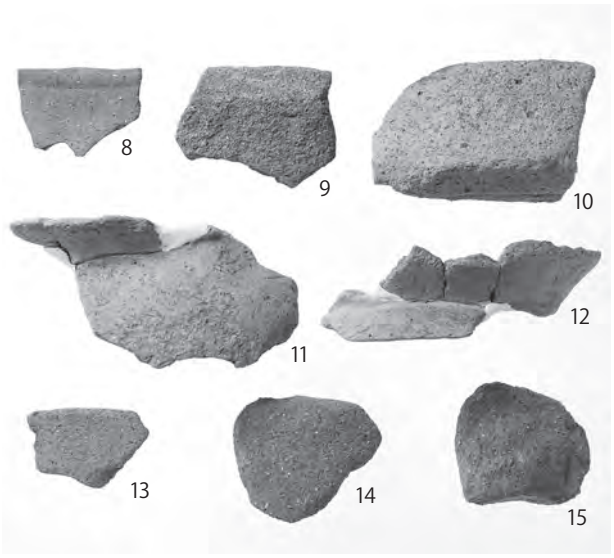
2　溝4（西から）

3　溝4堆積状況
（北から）

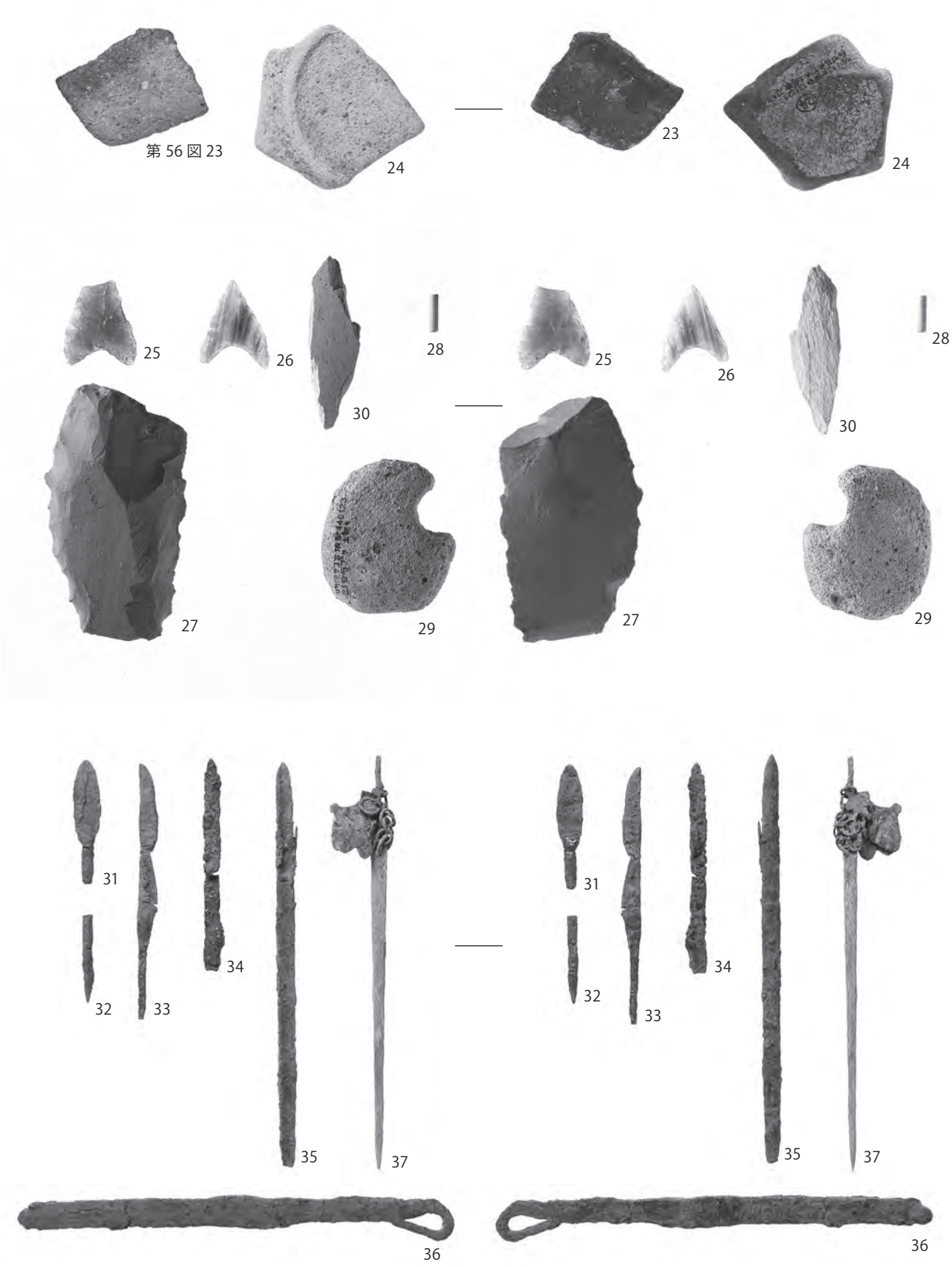
1　供献須恵器検出状況
（南西から）

2　供献須恵器検出状況
（真上から）

第 56 図 1



鏡迫古墳群出土土器



鏡迫古墳群出土土器・石器・金属器

上唐原榎町遺跡
３・４次調査

Ⅴ　上唐原榎町遺跡３・４次調査

１　遺跡と調査の概要

上唐原榎町遺跡は、築上郡上毛町上唐原地区の山国川左岸自然堤防上から丘陵裾に立地しており、ほ場整備関連ですでに２度調査が行われているので、今回は３次調査となった。１・２次調査では縄文時代の包含層、弥生時代中・後期～古墳時代前期、古墳時代後期から近世にいたる集落遺跡が確認されており、今回の調査区東部ではその集落の続きが発見された。竪穴住居跡 32 基、掘立柱建物跡６棟、土坑 14 基、溝状遺９条などが検出され、縄文時代の遺物包含層とわずかながら遺構もみられた。西部は試掘調査で初めて調査対象地になった範囲で、堤状遺構など近代以降の水田に伴う施設が多く、土坑３基、溝状遺構４条、流路跡１条、波板状遺構１条、集石遺構１基、基壇状遺構１基が確認されたにとどまった。

（１）　調査の概要

調査対象地は現道で分けられることから、区画ごとに地区を分け、県道から東をⅠ・Ⅱ・Ⅳ区、西をⅢ・Ⅴ・Ⅵ区とした。Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区については、Ⅰ区を九州歴史資料館が、Ⅱ・Ⅳ区を上毛町教育委員会が担当することになっていたが、上毛町教育委員会が業務繁多となったためⅡ区をＡ・Ｂ２つに分け、未着手だった現道南側をⅡＢ区として受け持つことになった。また、用地取得の遅れた範囲については平成 25 年度に実施し、これを４次調査とした。

各区の調査面積と調査期間は以下の通りである。

３次Ⅰ区	2,800 ㎡	平成 24（2012）年３月 19 日～平成 24（2012）年　７月　６日
Ⅱ Ｂ区	1,200 ㎡	平成 25（2013）年１月　８日～平成 25（2013）年　５月 20 日
Ⅲ区	1,600 ㎡	平成 24（2012）年５月 30 日～平成 24（2012）年　９月　１日
Ⅴ区	2,020 ㎡	平成 24（2012）年９月 10 日～平成 24（2012）年 11 月 14 日
Ⅵ区	1,820 ㎡	平成 24（2012）年６月 12 日～平成 24（2012）年　９月　１日
４次	980 ㎡	平成 25（2013）年５月 24 日～平成 25（2013）年　７月 22 日

（２）　調査の経過

上唐原榎町遺跡３・４次調査は各区が近接しており、併行して調査することもあったので、調査の経過については区ごとでなく時系列に沿って記述する。

Ⅰ区は橋台の施工範囲にかかることから、調査期間短縮のため平成 24（2012）年３月 19～23 日の間、上毛町教育委員会により表土上部の土壌撤去を行った。４月 12 日にバックホーによる表土剥ぎを開始する。Ⅰ区は調査区中央と橋台付近に限定協議範囲があったが、調査区中央に遺構面と表土の比高差が大きい限定協議範囲が残ると表土剥ぎの作業効率が下がるため、表土は撤去するものの調査しないことになった。また、橋台部分については表土剥ぎして遺構プランの検出・写真撮影・現状の図面作成のみを行った。４月 19 日に遺構検出に着手したが、東側の基盤層が砂質なため遺構面を確定するのに難航した。また、基盤層と見られた面に縄文土器が入っており、縄文包含層と基盤層内の互層に堆積する砂層の区別がつきにくく、どこまで縄文包含層が入るのかは判然としなかった。そのため、5 月 24 日に空撮したのち、確認トレンチを入れて縄文包含層の広がりを確認した。

ⅡＢ区の調査は平成 22 年度末に着手したが、予算上の問題で人力により包含層を掘削しなければならない部分が生じたため、平成 23 年度まで継続して調査した。まず、表土下で中世前期の包含層の上面に近世のものと思われる溝が見られ、その中世前期包含層を掘削したところ、弥生時代終末と古墳時代後期の黒色土包含層があり、その上面には中世前期の溝状遺構が検出された。中近世の溝は水田に伴う水路と見られたが、水田面や畦畔は確認できなかった。弥生時代終末から古墳時代前期と古墳時代後期の包含層は人力で掘り下げたが、遺構面が明瞭には区別できなかったため同一遺構面で検出した。この遺構面の下に部分的に縄文包含層が堆積していたが、土器と石器が少量出土したのみで、遺構は見られなかった。

県道の西側はⅢ区の東端に県道のボックス工事が予定されていたので、他の地区に先立って着手した。平成 24（2012）年５月 30 日にバックホーを入れて、対象地の反転調査するため、西端から表土剥ぎを開始した。しかし、２日間表土剥ぎしても礫原のみで遺構が見つからないことから、表土剥ぎの場所を移してようやく石垣やピットが検出された。そこで調査範囲を絞り込むためトレンチを入れて西半分は礫原であることを確認し、東半分のみを調査することにした。６月から梅雨となり、谷部は大雨と湧水とで冠水することが予想されたため、揚水する間はⅥ区を併行調査することにし、Ⅲ区の表土剥ぎ終了後、６月 12 日からⅥ区の表土剥ぎを始めた。

Ⅵ区の対象地南部は大きな攪乱が入っており、西側も丘陵基盤層の下位礫層（註１）が露出していたので、東半のみを調査対象とした。梅雨の間は主にⅥ区の調査を行い、梅雨明け後は猛暑でのⅢ区の谷の泥除去作業となり至難を極めた。この間、Ⅰ区の図化作業を終わらせ、７月６日にⅠ区の埋め戻しを完了した。８月 29 日にはⅢ区とⅥ区を同時に空中写真撮影し、Ⅲ区はすぐに工事に着手するため最低限の埋め戻しにとどめて９月１日に終了した。

９月 10 日にⅤ区の表土剥ぎに着手すると、調査区南端の溝が主な遺構であり、対象地の中央に大きな段落ちが入っていたので、中央から西は遺構がないとみて東半のみを調査範囲にすることにした。

橋台工事が終わったことから、10 月 11 日にⅠ区の工事車両進入路部分の調査を開始した。そのためⅠ区とⅤ区は併行調査となり、11 月２日にⅠ・Ⅴ区ともに空撮した。11 月 14 日にⅤ区の埋め戻しとⅠ区の撤収を完了した。

Ⅱ区については上毛町教育委員会が担当することになっていたが、平成 24 年度中に町事業関連の調査に着手する必要が生じたため、すでに着手していたⅡ区を南北に分け、未調査だった南側のⅡＢ区を本館が担当することになった。ⅡＢ区はすでに上毛町が１面目の表土剥ぎを行っていたので、平成 25（2013）年１月８日からリース機材を搬入し、途中まで掘り下げた溝の掘削から開始した。２月 25 日に１面目を空撮し、予算不足から３月５日に 25 年度の調査を一旦終え、25 年度は４月 10 日から再開した。５月８日に空撮し、５月 20 日に埋め戻しを終了した。

４次調査は平成 25（2013）年５月 24 日にバックホーを入れて調査終了したⅤ区を作業ヤードとして環境整備から始め、５月 27 日に反転作業する予定で東から表土剥ぎを初めた。しかし、東部はⅢ区西部とⅤ区東部がそうであったように礫原だったので、遺構が検出された西半分を調査対象とした。９月 10 日に空撮を行い、９月 18 日に撤収した。